

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 5857







昭和九年三月十五日 印刷
昭和九年三月二十日 發行
昭和十五年十月二十日 再版發行

不許
複製

國譯一切經般若部一

【定價 金一圓五十錢】

編輯者兼

岩野真

雄

東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者

長尾文

雄

東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所

日進舍

舍

東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

發行所

株式會社

大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝三〇九四四番

尼門・一切三摩地門。(a)一切智乃至一切相智。(a)聲聞菩提・獨覺菩提・無上菩提。舍利子、此の緣に由るが故に諸の菩薩摩訶薩は是の如き住に住して常に應に大悲の作意を捨てざるべしと。

爾の時世尊、善現を讚めて言はく、善哉善哉、汝善能く菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜多を宣説す、此れ皆如來威神の力なり。諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜多を宣説せんと欲する者有らば皆應に汝の宣説する所の如くすべし。諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を學せんと欲する者有らば皆應に汝の所説に隨ひて學すべしと。具壽善現、諸の菩薩摩訶薩の爲に是の般若波羅蜜多を説く時、此の三千大千世界に於て六種に轉變す、謂ゆる、動・極動・等極動。踊・極踊・等極踊。震・極震・等極震。擊・極擊・等極擊。吼・極吼・等極吼。爆・極爆・等極爆。東に踊り西に没し、西に踊り東に没し、南に踊り北に没し、北に踊り南に没し、中に踊り邊に没し、邊に踊り中に没す。爾の時如來即便ち微笑したまふ。佛、善現に告げたまはく、我れ此の三千大千堪忍世界に於て、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜多を宣説するが如く、今十方無量無數無邊の世界に於て、諸佛世尊も亦た諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜多を宣説したまへり。今此の三千大千堪忍世界に於て十二那庾多の諸の天人等有りて般若波羅蜜多を説くを聞きて諸法の中に於て無生忍を得るが如く、今十方無量無數無邊の世界に於て各無量無數無邊の有情有り、彼の諸佛の説きたまふ所の般若波羅蜜多を聞き亦た阿耨多羅三藐三菩提の心を發せりと。

【一】動乃至等極爆を六種震動といふ。即ち動、踊、擊(形の變)と震、吼、爆(聲の變)との六にて、その各各に三相ありて十八變となる。

【二】堪忍世界。堪忍土又は忍土と稱し、娑婆世界の意。

【三】那庾多(Mayuta)。數目の名。百阿由多を以て一那庾多とし、億に相當す。

【四】無生忍。生滅を遠離せる眞如實相の理に安住すること。

し是の菩薩摩訶薩は是の如き住に住して作意を離れず、謂ゆる一切有情を救護せんと欲し、常に一切有情を捨離せざる大悲を意と作すと。時に舍利子、善現に謂つて言はく、若し菩薩摩訶薩、是の如き住に住して作意を離れずんば、則ち一切有情も亦た應に菩薩摩訶薩を成すべし。何を以ての故に、一切有情も亦た常に此の作意を離れざるを以ての故に。是れ則ち菩薩摩訶薩と一切有情と應に差別無かるべしと。爾の時具壽善現、舍利子を讚めて言はく、善哉善哉、誠に所説の如し。能く如實に我が所説の義を取れり。所以は何ん。(a)舍利子、有情有るに非ざるが故に當に知るべし作意も亦有るに非すと。我、命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・儒童・作者・受者・知者・見者有るに非ざるが故に當に知るべし作意も亦た有るに非すと。有情實無きが故に當に知るべし作意も亦た實無しと。我乃至見者實無きが故に當に知るべし作意も亦た實無しと。有情自性無きが故に當に知るべし作意も亦た自性無しと。我乃至見者自性無きが故に當に知るべし作意も亦た自性無しと。有情空なるが故に當に知るべし作意も亦た空なりと。我乃至見者空なるが故に當に知るべし作意も亦た空なりと。有情遠離の故に當に知るべし作意も亦た遠離なりと。我乃至見者遠離の故に當に知るべし作意も亦た遠離なりと。有情寂靜なるが故に當に知るべし作意も亦た寂靜なりと。我乃至見者寂靜なるが故に當に知るべし作意も亦た寂靜なりと。有情覺知無きが故に當に知るべし作意も亦た覺知無しと。我乃至見者覺知無きが故に當に知るべし作意も亦た覺知無しと。

(a)色乃至識。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)地界乃至諸受。(a)苦聖諦乃至道聖道。

(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)內空乃至至無自性自性空。(a)眞如乃至不思議界。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脫乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法。(a)無忘失法・恒住捨性。(a)一切陀羅

(a)「舍利子有情非有故當知作意亦非有……有情無覺知故當知作意亦無覺知我乃至見者無覺知故當知作意亦無覺知」
右の文中「有情、我乃至見者」のある所に次下に出す諸法を相應して代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

時に舍利子、善現に問うて言はく、何等をか名づけて菩薩摩訶薩の菩提道と爲すやと。善現答へて言はく、⁽ⁱ⁾舍利子、内空を名づけて菩薩摩訶薩の菩提道と爲し、外空乃至無性自性空を名づけて菩薩摩訶薩の菩提道と爲す。⁽ⁱ⁾眞如乃至不思議界。⁽ⁱ⁾苦聖諦乃至道聖諦。⁽ⁱ⁾布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。⁽ⁱ⁾四靜慮乃至四無色定。⁽ⁱ⁾八解脫乃至十遍處。⁽ⁱ⁾四念住乃至八聖道支。⁽ⁱ⁾空解脫門乃至無願解脫門。⁽ⁱ⁾五眼・六神通。⁽ⁱ⁾佛の十力乃至十八不共法。⁽ⁱ⁾無忘失法・恒住捨性。⁽ⁱ⁾一切陀羅尼門・一切三摩地門。⁽ⁱ⁾一切智乃至一切相智。舍利子、是の如き等の無量無邊の大功德聚を名づけて菩薩摩訶薩の菩提道と爲すと。

時に舍利子、善現を讃めて言はく、善哉善哉、誠に所説の如し、是の如き功德は何等の波羅蜜多の勢力に由りて致す所と爲すやと。善現言はく、舍利子、是の如き功德は皆般若波羅蜜多の勢力に由りて致す所なり。何を以ての故に、舍利子、是の如き般若波羅蜜多は能く一切の善法の與に母と爲り一切の聲聞獨覺菩薩如來の善法は此れより生ずるが故に。舍利子、是の如き般若波羅蜜多は普ねく能く一切の善法を攝受し、一切の聲聞獨覺菩薩如來の善法は此れに依りて住するが故に。舍利子、過去の諸佛は般若波羅蜜多を修行し極めて圓滿せしが故に、已に無上正等菩提を證し妙法輪を轉じて無量の衆を度せり。未來の諸佛は般若波羅蜜多を修行し極めて圓滿するが故に、當に無上正等菩提を證し妙法輪を轉じて無量の衆を度すべく、現在十方世界の諸佛は般若波羅蜜多を修行し極めて圓滿せるが故に現に無上正等菩提を證し妙法輪を轉じて無量の衆を度せりと。

卷の第七十六

初分淨道品第二十一之一

舍利子、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を説くを聞きて心疑惑無く亦た迷悶せずんば當に知るべ

【二八】三十七道品乃至大慈大悲は畢竟清淨にして菩提に近く法なり。

【一】「舍利子内空名爲菩薩摩訶薩菩提道……無性自性空名爲菩薩摩訶薩菩提道」右を符號(i)にて略し以下(h)の場合に準じて略出す。

【一九】善現を讃じ併せて般若の妙力を明かにす。

出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間の靜慮波羅蜜多と爲すと。

舍利子言はく、云何が^二世間の般若波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、般若を修すと雖も而かも所依有りて謂ゆる是の念を作す、我れ一切有情を饒益せんが爲に般若を修す、我れ佛の教に隨ひて勝般若に於て能く正しく修行す、我れ能く悔いて自ら作せし所の惡を除く、我れ他の惡を見るも終に譏凌せず、我れ能く他の修せし所の福を隨喜す、我れ能く諸佛に妙法輪を轉ぜんことを請ふ。我れ所聞に隨ひて能く正しく決擇す、我れ般若波羅蜜多を行すと。彼れ慧を修する時有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて諸の有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと。彼れ三輪に著して般若を修す。一には自想、二には他想、三には般若想なり。此の三輪に著して般若を修するに由るが故に、世間の般若波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の般若を名づけて世間と爲す。世間と同じく共に行するを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の般若波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が^三出世間の般若波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、般若を修する時三輪清淨ならん。一には我れ能く慧を修すと執せず、二には爲す所の有情に執せず、三には般若及び果に著せず。是れを菩薩摩訶薩、般若を修する時、三輪清淨なりと爲す。又た舍利子、菩薩摩訶薩、大悲を以て上首と爲し、般若を修する福普ねく有情に施し、諸の有情に於て都て所得無く、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして般若を修するに由るが故に、出世間の般若波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の般若を出世間と名づくる。世間と同じく共に行せざるが故に、能く出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間の般若波羅蜜多と爲す。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は六種波羅蜜多を修行する時菩提道を淨むるなりと。

【六】 世間の般若波羅蜜多。

【七】 出世間の般若波羅蜜多。

爲す。又た舍利子、菩薩摩訶薩、大悲を以て上首と爲し、精進を修する福普ねく有情に施し、諸の有情に於て都て所得無く、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして勤め精進するに由るが故に、出世間の精進波羅蜜多と名づく。何に緣りてか、此の精進を出世間と名づくる。世間と同じく共に行ぜざるが故に、能く出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間精進波羅蜜多と爲すと。

舍利子言はく、云何が^一世間の靜慮波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、靜慮を修すと雖も而かも所依有りて謂ゆる是の念を作す、我れ一切有情を饒益せんが爲に靜慮を修す、我れ佛の教に隨ひて勝等持に於て能く正しく修習す、我れ靜慮波羅蜜多を行すと。彼れ定を修する時、有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと。彼れ三輪に著して靜慮を修す、一には自想、二には他想、三には靜慮想なり。此の三輪に著して靜慮を修するに由るが故に、世間の靜慮波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の靜慮を名づけて世間と爲す。世間と同じく共に行するを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の靜慮波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が^二出世間の靜慮波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩靜慮を修する時三輪清淨ならん、一には我れ能く定を修すと執せず、二には爲す所の有情に執せず、三には靜慮及び果に著せず。是れを菩薩摩訶薩、靜慮を修する時三輪清淨なりと爲す。又た舍利子、菩薩摩訶薩、大悲を以て上首と爲し、靜慮を修する福普ねく有情に施し、諸の有情に於て都て所得無く、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして靜慮を修するに由るが故に、出世間の靜慮波羅蜜多と名ざく。何に緣りてか、此の靜慮を出世間と名づくる。世間と同じく共に行ぜざるが故に、能く

【一】 世間の靜慮波羅蜜多。

【二】 出世間の靜慮波羅蜜多。

けて世間と爲す。世間と同じく共に行するを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の安忍波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が^二 出世間の安忍波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、安忍を修する時三輪清淨ならん。一には我れ能く忍を修すと執せず、二には忍ぶ所の有情に執せず、三には忍及び忍の果に著せず是れを菩薩摩訶薩、安忍を修する時三輪清淨なりと爲す。又た舍利子、菩薩摩訶薩大悲を以て上首と爲し、修する所の忍福普ねく有情に施し諸の有情に於て都て所得無く、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして安忍を修するに由るが故に、出世間の安忍波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の安忍を出世間と名づくる。世間と同じく共に行せざるが故に、能く出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間の安忍波羅蜜多と爲すと。

舍利子言はく、云何が^三 世間の精進波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、勤め精進すと雖も而かも所依有りて謂ゆる是の念を作す。我れ一切有情を饒益せんが爲に勤め精進す、我れ佛の教に隨ひて身心を策勵し曾て懈怠無し、我れ精進波羅蜜多を行すと。彼れ精進する時有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて諸の有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと。彼れ三輪に著して勤め精進す。一には自想、二には他想、三には精進想なり。此の三輪に著して精進を修するに由るが故に世間の精進波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の精進を名づけて世間と爲す。世間と同じく共に行するを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の精進波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が^三 出世間の精進波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく若し菩薩摩訶薩、勤め精進する時、三輪清淨ならん。一には我れ能く精進すと執せず、二には爲す所の有情に執せず、三には精進及び果に著せず。是れを菩薩摩訶薩、勤め精進する時三輪清淨なり

【二】 出世間の安忍波羅蜜多。

【三】 世間の精進波羅蜜多。

【三】 出世間の精進波羅蜜多。

有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて諸の有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと彼れ三輪に著して戒を受持す。一には自想、二には他想、三には戒想なり。此の三輪に著して戒を受持するに由るが故に世間の淨戒波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の淨戒を名づけて世間と爲す世間と同じく共に行ずるを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の淨戒波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が 出世間の淨戒波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、戒を受持する時、三輪清淨ならん。一には我れ能く戒を持つと執せず、二には護る所の有情に執せず、三には戒及び戒果に著せず。是れを菩薩摩訶薩、戒を受持する時三輪清淨なりと爲す。又た舍利子、菩薩摩訶薩、大悲を以て上首と爲し、持つ所の戒福普ねく有情に施し、諸の有情に於て都て所得無く、一切情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして戒を受持するに由るが故に出世間の淨戒波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の淨戒を出世間と名づくる。世間と同じく共に行ぜざるが故に、能く出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間の淨戒波羅蜜多と爲すと。

舍利子言はく、云何が 世間の安忍波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、安忍を修すと雖も而かも所依有りて謂ゆる是の念を作す。我れ一切有情を饒益せんが爲に而かも安忍を修す、我れ佛の教に隨ひて勝安忍に於て能く正しく修習す、我れ安忍波羅蜜多を行すと。彼れ忍を修する時有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて諸の有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと。彼れ三輪に著して安忍を修す。一には自想、二には他想、三には忍想なり。此の三輪に著して安忍を修するに由るが故に、世間の安忍波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の安忍を名づ

【九】 出世間の淨戒波羅蜜多。

【一〇】 世間の安忍波羅蜜多。

耳鼻を與へ僮僕を乞へば僮僕を與へ珍財を乞へば珍財を與へ生類を乞へば生類を與へ、是の如き一切其の求むる所に隨ひて内外の物並びに皆施與す。是の施を作すと雖も而も所依有り。謂ゆる是の念を作す、我れ施し我れ受く、我れ施主と爲り、我れ慳貪ならず、我れ佛の教に隨ひて一切能く捨つ我れ布施波羅蜜多を行すと。彼れ施を行する時、有所得を以て方便と爲し、諸の有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。復た是の念を作さく、我れ此の福を持ちて諸の有情に施し、此の世他の世の安樂を得乃至無餘涅槃を證得せしめんと。彼れ三輪に著して布施を行す、一には自想、二には他想、三には施想なり。此の三輪に著して施を行するに由るが故に世間の布施波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の施を名づけて世間と爲す。世間と同じく共に行するを以ての故に、出世間法に超動せざるが故に、是の如く名づけて世間の布施波羅蜜多と爲すと。舍利子言はく、云何が^五出世間の布施波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、戒を著せず。是れを菩薩摩訶薩、布施を行する時三輪清淨なりと爲す。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩、大悲を以て上首と爲し、修する所の施福普ねく有情に施し、諸の有情に於て都て所得無く、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと雖も而かも其の中に於て少相を見ず。都て執する所無くして施を行するに由るが故に出世間の布施波羅蜜多と名づく。何に緣りてか此の施を出世間と名づくる。世間と同じく共に行ぜざるが故に、能く出世間法に超動するが故に、是の如く名づけて出世間の布施波羅蜜多と爲すと。

舍利子言はく、云何が^七世間の淨戒波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、戒を受持すと雖も而かも所依有りて謂ゆる是の念を作さん、我れ一切有情を饒益せんが爲に淨戒を受持す、我れ佛の教に隨ひ淨尸羅^八に於て能く犯す所無し、我れ淨戒波羅蜜多を行すと。彼れ戒を持つ時

【三】 有所得。執著心、分別智をいふ。

【四】 無上等正覺と譯し、佛陀の覺智をいふ。

【五】 出世間の布施波羅蜜多。

【六】 三輪清淨。三輪空寂、又は三輪體空といふが如し。

【七】 世間の淨戒波羅蜜多。

【八】 尸羅(Sīla)。戒と譯す。

初分淨道品第二十一之一

爾の時具壽善現、舍利子に謂つて言はく、諸の菩薩摩訶薩、六種波羅蜜多を修行する時^(b)應に色を淨むべし、應に受想行識を淨むべし。^(h)眼處乃至意處。^(h)色處乃至法處。^(h)眼界乃至諸受。^(h)耳鼻乃至諸受。^(h)鼻界乃至諸受。^(h)舌界乃至諸受。^(h)身界乃至諸受。^(h)意界乃至諸受。^(h)地界乃至識界。^(h)苦聖諦乃至道聖諦。^(h)無明乃至老死愁歎苦憂惱。^(h)內空乃至無性自性空。^(h)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。^(h)四靜慮乃至四無色定。^(h)八解脫乃至十遍處。^(h)四念住乃至八聖道支。^(h)空解脫門乃至無願解脫門。^(h)佛の十力乃至十八不共法。^(h)無忘失法・恒住捨性。^(h)一切陀羅尼門、一切三摩地門。^(h)一切智乃至一切相智。^(h)菩提道。

時に舍利子、善現に問うて言はく、云何が菩薩摩訶薩、六種波羅蜜多を修行する時菩提道を淨むるやと。善現答へて言はく、舍利子、六波羅蜜多に各二種有り、一には世間、二には出世間なりと。舍利子言はく、云何が世間の布施波羅蜜多なるやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、大施主と爲りて能く一切の沙門婆羅門貧病孤露道行乞者に施し、食を須つには食を與へ飲を須つには飲を與へ乘を須つには乘を與へ衣を須つには衣を與へ香を須つには香を與へ華を須つには華を與へ嚴飾を須つには嚴飾を與へ舍宅を須つには舍宅を與へ醫藥を須つには醫藥を與へ照明を須つには照明を與へ坐臥具を須つには坐臥具を與へ、是の如き一切其の須つ所に隨ひて、資生什物悉く皆施與す。若し復た有るひは來りて男を乞へば男を與へ女を乞へば女を與へ妻妾を乞へば妻妾を與へ官位を乞へば官位を與へ國土を乞へば國土を與へ王位を乞へば王位を與へ頭目を乞へば頭目を與へ手足を乞へば手足を與へ支節を乞へば支節を與へ血肉を乞へば血肉を與へ骨髓を乞へば骨髓を與へ耳鼻を乞へば

(b) 「應淨色應淨受想行」
右を所付の符號にて略し以下亦た(b)の場合の如くして略す。

【一】六度淨を別説す。

【二】世間の布施波羅蜜多。

性空。(f)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f)四靜慮乃至四無色定。(f)八解脫乃至十遍處。(f)四念住乃至八聖道支。(f)空解脫門乃至無願解脫門。(f)五眼・六神通。(f)佛の十力乃至十八佛不共法。(f)一切智乃至一切相智。(f)無忘失法・恒住捨性。(f)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(f)異生・異生法。(f)預流・預流法。(f)一來・一來法。(f)不還・不還法。(f)阿羅漢・阿羅漢法。(f)獨覺・獨覺法。(f)菩薩・菩薩法。(f)如來・如來法。(f)身行・語行・意行。舍利子、此の緣に由るが故に、不生法に於て不生言を起すも亦た生の義無し。舍利子、若しは所説の法、若しは能説の言・説者・聽者皆不生の故にと。時に舍利子、善現に謂つて言はく、仁者は説法人の中に於て最れ爲れ第一なり。何を以ての故に、問詰する所に隨ひて皆能く酬答し滯礙無きが故にと。善現報へて言はく、諸佛の弟子は一切法に於て依著する者無し。法爾として皆能く問詰する所に隨ひて一一酬答し自在にして畏れ無し。何を以ての故に、一切法所依無きを以ての故に。

時に舍利子、善現に問うて言はく、云何が諸法は都て所依無きやと。善現答へて言はく、(g)舍利子、色の本性空にして内に依り外に依り兩の中間に依るも不可得なるが故に、受想行識の本性空にして内に依り外に依り兩の中間に依るも不可得なるが故に。(g)眼處乃至意處。(g)色處乃至法處。(g)眼界乃至諸受。(g)耳界乃至諸受。(g)鼻界乃至諸受。(g)舌界乃至諸受。(g)身界乃至諸受。(g)眼界乃至諸受。(g)地界乃至識界。(g)善聖諦乃至道聖諦。(g)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(g)內空乃至無性自性空。(g)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g)四靜慮乃至四無色定。(g)八解脫乃至十遍處。(g)四念住乃至八聖道支。(g)空解脫門乃至無願解脫門。(g)五眼・六神通。(g)佛の十力乃至十八佛不共法。(g)一切智乃至一切相智。(g)無忘失法・恒住捨性。(g)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(g)異生・異生法。(g)預流・預流法。(g)一來・一來法。(g)不還・不還法。(g)阿羅漢・阿羅漢法。(g)獨覺・獨覺法。(g)菩薩・菩薩法。(g)如來、如來法。舍利子、此の緣に由るが故に我れ諸法は都て所依無しと説くと。

【三】 無所依清淨なるを説く。

【四】 法爾。或は自爾ともいひ、自然の異名。

(g) 「舍利子色本性空………受想行識本性空依内依外依兩中間不可得故」
右を附する所の符號(g)にて略し以下亦た(f)に準じて以下略出す。

卷の第七十五

初分無生品第二十之二

(e) 前卷と同意。

(d) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e) 四靜慮乃至四無色定。(e) 八解脫乃至十遍處。(e) 四念住乃至八聖道支。(e) 空解脫門乃至無願解脫門。(e) 五眼・六神通。佛の十力乃至十八不共法。(e) 一切智乃至一切相智。(e) 無忘失法・恒住捨性。(e) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(e) 異生・異生法。(e) 預流・預流法。(e) 一來・一來法。(e) 不還・不還法。(e) 阿羅漢・阿羅漢法。(e) 獨覺・獨覺法。(e) 菩薩・菩薩法。(e) 如來・如來法。時に舍利子、善現に問うて言はく、仁今生をして生ぜしめんと欲すと爲すや、不生をして生ぜしめんと欲すと爲す耶と。善現答へて言はく、我れ生をして生ぜしめんと欲せず、亦た不生をして生ぜしめんと欲せず。何を以ての故に、舍利子、生と不生と是の如き二法は俱に相應に非ず不相應に非ず、有色に非ず無色に非ず、有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、咸同一相にして所謂無相なればなり。舍利子、此の緣に由るが故に我れ生をして生ぜしめんと欲せず亦た不生をして生ぜしめんと欲せざるなりと。時に舍利子、善現に問うて言はく、仁者、説く所の無生法に於て樂うて無生相を辯説する耶と。善現答へて言はく、我れ説く所の無生法に於て亦た無生相を辯説するを樂はず。所以は何ん、若しは無生法、若しは無生相、若しは樂辯説、是の如き一切は皆相應に非ず不相應に非ず、有色に非ず無色に非ず、有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、咸同一相にして所謂無相なればなりと。舍利子言はく、不生法に於て不生言を起こす、此の不生言も亦た不生なるや不やと。善現答へて言はく、是の如し是の如し。所以は何ん、(f) 舍利子、色は不生なり、受想行識も亦た不生なり。何を以ての故に、皆本性空なるが故に。(f) 眼處乃至意處。(f) 色處乃至法處。(f) 眼界乃至諸受。(f) 耳界乃至諸受。(f) 鼻界乃至諸受。(f) 舌界乃至諸受。(f) 身界乃至諸受。(f) 眼界乃至諸受。(f) 地界乃至識界。(f) 苦聖諦乃至道聖諦。(f) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(f) 內空乃至無性自

【一】無生を説く語言も無生相なるを説く。

【二】仁者。仁ともいひ、人を呼ぶの稱。きみ或はなんぢと云ふ。

(f) 「舍利子色不生受想行識亦不生何以故皆本性空故」右を符號(f)にて略し以下(e)の場合に準じ同方法を以て略出す。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、仁今不生法をして生ぜしめんと欲すと爲すや。已生法をして生ぜしめんと欲すと爲す耶と。善現答へて言はく、我れ不生法をして生ぜしめんと欲せず、亦た已生法をして生ぜしめんと欲せずと。舍利子言はく、何等か是れ不生法にして仁者彼の法をして生ぜしめんと欲せざるやと。善現答へて言はく、舍利子、色は是れ不生法にして我れ生ぜしめんと欲せず。何を以ての故に、自性空なるを以ての故に。受想行識は是れ不生法にして我れ生ぜしめんと欲せず。何を以ての故に、自性空なるを以ての故に。(d)眼處乃至意處。(b)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳鼻乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)眼界乃至諸受。(d)地界乃至識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)內容乃至無性自性空。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)八解脫乃至十遍處。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至十八不共法。(d)一切智乃至一切相智。(d)無忘失法、恒住捨性。(d)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(d)異生・異生法。(d)預流・預流法。(d)一來・一來法。(d)不還・不還法。(d)阿羅漢・阿羅漢法。(d)獨覺・獨覺法。(d)菩薩・菩薩法。(d)如來・如來法。

舍利子言はく、何等か是れ已生法にして仁者彼の法をして生ぜしめんと欲せざるやと。善現答へて言はく、色は是れ已生法にして我れ生ぜしめんと欲せず。何を以ての故に、自性空なるを以ての故に。受想行識は是れ已生法にして我れ生ぜしめんと欲せず。何を以ての故に、自性空なるを以ての故に。(c)眼處乃至意處。(e)色處乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳鼻乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)眼界乃至諸受。(c)地界乃至識界。(c)苦聖諦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(e)內容乃至無性自性空。

【二】不生法。不生は涅槃の意、常住の法を云ふ。
【三】已生法。現在法の意。

(一)「舍利子色是不生法……受想行識是不生法我不欲令生何以故以自性空……」右を符號(d)を以て略し以下(c)の場合の如くにして略出す。

(c)「舍利子」の三字を「色是已生法……受想行識是已生法我不欲令生何以故以自性空故」に加へ右を符號(e)にて略し以下(d)と同方法によりて略出す。

の爲に大饒益を作す。舍利子、諸の菩薩摩訶薩應に是の心を作すべし、我の自性一切法に於て一切種を以て一切處一切時に求むるも不可得なるが如く、内外の諸法も亦復た是の如く都て所有無く皆不可得なりと。何を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩、若し此の想に住して難行苦行を修せば便ち能く無量無數無邊の有情を饒益すればなり。是の故に菩薩摩訶薩は一切法に於て應に執受すること無かるべし。舍利子、我れ無生法の中に於て諸佛の無上正等菩提を證得し妙法輪を轉じ無量の衆を度する有るを見るに非ずと。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、仁今（七）生法を以て生法を證せんと欲すと爲すや。無生法を以て無生法を證せんと欲すと爲す耶と。善現答へて言はく、我れ實に生法を以て生法を證するを欲せず、亦た實に無生法を以て無生法を證するを欲せずと。舍利子言はく、若し爾れば仁今生法を以て無生法を證せんと欲すと爲すや、無生法を以て生法を證せんと欲すと爲す耶と。善現答へて言はく、我れ亦た生法を以て無生法を證するを欲せず、亦復た無生法を以て生法を證するを欲せずと。舍利子言はく、若し是の如くんば豈に全く得る無く、現觀無き耶と。善現答へて言はく、得る有り現觀有りと雖も而かも此の二法を以ては證せざるなり。舍利子、但だ世間の言說施設に隨ひて得る有り現觀有るのみ。勝義の中には得る有り現觀有るに非ず。但だ世間の言說施設に隨ひて預流有り預流果有り、一來有り一來果有り、不還有り不還果有り、阿羅漢有り阿羅漢果有り、獨覺有りや獨覺菩提有り、菩薩摩訶薩有り無上正等覺有るのみ、勝義の中には預流乃至無上正等覺有るに非ずと。舍利子言はく、若し世間の言說施設に隨ひて得る有り現觀等有り勝義には非ずとせば六趣の差別も亦た世間の言說施設に隨ふが故に有り、勝義には非ざる耶と。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如し。何を以ての故に、舍利子、勝義の中に於ては業無く異熟無く生無く滅無く染無く淨無きが故にと。

【七】 諸法無生ならばこれを證するは生法なりや、無生法なりやを辨ず。

【八】 生法。或は人法、我法などといふ。生は有情、法は非情の謂なり。

【九】 無生法。眞如の理、涅槃の體をいふ。

【一〇】 現觀。具に聖諦現觀と稱し、慧が現前に四諦の法を觀すること。

切法定めて無生なれば何に緣りて預流預流果の爲に 三結道を修斷するや。何に緣りて一來一來果の爲に貪瞋癡道を修薄するや。何に緣りて不還不還果の爲に 五順下分結道を修斷するや。何に緣りて阿羅漢阿羅漢果の爲に 五順上分結道を修斷するや。何に緣りて獨覺獨覺菩提の爲に緣起道を修悟するや。何に緣りて菩薩摩訶薩、諸の無量の有情を度せんが爲の故に、多く百千の難行苦行を修し、無邊種種の劇苦を備受するや。何に緣りて如來は無上正等菩提を證得するや。何に緣りて諸佛は有情の爲の故に妙法輪を轉するやと。

爾の時具壽善現、舍利子に答へて言はく、我れ無生法の中に於て六趣受生の差別有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て能く諦現解に入る者有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て預流預流果を得。一來一來果を得、不還不還果を得。阿羅漢阿羅漢果を得る有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て獨覺獨覺菩提を得る有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て菩薩摩訶薩、一切相智及び五種菩提を得る有るを見るに非ず。復た次に舍利子、我れ無生法の中に於て預流預流果の爲に三結道を修斷する有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て一來一來果の爲に貪瞋癡道を修薄する有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て不還不還果の爲に五順下分結道を修斷する有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て阿羅漢阿羅漢果の爲に五順上分結道を修斷する有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て菩薩摩訶薩の爲に緣起道を修悟する有るを見るに非ず。我れ無生法の中に於て菩薩摩訶薩、無量の諸の有情を度せんが爲の故に多く百千の難行苦行を修し無邊種種の劇苦を備受する有るを見るに非ず。而かも諸の菩薩摩訶薩亦復た難行苦行想を起さず。所以は何ん、難行苦行想に住するに非ざればなり、能く無量無數無邊の有情の爲に饒益事を作す。舍利子、然かも諸の菩薩摩訶薩は無所得を以て方便と爲し、一切有情に於て大悲心を起して住すること父母の想の如く、兄弟の想の如く、妻子の想の如く、己身の想の如し。是の如く乃ち能く無量無數無邊の有情

【四】三結道。預流果を得る人の斷ずる三種の煩惱、即ち見結、戒取結、疑結を云ふ。
【五】五順下分結道。欲界に於ける五種の結惑、即ち貪結、瞋結、身見結、戒取見、疑結をいふ。
【六】五順上分結道。色界無色界に於ける五種の結惑、即ち色愛結、無色愛結、掉結、慢結、無明結をいふ。

初分無生品第二十之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、^(b)世尊、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行して諸法を觀する時、我の無生を見る、畢竟淨の故に。有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅、意生・儒童・作者・受者・知者・見者の無生を見る畢竟淨の故に。

^(b)色乃至識。^(b)眼處乃至意處。^(b)色處乃至法處。^(b)眼界乃至諸受。^(b)耳界乃至諸受。^(b)鼻界乃至諸受。^(b)舌界乃至諸受。^(b)身界乃至諸受。^(b)意界乃至諸受。^(b)地界乃至識界。^(b)苦聖諦乃至道聖諦。^(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。^(b)內空乃至無性自性空。^(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。^(b)四靜慮乃至四無色定。^(b)八解脫乃至十遍處。^(b)四念住乃至八聖道支。^(b)空解脫門乃至無願解脫門。^(b)五眼・六神通。^(b)佛の十力乃至十八不共法。^(b)一切智乃至一切相智。^(b)無忘失法、恒住捨性。^(b)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

^(c)世尊、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行して諸法を觀する時、異生の無生を見る、畢竟淨の故に。異生法の無生を見る、畢竟淨の故に。

^(c)預流。^(c)一來。^(c)不還。^(c)阿羅漢。^(c)獨覺。^(c)菩薩。^(c)如來。
 時に舍利子、善現に謂つて言はく、我が解する如くんば仁者説く所の義、我有情等無生、色受等無生乃至如來如來法無生なり。若し是の如くんば六趣に生を受くるも應に差別無かるべし。預流預流果を得、一來一來果を得、不還不還果を得、阿羅漢阿羅漢果を得べからず。獨覺獨覺菩提を得べからず。菩薩摩訶薩一切相智を得べからず。亦た五種菩提を得べからず。復た次に善現、若し一

【一】善現舍利弗と問答終りて佛の證知を求む。

【二】「世尊諸菩薩摩訶薩……知者見者無生畢竟淨故」右を所付の符號にて略し以下【a】の場合に準じて略出す。

【c】「世尊諸菩薩摩訶薩……見異生法無生畢竟淨故」右を所付の符號にて略し以下【b】と同方法により略す。

【三】諸法不生にして得度有りや無きやを辨ず。

【三】五種菩提。發心、伏心、明心、出到、無上の五菩提を云ふ。

卷の第七十四

初分觀行品第十九之五

時に舍利子善現に問ふて言はく、何に緣るが故に色等不二無妄の法數に入ると説く耶と。善現答へて言はく、(a)舍利子、色は無生滅に異らず無生滅は色に異らず、色は即ち是れ無生滅、無生滅は即ち是れ色、受想行識は無生滅に異らず無生滅は受想行識に異らず、受想行識は即ち是れ無生滅、無生滅は即ち是れ受想行識なり。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、色は不二無忘の法數に入り、受想行識は不二無忘の法數に入ると。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)意界乃至諸受。(a)地界乃至識界。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)內空乃至無性自性空。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脫乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八佛不共法。(a)眞如乃至不思議界。(a)無上正等菩提・一切智乃至一切相智。(a)無忘失法・恒住捨性。(a)一切陀羅尼門・一切三摩地門。

【一】法數。法門の數、三界、四諦、五蘊、六度、十二因緣などをいふ。

(a)「舍利子色不異無生滅……受想行識入不二無忘法數」

右を符號(a)にて略し以下前卷(○)の場合に準じて略出す。

ち受想行識に非ずと。

(b) 眼處乃至意處。(b) 色處乃至法處。(b) 眼界乃至諸受。(b) 耳界乃至諸受。(b) 鼻界乃至諸受。(b) 舌界乃至諸受。(b) 身界乃至諸受。(b) 眼界乃至諸受。(b) 地界乃至識界。(b) 苦聖諦乃至道聖諦。(b) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b) 內空乃至無性自性空。(b) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b) 四靜慮乃至四無色定。(b) 八解脫乃至十遍處。(b) 四念住乃至八聖道支。(b) 空解脫門乃至無願解脫門。(b) 五眼・六神通。(b) 佛の十力乃至十八佛不共法。(b) 眞如乃至不思議界。(b) 無上正等菩提・一切智乃至一切相智。(b) 無忘失法・恒住捨性。(b) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に緣るが故に色等不二なれば則ち色等に非ずと説くやと。

善現答へて言はく、(c) 舍利子、若しは色、若しは不二若しは受想行識、若しは不二、是の如き一切相應に非ず相應に非ず、有色に非ず無色に非ず、有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、或同一相にして所謂無相なり。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、色不二なれば則ち色に非ず、受想行識不二なれば則ち受想行識に非ずと。

(c) 眼處乃至意處。(c) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至諸受。(c) 耳界乃至諸受。(c) 鼻界乃至諸受。(c) 舌界乃至諸受。(c) 身界乃至諸受。(c) 眼界乃至諸受。(c) 地界乃至識界。(c) 苦聖諦乃至道聖諦。(c) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 內空乃至無性自性空。(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 四靜慮乃至四無色定。(c) 八解脫乃至十遍處。(c) 四念住乃至八聖道支。(c) 空解脫門乃至無願解脫門。(c) 五眼・六神通。(c) 佛の十力乃至十八佛不共法。(c) 眞如乃至不思議界。(c) 無上正等菩提・一切智乃至一切相智。(c) 無忘失法・恒住捨性。(c) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。

(c) 「舍利子若色若不二……受想行識不二則非受想行識」
右を所付の符號にて略し以下(b)の場合の如くして略出す。

(a)八解脱乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脱門乃至無願解脱門。(a)五眼、六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法。(a)眞如乃至不思議界。(a)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(a)無忘失法、恒住捨性。(a)一切陀羅尼門、一切三摩地門。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時應に是の如く諸法を觀すべしと。

卷の第七十三

初分觀行品第十九之四

時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に緣るが故に色等不生なれば則ち色等に非すと説くやと。善現答へて言はく、(a)舍利子、色の色性空なり。此の性空の中生無く色無し。受想行識の受想行識性空なり。此の性空の中生無く受想行識無し。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す。色不生なれば則ち色に非ず、受想行識不生なれば則ち受想行識に非すと。

(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)地界乃至諸受。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)內空乃至無自性自性空。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脱乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脱門乃至無願解脱門。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法。(a)眞如乃至不思議界。(a)無上正等菩提・一切智乃至一切相智。(a)無忘失法・恒住捨性。(a)一切陀羅尼門・一切三摩地門。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に緣るが故に色等不滅なれば則ち色等に非すと説くやと。善現答へて言はく、(b)舍利子、色の色性空なり。此の性空の中滅無く色無し、受想行識の受想行識性空なり。此の性空の中滅無く受想行識無し。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、色不滅なれば則ち色に非ず、受想行識不滅なれば則

【一】先に説く色不生是れ色に非ず等の文に就て問答説明す。
(a)「舍利子色性空……受想行識不生則非受想行識」右を所付の符號にて略し以下前卷(a)の場合と同方法によりて略す。

(b)「舍利子色性空……受想行識不滅則非受想行識」右を所付の符號にて略し以下前卷(a)の場合と同方法によりて略す。

無性自性空。(k)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(k)四靜慮乃至四無色定。(k)八解脫乃至十遍處。(k)四念住乃至八聖道支。(k)空解脫門乃至無願解脫門。(k)五眼、六神通。(k)佛の十力乃至十八不共法。(k)眞如乃至不思議界。(k)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(k)無忘失法、恒住捨性。(k)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

卷の第七十二

初分觀行品第十九之三

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何をか諸法を觀すと謂ふやとは、(a)舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色の常に非ず無常に非ざるを觀じ、受想行識の常に非ず無常に非ざるを觀じ、色の樂に非ず苦に非ざるを觀じ、受想行識の樂に非ず苦に非ざるを觀じ、色の我に非ず無我に非ざるを觀じ、受想行識の我に非ず無我に非ざるを觀じ、色の淨に非ず不淨に非ざるを觀じ、受想行識の淨に非ず不淨に非ざるを觀じ、色の空に非ず不空に非ざるを觀じ、受想行識の空に非ず不空に非ざるを觀じ、色の有相に非ず無相に非ざるを觀じ、受想行識の有相に非ず無相に非ざるを觀じ、色の有願に非ず無願に非ざるを觀じ、受想行識の有願に非ず無願に非ざるを觀じ、色の寂靜に非ず不寂靜に非ざるを觀じ、受想行識の寂靜に非ず不寂靜に非ざるを觀じ、色の遠離に非ず不遠離に非ざるを觀じ、受想行識の遠離に非ず不遠離に非ざるを觀す。舍利子、是れを諸法を觀すと謂ふ。

(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)地界乃至識界。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死歎苦憂惱。(a)內空乃至無性自性空。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。

【一】般若波羅蜜多に於ける觀法。

(a)「舍利子諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時觀色非常非無常觀受想行識非常非無常……觀色非遠離非不遠離觀受想行識非遠離非不遠離舍利子是謂觀諸法」右の文中「色乃至識」のある所に相應して次下に出す諸法を代入せば各諸法につき皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法を略出す。

く執著せざるが故に復た摩訶薩と名づく。舍利子言はく、云何が菩薩摩訶薩、能く一切の法相を知りて而かも執著せざるやと。善現答へて言はく、(j)舍利子、菩薩摩訶薩は如實に色相を知りて執著せず、如實に受想行識相を知りて執著せず。(j)眼處乃至意處。(j)色處乃至法處。(j)眼界乃至諸受。(j)耳界乃至諸受。(j)鼻界乃至諸受。(j)舌界乃至諸受。(j)身界乃至諸受。(j)意界乃至諸受。(j)地界乃至識界。(j)苦聖諦乃至道聖諦。(j)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(j)內空乃至無自性自性空。(j)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(j)四靜慮乃至四無色定。(j)八解脫乃至十遍處。(j)四念住乃至八聖道支。(j)空解脫門乃至無願解脫門。(j)佛の十力乃至十八不共法。(j)眞如乃至不思議界。(j)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(j)無忘失法、恒住捨性。(j)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、何等をか名づけて一切の法相と爲すやと。善現答へて言はく、若く是の如き諸行の相狀に由りて諸法を表知し是れ色、是れ聲、是れ香、是れ味、是れ觸、是れ法、是れ內、是れ外、是れ有漏、是れ無漏、是れ有爲、是れ無爲とせば、此れ等を名づけて一切の法相と爲すと。爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何をか般若波羅蜜多と謂ふやとは、舍利子、勝妙慧有りて遠く離るる所有り、故に般若波羅蜜多と名づく。舍利子言はく、此れ何の法に於てか遠離を得るやと。善現答へて言はく、此れ一切の煩惱見趣に於て遠離を得。此れ一切の六趣四生に於て遠離を得。此れ一切の蘊界處等に於て遠離を得。故に般若波羅蜜多と名づく。又た舍利子、勝妙慧有りて遠く到る所有り、故に般若波羅蜜多と名づく。舍利子言はく、此れ何の法に於てか遠到を得るやと。善現答へて言はく、(k)舍利子、此れ色の實性に於て遠到を得、受想行識の實性に於て遠到を得。故に般若波羅蜜多と名づく。(k)眼處乃至意處。(k)色處乃至法處。(k)眼界乃至諸受。(k)耳界乃至諸受。(k)鼻界乃至諸受。(k)舌界乃至諸受。(k)身界乃至諸受。(k)意界乃至諸受。(k)地界乃至識界。(k)苦聖諦乃至道聖諦。(k)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(k)內空乃至

(j)「舍利子菩薩摩訶薩如實色相而不執著如實知受想行識相而不執著」にて略し以下の文を符號(j)にて略し以下の場合と同方法によりて略出す。

(二) 一切の法相の意。

(三) 般若波羅蜜多の意。

(四) 六趣四生。六趣は六道と同じ、四生は胎生、卵生、濕生、化生の稱。

(k)「舍利子此於色實性得遠到於受想行識實性得遠到故名般若波羅蜜多」右を符號(k)にて略し以下(j)の場合と同方法によりて略出す。

無願解脫門。(g)五眼、六神通。(g)佛の十力乃至十八佛不共法。(g)眞如乃至不思議界。(g)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(g)無忘失法、恒住捨性。(g)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

(h)世尊、色不二なれば則ち色に非ず、受想行識不二なれば則ち受想行識に非ず。(h)眼處乃至意處。(h)色處乃至法處。(h)眼界乃至諸受。(h)眼界乃至諸受。(h)鼻界乃至諸受。(h)舌界乃至諸受。(h)身界乃至諸受。(h)眼界乃至諸受。(h)地界乃至識界。(h)苦聖諦乃至道聖諦。(h)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(h)內空乃至無性自性空。(h)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(h)四靜慮乃至四無色定。(h)八解脫乃至十遍處。(h)四念住乃至八聖道支。(h)空解脫門乃至無願解脫門。(h)五眼・六神通。(h)佛の十力乃至十八佛不共法。(h)眞如乃至不思議界。(h)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(h)無忘失法、恒住捨性。(h)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

(i)世尊、色は不二無忘の法數に入り、受想行識は不二無忘の法數に入る。(i)眼處乃至意處。(i)色處乃至法處。(i)眼界乃至諸受。(i)耳界乃至諸受。(i)鼻界乃至諸受。(i)舌界乃至諸受。(i)身界乃至諸受。(i)眼界乃至諸受。(i)地界乃至識界。(i)苦聖諦乃至道聖諦。(i)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(i)內空乃至無性自性空。(i)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(i)四靜慮乃至四無色定。(i)八解脫乃至十遍處。(i)四念住乃至八聖道支。(i)空解脫門乃至無願解脫門。(i)五眼・六神通。(i)佛の十力乃至十八佛不共法。(i)眞如乃至不思議界。(i)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(i)無忘失法、恒住捨性。(i)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、所説の菩薩摩訶、般若波羅蜜多を修行し諸法を觀する時とは、何をか菩薩摩訶と謂ひ、何をか般若波羅蜜多と謂ひ、何をか諸法を觀すと謂ふやと。爾の時具善善現、舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何をか菩薩摩訶と謂ふやとは、舍利子。有情類の爲に大菩提を求め、亦た菩提有るが故に菩薩と名づく。彼れ如實に一切の法相を知りて能

(h)「世尊色不二則非色受想行識不二則非受想行識」右を符號(h)にて略し以下(イ)の場合と同方法によりて略す。

(i)「世尊色入不二無忘法數受想行識入不二無忘法數」右を符號(i)にて略し以下(h)と同方法によりて略す。

【一】菩薩般若の觀行、一切を知り一切を遠離するにあるを明す。

(f) 世尊、色不生なれば則ち色に非ず、受想行識不生なれば則ち受想行識に非ず。所以は何ん、色と不生とは二無く二分無く、受想行識と不生とは二無く二分無ければなり。何を以ての故に、不生法は一に非ず二に非ず多に非ず異に非ざるを以て、是の故に色不生なれば則ち色に非ず、受想行識不生なれば、則ち受想行識に非ず。(f) 眼處乃至意處。(f) 色處乃至法處。(f) 眼界乃至諸受。(f) 耳界乃至諸受。(f) 鼻界乃至諸受。(f) 舌界乃至諸受。(f) 身界乃至諸受。(f) 意界乃至諸受。(f) 地界乃至識界。(f) 苦聖諦乃至道聖諦。(f) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(f) 圓空乃至無性自性空。

卷第七十一

初分觀行品第十九之二

(f) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f) 四靜慮乃至四無色定。(f) 八解脫乃至十遍處。(f) 四念住乃至八聖道支。(f) 空解脫門乃至無願解脫門。(f) 五眼、六神通。(f) 佛の十力乃至十八不共法。(f) 眞如乃至不思議界。(f) 無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(f) 無忘失法、恒住捨性。(f) 一切陀羅尼門、一切三摩地門。

(g) 世尊、色不滅なれば則ち色に非ず、受想行識不滅なれば則ち受想行識に非ず。所以は何ん、色と不滅と二無く二分無く、受想行識と不滅と二無く二分無ければなり。何を以ての故に、不滅法は一に非ず二に非ず多に非ず異に非ざるを以て、是の故に色不滅なれば則ち色に非ず、受想行識不滅なれば則ち受想行識に非ざるなり。(g) 眼處乃至意處。(g) 色處乃至法處。(g) 眼界乃至諸受。(g) 耳界乃至諸受。(g) 鼻界乃至諸受。(g) 舌界乃至諸受。(g) 身界乃至諸受。(g) 意界乃至諸受。(g) 地界乃至識界。(g) 苦聖諦乃至道聖諦。(g) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(g) 內空乃至無性自性空。(g) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g) 四靜慮乃至四無色定。(g) 八解脫乃至十遍處。(g) 四念住乃至八聖道支。(g) 空解脫門乃至

(f) 「世尊色不生則非色……是故色不生則非色受想行識不生則非受想行識」
右を符號(f)にて略し以下(e)の場合と同方法によりて略出す。

(f) 前巻と同意。

(g) 「世尊色不滅則非色……是故色不滅則非色受想行識不滅則非受想行識」
右を符號(g)にて略し以下(f)の場合と同方法によりて略出す。

初分觀行品第十九之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、(d)世尊、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行して諸法を觀する時、色に於て受けず取らず執せず著せず亦た爲れ色なりと施設せず、受想行識に於て受けず取らず執せず著せず亦た是れ受想行識なりと施設せず。(d)眼處乃至意處。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)意識乃至諸受。(b)地界乃至識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)內空乃至無性自性空。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多乃至四靜慮乃至四無色定。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至十八佛不共法。(d)眞如、法界、法性、不虛妄性、不變異性、平等性、離生性、法定、法住、實際、虛空界、不思議界。(d)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(d)無忘失法、恒住捨性。(d)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

(e)世尊、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時色を見ず。何を以ての故に、色性空にして生滅無きを以ての故に。受相行識を見ず、何を以ての故に、受想行識性空にして生滅無きを以ての故に。(e)眼處乃至意處。(e)色處乃至法處。(e)眼界乃至諸受。(e)耳界乃至諸受。(e)鼻界乃至諸受。(e)舌界乃至諸受。(e)身界乃至諸受。(e)意識乃至諸受。(e)地界乃至識界。(e)苦聖諦乃至道聖諦。(e)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(e)內空乃至無性自性空。(e)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e)四靜慮乃至四無色定。(e)八解脫乃至十遍處。(e)四念住乃至八聖道支。(e)空解脫門乃至無願解脫門。(e)五眼、六神通。(e)佛の十力乃至十八佛不共法。(e)眞如乃至不思議界。(e)無上正等菩提、一切智乃至一切相智。(e)無忘失法、恒住捨性。(e)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

(d) 「世尊諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多觀諸法時於色不受不取不執不著亦不施設爲色亦不受想行識不受不取不執不著亦不施設爲受想行識」右も前の(e)の場合と同方法によりて以下略出す。

(e) 眞如。法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界。

(e) 「世尊諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時不見色何以故……以受想行識性空無生滅故」右を符號(e)にて略し以下(d)の場合と同方法によりて略出す。

乃至四無色定。(c)八解脫乃至十遍處。(c)四念住乃至八聖道支。(c)空解脫門乃至無願解脫門。(c)五眼六神通(c)。佛の十力乃至十八不共法。(c)一切智乃至一切相智。(c)無忘失法・恒住捨性。(c)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(c)極喜地乃至法雲地。(c)異生地乃至如來地。(c)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、畢竟不生を離れて亦た菩薩の能く無上正等菩提を行する無しと。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に、若し菩薩摩訶薩是の説を作すを聞きて其の心驚かず恐れず怖かず沈まず没せず亦た憂悔せずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多を行するなりと説くやとは、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、諸法覺有り用有りと見ず、一切法を見ること幻事の如く夢境の如く像の如く響の如く光影の如く陽焰の如く空花の如く尋香城の如く變化事の如し、都て實有に非ず。諸法の本性皆空なりと説くを聞きて深心に歡喜す。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す。若し菩薩摩訶薩、是の説を作すを聞きて其の心驚かず恐れず怖かず沈まず没せず亦た憂悔せずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多を行するなりと。

【三】 十分別中第十、菩薩なく菩提行なしとして驚怖せざるを明す。

(b) 五眼、六神通。(b)佛の十力乃至十八佛不共法。(b)一切智乃至一切相智。(b)無忘失法・恒住捨性。
 (b)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(b)極喜地乃至法雲地。(b)異生地乃至如來地。(b)聲聞乘乃至大乘。
 舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、若し畢竟不生なれば則ち色等と名づけずと。空無
 生の法は説く可からざるが故に。

爾の時具壽普現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に我れ豈に能く
 畢竟不生の般若波羅蜜多を以て畢竟不生の諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せんやと説くやとは、舍利子、
 畢竟不生は即ち是れ般若波羅蜜多、般若波羅蜜多は即ち是れ畢竟不生なり。何を以ての故に、畢竟
 不生と般若波羅蜜多とは二無く二分無きが故なり。舍利子、畢竟不生は即ち是れ菩薩摩訶薩、菩薩
 摩訶薩は即ち是れ畢竟不生なり。何を以ての故に、畢竟不生と菩薩摩訶薩とは二無く二分無きが故
 なり。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、我れ豈に能く畢竟不生の般若波羅蜜多を以
 て畢竟不生の諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せんやと。

爾の時具壽普現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に畢竟不生を離
 れて亦た菩薩摩訶薩の能く無上正等菩提を行する無しと説くやとは、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般
 若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多の畢竟不生に異なるを見ず。亦た菩薩摩訶薩の畢竟不生に異
 るを見ず。何を以ての故に。若しは般若波羅蜜多若しは菩薩摩訶薩と畢竟不生とは二無く二分無き
 が故なり。(c)舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、亦た色の畢竟不生に異なるを見
 ず、亦た受想行識の畢竟不生に異なるを見ず。何を以ての故に、色乃至識と畢竟不生とは二無く二分
 無きが故なり。(c)眼處乃至意處。(c)色處乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至
 諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)眼界乃至諸受。(c)地界乃至識界。(c)苦聖諦乃至道聖諦。
 (c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)内容乃至無性自性空。(c)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)四靜慮

(b) 前卷と同章。

【一】 十分別中第八、般若を
 教ふる者なきを説く。

【二】 十分別中第九、畢竟不
 生を離れて菩提を行する無き
 を説く。

(c) 「舍利子諸菩薩摩訶薩修
 行般若波羅蜜多時不見色異畢
 竟不生亦不見受想行識異畢竟
 不生何以故色乃至識與畢竟不
 生無二分故」
 右の文中「色乃至識」のある所
 に次下に出す諸法を代入せば
 他は皆各諸法につき同文なり
 故に之を符號(c)にて略し以下
 その諸法ののみ略出す。

至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)意界乃至諸受。(a)地界乃至識界。

(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)內空乃至無性自性空。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脫乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)五眼、六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法。(a)一切智乃至一切相智。(a)無忘失法、恆住捨性。(a)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(a)極喜地乃至法雲地。(a)異性地乃至如來地。(a)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、色等の諸法は畢竟不生なりと。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に緣るが故に若し畢竟不生なれば則ち色等と名づけずと説くやとは、舍利子、是の如し是の如し、若し畢竟不生なれば則ち色等と名づけざるなり。何を以ての故に、(b)舍利子、色は本性空なるが故なり。若し法の本性空なれば則ち若しは生若しは滅若しは住若しは異なりと施設す可からず。此の緣に由るが故に若し畢竟不生なれば則ち色と名づけず。舍利子、受想行識は本性空なるが故なり。若し法の本性空なれば則ち若しは生若しは滅若しは住若しは異なりと施設す可からず。此の緣に由るが故に若し畢竟不生なれば則ち受想行識と名づけず。(b)眼處乃至意處。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)耳界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)意界乃至諸受。(b)地界乃至識界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)內空乃至無性自性空。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)八解脫乃至十遍處。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫乃至無願解脫門。

門。

卷の第七十

初分無所得品第十八之十

初分無所得品第十八之十

【六】 十分別中第七、畢竟不生なれば名けて五蘊等とすべきものなきを明す。
(b)「舍利子色本性空故……不名受想行識」
右を符號(b)にて略し以下(a)の場合と同方法によりて略出す。

復た次に舍利子、一切法は常に非ず壞に非ずと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、云何が一切法は常に非ず壞に非ざるやと。善現答へて言はく、舍利子、色は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。(2)眼處乃至意處。(2)色處乃至法處。(2)眼界乃至諸受。(2)耳界乃至諸受。(2)鼻界乃至諸受。(2)舌界乃至諸受。(2)身界乃至諸受。(2)境界乃至諸受。(2)地界乃至識界。(2)苦聖諦乃至道聖諦。(2)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(2)內空乃至無性自性空。(2)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(2)四靜慮乃至四無色定。(2)八解脫乃至十遍處。(2)四念住乃至八聖道支。(2)空解脫門乃至無願解脫門。(2)五眼、六神通。(2)佛の十力乃至十八不共法。(2)一切智乃至一切相智。(2)無忘失法、恆住捨性。(2)一切陀羅尼門。一切三摩地門。(2)極喜地乃至法雲地。(2)異生地乃至如來地。(2)聲聞乘乃至大乘。

舍利子、要を以て之を言はば一切の善法は常に非ず壞に非ず、何を以ての故に。本性爾るが故に。一切の非善法は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。一切の有記法は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。一切の無記法は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。一切の有爲法は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。一切の無爲法は常に非ず壞に非ず。何を以ての故に、本性爾るが故に。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に緣るが故に色等の諸法畢竟不生なりと説くやとは、(a)舍利子、色は本性畢竟不生なり。何を以ての故に、所作に非ざるが故に。受想行識は本性畢竟不生なり。何を以ての故に、所作に非ざるが故に。所以は何ん、色乃至識の作者不可得なるを以ての故なり。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至

(2)「舍利子色非常非壞何以故本性爾故」右を符號(2)にて略し以下(7)の場合に準じて略出するものとす。

【三】有記法。異熟果を引くべき表象を有する法、即ち善惡の二法をいふ。

【四】無記法。善とも惡とも記別し得ざる法を云ふ。

(a)「舍利子色本性畢竟不生……色乃至識作者不可得故」右を符號(a)にて略し以下前の場合と同方法により略出するものとす。

【五】作者。十六神我の一、外道に神我を立てるもの我を以て作者とす。

復た次に舍利子、諸法は、出世間にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法出世間ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か出世間にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(x)舍利子、色は出世間にして亦た散失無く、受想行識は出世間にして亦た散失無し。(x)眼處乃至意處。(x)色處乃至法處。(x)眼界乃至諸受。(x)耳界乃至諸受。(x)鼻界乃至諸受。(x)舌界乃至諸受。(x)身界乃至諸受。(x)意界乃至諸受。(x)地界乃至識界。(x)苦聖諦乃至道聖諦(x)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(x)內空乃至無性自性空。(x)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(x)四靜慮乃至四無色定。(x)八解脫乃至十遍處。(x)四念住乃至八聖道支。(x)空解脫門乃至無願解脫門。(x)五眼・六神通。(x)佛の十力乃至十八不共法。(x)一切智乃至一切相智。(x)無忘失法・恆住捨性。(x)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(x)極喜地乃至法雲地。(x)異生地乃至如來地。(x)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は、無爲にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無爲ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に向ふて言はく、何の法か無爲にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(y)舍利子、色は無爲にして亦た散失無く、(y)受想行識は無爲にして亦た散失無し、(y)眼處乃至意處。(y)色處乃至法處。(y)眼界乃至諸受。(y)耳界乃至諸受。(y)鼻界乃至諸受。(y)舌界乃至諸受。(y)身界乃至諸受。(y)意界乃至諸受。(y)地界乃至識界。(y)苦聖諦乃至道聖諦。(y)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(y)內空乃至無性自性空。(y)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(y)四靜慮乃至四無色定。(y)八解脫乃至十遍處。(y)四念住乃至八聖道支。(y)空解脫門乃至無願解脫門。(y)五眼・六神通。(y)佛の十力乃至十八不共法。(y)一切智乃至一切相智。(y)無忘失法・恆住捨性。(y)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(y)極喜地乃至法雲地。(y)異生地乃至如來地。(y)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

【一】 出世間。一切生死の法を世間と云ふに對し、涅槃の法を出世間と云ふ。

(x) 「舍利子色出世間亦無散失受想行識出世間亦無散失」右を符號(x)にて略し以下(w)の場合と同方法によりて略出す。

【二】 無爲(Aśambhava)。眞如の異名。因緣の造作無きをいふ。

(y)「舍利子色無爲亦無散失受想行識無爲亦無散失」右を符號(y)にて略し以下(x)の場合と同方法によりて略出す。

身界乃至諸受。(v)眼界乃至諸受。(v)地界乃至識界。(v)苦受諸乃至道聖諦。(v)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(v)內空乃至無性自性空。

卷の第六十九

初分無所得品第十八之九

(v)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(v)四靜慮乃至四無色定。(v)八解脫乃至十遍處。(v)四念住乃至四無色定。(v)空解脫門乃至無願解脫門。(v)五眼・六神通。(v)佛の十力乃至十八不共法。(v)一切智乃至一切相智。(v)無忘失法・恒住捨性。(v)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(v)極喜地乃至法雲地。(v)異生地乃至如來地。(v)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は清淨にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法清淨ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か清淨にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(w)舍利子、色は清淨にして亦た散失無く、受想行識は清淨にして亦た散失無し。(w)眼處乃至意處。(w)色處乃至法處。(w)眼界乃至諸受。(w)耳界乃至諸受。(w)鼻界乃至諸受。(w)舌界乃至諸受。(w)身界乃至諸受。(w)眼界乃至諸受。(w)地界乃至識界。(w)苦聖諦乃至道聖諦。(w)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(w)內空乃至無性自性空。(w)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(w)四靜慮乃至四無色定。(w)八解脫乃至十遍處。(w)四念住乃至八聖道支。(w)空解脫門乃至無願解脫門。(v)五眼・六神通。(w)佛の十力乃至十八不共法。(w)一切智乃至一切相智。(w)無忘失法・恒住捨性。(w)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(w)極喜地乃至法雲地。(w)異生地乃至如來地。(w)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

(v) 前巻と同意。

(w) 「舍利子色清淨亦無散失受想行識清淨亦無散失」
右を符號(w)にて略し以下(v)の場合と同方法によりて略す。

(t)身界乃至諸受。(t)眼界乃至諸受。(t)地界乃至識界。(t)苦聖諦乃至道聖諦。(t)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(t)內空乃至無性自性空。(t)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(t)四靜慮乃至四無色定。(t)八解脫乃至十遍處。(t)四念住乃至八聖道支。(t)空解脫門乃至無願解脫門。(t)五眼・六神通。(t)佛の十力乃至十八不共法。(t)一切智乃至一切相智。(t)無忘失法・恆住捨性。(t)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(t)極喜地乃至法雲地。(t)異生地乃至淨觀地。(t)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す。諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は無漏にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無漏ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か無漏にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(u)舍利子、色は無漏にして亦た散失無く、受想行識は無漏にして亦た散失無し。(u)眼處乃至意處。(u)色處乃至法處。(u)眼界乃至諸受。(u)耳界乃至諸受。(u)鼻界乃至諸受。(u)舌界乃至諸受。(u)身界乃至諸受。(u)意界乃至諸受。(u)地界乃至識界。(u)苦聖諦乃至過聖諦。(u)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(u)內空乃至無性自性空。(u)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(u)四靜慮乃至四無色定。(u)八解脫乃至十遍處。(u)四念住乃至八聖道支。(u)空解脫門乃至無願解脫門。(u)五眼・六神通。(u)佛の十力乃至十八不共法。(u)一切智乃至一切相智。(u)無忘失法・恆住捨性。(u)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(u)極喜地乃至法雲地。(u)異生地乃至如來地。(u)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す。諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は無染にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無染ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か無染にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(v)舍利子、色は無染にして亦た散失無く、受想行識は無染にして亦た散失無し(v)眼處乃至意處。(v)色處乃至法處。(v)眼界乃至諸受。(v)耳界乃至諸受。(v)鼻界乃至諸受。(v)舌界乃至諸受。(v)

(u)「舍利子色無漏亦無散失受想行識無漏亦無散失」右を符號(u)にて略し以下(t)の場合と同方法によりて略す。

(v)「舍利子色無染亦無散失受想行識無染亦無散失」右を符號(v)にて略し以下(u)の場合と同方法によりて略す。

(r) 身界乃至諸受。(r) 眼界乃至諸受。(r) 地界乃至識界。(r) 苦聖諦乃至道聖諦。(r) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(r) 內空乃至無性自性空。(r) 奢訶波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(r) 四靜慮乃至四無色定。(r) 八解脫乃至十遍處。(r) 四念住乃至八聖道支。(r) 空解脫門乃至無願解脫門。(r) 五眼・六神通。(r) 佛の十力乃至十八不共法。(r) 一切智乃至一切相智。(r) 無忘失法・恆住捨性。(r) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(r) 極喜地乃至諸雲地。(r) 異生地乃至如來地。(r) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は善にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法善ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法が善にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(s) 舍利子、色は善にして亦た散失無く、受想行識は善にして亦た散失無し。(s) 眼處乃至諸受。(s) 色處乃至法處。(s) 眼界乃至諸受。(s) 耳界乃至諸受。(s) 鼻界乃至諸受。(s) 舌界乃至諸受。(s) 身界乃至諸受。(s) 意界乃至諸受。(s) 地界乃至諸受。(s) 苦聖諦乃至道聖諦。(s) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(s) 內空乃至無性自性空。(s) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(s) 四靜慮乃至四無色定。(s) 八解脫乃至十遍處。(s) 四念住乃至八聖道支。(s) 空解脫門乃至無願解脫門。(s) 五眼・六神通。(s) 佛の十力乃至十八不共法。(s) 一切智乃至一切相智。(s) 無忘失法・恆住捨性。(s) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(s) 極喜地乃至法雲地。(s) 異生地乃至如來地。(s) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は無罪にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無罪ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法が無罪にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(t) 舍利子、色は無罪にして亦た散失無く、受想行識は無罪にして亦た散失無し。(t) 眼處乃至意處。(t) 色處乃至法處。(t) 眼界乃至諸受。(t) 耳界乃至諸受。(t) 鼻界乃至諸受。(t) 舌界乃至諸受。

(s) 「舍利子色善亦無散失受想行識善亦無散失」
右を符號(s)にて略し以下(r)の場合と同方法にて略す。

(t) 「舍利子色無罪亦無散失受想行識無罪亦無散失」
右を符號(t)にて略し以下(s)の場合と同方法により略す。

受。(p) 眼界乃至諸受。(p) 地界乃至識界。(p) 苦聖諦乃至道聖諦。(p) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(p) 內空乃至無自性自性空。(p) 四靜慮乃至四無色定。(p) 八解脫乃至十遍處。(p) 四念住乃至八聖道支。(p) 空解脫門乃至無願解脫門。(p) 五眼・六神通。(p) 佛の十力乃至十八佛不共法。(p) 一切智乃至一切相智。(p) 無忘失法・恆住捨性。(p) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(p) 極喜地乃至法雲地。(p) 異生地乃至如來地。(p) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は無相にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無相ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か無相にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(q) 舍利子、色は無相にして亦た散失無く、受想行識は無相にして亦た散失無し。(q) 眼處乃至意處。(q) 色處乃至法處。(q) 眼界乃至諸受。(q) 耳界乃至諸受。(q) 鼻界乃至諸受。(q) 舌界乃至諸受。(q) 身界乃至諸受。(q) 眼界乃至諸受。(q) 地界乃至識界。(q) 苦聖諦乃至道聖諦。(q) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(q) 內空乃至無自性自性空。(q) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(q) 四靜慮乃至四無色定。(q) 八解脫乃至十遍處。(q) 四念住乃至八聖道支。(q) 空解脫門乃至無願解脫門。(q) 五眼・六神通。(q) 佛の十力乃至十八佛不共法。(q) 一切智乃至一切相智。(q) 無忘失法・恆住捨性。(q) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(q) 極喜地乃至法雲地。(q) 異生地乃至如來地。(q) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は無願にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法無願ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か無願にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(r) 舍利子、色は無願にして亦た散失無く、受想行識は無願にして亦た散失無し。(r) 眼處乃至意處。(r) 色處乃至法處。(r) 眼界乃至諸受。(r) 耳界乃至諸受。(r) 鼻界乃至諸受。(r) 舌界乃至諸受。

【二】 無相。體なきこと。

(q) 「舍利子色無相亦無散失受想行識無相亦無散失」右を符號(q)にて略し以下(p)の場合と同方法にて略出す。

(r) 「舍利子色無願亦無散失受想行識無願亦無散失」右を符號(r)にて略し以下(q)の場合と同方法にて略出す。

(n) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(n) 四靜慮乃至四無色定。(n) 八解脫乃至十遍處。(n) 四念住乃至八聖道支。(n) 空解脫門乃至無願解脫門。(n) 五眼・六神通。(n) 佛の十力乃至十八不共法。(n) 一切智乃至一切相智。(n) 無忘失法・恆住捨性。(n) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(n) 極喜地乃至法雲地。(n) 異生地乃至如來地。(n) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に善現、諸法は遠離にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法遠離ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か遠離にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(o) 舍利子、色は遠離にして亦た散失無く、受想行識は遠離にして亦た散失無し。(o) 眼處乃至意處。(o) 色處乃至法處。(o) 眼界乃至諸受。(o) 耳界乃至諸受。(o) 鼻界乃至諸受。(o) 舌界乃至諸受。(o) 身界乃至諸受。(o) 眼界乃至諸受。(o) 地界乃至識界。(o) 苦聖諦乃至道聖諦。(o) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(o) 內空乃至無性自性空。

(o) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(o) 四靜慮乃至四無色定。(o) 八解脫乃至十遍處。(o) 四念住乃至八聖道支。(o) 空解脫門乃至無願解脫門。(o) 五眼・六神通。(o) 佛の十力乃至十八不共法。(o) 一切智乃至一切相智。(o) 無忘失法・恆住捨性。(o) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(o) 極喜地乃至法雲地。(o) 異生地乃至如來地。(o) 聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法空にして亦た散失無し。何を以ての故に、若し法空ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か空にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(p) 舍利子、色は空にして亦た散失無く、受想行識は空にして亦た散失無し。(p) 眼處乃至意處。(p) 色處乃至法處。(p) 眼界乃至諸受。(p) 耳界乃至諸受。(p) 鼻界乃至諸受。(p) 舌界乃至諸受。(p) 身界乃至諸

【一】遠離。無爲法の性は空にして一切の事相繫縛を脱するをいふ。

(o) 「舍利子色遠離亦無散失受想行識遠離亦無散失」右を符號(o)にて略し以下(n)の場合と同方法にて略す。

(p) 「舍利子色空亦無散失受想行識空亦無散失」右を符號(p)にて略し以下(o)の場合と同方法にて略出す。

復た次に舍利子、諸法は我に非ず亦た散失無し。何を以ての故に、若し法我に非ずんば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か我に非ず亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(m)舍利子、色は我に非ず亦た散失無く、受想行識は我に非ず亦た散失無し。(m)眼處乃至意處。(m)色處乃至法處。(m)眼界乃至諸受。(m)耳界乃至諸受。(m)鼻界乃至諸受。(m)舌界乃至諸受。(m)身界乃至諸受。(m)眼界乃至諸受。(m)地界乃至識界。(m)苦聖諦乃至道聖諦。(m)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(m)內空乃至無自性空。

卷の第六十八

初分無所得品第十八之八

(m)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(m)四靜慮乃至四無色定。(m)八解脫乃至十遍處。(m)四念住乃至八聖道支。(m)空解脫門乃至無願解脫門。(m)五眼・六神通。(m)佛の十力乃至十八不共法。(m)一切智乃至一切相智。(m)無忘失法・恆住捨性。(m)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(m)極喜地乃至法雲地。(m)異生地乃至如來地。(m)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は寂靜にして亦た散失無し。何を以ての故に。若し法寂靜ならば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か寂靜にして亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(n)舍利子、色は寂靜にして亦た散失無く、受想行識は寂靜にして亦た散失無し。(n)眼處乃至意處。(n)色處乃至法處。(n)眼界乃至諸受。(n)耳界乃至諸受。(n)鼻界乃至諸受。(n)舌界乃至諸受。(n)身界乃至諸受。(n)眼界乃至諸受。(n)地界乃至識界。(n)苦聖諦乃至道聖諦。(n)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(n)內空乃至無自性空。

【三】一切有爲無爲の諸法の中に我の實體無と云ふ。

(m)「舍利子色非我亦無散失受想行識非我亦無散失」右も符號(m)にて略し以下(1)の場合と同方法にて略出するものとす。

(m) 前卷と同意。

(n)「舍利子色寂靜亦無散失受想行識寂靜亦無散失」右も符號(n)にて略し以下前の場合と同方法にて略出するものとす。

が故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か常に非ず亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(k)舍利子、色は常に非ず亦た散失無く、受想行識は常に非ず亦た散失無し。(k)眼處乃至意處。(k)色處乃至法處。(k)眼界乃至諸受。(k)耳界乃至諸受。(k)鼻界乃至諸受。(k)舌界乃至諸受。(k)身界乃至諸受。(k)眼界乃至諸受。(k)地界乃至諸受。(k)苦聖諦乃至道聖諦。(k)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(k)內空乃至無性自性空。

(k)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(k)四靜慮乃至四無色定。(k)八解脫乃至十遍處。(k)四念住乃至八聖道支。(k)空解脫門乃至無願解脫門。(k)五眼・六神通。(k)佛の十力乃至十八不共法。(k)一切智乃至一切相智。(k)無忘失法・恒住捨性。(k)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(k)極喜地乃至法雲地。(k)異生地乃至如來地。(k)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は樂に非ず亦た散失無し。何を以ての故に、若し法樂に非ずんば盡性無きが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か樂に非ず亦た散失無きやと。善現答へて言はく、(l)舍利子、色は樂に非ず亦た散失無く、受想行識は樂に非ず亦た散失無し。(l)眼處乃至意處。(l)色處乃至法處。(l)眼界乃至諸受。(l)耳界乃至諸受。(l)鼻界乃至諸受。(l)舌界乃至諸受。(l)身界乃至諸受。(l)眼界乃至諸受。(l)地界乃至諸受。(l)苦聖諦乃至道聖諦。(l)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(l)內空乃至無性自性空。(l)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(l)四靜慮乃至四無色定。(l)八解脫乃至十遍處。(l)四念住乃至八聖道支。(l)空解脫門乃至無願解脫門。(l)五眼・六神通。

(l)佛の十力乃至十八不共法。(l)一切智乃至一切相智。(l)無忘失法・恒住捨性。(l)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(l)極喜地乃至法雲地。(l)異生地乃至如來地。(l)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

(k)「舍利子色非常亦無散失受想行識非常亦無散失」右は(l)の場合に準じて以下略するものとす。

(l)「舍利子色非樂亦無散失受想行識非樂亦無散失」右も前の(k)の場合に準じて以下略出す。

知者、見者は畢竟都て無所有にして得可からず。云何が生有らん。(i)色乃至識。(i)眼處乃至意處。(i)色處乃至法處。(i)眼界乃至諸受。(i)耳界乃至諸受。(i)鼻界乃至諸受。(i)舌界乃至諸受。(i)身界乃至諸受。(i)意界乃至諸受。(i)地界乃至識界。(i)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(i)內空乃至無性自性空。(i)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(i)四靜慮乃至四無色定。(i)八解脫乃至十遍處。(i)四念住乃至八聖道支。(i)空解脫門乃至無願解脫門。(i)五眼・六神通。(i)佛の十力乃至十八不共法。(i)一切智乃至一切相智。(i)無忘失法・恒住捨性。(i)一切陀羅尼門・一切三摩地門。(i)極喜地乃至法雲地。(i)異生地乃至如來地。(i)聲聞乘・獨覺乘・大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、我等畢竟不生なりと説くが如しと。

爾の時具善善現、復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に緣るが故に諸法も亦た爾なり都て自性無しと説くやとは、舍利子、諸法は都て和合の自性無し。何を以ての故に、和合して法有るも自性空なるが故なりと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の法か都て和合の自性無きやと。善現答へて言はく、(i)舍利子、色は都て和合の自性無く、受想行識は都て和合の自性無し。(i)眼處乃至意處。(i)色處乃至法處。(i)眼界乃至諸受。(i)耳界乃至諸受。(i)鼻界乃至諸受。(i)舌界乃至諸受。(i)身界乃至諸受。(i)意界乃至諸受。(i)地界乃至識界。(i)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(i)內空乃至無性自性空。

(i)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(i)四靜慮乃至四無色定。(i)八解脫乃至八聖道支。(i)空解脫門乃至無願解脫門。(i)佛の十力乃至十八不共法。(i)一切智乃至一切相智。(i)無忘失法・恒住捨性。(i)一陀羅尼門・一切三摩地門。(i)極喜地乃至法雲地。(i)異生地乃至如來地。(i)聲聞乘乃至大乘。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の說を作す、諸法も亦た爾なり都て自性無しと。

復た次に舍利子、諸法は常に非ず亦た散失無し。何を以ての故に、若し法常に非ずんば盡性無き

(j)〔舍利子色都無和合自性受想行識都無和合自性〕右の文中「色乃至識」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は各諸法につき皆同文なり故に之を符號(j)にて略し以下その諸法のみ略出す。

【三】生滅の相を離るゝを云ふ。

る所無く亦た住する所無し。受想行識の中名無く名の中受想行識無し。合に非ず雖に非ず但だ假りの施設のみ。何を以ての故に、受想行識と名と俱に自性空なるを以ての故に。自性空の中若しは受想行識若しは名俱に無所有にして得可からざるが故に。菩薩摩訶薩の名も亦復た是の如し。唯だ客に攝せらるるのみ。十方三世に於て從來する所無く至去する所無く亦た住する所無し。菩薩摩訶薩の中名無く名の中菩薩摩訶薩無し、合に非ず雖に非ず但だ假りの施設のみ。何を以ての故に、菩薩摩訶薩と名と俱に自性空なるを以ての故に。自性空の中若しは菩薩摩訶薩若しは名俱に無所有にして得可からざるが故に、舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、菩薩摩訶薩は但だ假名有るのみと。

(a) 眼處乃至意處。(b) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至諸受。(d) 身界乃至諸受。(e) 意界乃至諸受。

(h) 地界乃至識界。(h) 苦聖諦乃至道聖諦。(h) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。

(h) 四靜慮乃至四無色定。(h) 八解脫乃至十遍處。(h) 四念住乃至八聖道支。

卷の第六十七

初分無所得品第十八之七

(h) 空解脫門乃至無願解脫門。(h) 五眼・六通。(h) 佛の十力乃至十八佛不共法。(h) 一切智乃至一切相智。(h) 無忘失法・恒住捨性。(h) 一切陀羅尼門・一切三摩地門。(h) 內空乃至無性自性空。(h) 眞如乃至實際・究竟涅槃。(h) 極喜地乃至法雲地。(h) 異生地乃至如來地。(h) 聲聞乘・獨覺乘・大乘。

爾の時具壽善現、復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く何に緣るが故に、我等畢竟不生なりと説くが如しと説くやとは、(i) 舍利子、我は畢竟都て無所有にして既に得可からず。云何が生有らん。有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・儒童・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者。

(h) 前卷と同意。

【一】十分別中第六、名字空なるが如く八法畢竟不生なるを明す。

(i) 「舍利子我等畢竟都て無所有………知者見者畢竟都て無所有既不可得」右の文中「我等乃至見者のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆各諸法につき同文なり故に之を符號(i)にて略し以下その諸法のみ略出す。

藐三佛陀。(g)菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多、教誡教授。

舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、我れ一切法に於て一切種を以て一切處、一切時に菩薩摩訶薩を求むるも都て見る所無く竟に得可からず。云何が我れをして般若波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せしむると。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に、菩薩摩訶薩は但だ假名有るのみと説くやとは、舍利子、菩薩摩訶薩の名は唯だ客に攝せらるるのみなるが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に縁るが故に、菩薩摩訶薩の名は唯だ客に攝せらるるのみと説くやと。善現答へて言はく、一切法の名の如き唯だ客に攝せらるるのみ、十方三世に於て從來する所無く至去する所無く住する所無し。一切法の中名無く、名の中一切法無し。合に非ず離に非ず但だ假りの施設のみ。何を以ての故に、一切法と名と俱に自性空なるを以ての故に。自性空の中若しは一切法、若しは名俱に無所有にして得可からざるが故に。菩薩摩訶薩の名も亦復た是の如く唯だ客に攝せらるるのみ。十方三世に於て從來する所無く至去する所無く亦た住する所無し。菩薩摩訶薩の中名無く、名の中菩薩摩訶薩無し。合に非ず離に非ず但だ假りの施設のみ。何を以ての故に、菩薩摩訶薩と名と俱に自性空なるを以ての故に。自性空の中若しは菩薩摩訶薩、若しは名俱に無所有にして得可からざるが故に。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す、菩薩摩訶薩は但だ假名有るのみと。

(h) 舍利子、色の名の如き唯だ客に攝せらるるのみ、十方三世に於て從來する所無く至去する所無く亦た住する所無し。色の中名無く、名の中色無し。合に非ず離に非ず但だ假りの施設のみ。何を以ての故に、色と名と俱に自性空なるを以ての故に。自性空の中若しは色若しは名俱に無所有にして得可からざるが故に。受想行識の名の如き唯だ客に攝せらるるのみ。十方三世に於て從來する所無く至去す

【一】十分別中第五、菩薩を教ふとは假名施設に過ぎざるを説く。
【二】假名。實體無きものに假りにつけし名。故に一切の名は虚假不實にて實體に契はずとなす。

(h) 「舍利子如色名唯客所攝於十方三世無所從來無所至去亦無所住……如受想行識名唯客所攝……舍利子由此緣故我作是說菩薩摩訶薩但有是説」
右の文中「色乃至識」のある所に相應して次に出す諸法を代入せば他は各諸法につき皆同文なり故に之を符號(h)にて略し以下その諸法のみ略出す。

り。想性空なるが故に。想は想に於て無所有不可得なり。想は色受に於て無所有不可得なり。色受想は行に於て無所有不可得なり。行性空なるが故に行は行に於て無所有不可得なり。行は色受想に於て無所有不可得なり。色受想行は識に於て無所有不可得なり。識性空なるが故に識は識に於て無所有不可得なり。識は色受想行に於て無所有不可得なり。舍利子、我れ是の如き諸法に於て一切種を以て一切處、一切時に菩薩摩訶薩を求むるも亦た無所有不可得なり。何を以ての故に、自性空なるが故に。

(g) 眼處乃至意處。(g) 色處乃至法處。

卷の第六十五

初分無所得品第十八之五

(g) 眼界乃至諸受。(g) 耳界乃至諸受。(g) 鼻界乃至諸受。(g) 舌界乃至諸受。(g) 身界乃至諸受。(g) 意界乃至諸受。(g) 地界乃至識界。(g) 苦聖諦乃至道聖諦。(g) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(g) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g) 四靜慮乃至四無色定。(g) 八解脫乃至十遍處。(g) 四念住乃至八聖道支。(g) 空解脫門乃至無願解脫門。(g) 五眼・六神通。(g) 佛の十力乃至十八不共法。(g) 一切智乃至一切相智。(g) 無忘失法、恒住捨性。(g) 一切陀羅尼門、一切三摩地門。(g) 內空乃至無性自性空。(g) 眞如乃至實際、究竟涅槃。(g) 極喜地乃至法雲地。(g) 極喜地乃至法雲地。

卷の第六十六

初分無所得品第十八之六

(g) 異生地乃至如來地。(g) 異生地乃至如來地。(g) 須流向法乃至三藐三佛陀法。(g) 須流向乃至三

(g) 前卷と同意。

(g) 前巻と同意。

可からするが故に、菩薩摩訶薩も亦た無所有にして得可からず。非受想行識は非受想行識性空なり。何を以ての故に、非受想行識空の中非受想行識は無所有にして得可からざるが故に、菩薩摩訶薩も亦た無所有にして得可からず。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す。色に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、色を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず。受想行識に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、受想行識を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からずと。(f)眼處乃至意處。(g)色處乃至法處。

卷の第六十四

初分無所得品第十八之四

(f)眼界乃至諸受。(f)耳界乃至諸受。(f)鼻界乃至諸受。(f)舌界乃至諸受。(f)身界乃至諸受。(f)意見乃至諸受。(f)地諸乃至識界。(f)苦聖諦乃至道聖諦。(f)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(f)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f)四靜慮乃至四無色定。(f)八解脫乃至十遍處。(f)四念住乃至八聖道支。(f)空解脫門乃至無願解脫門。(f)五眼・六神通。(f)佛の十力乃至一切智・一切相智。(f)道相智。(f)無忘失法、恒住捨性。(f)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(f)內空乃至無性自性空。(f)眞如乃至實際、究竟涅槃。(f)聲聞乘・獨覺乘・大乘。(f)聲聞補特伽羅、獨覺大乘補特伽羅。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に我れ一切法に於て一切種を以て一切處、一切時に菩薩摩訶薩を求むるも都て見る所無く竟に得可からず。云何が我れをして般若波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せしむるやと説くやとは、(g)舍利子、色性空なるが故に色は色に於て無所有不可得なり。色は受に於て無所有不可得なり。受性空なるが故に受は受に於て無所有不可得なり。受は色に於て無所有不可得なり。色受は想に於て無所有不可得な

(f) 前卷と同意。
【一】 十分別中第四、菩薩不可得の故に般若の所化とすべきものなきを示す。

(g) 「舍利子色性空故色於色無所有不可得色於受無所有不可得受性空……識於色受想行無所有不可得舍利子我於如是諸法以一切種一切處一切時求菩薩摩訶薩亦無所有不可得何以故自性空故」
右の文中「色乃至識」のある所に相應して次下所出の諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(g)にて略し以下その諸法のみ略出す。

爾の時具壽善現復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に緣るが故に色等無邊なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと説くやとは(一)舍利子、色は虚空の如く、受想行識は虚空の如し。所以は何ん、舍利子、虚空の前際得可からず後際得可からず中際得可からざるが如く、彼の中邊得可からざるを以ての故に説いて虚空と爲す。色受想行識も亦た是の如し、前際得可からず後際得可からず中際得可からず。何を以ての故に、色性空なるが故に。受想行識性空なるが故に、空の中前際得可からず後際得可からず中際得可からず。亦た中邊俱に得可からざるを以ての故に説いて空と爲す。舍利子、此の緣に由るが故に我れ是の説を作す。色無邊なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無邊なり、受想行識無邊なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。(一)眼處乃至意處。(二)色處乃至法處。(三)眼界乃至諸受。(四)耳界乃至諸受。(五)鼻界乃至諸受。(六)舌界乃至諸受。(七)身界乃至諸受。(八)意界乃至諸受。(九)地界乃至識界。(十)苦聖諦乃至道聖諦。(十一)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(十二)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(十三)四靜慮乃至四無色定。(十四)八解脫乃至十遍處。(十五)四念住乃至八聖道支。(十六)空解脫門乃至無願解脫門。(十七)五眼・六神通。(十八)佛の十力乃至一切相智。(十九)無忘失法、恒住捨性。(二十)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(二十一)內空乃至無性自性空。(二十二)眞如乃至實際、究竟涅槃。(二十三)聲聞乘、獨覺乘、大乘。

爾の時具壽善現、復た舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に緣るが故に、色等に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、色等を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からずと説くやとは、(一)舍利子、色は色性空なり。何を以ての故に、色性空の中色は無所有にして得可からざるが故に。菩薩摩訶薩も亦た無所有にして得可からず。非色は非色性空なり。何を以ての故に、非色性空の中非色は無所有にして得可からざるが故に、菩薩摩訶薩も亦た無所有にして得可からず。受想行識は受想行識性空なり。何を以ての故に、受想行識性空の中受想行識は無所有にして得

【一】 十分別第二、色等諸法無邊にして菩薩も無邊なれば邊中不可得なるを明す。

(一) 舍利子色如虚空………受想行識無邊故當知菩薩摩訶薩亦無邊。

右も前の(d)の場合と同方法によりて以下略出す。

(二) 聲聞乘、獨覺乘、大乘。十分別第三、五蘊等當體菩薩にして而も諸法の體相不可得なり菩薩不可得なるを説く。

(三) 舍利子色性空………受想行識菩薩摩訶薩無所有不可得。

右も(e)の場合に準じて以下略出す。

(三) 非色。五蘊中、受想行識の四蘊をいふ。即ち四大所及び四大所生の法に非ざるも

色受想行識の無所有異り有るに非ず、色受想行識の空異り有るに非ず、色受想行識の遠離異り有るに非ず、色受想行識の無自性異り有るに非ず、前際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず、後際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず。中際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず。舍利子、若しは色受想行識の無所有、若しは色受想行識の空、若しは色受想行識の遠離、若しは色受想行識の無自性、若しは前際の菩薩摩訶薩、若しは後際の菩薩摩訶薩、若しは中際の菩薩摩訶薩、是の如き一切法は二無く二分無し。舍利子、此の縁に由るが故に我れ是の説を作す。前際の菩薩摩訶薩得可からず、後際の菩薩摩訶薩得可からず、中際の菩薩摩訶薩得可からずと。

(d) 眼處乃至意處。(d) 色處乃至法處。(d) 眼界乃至諸受。

卷の第六十二

初分無所得品第十八之二

(d) 耳界乃至諸受。(d) 鼻界乃至諸受。(d) 舌界乃至諸受。(d) 身界乃至諸受。(d) 眼界乃至諸受。(d) 地界乃至識界。(d) 苦聖諦乃至道聖諦。(d) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d) 四靜慮乃至四無色定。(d) 八解脫乃至十遍處。(d) 四念住乃至八聖道支。(d) 空解脫門乃至無願解脫門。(d) 五眼・六神通。(d) 佛の十力乃至一切相智。(d) 無忘失法・恒住捨性。

卷の第六十三

初分無所得品第十八之三

(d) 一切陀羅尼門 一切三摩地門。(d) 內容乃至無自性空。(d) 眞如乃至實際。(d) 聲聞乘。(d) 獨覺乘。

(d) 前卷と同意。

能く畢竟不生の般若波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せんやと説くや。何に縁るが故に畢竟不生を離れて亦た菩薩摩訶薩の能く無上正等菩提を行する無しと説くや。何に縁るが故に若し菩薩摩訶薩、是の説を作すを聞き其の心驚かず恐れず怖かず沈まず没せず亦た憂悔せずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多を行するなりと説くやと。

爾の時具壽善現、舍利子に答へて言はく、尊者の云ふ所の如く、何に縁るが故に前際の菩薩摩訶薩得可からず後際の菩薩摩訶薩得可からず中際の菩薩摩訶薩得可からずと説くやとは、舍利子、有情無所有たるが故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、有情空なるが故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、有情遠離の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、有情自性無きが故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からざるなり。何を以ての故に、舍利子、有情無所有・空・遠離・無自性中・前後中際の菩薩摩訶薩皆得可からざるが故に。舍利子、有情の無所有異り有るに非ず、有情の空異り有るに非ず、有情の遠離異り有るに非ず、有情無自性異り有るに非ず、前際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず、後際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず、中際の菩薩摩訶薩異り有るに非ず。舍利子、若しは有情の無所有、若しは有情の空、若しは有情の遠離、若しは有情の無自性、若しは前際の菩薩摩訶薩、若しは後際の菩薩摩訶薩、若しは中際の菩薩摩訶薩、是の如き一切法は二無く二分無し。舍利子、此の縁に由るが故に是の説を作す、前際の菩薩摩訶薩得可からず後際の菩薩摩訶薩得可からず中際の菩薩摩訶薩得可からずと。舍利子、色無所有なるが故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、受想行識無所有たるが故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず。色空の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、受想行識空の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず。色遠離の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、受想行識遠離の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず、色無自性の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず。受想行識無自性の故に前後中際の菩薩摩訶薩得可からず。何を以ての故に、舍利子、

【四】善現十種分別、第一三際不可得を明す。

(d) 「舍利子色無所有故前後中際菩薩摩訶薩不可得受想行識無所有故前後中際菩薩摩訶薩不可得……我作是說前際菩薩摩訶薩不可得後際菩薩摩訶薩不可得中際菩薩摩訶薩不可得」

右の文中「色乃至識」のある所に相應して次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(d)にて略し以下その諸法を略出するに止む。

開補特伽羅に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、聲聞補特伽羅を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、獨覺大乘に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、獨覺大乘を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からざるなり。世尊、我れ一切法に於て一切種を以て一切處、一切時に菩薩摩訶薩を求むるも都て見る所無く竟に得可からざるなり。云何が我れをして般若波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せしむるや。世尊、菩薩摩訶薩は但だ假名のみ有り、我等畢竟不生なりと説くが如く諸法も亦た爾なり。都て自性無し。世尊、色等の諸法は畢竟不生なり。若し畢竟不生なれば則ち色等と名づけず。世尊、我れ豈に能く畢竟不生の般若波羅蜜多を以て畢竟不生の諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せんや。世尊、畢竟不生を離れて亦た菩薩摩訶薩の能く無上正等菩提を行する無し。世尊、若し菩薩摩訶薩是の説を作すを聞き、其の心驚かず恐れず怖かず沈まず没せず亦た憂悔せずんば當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多を行するなりと。

三 時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に緣るが故に前際の菩薩摩訶薩得可からず、後際の菩薩摩訶薩得可からず、中際の菩薩摩訶薩得可からずと説くや。何に緣るが故に色等無邊なるが故に菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと説くや。何に緣るが故に色等に即せる菩薩摩訶薩無所有にして得可からず、色等を離れし菩薩摩訶薩無所有にして得可からずと説くや。何に緣るが故に我れ一切法に於て一切種を以て一切處、一切時に菩薩摩訶薩を求むるも都て見る所無く竟に得可からず、云何が我れをして般若波羅蜜多を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せしむるやと説くや。何に緣るが故に菩薩摩訶薩は但だ假名のみ有りと説くや。何に緣るが故に我等畢竟不生なりと説くが如しと説くや。何に緣るが故に諸法も亦た爾なり都て自性無しと説くや。何に緣るが故に色等の諸法畢竟不生なりと説くや。何に緣るが故に若し畢竟不生なれば則ち色等と名づけずと説くや。何に緣るが故に我れ豈に

【三】不生。涅槃に同じ、諸法常住にして初めて生ぜざるの意。

【三】舍利子十種分別の因縁を問ふ。

初分無所得品第十八之一

爾の時具壽善現、佛に白して言とく、世尊、前際の菩薩摩訶薩得可からず、後際の菩薩摩訶薩得可からず、中際の菩薩摩訶薩得可からざるなり。(b)世尊、色無邊なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと、受想行識無邊なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。(b)眼處乃至諸受。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)耳界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。至意處。(b)身界乃至諸受。(b)眼界乃至諸受。(b)地界乃至諸受。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)八解脫乃至十遍處。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門乃至無願解脫門。(b)五眼・六神通。(b)佛の十力乃至一切相智。(b)佛の十力乃至一切相智。(b)無忘失法、恒住捨性。(b)一切陀羅尼門、一切三摩地門、(b)內容乃至無性自性空。(b)眞如乃至實際、究竟涅槃。(b)聲聞乘。(b)獨覺乘。(b)大乘。

(c)世尊、色に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、色を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、受想行識に即せる菩薩摩訶薩は無所有にして得可からず、受想行識を離れし菩薩摩訶薩は無所有にして得可からざるなり。(c)眼處乃至意處。(c)色處乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)眼界乃至諸受。(c)地界乃至諸受。(c)苦聖諦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)八解脫乃至十遍處。(c)四念住乃至八聖道支。(c)空解脫門乃至無願解脫門。(c)五眼・六神通。(c)佛の十力乃至一切相智。(c)道相智。(c)無忘失法、恒住捨性。(c)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(c)內容乃至無性自性空。(c)眞如乃至實際、究竟涅槃。(c)聲聞乘・性覺乘・大乘。世尊、聲

【一】菩薩無邊不可得なれば爲に説くべき菩薩なきを示すに三際不可得等の十を以てす。
 (b)「世尊色無邊故……」受想行識無邊故當知菩薩摩訶薩亦無邊」の場合の如く「色乃至右も(a)の場合に代入して略すものとす他は皆(a)の場合に準ず。

(c)「世尊即色菩薩摩訶薩……」受想行識菩薩摩訶薩無所有不可得」右も(b)の場合の如くして略す。

は世間出世間法、若しは四靜慮乃至四無色定、若しは八解脫、若しは八勝處、九次第定・十遍處、若しは四念住乃至八聖道支、若しは空解脫門乃至無願解脫門、若しは五眼、若しは六神通、若しは佛の十力乃至一切相智、若しは無忘失法若しは恆住捨性、若しは一切陀羅尼門若しは一切三摩地門、若しは諸の如來若しは佛の所覺所說の法律、若しは內空乃至無性自性空、若しは眞如乃至實際、究竟涅槃、是の如き等の一切法は皆相應に非ず不相應に非ず、有色に非ず無色に非ず、有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、咸く同一相にして所謂無相なり。善現、此の因縁に由りて、汝が向に説く所の大乘は般若波羅蜜多に於て悉く皆隨順し違越する所無きなり。所以は何ん、(a)善現、大乘は般若波羅蜜多に異らず、般若波羅蜜多は大乘に異らず。何を以ての故に、若しは大乘、若しは般若波羅蜜多、其の性二無く二分無きが故に。善現、大乘は靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多に異らず、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多は大乘に異らず。何を以ての故に、若しは大乘、若しは靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多、其の性二無く二分無きが故に。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脫乃至十遍處。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)五眼・六神通、(a)佛の十力乃至一切相智。(a)無忘失法・恆住捨性。(a)蘊處界等の空不空法。善現、此の因縁に由り汝が向に説く所の大乘は般若波羅蜜多に於て悉く皆隨順し違越する所無し。若し大乘を説かば則ち爲れ已に般若波羅蜜多を説くなり。若し般若波羅蜜多を説かば則ち爲れ已に大乘を説くなり。是の如き二法は別異無きが故にと。

(た) 八解脫。八勝處九次第定十遍處。

(a) 「善現大乘不異般若波羅蜜多……若靜慮精進安忍淨戒布施波羅蜜多其性無二分故」
右の文中「般若乃至布施波羅蜜多」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

初分隨順品第十七

爾の時滿慈子、佛に白して言さく、世尊、如來は先に尊者善現をして諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜多を宣説せしめたまへり。而かも今何が故ぞ乃ち大乘を説きたまふやと。具壽善現即ち佛に白して言さく、世尊、我が向に説く所の大乘は將に般若波羅蜜多に違越する無き耶と。佛、善現に告げたまはく、汝向に説きし所の大乘は般若波羅蜜多に於て悉く皆隨順し違越する所無し。何を以ての故に、善現、一切の善法、菩提分法、若しは聲聞法、若しは獨覺法、若しは諸佛法、是の如き一切は般若波羅蜜多に攝入せざる無ければなりと。時に具壽善現、復た佛に白して言さく、世尊、何等か一切の善法、菩提分法、若しは聲聞法、若しは獨覺法、若しは諸佛法、皆悉く般若波羅蜜多に攝入する耶と。佛言はく、善現、若しは布施波羅蜜多・淨戒波羅蜜多・安忍波羅蜜多・精進波羅蜜多・靜慮波羅蜜多・般若波羅蜜多。若しは四靜慮乃至四無色定。若しは四念住乃至八聖道支。若しは空解脫門乃至無願解脫門。若しは佛の十力乃至十八不共法。若しは一切智乃至一切相智。若しは無忘失法、恆住捨性。善現、諸の是の如き等の一切の善法、菩提分法、若しは聲聞法。若しは獨覺法。若しは菩薩法。若しは諸佛法、是の如き一切皆悉く般若波羅蜜多に攝入す。

復た次に善現、若しは大乗、若しは般若波羅蜜多、若しは靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多、若しは色乃至識、若しは眼處乃至意處、若しは色處乃至法處、若しは眼界乃至諸受、若しは耳界乃至諸受、若しは鼻界乃至諸受、若しは舌界乃至諸受、若しは身界乃至諸受、若しは意界乃至諸受、若しは地界乃至識界、若しは苦聖諦乃至道聖諦、若しは無明乃至老死愁歎苦憂惱、若しは、欲界、若しは色無色界、若しは善・法非善法、若しは有記無記法、若しは有漏無漏法、若しは有爲無爲法、若し

【一】 滿慈子は既に大乘と般若と一致することを疑はざるも新學鈍根の爲に疑なからしめんとして問ひ佛これを決す。

【二】 菩提分法。三十七道品、即ち、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道支の總名。

づく。若し菩薩摩訶薩、是の如き大乘相の中に安住せば、一切世間天人阿素洛等に超勝し、速に能く一切智智を證得し有情を利樂せんと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、善い哉善い哉、如來應正等覺は菩薩摩訶薩の大乘を善説し正説したまふ。世尊、是の如き大乘は最尊最妙なり。過去の諸の菩薩摩訶薩、此の中に於て學して已に一切智智を得たり。未來の諸の菩薩摩訶薩も、此の中に於て學して當に一切智智を得べし。現在の十方無量無數無邊世界の一切の菩薩摩訶薩も此の中に於て學して今一切智智を得。是の故に大乘は最尊最妙にして一切智智の眞の勝所依なりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所説の如し。過去未來現在の諸の菩薩摩訶薩は皆大乘に依り精勤修學して速に無上正等菩提を證。是の故に大乘は最尊最妙なりと。

得可からず、三世平等中の受想行識も亦た得可からず。所以は何ん、善現、平等中の過去未來現在の受想行識皆得可からざればなり。何を以ての故に、平等中の平等性すら尚ほ得可からず、何かに況んや平等中過去未來現在の受想行識得可きこと有らんをや。

(e) 眼處乃至意處。(e) 色處乃至法處。(e) 眼界乃至諸受。(e) 耳界乃至諸受。(e) 鼻界乃至諸受。(e) 舌界乃至諸受。(e) 身界乃至諸受。(e) 意界乃至諸受。(e) 地界乃至識界。(e) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(e) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e) 四靜慮乃至四無色定。(e) 四念住乃至八聖道支。(e) 空解脫門乃至無願解脫門。(e) 五眼・六神通。(e) 佛の十力乃至一切相智。

卷の第六十一

初分讚大乘品第十六之六

善現、前際の異生得可からず、後際の異生得可からず、中際の異生得可からず、三世平等中の異生も亦た得可からず。所以は何ん、善現、平等の中過去未來現在の異生皆可からざればなり。何を以ての故に、平等中平等性すら尚ほ得可からず。何に況んや平等中過去未來現在の異生得可き有らんをや。我有情乃至知者見者得可からざるを以ての故に。善現、前際の聲聞獨覺菩薩如來得可からず、後際の聲聞獨覺菩薩如來得可からず、中際の聲聞獨覺菩薩如來得可からず、三世平等中の聲聞獨覺菩薩如來も亦た得可からず。所以は何ん、善現、平等中の過去未來現在の聲聞獨覺菩薩如來皆得可からざればなり。何を以ての故に、平等中平等性すら尚ほ得可からず、何かに況んや平等中過去未來現在の聲聞獨覺菩薩如來得可き有らんをや。我有情乃至知者見者得可からざるを以ての故に。

善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の三世平等相の中に住し、精勤して一切智智を修學し取著無きが故に速に圓滿することを得。善現、是れを菩薩摩訶薩の三世平等大乘相と

【一】 異生。凡夫の異名。

得なり。何を以ての故に、過去の受想行識は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尙ほ不可得なり。何かに況んや空中過去の受想行識得可き有らんをや。善現、空中の未來の受想行識不可得なり。何を以ての故に、未來の受想行識は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尙ほ不可得なり。何かに況んや空中未來の受想行識得可き有らんをや。善現、空中の現在の受想行識不可得なり。何を以ての故に、現在の受想行識は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尙ほ不可得なり。何かに況んや空中現在の受想行識得可き有らんをや。善現、空中の過去未來現在の受想行識不可得なり。何を以ての故に、過去未來現在の受想行識は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尙ほ不可得なり。何かに況んや空中過去未來現在の受想行識得可き有らんをや。

(d)眼處乃至意處。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)眼界乃至諸受。(d)地界乃至識界。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。

卷の第六十

初分讚大乘品第十六之五

(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至一切相智。(d)異生・聲聞・獨覺・菩薩・如來。我有情乃至知者見者不可得なるを以ての故に。

復た次に^(e)善現、前際の色得可からず、後際の色得可からず、中際の色得可からず、三世平等中の色も亦た得可からず。所以は何ん、善現、平等中の過去未來現在の色皆得可からざればなり。何を以ての故に、平等中の平等性すら尙ほ得可からず、何かに況んや平等中過去未來現在の色得可きこと有らんをや。善現、前際の受想行識得可からず、後際の受想行識得可からず、中際の受想行識

(e) 「善現前際色不可得……何況平等中有過去未來現在受想行識可得」
右の全文を所付の符號にて略し以下只だ「色乃至識」のある所に代入すべき諸法のみ略出す何者之を代入せば原文と全く等しきを得るが故に。
【一】 平等性。眞如のこと。眞理の性は一切諸法に周遍して平等なる故にいふ。

何ん、善現、過去世は過去世空、未來世は未來世空、現在世は現在世空、三世平等性は三世平等性空、大乘性は大乗性空、菩薩摩訶薩は菩薩摩訶薩性空なればなり。何を以ての故に、善現、空は一二三四五六七八九十の別異の相無し。是の故に大乘は三世平等なり。善現、是の如く大乘中、平等不平等相俱に得可からず、貪不貪相俱に得可からず、瞋不瞋相俱に得可からず、癡不癡相俱に得可からず、慢不慢相俱に得可からず、是の如く乃至善非善相俱に得可からず、有記無記相俱に得可からず、有漏無漏相俱に得可からず、有罪無罪相俱に得可からず、有染雜染相俱に得可からず、世間出世間相俱に得可からず、雜染清淨相俱に得可からず、生死涅槃相俱に得可からず、常無常相俱に得可からず、樂及び苦相俱に得可からず、我無我相俱に得可からず、淨不淨相俱に得可からず、寂靜不寂靜相俱に得可からず、遠離不遠離相俱に得可からず、欲界出欲界相俱に得可からず、色界出色界相俱に得可からず、無色界出無色界相俱に得可からず。何を以ての故に、善現、大乘中諸法の自性不可得なるを以ての故に。(d) 善現、過去の色は過去の色空、未來の色は未來の色空、現在の色は現在の色空。過去の受想行識は過去の受想行識空、未來の受想行識は未來の受想行識空、現在の受想行識は現在の受想行識空なり。所以は何ん、善現、空中過去の色は不可得なればなり。何を以ての故に、過去の色は即ち是れ空、空性も亦空なり。空中の空尚ほ不可得なり、何かに況んや空中過去の色得可き有らんをや。善現、空中未來の色不可得なり。何を以ての故に、未來の色は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尚ほ不可得なり。何かに況んや空中未來の色得可き有らんをや。善現、空中の現在の色不可得なり。何を以ての故に、現在の色は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尚ほ不可得なり、何かに況んや空中現在の色得可き有らんをや。善現、空中の過去未來現在の色不可得なり。何を以ての故に、過去未來現在の色は即ち是れ空、空性も亦た空なり。空中の空尚ほ不可得なり、何かに況んや空中過去未來現在の色得可き有らんをや。善現、空中の過去の受想行識不可

(d) 「善現過去色過去色空……何況空中有過去未來現在受想行識可得」
右の全文を符號にて(d)にて略し以下「色乃至識」のある所に代入すべき諸法のみ略出す何者之を代入せば各諸法につき色等の五蘊の場合と全く同文となるが故に。

り、來る無く去る無く住して見る可き無しとは、是の如し是の如し、汝が所説の如し。所以は何ん。善現、一切法は來る無く去る無く亦復た住せざるを以てなり。何を以ての故に、一切法の若しは動、若しは住不可得なるを以ての故に。(c)善現色は來る無く去る無く亦復た住せず、受想行識は來る無く去る無く亦復た住せず。色の本性は來る無く去る無く亦復た住せず、受想行識の本性は來る無く去る無く亦復た住せず。色の眞如は來る無く去る無く亦復た住せず、受想行識の眞如は來る無く去る無く亦復た住せず。色の自性は來る無く去る無く亦復た住せず、受想行識の自性は來る無く去る無く亦復た住せず。何を以ての故に、善現、色受想行識及び彼の本性・眞如・自性・自相の若しは動、若しは住不可得なるを以ての故に。(c)眼處乃至意處。(c)色處乃至法處。

(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)意界乃至諸受。

(c)地界乃至識界。(c)苦聖諦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)眞如乃至實際。(c)內空乃至無自性自性空。(c)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)四念住乃至八聖道支。

卷の第五十九

初分讚大乘品第十六之四

(空解脱門乃至無願解脱門。(c)五眼・六神通。(c)佛の十力乃至一切相智。(c)菩薩・佛陀。(c)有爲・無爲・善現、故に説く、大乘は來る無く去る無く住して見る可き無し、譬へば虚空の如しと。

復た次に善現、汝が言ふ又た虚空は、前後中際皆不可得なるが如く大乘も亦た爾なり、前後中際皆不可得なり。三世平等なるが故に大乘と名づくとは、是の如し是の如し。汝が所説の如し。所以は

(c)「復次」の二字を添へて。
 「復次善現色無來無去亦復不住……以色受想行識及彼本性眞如自性自相若動若住不可得故」
 右の全文を符號(c)にて略し以下「色乃至識」のある所に代入すべき諸法のみを略出す何者之を代入せば皆色等の五蘊の場合と全く等しきが故に

(c) 前卷と同意。

【一】先に善現の前後中際得べからずとの説を印可し廣説し給ふ。

【二】前後中際。過去、未來、現在の三世をいふ。

が故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし無邊も亦た無所有なりと。無邊無所有なるが故に當に知るべし一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に、大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと説く。何を以ての故に、善現、若しは我乃至見者、若しは聲聞乘獨覺乘正等覺乘、若しは虛空、若しは大乘、若しは無數、若しは無量、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有不可得なるが故に。

復た次に善現、我乃至見者無所有なるが故に當に知るべし聲聞乘補特伽羅も亦た無所有なりと。聲聞乘補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし獨覺乘補特伽羅も亦た無所有なりと。獨覺乘補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし正等覺乘補特伽羅も亦た無所有なりと。正等覺乘補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし虛空も亦た無所有なりと。虛空無所有なるが故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし無邊も亦た無所有なりと。無邊無所有なるが故に當に知るべし一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に、大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと説く。何を以ての故に、善現、若しは我乃至見者、若しは聲聞乘・獨覺乘・正等覺乘の補特伽羅、若しは虛空、若しは大乘、若しは無數、若しは無量、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有不可得なるが故に。善現、當に知るべし涅槃界の普ねく能く無數無量無邊の有情を含受するが如く大乘も亦た爾なり、普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと。善現、此の因縁に由るが故に是の説を作す。譬へば虛空の普ねく能く無數無量無邊の有情を含受するが如く大乘も亦た爾なり、普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと。

復た次に善現、汝が言ふ又た虛空は來る無く去る無く住して見る可き無きが如く大乘も亦た爾な

【六】先に善現の云へる來處を見ず等の説を印可して更に廣説し給ふ。

預流向補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし預流果補特伽羅も亦た無所有なりと。預流果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし一來向補特伽羅も亦た無所有なりと。一來果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし一來果補特伽羅も亦た無所有なりと。一來果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし不還向補特伽羅も亦た無所有なりと。不還向補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし不還果補特伽羅も亦た無所有なりと。不還果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし阿羅漢向補特伽羅も亦た無所有なりと。阿羅漢向補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし阿羅漢果補特伽羅も亦た無所有なりと。阿羅漢果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし獨覺向補特伽羅も亦た無所有なりと。獨覺向補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし獨覺果補特伽羅も亦た無所有なりと。獨覺果補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし菩薩摩訶薩も亦た無所有なりと。菩薩摩訶薩無所有なるが故に當に知るべし三藐三佛陀も亦た無所有なりと。三藐三佛陀無所有なるが故に當に知るべし虛空も亦た無所有なりと。虛空無所有なるが故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に、大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと説く。何を以ての故に、善現、若しは我乃至見者、若しは預流向補特伽羅乃至三藐三佛陀、若しは虛空、若しは大乘、若しは無數、若しは無量、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有不可得なるが故に。

復た次に善現、我乃至見者無所有なるが故に當に知るべし聲聞乘も亦た無所有なりと。聲聞乘無所有なるが故に獨覺乘も亦た無所有なりと。獨覺乘無所有なるが故に當に知るべし正等覺乘も亦た無所有なりと。正等覺乘無所有なるが故に當に知るべし虛空も亦た無所有なりと。虛空無所有なる

【一】 預流向。預流果の因道。見惑を斷じつゝある見道十五心の間を云ふ。

【二】 一來向。一來果の因道。欲界九品の修惑中前六品を斷ずる位。

【三】 不還向。不還果の因道。欲界九品の修惑中後三品を斷ずる位。

【四】 阿羅漢向。阿羅漢果の因道。色界無色界の一切の修惑を斷ずる位。

【五】 三藐三佛陀 (Samyaksambuddha)。佛十號の第三。正通知、正等覺などと譯す。

(お) 聲聞乘、獨覺乘、正等覺乘。

に知るべし寂靜界も亦た無所有なりと。寂靜界無所有なるが故に當に知るべし法定も亦た無所有なりと。法定無所有なるが故に當に知るべし法位も亦た無所有なりと。法位無所有なるが故に當に知るべし本無も亦た無所有なりと。本無無所有なるが故に當に知るべし實際も亦た無所有なりと。實際無所有なるが故に當に知るべし虚空も亦た無所有なりと。虚空無所有なるが故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし無邊も亦た無所有なりと。無邊無所有なるが故に當に知るべし一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと説く。何を以ての故に、善現、若しは我乃至見者、若しは眞如乃至實際、若しは虚空、若しは大乘、若しは無數、若しは無量、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有不可得なるが故に。

(b)色乃至識。(b)眼處乃至意識。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)意見乃至諸受。(b)地界乃至諸界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。

卷の第五十八

初分讚大乘品第十六之三

(b)内容乃至無能自在空。(b)有妙波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門乃至無願解脫門。(b)五眼・六神通。(b)佛の十力乃至一切相智。(b)極善地乃至法雲地。(b)淨觀地乃至如來地。(b)預流向乃至三藐三佛陀法。

復た次に善現、我乃至見者無所有なるが故に當に知るべし、預流向補特伽羅も亦た無所有なりと。

(b) 前卷と同意。

し使受者も亦た無所有なりと。使受者無所有なるが故に當に知るべし知者も亦た無所有なりと。知者無所有なるが故に當に知るべし見者も亦た無所有なりと。見者無所有なるが故に當に知るべし虚空も亦た無所有なりと。虚空無所有なるが故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし無邊も亦た無所有なりと。無邊無所有なるが故に當に知るべし、一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を containment と説く。何を以ての故に、善現、若しは我乃至見者、若しは虚空、若しは大乗、若しは無數、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有不可得なるが故に。

(b) 復た次に善現、我乃至見者無所有なるが故に當に知るべし眞如も亦た無所有なりと。眞如無所有なるが故に當に知るべし法界も亦た無所有なりと。法界無所有なるが故に當に知るべし法性も亦た無所有なりと。法性無所有なるが故に當に知るべし不虛妄性も亦た無所有なりと。不虛妄性無所有なるが故に當に知るべし不變異性も亦た無所有なりと。不變異性無所有なるが故に當に知るべし平等性も亦た無所有なりと。平等性無所有なるが故に當に知るべし離生性も亦た無所有なりと。離生性無所有なるが故に當に知るべし不思議界も亦た無所有なりと。不思議界無所有なるが故に當に知るべし虚空界も亦た無所有なりと。虚空界無所有なるが故に當に知るべし斷界も亦た無所有なりと。斷界無所有なるが故に當に知るべし離界も亦た無所有なりと。離界無所有なるが故に當に知るべし滅界も亦た無所有なりと。滅界無所有なるが故に當に知るべし無性界も亦た無所有なりと。無性界無所有なるが故に當に知るべし無相界も亦た無所有なりと。無相界無所有なるが故に當に知るべし無作界も亦た無所有なりと。無作界無所有なるが故に當に知るべし、無爲界も亦た無所有なりと。無爲界無所有なるが故に當に知るべし安隱界も亦た無所有なりと。安隱界無所有なるが故に當

(b) 「復た善現我乃至見者無所有故當知眞如亦無所有眞如無所有故當知法界亦無所有：何以故善現若我乃至見者若眞如乃至實際若虚空若大乘若無數若無量若無邊若一切法如是一切皆無所有不可得故」右の文中「眞如乃至實際」のある所に相應して次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(b)にて略し以下その諸法のみ略出す。

皆所有無く不可得なるが故に。復た次に善現、有情無數無量無邊なるが故に當に知るべし、虚空も亦た無數無量無邊なりと。虚空無數無量無邊なるが故に當に知るべし大乘も亦た無數無量無邊なりと。是の如き義に由るが故に大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を containment と説く。何を以ての故に、善現、若しは有情の無數無量無邊、若しは虚空の無數無量無邊、若しは大乘の無數無量無邊、是の如き一切皆所有無く不可得なるが故に。復た次に善現、有情無所有なるが故に當に知るべし虚空も亦た無所有なりと。虚空無所有なるが故に當に知るべし大乘も亦た無所有なりと。大乘無所有なるが故に當に知るべし無數も亦た無所有なりと。無數無所有なるが故に當に知るべし無量も亦た無所有なりと。無量無所有なるが故に當に知るべし一切法も亦た無所有なりと。是の如き義に由るが故に、大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を containment と説く。何を以ての故に、善現、若しは有情、若しは虚空、若しは大乘、若しは無數、若しは無量、若しは無邊、若しは一切法、是の如き一切皆無所有にして不可得なるが故に。復た次に善現、我無所有なるが故に當に知るべし有情も亦た無所有なりと。有情無所有なるが故に當に知るべし命者も亦た無所有なりと。命者無所有なるが故に當に知るべし生者も亦た無所有なりと。生者無所有なるが故に當に知るべし養者も亦た無所有なりと。養者無所有なるが故に當に知るべし士夫も亦た無所有なりと。士夫無所有なるが故に當に知るべし、補特伽羅も亦た無所有なりと。補特伽羅無所有なるが故に當に知るべし意生も亦た無所有なりと。意生無所有なるが故に當に知るべし儒童も亦た無所有なりと。儒童無所有なるが故に當に知るべし作者も亦た無所有なりと。作者無所有なるが故に當に知るべし使作者も亦た無所有なりと。使作者無所有なるが故に當に知るべし、起者も亦た無所有なりと。起者無所有なるが故に當に知るべし使起者も亦た無所有なりと。使起者無所有なるが故に當に知るべし受者も亦た無所有なりと。受者無所有なるが故に當に知るべし使起者無所有なるが故に當に知るべし受者も亦た無所有なりと。受者無所有なるが故に當に知るべし使起者無所有なるが故に當に知るべし受者も亦た無所有なりと。

り、有色に非ず無色に非ず、有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、相應に非ず不相應に非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の常に非ず無常に非ず樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ず、淨に非ず不淨に非ざるが如く、大乘も亦た爾なり、常に非ず無常に非ず、樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ず、淨に非ず不淨に非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の空に非ず不空に非ず、有相に非ず無相に非ず、有願に非ず無願に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、空に非ず不空に非ず、有相に非ず無相に非ず、有願に非ず無願に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の寂靜に非ず不寂靜に非ず、遠離に非ず不遠離に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、寂靜に非ず不寂靜に非ず、遠離に非ず不遠離に非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の明に非ず暗に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、明に非ず暗に非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の^五蘊處界に非ず蘊處界を離るるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、蘊處界に非ず蘊處界を離るるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の得可きに非ず得可からざるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、得可きに非ず得可からざるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の説く可きに非ず説く可からざるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、説く可きに非ず説く可からざるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、是の如き等の無量の因縁に由るが故に大乘と虚空と等しと説くなり。

六 復た次に善現、汝が言ふ譬へば虚空の普ねく能く無數無量無邊の有情を含受するが如く大乘も亦た爾なり、普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すとは、是の如し是の如し、汝が所説の如し。所以は何ん、善現、有情所有無きが故に當に知るべし虚空も亦た所有無しと。虚空所有無きが故に當に知るべし大乘も亦た所有無しと。是の如き義に由るが故に大乘は普ねく能く無數無量無邊の有情を含受すと説く。何を以ての故に、善現、若しは有情、若しは虚空、若しは大乘、是の如き一切

【五】 蘊處界。五蘊、十二處、十八界の稱。

【六】 先に善現の云へる空の含受する如く大乘も然ること
を印可し廣説す。

達する所に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、知る所に非ず達する所に非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の遍ねく知るに非ず永く斷するに非ず作證するに非ず修習するに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、遍く知るに非ず永く斷するに非ず作證するに非ず修習するに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の異熟するに非ず異熟法有るに非ざるが如く大乘も亦た爾なり。異熟するに非ず異熟法有るに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の食法有るに非ず食法を離るるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、食法有るに非ず食法を離るるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の瞋法有るに非ず瞋法を離るるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、瞋法有るに非ず瞋法を離るるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の癡法有るに非ず癡法を離るるに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、癡法有るに非ず癡法を離るるに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の欲界に墮するに非ず色界に墮するに非ず無色界に墮するに非ざるが如し大乘も亦た爾なり、欲界に墮するに非ず色界に墮するに非ず無色界に墮するに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の初地發心有りて得可きに非ず乃至第十地發心有りて得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、初地發心有りて得可きに非ず乃至第十地發心有りて得可きに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の淨觀地乃至如來地有りて得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、淨觀地乃至如來地有りて得可きに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現又た虚空の預流向預流果乃至菩薩如來有りて得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、預流向預流果乃至菩薩如來有りて得可きに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の有聲聞地獨覺地正等覺地有りて得可きに非ず、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の有色に非ず無色に非ず有見に非ず無見に非ず、有對に非ず無對に非ず、相應に非ず不相應に非ざるが如く大乘も亦た爾なり

應正等覺の轉ずる所の法輪は彼の諸の有情類をして、無餘依妙涅槃界に於て已般今般當般涅槃せしむる能はず。諸の如來應正等覺妙法輪を轉じ彼むる所の有情、實に性有るに非ざるを以ての故に、諸の如來應正等覺の轉ずる所の法輪は悉く能く彼の諸の有情類をして無餘依妙涅槃界に於て已般今般當般涅槃せしむ。善現、是の如き等の無量の因縁に由るが故に、大乘は一切世間天人阿素洛等に超勝し最尊最妙なりと説く。復た次に善現、汝が言ふ是の如き大乘は虚空と等しとは、是の如し是の如し、汝が所説の如し。所以は何ん、善現、譬へば虚空の東南西北四維上下方有りて分ち得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、東南西北四維上下方有りて分ち得可きに非ず。善現、故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の長短方圓高下邪正形色有りて得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、長短方圓高下邪正形色有りて得可きに非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の青黃赤白黑紫縹等の顯色有りて得可きに非ざるが如く大乘も亦た爾なり、青黃赤白黑紫縹等の顯色有りて得可きに非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の過去に非ず未來に非ず現在に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、過去に非ず未來に非ず現在に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の増に非ず減に非ず進に非ず退に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、増に非ず減に非ず進に非ず退に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の雜染に非ず清淨に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、雜染に非ず清淨に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の生に非ず滅に非ず住に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、生に非ず滅に非ず住に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の善に非ず非善に非ず有記に非ず無記に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、善に非ず非善に非ず有記に非ず無記に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空のみに非ず聞に非ず覺に非ず知に非ざるが如く大乘も亦た爾なり、見に非ず聞に非ず覺に非ず知に非ず。故に大乘と虚空と等しと説く。善現、又た虚空の知る所に非ず

【三】 無餘依妙涅槃界。煩惱障を斷じ、五蘊假和合の身體を滅して灰身滅智したる涅槃の世界。

【四】 先に善現大乘虚空と等しと説くを印可し廣説す。

薩摩訶薩初發心より乃至妙菩提の座に坐すを得るまでの中間に起りし所の諸心。(a)菩薩摩訶薩の金剛喻智。善現、若し菩薩摩訶薩、金剛喻智所斷の煩惱の習氣相續、實に性有りとせば則ち此の能斷の金剛喻智は彼の都て自性無く斷じ已つて證得する一切智智に達する能はず。金剛喻智所斷の煩惱の習氣相續、實に性有るに非ざるを以ての故に、此の能斷の金剛喻智は能く彼の都て自性無く斷じ已つて證得する一切智智に達す。善現、若し諸の如來應正等覺の三十二大士相八十隨好の莊嚴する所の身、實に性有りとせば則ち諸の如來應正等覺の威光妙徳は一切世間の天人阿素洛等を超えず。諸の如來應正等覺の三十二大士相八十隨好の莊嚴する所の身、實に性有るに非ざるを以ての故に、諸の如來應正等覺の威光妙徳は一切世間の天人阿素洛等に超勝す。善現、若し諸の如來應正等覺演ぶる所の光明、實に性有りとせば則ち諸の如來應正等覺演ぶる所の光明は普ねく十方各殊伽沙等に過ぐる諸佛世界を照らす能はず。諸の如來應正等覺演ぶる所の光明、實に性有るに非ざるを以ての故に、諸の如來應正等覺演ぶる所の光明は、悉く能く普ねく十方各殊伽沙等に過ぐる諸佛世界を照らす。善現、若し諸の如來應正等覺の具する所の六十美妙支音、實に性有りとせば則ち諸の如來應正等覺の具する所の六十美妙支音は遍ねく十方無量無數百千俱胝那庾多殊伽沙等の諸佛世界に告ぐる能はず。諸の如來應正等覺の具する所の六十美妙支音、實に性有るに非ざるを以ての故に、諸の如來應正等覺の具する所の六十美妙支音は皆能く遍ねく十方無量無數百千俱胝那庾多殊伽沙等の諸佛世界に告ぐる能なり。善現、若し諸の如來應正等覺の轉する所の法輪實に性有りとせば則ち諸の如來應正等覺の轉する所の法輪は極めて清淨なるに非ず、亦た一切世間沙門婆羅門天魔梵等轉する能はざる所に非ず。諸の如來應正等覺の轉する所の法輪は實に性有るに非ざるを以ての故に、諸の如來應正等覺の轉する所の法輪は最も極めて清淨に、一切世間沙門婆羅門天魔梵等轉する能はざる所なり。善現、若し諸の如來應正等覺、妙法輪を轉じ被むる所の有情實に性有りとせば則ち諸の如來

【二】金剛喻智。一切の煩惱を斷ずる堅固銳利なる智。

非ず實に非ず常無く恒無く變有り易有り都て實性無きを以ての故に。此の大乗は是れ尊、是れ妙、一切世間天人阿素洛等に超勝す。善現、若し色、無色界は是れ真如ならば虚妄に非ず顛倒に非ず假設に非ず、是れ諦、是れ實、常有り恒有り變無く易無く實性有り、則ち此の大乗は尊に非ず妙に非ず一切世間天人阿素洛等を超えず、色、無色界は真如に非ず、是れ虚妄、是れ顛倒、是れ假設にして諦に非ず實に非ず、常無く恒無く變有り易有り、都て實性無きを以ての故に。此の大乗は是れ尊、是れ妙、一切世間天人阿素洛等に超勝す。(f)色乃至識。(f)眼處乃至意處。(f)色處乃至法處。(f)眼界乃至諸受。(f)耳界乃至諸受。(f)鼻界乃至諸受。(f)舌界乃至諸受。(f)身界乃至諸受。(f)意界乃至諸受。(f)地界乃至識界。(f)無明乃至老死愁歎苦憂惱。

卷の第五十七

初分讚大乘品第十六之二

復次に(a)善現、若し真如は實に性有りとせば則ち此の大乗は尊に非ず妙に非ず、一切世間天人阿素洛等を超えず。真如は實に性有るに非ざるを以ての故に、此の大乗は是れ尊、是れ妙にして一切世間天人阿素洛等に超勝す。善現、若し法界乃至實際實に性有りとせば則ち此の大乗は尊に非ず、妙に非ず、一切世間天人阿素洛等を超えず。法界乃至實際、實に性有るに非ざるを以ての故に、此の大乗は是れ尊、是れ妙にして一切世間天人阿素洛等に超勝す。(a)内空乃至無性自性空。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至一切相智。(a)菩薩十地。(a)淨觀地・種性地・第八地・預流法・一來法・不還法・阿羅漢法・獨覺法・菩薩摩訶薩法・三藐三佛陀法。(a)淨觀地の補特伽羅。(a)種性地の補特伽羅・預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺・菩薩摩訶薩・三藐三佛陀。(a)一切世間天人阿素洛等。(a)菩

【一】現象法のみならず、真如等も法の有とすべきなければ、これを無しとする大乘勝れたるを説く。

(a)「善現若真如實有性者則此大乘非尊非妙……善現若法界法性……本無實際實有性者則此大乘非尊非妙不超一切世間天人阿素洛等以法界乃至實際非實有性故此大乘是尊是妙超勝一切世間天人阿素洛等」

右の文中「真如乃至實際」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

初分讚大乘品第十六之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、大乘と言まふ、大乘とは一切世間天人阿素洛等に超勝し最尊最妙なり。是の如き大乘は虚空と等し、譬へば虚空の普ねく能く無數無量無邊の有情を含まずするが如く大乘も亦た爾なり。普ねく能く無數無量無邊の有情を含まず。又た虚空の來る無く去る無く住して見る可き無きが如く大乘も亦た爾なり、來る無く去る無く住して見る可き無し。又た虚空の前後中際皆得可からざるが如く大乘も亦た爾なり。前後中際皆得可からず、三世平等なり。故に大乘と名づく。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所説の如し。菩薩の大乘は是の如き等の無邊の功德を具す。善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ布施乃至般若波羅蜜多なりと。復た次に善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ内空乃至無性自性空なりと。復た次に善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ健行三摩地乃至無染著如虚空三摩地等の無量百千の三摩地門なりと。復た次に善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ四念住乃至八聖道支なりと。復た次に善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ三三摩地乃至十八佛不共法なりと。復た次に善現、是の如き大乘は當に知るべし即ち是れ文字陀羅尼等の一切陀羅尼門なりと。善現、是の如き等の無量無邊殊勝の功德は當に知るべし皆是れ菩薩摩訶薩の大乘なりと。

復た次に善現、汝が言ふ大乘は一切世間天人阿素洛等に超勝し最尊最妙なりとは、是の如し是の如し汝が所説の如し。所以は何ん、善現、若し欲界はれ真如ならば虚妄に非ず顛倒に非ず假設に非ず、是れ諦、是れ實、常有り恒有り、變無く易無く、實性有り。則ち此の大乘は尊に非ず妙に非ず、一切世間天人阿素洛等を超えず。欲界は真如に非ず是れ虚妄、是れ顛倒、是れ假設にして諦に

【一】 大乘の一切世間等に勝出することを明す。

【二】 諸法無常なるを以て大乘の勝出せるを説く。

(f) 「善現若欲界是真如……善現若色無色界是真如……都無實性故此大乘是尊是妙超勝一切世間天人阿素洛等」右の文中「欲界色無色界」のある所に相應して次下所出の諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を行號(f)にて略し以下その諸法のみ略出す。

に得可きに非ず、當に得べきに非ず、現に得可きに非ざればなり。畢竟淨なるが故に、(d)眞如乃至實際。(d)色乃至識。(d)眼處乃至意處。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)耳界乃至耳觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)鼻界乃至鼻觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)舌界乃至舌觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)身界乃至身觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)境界乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(d)地界乃至識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明性乃至老死愁歎苦憂惱。(d)幻事乃至變化事。(d)內空乃至無自性自性空。

(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至一切相智。(d)預流者惡趣生乃者三藐三佛陀後有生。(d)預流果預流果乃至如來性。(d)名字假想施設言說。(d)無生無滅無染無淨無相無爲。(d)初中後際。(d)往來。(d)行住。(d)死生。(d)増減。(d)極喜地乃至法雲地。(d)淨觀地乃至如來地。(d)成熟有情。(d)嚴淨佛土。復た次に(e)善現、內空中布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多性不可得なるが故に、布施乃至般若波羅蜜多不可得なりと説き、乃至無自性自性空中布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多性不可得なるが故に布施乃至般若波羅蜜多不可得なりと説く。何を以ての故に、此の中布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多性は已に得可きに非ず、當に得可きに非ず、現に得可きに非ざればなり。畢竟淨なるが故に。(e)四靜慮乃至四無量。(e)四念住乃至八聖道支。(e)空乃至無願解脫門。(e)五眼・六神通。(e)佛十力乃至一切相智。(e)預流向預流果乃至如來。(e)極喜地乃至法雲地。(e)淨觀地乃至如來地。(e)成熟有情。(e)嚴淨佛土。是の如く善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切法は皆無所有不可得にして畢竟淨なるが故に大乘に乗じて而かも出至する者無しと觀ずと雖も然かも無所得を以て方便と爲し大乘に乘りて三界の生死を出でて一切智智に至り、一切有情を利益安樂し、未來際を窮むるまで常に斷盡無し。

(e)「善現內空中布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多性不可得故說布施乃至般若波羅蜜多不可得……非現可得畢竟淨故」右の文中「布施乃至般若波羅蜜多」のある所に相應して次下に出す諸法を代入せば他は皆文なく故に之を符號(e)にて略し以下その諸法のみ略出す。

所、至る所及び出至の時、是の如き一切皆無所有にして都て得可からず。何を以ての故に、善現、一切法は皆無所有にして都て得可からざればなり。畢竟淨なるを以ての故に。如何が乘に乗る者、出至を爲すに由り及び出至の時なりと言ふ可けんや。(c) 善現、當に知るべし、我は無所有にして得可からざるが故に大乘に乗る者も亦た得可からずと、所以は何ん、畢竟淨なるが故に。是の如く有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅、意生・儒童・作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者は無所有にして得可からざるが故に、大乘に乗る者も亦た得可からず。所以は何ん、畢竟淨なるが故に。(c) 眞如乃至實際。(c) 色乃至識。(c) 眼處乃至意處。(c) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至諸受。(c) 鼻界乃至諸受。(c) 舌界乃至諸受。(c) 身界乃至諸受。(c) 眼界乃至諸受。(c) 耳界乃至諸受。(c) 鼻界乃至諸受。(c) 舌界乃至諸受。(c) 身界乃至諸受。(c) 眼界乃至諸受。

卷の五十六

初分辯大乘品第十五之六

(c) 地界乃至識界。(c) 苦聖諦乃至道聖諦。(c) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 幻事・夢境・像・響・光影・空花・陽焰・尋香城・變化事。(c) 內空乃至無性自性空。

(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 四靜慮乃至四無色定。(c) 四念住乃至八聖道支。(c) 空解脫門乃至無願解脫門。(c) 五眼・六神通。(c) 佛の十力乃至一切相智。(c) 預流者惡趣生乃至三藐三佛陀後有生。(c) 預流向預流果乃至如來。(c) 名字・假想・施設・言說。(c) 無生無滅・無染無淨・無相無爲。(c) 前中後際。(c) 往來。(c) 行住。(c) 無生。(c) 増減。(c) 極喜地・離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地。(c) 淨觀地・種姓地・第八地・具見地・薄地・離欲地・已辦地・獨覺地・菩薩地・如來地。(c) 成熟有情。(c) 嚴淨佛土。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何の法不可得なるが故に、我等不可得なりと説きたまふ耶と。佛言はく、(a) 善現、我性不可得なるが故に我不可得なりと説き乃至見者不可得なるが故に見者不可得なりと説く。何を以ての故に、我性乃至見者性は已

(c) 「善現當知我無所有不可得故乘大乘者亦不可得……」
 知者見者無所有不可得故乘大乘者亦不可得所以者何畢竟淨故」
 右の文を符號(c)にて略し以下は前の(b)の場合の如くして略すものとす。
 (a) 前卷と同重。
 (b) 極喜地。離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地。
 (c) 淨觀地。種姓地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地。
 (d) 我等。我乃至見者の十六神我をいふ。
 (e) 「善現我性不可得故説不可得乃至見者性不可得故説見者不可得……」非現可得畢竟淨」
 右の文を符號(d)にて略し以下前に準じて省略するものとす但し原文既に省略法を採れるが故に傍付の符號(い)(ろ)(は)等を付せず。

て住する所無し。所以は何ん、一切法皆住する所無きを以てなり。何を以ての故に、諸法の住處不可得の故に。善現、然かも此の大乗は住する所無きに住す。(b)善現、眞如性の住するに非ず住せざるに非ざるが如く、大乘も亦た爾なり、住するに非ず住せざるに非ず。所以は何ん、眞如性は住する無く住せざる無きを以てなり。何を以ての故に、善現、眞如性は眞如性空なるが故なり。善現、法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・不思議界・虛空界・斷界・離界・滅界・無性界・無相界・無作界・無爲界・安隱界・寂靜界・法定法住・本無・實際性の住するに非ず住せざるに非ざるが如く、大乘も亦た爾なり、住するに非ず、住せざるに非ず。所以は何ん、法界性乃至實際性住する無く住せざる無きを以てなり。何を以ての故に、善現、法界性は法界性空乃至實際性は實際性空なるが故なり。(b)色乃至識。(b)眼處乃至意處。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)耳界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)眼界乃至諸受。(b)地界乃至識界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)幻事・夢境・像・響・光影・空華・陽焰・尋香城・變化事。(b)內空乃至無性自性空。

(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門乃至無願解脫門。(b)五眼・六神通。(b)佛の十力乃至一切相智。(b)預流者惡趣生・一來者頻來生・不還者欲界生・摩訶薩自利生・阿羅漢獨覺三藐三佛陀後有生。(b)預流向預流果・一來向一來果・不還向不還果・阿羅漢向阿羅漢果・獨覺向獨覺果・菩薩、如來。(b)名字假想施設言說。(b)無生無滅・無染無淨・無相無爲。善現、此の緣に由るが故に、是の如き大乘は都て住する所無しと雖も而かも住する所無きに住するなり。

復た次に善現、汝の問ふ誰れか復た是の大乗に乗りて出づるやとは、善現、都て是の大乗に乗りて出づる者無し。所以は何ん、若しは所乗の乘、若しは能乗者、此れに由りて此れを爲す、出づる

【八】一切法無住。一切法に自性無く、自性なきが故に執着する所なく、緣に隨つて起るを云ふ。

(b)「善現如眞如性非住非不住大乘亦爾非住非不住……乃至實際性實際性空故」

右の全文を符號(b)にて略し以下は(a)の場合に準じて略すものとす。

(七)眞如。法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性不思議界虛空界斷界離界滅界無性界無相界無作界無爲界安隱界寂靜界法定法住本無實際。

(マ)預流者惡趣生一來者頻來生不還向不還果阿羅漢向阿羅漢果獨覺向獨覺果菩薩如來生阿羅漢獨覺三藐三佛陀後有生。

(ウ)預流向預流果一來向一來果不還向不還果阿羅漢向阿羅漢果獨覺向獨覺果菩薩如來【九】先に問へる能乗者を答へ實に乘者あるなきを述ぶ。

有對に非ず、無對に非ず、咸く同一相にして所謂無相なり、無相の法は出づる無く至る無し。何を以ての故に、善現、無相の法は已に出で已に至れるに非ず、當に出づべく當に至るべきに非ず、今出で今至るに非ざるが故に。(a) 善現、其れ無相の法をして出る有り至る有らしめんと欲する有らば則ち眞如をして出づる有り至る有らしめんと欲すと爲す。所以は何ん、眞如は三界中より出づる能はず、亦た一切智智の中に至りて住する能はざればなり。何を以ての故に、善現、眞如は眞如の自性空なるが故に。善現、其れ無相の法をして出づる有り至る有らしめんと欲する有らば則ち法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・本思議界・虛空界・斷界・離界・滅界・無性界・無相界・無作界・無爲界・安隱界・寂靜界・法定・法住・本無・實際をして出づる有り至る有らしめんと欲すと爲す。所以は何ん、法界乃至實際は三界中より出づる能はず亦た一切智智の中に至りて住する能はざればなり。何を以ての故に、善現、法界は法界の自性空、乃至實際の自性空なるが故に。(a) 色乃至識。(a) 眼處乃至意處。(a) 色處乃至法處。(a) 眼界乃至諸受。(a) 耳界乃至諸受。(a) 鼻界乃至諸受。(a) 舌界乃至諸受。(a) 身界乃至諸受。(a) 意界乃至諸受。(a) 地界乃至識界。(a) 苦聖諦乃至道聖諦。(a) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a) 幻事・夢境・像・響・光影・空花・陽焰・華香・變化事。(a) 內空乃至無自性自性空。

(a) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a) 四靜慮乃至四無色定。(a) 四念住乃至八聖道支。(a) 空解脫門乃至無願解脫門。(a) 五眼・六神通。(a) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(a) 預流者惡趣生・一來者類・來生・不還者欲界生・摩訶薩白利生・阿羅漢獨覺三藐三佛陀後有生。(a) 預流向預流果・一來向一來果・不還向不還果・阿羅漢向阿羅漢果・獨覺向獨覺果・菩薩・如來。(a) 名字・假想・施設・言說。(a) 無生無滅・無染無淨・無相無爲・善現、此の緣に由るが故に是の如き大乘は三界中より出で一切智智の中に至りて住するも、一無きを以ての故に出づる無く至る無し、無相の法は動轉無きが故に。

復た次に善現、汝の問ふ是の如き大乘は何の爲に住する所なるやとは、善現、是の如き大乘は都

【五】 無相の法。一切の執着を離れ萬法を幻の如しと觀する無漏心をいふ。

(a) 「善現其有欲令無相之法有出有至者則爲欲令眞如有出有至……則爲欲令法界……本無實際有出有至……善現法界法界自性空乃至實際實際自性空故」

右の文中「眞如乃至實際」のある所に次下に出ず諸法を相應して代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

【六】 法界乃至實際は何れも眞如と異名同義なり。

【七】 大乘は無住の住たるを明す。

卷の第五十五

初分辯大乘品第十五之五

世尊、云何が當に知るべし第十法雲地を圓滿せる菩薩摩訶薩は諸の如來と異なること無しと言ふべきやと。善現、是の菩薩摩訶薩は已に六波羅蜜多を圓滿し、已に四靜慮・四無量・四無色定を圓滿し、已に四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を圓滿し、已に空・無相・無願解脱門を圓滿し、已に五眼・六神通を圓滿し、已に佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智を圓滿し、已に一切の佛法を圓滿するが故に、若しは復た永く一切の煩惱の習氣相續を斷じ便ち佛地に住す、是の故に當に知るべし、已に第十法雲地を圓滿せる菩薩摩訶薩は諸の如來と異なること無しと言ふべしと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が第十法雲地の菩薩摩訶薩は如來地に趣くやと。佛言はく、善現、是の菩薩摩訶薩は方便善巧して六波羅蜜多を行じ、靜慮・無量・無色定・三十七菩提分の法、三解脱門を修し、五眼・六神通・佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智を學し、一切の佛法已に圓滿せるが故に、淨觀地・種性地・第八地・具見地・薄地・離欲地・已辦地・獨覺地及び菩薩の十地を超過し永く煩惱の習氣相續を斷じて便ち如來應正等覺を成ず、善現、是の如き第十法雲地の菩薩摩訶薩は如來地に趣くなり。善現、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと爲すと。

復た次に善現、汝の問ふ是の如き大乘は何の處より出て何の處に至りて住するやとは、善現、是の如き大乘は三界中より出で、一切智智の中に至りて住す、一切智智の爲に而かも三界を出づるに由るが故に。然るに二無きが故に出づる無く至る無し。所以は何ん、若しは大乘、若しは一切智智、是の如き二法は相應に非ず、不相應に非ず、有色に非ず、無色に非ず、有見に非ず、無見に非ず、

【一】第十地の功徳を釋す。

【二】習氣。煩惱の體を正使といふに對し煩惱が慣習的氣分として殘るのを習氣と云ふ。

【三】淨觀地乃至佛地を三乘共通の十地となす。

【四】出到を辦じて三界を出で一切智智に到るとす。而も空無相なれば實に出到の取るべきものなきを明す。

帝利大族姓の家に生じ、或は^{二五}婆羅門大族姓の家に生じ、熏くるところの父母護嫌す可き無き、是れを菩薩摩訶薩、應に家族具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に種姓具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、常に預め過去の諸大菩薩の種姓の中に生ずる、是れを菩薩摩訶薩、應に種姓具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に眷屬具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、純ら無量無數の菩薩を以て而かも眷屬と爲し諸の雜類に非ざる、是れを菩薩摩訶薩、應に眷屬具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に生身具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、初生の時に於て其の身一切相好を具足し大光明を放ちて遍なく無邊の諸佛世界を照らし亦た彼の界をして六種に變動せしめ、有情の遇ふ者益を蒙らざる無き、是れを菩薩摩訶薩、應に生身具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は出家具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、出家の時に於て無量無數の天龍藥叉人非人等に翼從せられ道場に往詣し鬚髮を剃除し^{三〇}三法衣を服し、應器を受持して無量無數の有情を引導し、三乘に乗じて圓寂に趣かしむる、是れを菩薩摩訶薩、應に出家具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に莊嚴菩提樹具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、殊勝の善根廣大の願力によりて是の如き妙菩提樹を感得し、^{三一}吠琉璃寶以て其の莖を爲し、眞金根と爲り、枝葉花果皆上妙の七寶を以て成ぜられ、其の樹高廣にして遍ねく三千大千佛土を覆ひ、光明照耀して十方苾芻沙等諸佛世界に周遍す、是れを菩薩摩訶薩、應に莊嚴菩提樹具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は一切功德具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、殊勝の福慧資糧を満足し有情を成熟し佛土を嚴淨する、是れを菩薩摩訶薩、應に一切功德具足するを圓滿すべしと爲すと。

【二五】婆羅門(Brahmanas)、印度四姓の第一、所謂僧族をいふ。

【三〇】三法衣。一に僧伽梨(Saṅghaṭṭi)、大衣、二に鬱多羅僧(Uttarasāṅga)七條、三に安陀會(Anvayasaṅga)五條をいふ。
【三一】吠琉璃(Vaidurya)。瑠璃の新譯、七寶の一。

て應に熟すべきが故に諸有に入り自ら化生を現するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の有情類を成熟せんと欲するが爲に殊勝の善根其の宜しき所に隨ふが故に諸有に入りて受生を現する、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情の善根に隨つて應に熟すべきが故に諸有に入り自ら化生を現すと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に無邊處所大願を攝受するを圓滿し、所願有るに隨つて皆圓滿せしむべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、己に具さに六波羅蜜多を修し圓滿を極むるが故に、或は諸の佛國土を嚴淨せんが爲に、或は諸の有情類を成熟せんが爲に、心の所願に願つて皆圓滿するを得る、是れを菩薩摩訶薩、應に無邊處所大願を攝受するを圓滿し、所願有るに隨つて皆圓滿せしむべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等に隨つて異類音智を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、殊勝の詞無礙解を修得し善く有情の言音差別を知る、是れを菩薩摩訶薩、應に諸の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等に隨つて異類音智を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に無礙辯說智を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、殊勝の辯無礙解を修習し諸の有情の爲に能く無盡に説く、是れを菩薩摩訶薩、應に無礙辯說智を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に入胎具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切生處に實に恒に化生すと雖も而かも有情を益せんが爲に現に入胎藏を現じ、中に於て種種の勝事を具足する、是れを菩薩摩訶薩、應に入胎具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に出生具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、出胎の時に於て種種希有の勝事を示現し、諸の有情の見る者をして歡喜し大利樂を獲せしむ、是れを菩薩摩訶薩、應に出生具足するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に家族具足するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、或は刹利

【三】 九地の十二法を釋す。

【二】 刹帝利(Kṣatriya)。印度四姓の第二、王族を云ふ。

心行に悟入するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸の神通に遊戯するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、種種の自在神通に遊戯し、一佛國より一佛國に趣き、亦復た佛國に遊ぶ想を生ぜざる、是れを菩薩摩訶薩、應に諸の神通に遊戯するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸の佛土を見、其の見る所の如く而かも自ら種種の佛土を嚴淨するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一佛土に住し能く十方無邊の佛國を見、亦た能く示現して而かも曾て佛國土の想を生ぜず、又た諸の有情を成熟せんが爲の故に現に三千大千世界の轉輪王位に處して自ら莊嚴し、亦た能く棄捨して執する所無き、是れを菩薩摩訶薩、應に諸の佛土を見、其の見る所の如く而かも自ら種種の佛土を嚴淨するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸佛世尊に供養し承事し、如來の身に於て實の如く觀察するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に法の義趣に於て實の如く分別する、是の如きを名づけて法を以て諸佛に供養し承事すと爲す、又た諦かに諸佛の法身を觀察する、是れを菩薩摩訶薩、應に諸佛世尊に供養し承事し如來の身に於て實の如く觀察するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸の有情の根勝劣智を知るを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、佛の十力に住し實の如く一切有情の諸根の勝劣を了知する、是れを菩薩摩訶薩、應に諸の有情の根勝劣智を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に佛土を嚴淨するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、應に佛土を嚴淨するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に幻の如き等持數諸定に入るを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、此の等持に住し能く一切事業を成辦すと雖も而かも心動ぜず、又た等持を修し成熟を極むるが故に加行を作さずして數數現前す、是れを菩薩摩訶薩、應に幻の如き等持數諸定に入るを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸の有情の善根に隨つ

遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸見を遠離するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切の聲聞獨覺等の見を遠離する、是れを菩薩摩訶薩、應に諸見を遠離するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に煩惱を遠離するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切の有漏煩惱の習氣相續を棄捨する、是れを菩薩摩訶薩、應に煩惱を遠離するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に奢摩他毘鉢舍那地を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切智道相智一切相智を修する、是れを菩薩摩訶薩、應に奢摩他毘鉢舍那地を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に心性を調伏するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、三界法に於て樂はず動ぜざる、是れを菩薩摩訶薩、應に心性を調伏するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に心性を寂靜にするを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、善く六根を攝する、是れを菩薩摩訶薩、應に心性を寂靜にするを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に無礙智性を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、佛眼を修得する、是れを菩薩摩訶薩、應に無礙智性を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に愛染する所無きを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、外六處に於て能善く棄捨する、是れを菩薩摩訶薩、應に愛染する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に心の欲する所に隨つて諸の佛土に往き佛の衆會に於て自ら其の身を現するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、勝神通を修し一佛國より一佛國に趣きて諸佛世尊を供養恭敬尊重讚歎し、轉法輪を請ひ一切を饒益する、是れを菩薩摩訶薩、應に心の欲する所に隨つて諸の佛土に往き佛の衆會に於て自ら其の身を現するを圓滿すべしと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切有情の心行に悟入するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一心智を以て實の如く遍ねく一切有情の心心所法を知る、是れ菩薩摩訶薩、應に一切有情の

【六】 八地中の五法を釋す。

と爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に有情を悲愍し及び有情に於て執著する所無きを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、已に大悲を得及び土を嚴淨する、是れを菩薩摩訶薩、應に有情を悲愍し及び有情に於て執著する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切法平等見及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法に於て増さず減ぜず及び此の中に於て取る無く住する無き、是れを菩薩摩訶薩、應に一切法平等見及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切有情平等見及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の有情に於て増さず減ぜず、及び此の中に於て取る無く住する無き、是れを菩薩摩訶薩、應に一切有情平等見及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に眞實理趣に於て實の如く通達すと雖も而かも通達する所無く及び此の中に於て取る無く住する無き、是れを菩薩摩訶薩、應に眞實理趣に通達し及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、一切法の眞實理趣に於て實の如く通達すと雖も而かも通達する所無く及び此の中に於て取る無く住する無き、是れを菩薩摩訶薩、應に眞實理趣に通達し及び此の中に於て執著する所無きを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、一切法は生無く滅無く造作せらるる無しと忍び及び名色畢竟不生なりと知る、是れを菩薩摩訶薩、應に無生忍智を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切法は一相の理趣なりと説くを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、應に一切法は一相の理趣なりと説くを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に分別を滅除するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法に於て分別を起さざる、是れを菩薩摩訶薩、應に分別を滅除するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諸想を遠離するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切の小大無量の想を遠離する、是れを菩薩摩訶薩、應に諸想を

摩訶薩、應に一切法に於て理の如く理の如くならざる執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に依佛の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、佛に依るの見執を知らば見佛するを得ざるが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に依佛の見執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に依法の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、眞の法性は不可見なりと達するが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に依法の見執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に依佛の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、和合衆は無相無爲不可見なりと知るが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に依佛の見執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に依戒の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、罪福の性俱に非有なりと知るが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に依戒の見執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に依戒の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の空法は皆自性無く怖畏する所の事畢竟非有なりと観する、是れを菩薩摩訶薩、應に怖畏空法を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に違背空性を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法の自性皆空にして非空と空と違背有り^と観するが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に違背空性を遠離すべしと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に通達空を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法自相皆空なりと達する、是れを菩薩摩訶薩、應に通達空を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に無相を證するを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切相を思惟せざる、是れを菩薩摩訶薩、應に無相を證するを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に無願を知るを圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、三界法に於て心住する所無き、是れを菩薩摩訶薩、應に無願を知るを圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に^{三輪}清淨を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、清淨の十善業道を具足する、是れを菩薩摩訶薩、應に三輪清淨を圓滿すべし

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に相想を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、雜染性不可得なりと觀するが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に相想を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に因等の見執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、都て諸の見性有るを見ざるが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に因等の見執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に^三名色執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、名色性都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に名色執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に蘊執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、五蘊性都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に蘊執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に處執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩^三十二處性都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に處執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諦執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、應に諦執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に界執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、應に界執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に諦執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の諦性都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に諦執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に緣起執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の緣起性不可得なりと觀するが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に緣起執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は住著三界執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、三界性都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に住著三界執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切法執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の法性皆虚空の如く都て不可得なりと觀する、是れを菩薩摩訶薩、應に一切法執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に一切法に於て理の如く理の如くならざる執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の法性都て不可得にして、理の如く理の如くならざる性有ること無しと觀する、是れを菩薩

【三】名色執。五蘊執のこと。名は多想行識の四蘊をいふ。

【三】十二處。三科の一。五根五境の十處(色)と意根法境の二處(心)を云ふ。

【四】十八界。三科の一。五根五境の十界(色)と意根法境及六識(心)の稱。

き念を作さん、諸の獨覺心は定めて一切智を得ること能はず、故に我れ今應に之れを遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、應に獨覺心を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に熱惱心を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、生死熱惱を怖畏するの心は無上正等覺道を證するに非ず。故に應に遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、應に熱惱の心を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は乞ふ者來るを見て心厭感せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、此の厭感の心は大菩提に於て能く道を證するに非ず、故に我れ今定めて應に遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、乞ふ者の來るを見心厭感せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は所有の物を捨てて憂悔心無きやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、此の憂悔心は無上正等菩提を證するに於て定めて障礙を爲すが故に我れ應に捨つべしと。是れを菩薩摩訶薩、所有の物を捨てて憂悔心無しと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は來り求むる者に於て終に矯誑せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、此の矯誑心は定めて阿耨多羅三藐三菩提道に非ず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩、初めて無上菩提心を發す時、是の誓言を作す、凡そ我が所有は來り求むる者に施し欲に隨つて空しからざらん。如何が今時に而かも彼れを矯誑せんやと。是れを菩薩摩訶薩、來り求むる者に於て終に矯誑せずと爲すと。

三 世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に我執有情執乃至知者執見者執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、我有情乃至知者見者を觀するも畢竟不可得なるが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に我執有情執乃至知者執見者執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に斷執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法畢竟不生なりと觀ず、斷義無きが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に斷執を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に常執を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法常性無しと觀するが故に、是れを菩薩摩訶薩、應に常執を遠離すべしと爲すと。

【三】七地の二十法を釋す。

菩提をや、是れ故に定めて應に忿諍を遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、應に衆會忿諍を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に自讃毀他を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、内外法に於一都て見る所無し、故に應に自讃毀他を遠離すべし、是れを菩薩摩訶薩、應に自讃毀他を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に十不善業道を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、此の十惡法は尙ほ善趣二乘聖道すら礙ぐ、況んや大菩提をや。故に應に遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、應に十不善業道を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に増上慢傲を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、法有るを見ざれば慢傲を起す可し、是れを菩薩摩訶薩、應に増上慢傲を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に顛倒を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、顛倒事を觀るも都て得可からず、是れを菩薩摩訶薩、應に顛倒を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に猶豫を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、猶豫事を觀するも都て得可からず、是れを菩薩摩訶薩、應に猶豫を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、應に貪瞋癡を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、都て貪瞋癡事有るを見ずんば是れを菩薩摩訶薩、應に貪瞋癡を遠離すべしと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に六波羅蜜多を圓滿すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、六種波羅蜜多を圓滿せば諸の聲聞及び獨覺地を超ゆ、又た此の六波羅蜜多に住すれば佛及び二乘能く五種の所知海岸に度る。何等をか五と爲す、一には過去、二には未來、三には現在、四には無爲、五には不可説なり、是れを菩薩摩訶薩、應に六波羅蜜多を圓滿すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に聲聞心を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、諸の聲聞心は無上大菩提道を證するに非ず、故に應に遠離すべしと。是れを菩薩摩訶薩、應に聲聞心を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に獨覺心を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の如

【二〇】 増上慢傲。七慢の一。自己を實際の價値以上に誤認すること。

【二一】 顛倒。無明のために事理を倒に見るを云ふ。

【二二】 六地の六法を釋す。

若し菩薩摩訶薩、妙欲樂に於て欲尋を起さずんば是れを菩薩摩訶薩、諸の欲樂に於て深く厭離を生ずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は常に能く寂滅俱心を發起するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法に達し曾て起作する無くんば、是れを菩薩摩訶薩、常に能く寂滅俱心を發起すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は諸の所有を捨つるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、内外法に於て曾て取る所無き、是れを菩薩摩訶薩、諸の所有を捨つと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は心滯没せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の識住に於て未だ常に心を起さざる、是れを菩薩摩訶薩、心滯没せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は諸の所有に於て願戀する所無きやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切物に於て思惟する所無き、是れを菩薩摩訶薩、諸の所有に於て願戀する所無しと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に居家を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、性に志し好んで諸の佛國土に遊び所生の處に隨つて常に出家を樂ひ、髮を剃り鬚を去り應器を執持し、三法服を被、現に沙門と作る、是れを菩薩摩訶薩、應に居家を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に苾芻尼を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、常に應に諸の苾芻尼を遠離し與に共居せず、如し彈指の頃も亦復た異心を起さざるべし、是れを菩薩摩訶薩、應に苾芻尼を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は家慳を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ應に長夜に一切有情を利益安樂すべし、今此の有情自ら福力に由りて是の如き勝施主家を感得す、故に我れ中に於て應に慳嫉すべからずと。是れを菩薩摩訶薩、應に家慳を遠離すべしと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に衆會忿諍を遠離すべきやと。善現、若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、若し衆會に處し其の中或は聲聞獨覺有りて或は彼の乘相應の法要を説き、我れをして大菩提心を退失せしめん、是の故に定めて應に衆會を遠離すべしと。復た是を念を作さん、諸の忿諍者能く有情をして瞋害を發起して種種の惡不善業を造作せしむるすら尚ほ善趣に違ふ、況んや大

【二六】識住。識の爰着する所に名づく。

【二七】五地中の十二法を釋す。

爲すと雖も而かも自ら高うせず、是れを菩薩摩訶薩、嚴淨土の爲に諸の善根を植ゑ廻向を用ふ。雖も而かも自ら擧げずと爲すと、世尊、云何が菩薩摩訶薩は有情を化せんが爲には無邊の生死を厭倦せずと雖も而かも自ら高うせざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切有情を度脱せんと欲するが爲に諸の善根を植ゑ佛土を嚴淨し乃至未だ一切智智を滿ぜず、無邊の生死を受け勤苦すと雖も而かも厭倦無く亦た自ら高うせず、是れを菩薩摩訶薩、有情を化せんが爲には無邊の生死を厭倦せずと雖も而かも自ら高うせずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩に慚愧に住すと雖も而かも著する所無きやと。善現、若し菩薩摩訶薩、専ら無上正等菩提を求め、諸の聲聞獨覺心作意に於て慚愧を具するが故に終に暫くも起らず而かも其の中に於て亦た著する所無し、是れを菩薩摩訶薩、慚愧に住すと雖も而かも著する所無しと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩は一五阿練若に住して常に捨離せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、無上正等菩提を求めんが爲に諸の聲聞獨覺等の地を超ゆるが故に常に阿練若處を捨てず、是れを菩薩摩訶薩、阿練若に住して常に捨離せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は少欲なるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、尙ほ自ら大菩提を求むるすら爲さず、況んや世間利譽等の事を欲せんをや。是れを菩薩摩訶薩は少欲なりと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は足るを喜ぶやと。善現、若し菩薩摩訶薩、専ら一切智智を證得せんが爲の故に餘事に於て著する所無し、是れを菩薩摩訶薩、足るを喜ぶと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は常に杜多功德を捨離せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、常に深法に於て諦察忍を起さば是れを菩薩摩訶薩、常に杜多功德を捨離せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は諸の學處に於て未だ曾て棄捨せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、學する所の戒に於て堅く守りて移らず、而かも其の中に於て能く相を取らず、是れを菩薩摩訶薩、諸の學處に於て未だ曾て棄捨せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は諸の欲樂に於て深く離を生ずるやと。善現、

【一四】 四地中の十法を釋す。
 【一五】 阿練若 (Arāṇya) 閑靜處、寂靜處などと譯す。

と。善現、若し菩薩摩訶薩、菩薩行を行ずる時、是の如き念を作す、我れ一一の有情を饒益せんが爲に、假使ひ各無量無數死伽沙の如き劫に大地獄に處し、諸の劇苦を受け、或は燒かれ或は煮られ或は斫られ或は截たれ若しは刺され若しは懸けられ若しは磨られ若しは擽かれ、是の如き等の無量の苦事を受け乃至彼れをして佛乘に乗じて般涅槃せしめ、是の如くして一切有情界の盡くるまで大悲心會て厭倦無き。是れを菩薩摩訶薩、恒に大悲を起すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、諸の師長に於て敬信の心を以て諮承し供養すること佛に事ふる想の如くするやと。善現、若し菩薩摩訶薩、無上正等菩提を求めんが爲に師長に恭順し都て顧みる所無き。是れを菩薩摩訶薩、諸の師長に於て敬信の心を以て諮承し供養すること佛に事ふる想の如しと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は勤求して波羅蜜多を修習するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の波羅蜜多に於て專心に學を求め餘事を運離せば是れを菩薩摩訶薩、勤求して波羅蜜多を修習すと爲すと。

二三

世尊、云何が菩薩摩訶薩は多聞を勤求して常に厭足無く所聞の法に於て文字に著せざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、勤精進を發し是の念を作して言はく、若しは此の佛土若しは十方界の諸佛世尊所説の正法を、我れ皆聽習し讀誦し受持し、而かも其の中に於て文字に著せずと。是れを菩薩摩訶薩、多聞を勤求して常に厭足無く所聞の法に於て文字に著せずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、無染の心を以て常に法施を行じ廣く開化すと雖も而かも自ら高うせざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の有情の爲に正法を宣説し、尙ほ自ら此の善根を持て菩提に廻向するすら爲さず。況んや餘の事を求めんをや。多く化導すと雖も而かも自ら恃まず、是れを菩薩摩訶薩、無染の心を持って常に法施を行じ、廣く開化すと雖も自ら高うせずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は嚴淨土の爲に諸の善根を植ゑ廻向を用ふと雖も而かも自ら擧げざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、勇猛精進して諸の善根を修し、諸佛の淨國を莊嚴せんと欲するが爲に及び清淨の自他心の生ぜんが爲に是の事を

【三】三地中の五法を釋す。

治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、暫く一たびも佛の形像を親見し已らば乃ち無上菩提を證得するに至るまで終に念佛作意を捨てざる、是れを菩薩摩訶薩、佛身業を愛樂するを修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、法教を開闡する業を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、佛の在世及び涅槃後に於て諸の有情の爲に法教を開闡し、初も中も後も善く文義巧妙に純一に清白の梵行の所謂契經、應頌、記別、諷頌、自說、緣起、譬喻、本事、本生、方廣、希法、論議を圓滿す。是れを菩薩摩訶薩、法教を開闡する業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は憍慢を破する業を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、常に謙敬を懷きて憍慢の心を伏し、此れに由りて下姓卑族に生ぜざる、是れを菩薩摩訶薩、憍慢を破する業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、恒に語業を諱むるを修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、知ると補して、而かも説き言行相符する、是れを菩薩摩訶薩、恒に語を諱むる業を修治すと爲すと。

世尊、云何が菩薩摩訶薩の清淨禁戒なるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、聲聞獨覺の作意及び餘の破戒、菩提を障ふる法を起さず、是れを菩薩摩訶薩の清淨禁戒と爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、恩を知り恩を報するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、菩薩行を行する時、小恩を得るに於てすら尙ほ報するを忘れず、況んや大恩恵にして而かも當に酬いざるべけんや。是れを菩薩摩訶薩、恩を知り恩を報すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は安忍力に住するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、説ひ諸の有情來りて侵毀するを見るも而かも彼の所に於て被害の心無し、是れを菩薩摩訶薩、安忍力に住すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、勝歡喜を受くるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、化する所の有情既に成熟するを得、身心適悅し勝歡喜を受くる、是れを菩薩摩訶薩、勝歡喜を受くと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩、有情を捨てざるやと。善現、若し菩薩摩訶薩、有情を拔濟する心恒に捨てざる、是れを菩薩摩訶薩、有情を捨てずと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は恒に大悲を起すや

【一】契經乃至論議を十二部經といふ、佛説に十二の樣式あればなり。(1)契經。修多羅(Sūtra)。(2)應頌。祇夜(Geyya)。(3)記別。授記説(Vākyāna)。(4)諷頌。伽陀(Gāthā)。(5)自說。優陀那(Utāna)。(6)緣起。尼陀那(Nidāna)。(7)譬喻。阿波陀那(Avadāna)。(8)本事。伊帝曰多伽(Hivṛhāna)。(9)本生。閻陀伽(Jātaka)。(10)方廣。毘佛略(Vaiśpulya)。(11)希法。阿浮陀達摩(Abhuta-dharma)。(12)論議。優婆提合(Upekṣā)。

【二】二地の八法を釋す。

四には應に入胎具足するを圓滿すべし。五には應に出生具足するを圓滿すべし。六には應に家族具足するを圓滿すべし。七には應に種姓具足するを圓滿すべし。八には應に眷屬具足するを圓滿すべし。九には應に生身具足するを圓滿すべし。十には應に出家具足するを圓滿すべし。十一には應に莊嚴菩提樹具足するを圓滿すべし。十二には一切功德成辦し具足するを圓滿すべし。善現、菩薩摩訶薩、第十法雲地に住する時、應に是の如き十二法を圓滿すべし。善現、當に知るべし已に第十法雲地を圓滿せる菩薩摩訶薩は諸の如來と異なること無しと言ふべしと。爾の時具善善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は勝意樂業を淨むるを修治するやと。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て一切の善根を修集す。是れを菩薩摩訶薩、勝意樂業を淨むるを修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は、一切有情平等心業を成熟するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て慈悲喜捨の四種無量を引發する、是れを菩薩摩訶薩、一切有情平等心業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は布施を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切有情に於て分別する所無くして布施を行する、是れを菩薩摩訶薩、布施業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は善友に親近する業を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、諸の善友の有情を勸化し其れをして一切智智を修習せしむるを見ては即便ち親近して恭敬供養尊重讚歎し、正法を請受し晝夜に承奉して懈倦の心無し。是れを菩薩摩訶薩、善友に親近する業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は求法業を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て如來の無上正法を勤求し、聲聞獨覺等の地に墮せざる、是れを菩薩摩訶薩、求法業を修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は常に出家を樂ぶ業を修治するやと。善現、若し菩薩摩訶薩、一切生處に恒に居家の牢獄喧雜を厭ひ、常に佛法の清淨の出家能く礙を爲す無きを欣ぶ、是れを菩薩摩訶薩、常に出家業を樂ぶを修治すと爲すと。世尊、云何が菩薩摩訶薩は佛身業を愛樂するを修

【三】 初地の業十事を釋す。

する所無かるべし。九には應に^五 無生忍智を圓滿すべし。十には應に一切法は一相の理趣なりと説くを圓滿すべし。十一には應に分別を滅除するを圓滿すべし。十二には應に諸想を遠離するを圓滿すべし。十三には應に諸見を遠離するを圓滿すべし。十四には應に煩惱を遠離するを圓滿すべし。十五には應に 奢摩他毘鉢舍那地を圓滿すべし。十六には應に心性を調伏するを圓滿すべし。十七には應に心性を寂靜にするを圓滿すべし。十八には應に無礙智性を圓滿すべし。十九には應に愛染する所無きを圓滿すべし。二十には應に心の欲する所に隨つて諸の佛土に往き佛の衆會に於て自ら其の身を現するを圓滿すべし。善現、菩薩摩訶薩、第七遊行地に住する時、應に是の如き二十法を遠離すべし及び應に是の如き二十法を圓滿すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第八^六 不動地に住する時、應に四法を圓滿すべし。何等をか四と爲す。一には應に一切有情の心行に悟入するを圓滿すべし。二には應に諸の神通に遊戲するを圓滿すべし。三には應に諸の佛土を見、其の見る所の如く而かも自ら種種の佛土を嚴淨するを圓滿すべし。四には應に諸佛世尊に供養し承事し、如來の身に於て如實に觀察するを圓滿すべし。善現、菩薩摩訶薩、第八不動地に住する時、應に是の如き四法を圓滿すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第九 善慧地に住する時、應に四法を圓滿すべし。何等をか四と爲す。一には應に諸の有情の根勝劣智を知るを圓滿すべし。二には應に佛土を嚴淨するを圓滿すべし。三には應に幻の如く等持^七 數^八 諸定に入るを圓滿すべし。四には應に諸の有情の善根に隨つて應に熟すべきが故に諸有に入り自ら化生を現するを圓滿すべし。善現、菩薩摩訶薩、第九善慧地に住する時、應に是の如き四法を圓滿すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第十法雲地に住する時、應に十二法を圓滿すべし。何等か十二なる。一には應に無邊處所大願を攝受するを圓滿す、所願有るに隨つて皆圓滿せしむべし。二には應に諸の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・堅捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の異類に隨つて普智を圓滿すべし。三には應に無礙の辯說智を圓滿すべし。

【五】 無生忍智。無生無滅の理に安住して動かざる智。

【六】 奢他毘鉢舍那 *Samāhita Vipasyana* 奢摩他は記號、止、寂靜等の意、毘鉢舍那は觀、見等の意、心を攝して緣に住し散亂を睡るる事理を觀見するを謂ふ。

【七】 不動地。菩薩十地の一。願波羅蜜を成就し無相觀に住して無意識に任運無功用を相續する位。

【八】 善慧地。菩薩十地の一。願波羅蜜を成就して眞如を證得し、衆生の積類を案じて度すべきか否かを知つて說法教化する位。

【九】 法雲地。菩薩十地の一。願波羅蜜を成就し大慈雲の如く衆生を潤化する位。

戒波羅蜜多を圓滿すべし。三には應に安忍波羅蜜多を圓滿すべし。四には應に精進波羅蜜多を圓滿すべし。五には應に靜慮波羅蜜多を圓滿すべし。六には應に般若波羅蜜多を圓滿すべし。復た應に六法を遠離すべし。何等をか六と爲す。一には應に聲聞心を遠離すべし。二には應に獨覺心を遠離すべし。三には應に離熱惱心を遠離すべし。四には乞ふ者來るを見ては厭感せず。五には所有の物を捨て憂悔の心無し。六には來り求むる者に於て終に矯誑せず。善現、菩薩摩訶薩、第六現前地に住する時、應に是の如き六法を圓滿すべし、及び應に是の如き六法を遠離すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第七、遠行地に住する時、應に二十法を遠離すべし。何等か二十なる。一には應に我執有情執乃至知者執見者執を遠離すべし。二には應に斷執を遠離すべし。三には應に常執を遠離すべし。四には應に相想を遠離すべし。五には應に因等の見執を遠離すべし。六には應に名色執を遠離すべし。七には應に纏執を遠離すべし。八には應に處執を遠離すべし。九には應に界執を遠離すべし。十には應に諦執を遠離すべし。十一には應に緣起執を遠離すべし。十二には應に三界に住著する執を遠離すべし。十三には應に一切法執を遠離すべし。十四には應に一切法に於て理の如く理の如くならざる執を遠離すべし。十五には應に依佛の見執を遠離すべし。十六には應に依法の見執を遠離すべし。十七には應に依僧の見執を遠離すべし。十八には應に依戒の見執を遠離すべし。十九には應に空法を怖畏するを遠離すべし。二十には應に空性に違背するを遠離すべし。復た應に二十法を圓滿すべし。何等か二十なる。一には應に空に通達するを圓滿すべし。二には應に無相を證するを圓滿すべし。三には應に無願を知るを圓滿すべし。四には應に三輪清淨を圓滿すべし。五には應に有情を悲愍するを圓滿し、及び有情に於て執著する所無かるべし。六には應に一切法平等見を圓滿し、及び此の中に於て執著する所無かるべし。七には應に一切有情平等見を圓滿し、及び此の中に於て執著する所無かるべし。八には應に眞實理趣に通達するを圓滿し、及び此の中に於て執著

【四】遠行地。菩薩十地の一。方便波羅蜜を成就し二乘の自利主義を超えて廣大無邊の眞理界に達する位。

に著せず。二には無染の心を以て常に法施を行じ、廣く開化すと雖も而かも自ら高うせず。三には嚴淨土の爲に諸の善根を植ゑ、用て廻向すと雖も而かも自ら擧げず。四には有情を化せんが爲には無邊の生死を厭倦せずと雖も而かも自ら高うせず。五には慚愧に住すと雖も而かも著する所無し。善現、菩薩摩訶薩、第三發光地に住する時、應に是の如き五法に安住すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第四 焰慧地に住する時、應に十法に住し常に捨てざるべし。何等をか十と爲す。一には 阿練若^{アレンニョ}に住し常に捨離せず。二には少欲。三には喜足。四には常に 杜多^{トド}の功徳を捨離せず。五には諸の學處に於て未だ曾て棄捨せず。六には諸の欲樂に於て深く厭離を生ず。七には常に棄てて寂滅俱心を發起す。八には諸の所有を捨つ。九には心滯沒せず。十には諸の所有に於て厭離する所無し。善現、菩薩摩訶薩、第四焰慧地に住する時、應に是の如き十法に住し常に捨てざるべし。

卷の第五十四

初分辯大乘品第十五之四

復た次に善現、菩薩摩訶薩、第五 極難勝地に住する時、應に十法を遠離すべし。何等をか十と爲す。一には應に居家を遠離すべし。二には應に 苾芻尼を遠離すべし。三には應に家慳を遠離すべし。四には應に衆會忿諍を遠離すべし。五には應に自讚毀他を遠離すべし。六には應に十不善業道を遠離すべし。七には應に増上の慢傲を遠離すべし。八には應に顛倒を遠離すべし。九には應に猶豫を遠離すべし。十には應に貪瞋癡を遠離すべし。善現、菩薩摩訶薩、第五極難勝地に住する時、應に是の如き十法を遠離すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第六 現前地に住する時、應に六法を圓滿すべし。何等をか六と爲す。一には應に布施波羅蜜多を圓滿すべし。二には應に淨

【六】 焰慧地。菩薩十地の一。精進波羅蜜を成就して智慧益益熾盛なる位。

【七】 阿練若 (Aranya) 寺院の總名比丘の住處なり無諍聲聞寂、遠離處等と譯す。

【八】 杜多 (Dutt) 抖擻、洗濯等と譯す、衣服飲食住處の三種の食著を抖擻不淨法を云ふ。

【一】 極難勝地。菩薩十地の一。禪定波羅蜜を成就して眞俗二智の調和を得たる位。

【二】 苾芻尼 (bhikkhuni)。比丘尼に同じ。

【三】 現前地。菩薩十地の一。慧波羅蜜を成就して最勝智を發し染淨一如を現前せしむる位。

の諸法變壞無きに由るが故に。是の菩薩摩訶薩、從越する所の地に於て恃まず思惟せず。地業を修治すと雖も而かも彼の地を見ず。善現、是れを菩薩摩訶薩、六波羅蜜多を修行する時、一地より一地に趣くと爲すと。世尊、何をか菩薩摩訶薩、地業を修治すと謂ふやと。善現、菩薩摩訶薩、初め極喜地に住する時、應に善く十種の勝業を修治すべし。何等をか十と爲す。一には無所得を以て方便と爲し、勝意業を淨むる業を修治す、勝意業不可得の故に。二には無所得を以て方便と爲し一切有情平等心業を修治す、一切有情不可得の故に。三には無所得を以て方便と爲し、布施業を修治す、施受若及び施さるる物不可得の故に。四には無所得を以て方便と爲し、善友に親近する業を修治す、善友惡友の二相無きが故に。五には無所得を以て方便と爲し法を求むる業を修治す、諸の所求の法不可得の故に。六には無所得を以て方便と爲し常に出家を樂ふ業を修治す。棄捨せらるる家不可得の故に。七には無所得を以て方便と爲し佛身を愛樂する業を修治す、諸相隨好不可得の故に。八には無所得を以て方便と爲し法教を開闡する業を修治す、分別せらるる法不可得の故に。九には無所得を以て方便と爲し憍慢を破する業を修治す、諸の興盛法不可得の故に。十には無所得を以て方便と爲し恒に語を諳むる業を修治す、一切の語性不可得の故に。善現、菩薩摩訶薩、初め極喜地に住する時、應に善く是の如き十種の勝業を修治すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第二離苦地に住する時、應に八法に於て思惟し修習して速に圓滿すべし。何等をか八と爲す。一には清淨禁戒。二には恩を知り恩を報ず。三には安忍力に住す。四には勝歡喜を受く。五には有情を捨てず。六には恒に大悲を起す。七には諸の師長に於て敬信の心を以て、諸承供養し佛に事ふる想の如くす。八には勤求して波羅蜜多を修習す。善現、菩薩摩訶薩、第二離苦地に住する時、應に是の如き八法に於て思惟し修習して速に圓滿すべし。復た次に善現、菩薩摩訶薩、第三發光地に住する時、應に五法に住すべし。何等をか五と爲す。一には多聞を勤求し嘗て厭足無く、所聞の法に於て文字

【三】 極喜地。菩薩十地の一。人、法二空の理を證し、聖性を得て大歡喜心を生ずる位。

【四】 離垢地。菩薩十地の一。戒波羅蜜を成就し思惑を斷じて清淨身と成る位。

【五】 發光地。菩薩十地の一。忍辱波羅蜜を成就し智慧の光明を開發する位。

善現、是の如き字義は宣説す可からず、顯示す可からず、執取す可からず、書持す可からず、觀察す可からず、諸相を離るるが故に。善現、譬へば虚空はれ一切物の歸趣する所の處なるが如く此の諸字門も亦復是の如し。諸法空の義皆此の門に入りて方に顯了することを得。善現、此の裏二等の名に入るは諸字門に入るなり、善現、若し菩薩摩訶薩是の如き諸字門に入るより善巧智を得、諸の言音に於て詮する所表はす所皆罣礙無く、一切法平等空性に於て盡く能く證持し家の言音に於て成く善巧を得。善現、若し菩薩摩訶薩、能く是の如き諸字門に入る印相印句を聽き、聞き已つて受持し讀誦し通利し他の爲に解説し、名利を貪らずんば此の因縁に因りて二十種の殊勝功德を得。何等か二十なる。謂ゆる強憶念を得、勝慚愧を得、堅固力を得、法の旨趣を得、増上覺を得、殊勝慧を得、無礙辯を得、總持門を得、疑惑無きを得、語に違順して恚愛を生ぜざるを得、高下無く平等に住するを得、有情の言音に於て善巧を得、蘊善巧・處善巧・界善巧を得、緣起善巧・因善巧・緣善巧・法善巧を得、根勝劣智善巧他心智善巧を得、星曆を觀する善巧を得、天耳智善巧・宿住隨念智善巧・神境智善巧・死生智善巧を得、漏盡智善巧を得、處非處智を説く善巧を得、往來等威儀路善巧を得。善現、是れを二十種の殊勝功德を得と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、得る所の文字陀羅尼門は當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

六三

佛、善現に告げたまはく、汝の問ふ云何が當に菩薩摩訶薩は大乗に發趣すと知るべきやとは、善現、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜多を修行する時、一地より一地に趣かば當に知るべし是れを菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと爲すと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、六波羅蜜多を修行する時、一地より一地に趣くやと。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切法の從て來る所無く亦た趣く所無しと知る。何を以ての故に、一切法去る無く來る無く從ふ無く趣く無し、彼

【六三】 一地の地業を列ぬ。

なりと悟るが故に。惡吒字門に入る、一切法は制伏任持相不可得なりと悟るが故に。迦字門に入る、一切法の作者不可得なりと悟るが故に。婆字門に入る、一切法は時平等性不可得なりと悟るが故に。磨字門に入る、一切法の我及び我所性不可得なりと悟るが故に。伽字門に入る、一切法の行取性不可得なりと悟るが故に。他字門に入る、一切法の處不可得なりと悟るが故に。闍字門に入る、一切法の生起不可得なりと悟るが故に。濕縛字門に入る、一切法の安穩性不可得なりと悟るが故に。達字門に入る、一切法の界性不可得なりと悟るが故に。捨字門に入る、一切法の疲靜性不可得なりと悟るが故に。佉字門に入る、一切法の如虛空性不可得なりと悟るが故に。厲字門に入る、一切法の窮盡性不可得なりと悟るが故に。薩婆字門に入る、一切法の任持處非處令不動轉性不可得なりと悟るが故に。若字門に入る、一切法の所了知性不可得なりと悟るが故に。辣他字門に入る、一切法の執著義性不可得なりと悟るが故に。呵字門に入る、一切法の因性不可得なりと悟るが故に。薄字門に入る、一切法の可破壞性不可得なりと悟るが故に。縛字門に入る、一切法欲樂覆性不可得なりと悟るが故に。癡磨字門に入る、一切法の可憶念性不可得なりと悟るが故に。嚩縛二門に入る、一切法の可呼召性不可得なりと悟るが故に。蹉二門に入る、一切法の勇健性不可得なりと悟るが故に。鍵二門に入る、一切法の厚平等性不可得なりと悟るが故に。攝字門に入る、一切法の積集性不可得なりと悟るが故に。拏字門に入る、一切法の諸の喧譁を離れ往無く來無く行住坐臥不可得なりと悟るが故に。頗字門に入る、一切法の遍滿果報不可得なりと悟るが故に。塞迦字門に入る、一切法の聚積蘊性不可得なりと悟るが故に。逸婆二門に入る、一切法の衰老性相不可得なりと悟るが故に。酌字門に入る、一切法の聚集足跡不可得なりと悟るが故に。吒字門に入る、一切法の相驅迫性不可得なりと悟るが故に。擇二門に入る、一切法の究竟處所不可得なりと悟るが故に。善現、是の如き字門は是れ能く法の空邊際に悟入す、是の如き字表を除き諸法空は更に不可得なり。何を以ての故に、

薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる。十八種不共法なり。何等か十八なるや。謂ゆる我々は如來應正等覺にして初め阿耨多羅三藐三菩提を證得して夜より乃ち最後所作已に著し無餘依大涅槃に入る夜に至るまで其の中間に於て常に畏怯無く、至暴の音無く、定心の念無く、不定の心無く、種種の想無く、捨を得ざる無く、意欲退する無く、轉退する無く、念退する無く、善退する無く、解脫退する無く、解脫智見退する無く、一切の身業は智前等を爲し智に隨つて轉じ、一切の語業は智前等を爲し智に隨つて轉じ、一切の意業は智前等を爲し智に隨つて轉じ、過去世に於て起せし所の智見著無く礙無く、未來世に於て起せし所の智見著無く礙無し、現在世に起せし所の智見著無く礙無し。善現、是の如き十八佛不共法は皆無所得を以て方便と爲さざる無し。當に知るべし是れは菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる諸の文字陀羅尼門なりと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が文字陀羅尼門なるやと。佛言はく、善現、字平等性・語平等性・言說理趣平等性は諸字門に入る。是れを文字陀羅尼門と爲すと。世尊、云何が諸字門に入るやと。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、空字門に入る、一切法不生なりと悟るが故に。洛字門に入る、一切法塵垢を離ると悟るが故に。跛字門に入る、一切法障義教なりと悟るが故に。者字門に入る、一切法死生無しと悟るが故に。嚮字門に入る、一切法は名相を遠離し得失無しと悟るが故に。禰字門に入る、一切法は出世間なりと悟るが故に、愛支因縁永く現ぜざるが故に。陀字門に入る、一切法は調伏寂靜真如平等無分別なりと悟るが故に。婆字門に入る、一切法は髮縛を離ると悟るが故に。茶字門に入る、一切法は熱惱穢を離れ清淨を得と悟るが故に。沙字門に入る、一切法畢竟無きを悟るが故に。縛字門に入る、一切法は言音道斷なりと悟るが故に。鎖字門に入る、一切法は眞如不動なりと悟るが故に。也字門に入る、一切法は如實不生

【六〇】十八佛不共法。身無失等の二乗や菩薩に共同しない、佛のみの有する十八種の功德。

【六一】諸の文字陀羅尼門これ大乘たるを説く。

尊位に處すと稱し、大衆の中に於て正しく師子吼し妙梵輪を轉す。其の輪清淨正眞無上にして一切の沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間皆能く法の如く轉ずる者有ること無し、是れを漏盡無畏と爲すと。世尊、云何が五三障法無畏なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、諸の弟子の爲に障道の法を説く。設ひ沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間有りて法に依りて難を立て及び憶念せしめて言はく、此の法を習ふも道を障へる能はずと。我れ彼れに於て正見由無きを難す。彼れに於て見由無きを難するを以ての故に安穩に住し怖き無くはれ無きを得、自ら我れ大仙尊位に處すと稱し、大衆の中に於て正しく師子吼し妙梵輪を轉す。其の輪清淨正眞無上にして一切の沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間皆能く法の如く轉ずる者有ること無し、是れを障法無畏と爲すと。世尊、云何が五三盡苦道無畏なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、諸の弟子の爲に盡苦の道を説く。設ひ沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間有りて法に依りて難を立て及び憶念せしめて言はく、此の道を修するも苦を盡くす能はずと。我れ彼れに於て正見由無きを難す。彼れに於て見由無きを難するを以ての故に安穩に住し怖き無く畏れ無きを得、自ら我れ大仙尊位に處すと稱し、大衆の中に於て師子吼し妙梵輪を轉す。其の輪清淨正眞無上にして一切の沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間皆能く法の如く轉ずる者有ること無し、是れを盡苦道無畏と爲すと。善現、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

五三復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる四無礙解なり。何等をか四と爲す。謂ゆる五五義無礙解・法無礙解・詞無礙解・辯無礙解なり。善現、是の如き四無礙解に若し無所得を以て方便と爲さば、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる大慈大悲大喜大捨、五眼六神通、一切智道相智一切相智なり。善現、是の如き等の法に若し無所得を以て方便と爲さば、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。五九復た次に善現、善

【五三】 障法無畏。佛の四無畏の一。正道を妨礙するものを明かにしこれを説くに他の非難を畏るゝなきこと。

【五三】 盡苦道無畏。佛の四無畏の一。苦界を脱する要道を示し他の非難あるを畏れないこと。

【五四】 四無礙解これ大乘たるを説く。
【五五】 義無礙解。四無礙解の一。教法の義理に於て通達無礙なること。

【五六】 法無礙解。四無礙解の一。總ての教法に通達無礙なること。

【五七】 詞無礙解。四無礙解の一。諸方の言辭に於て通達無礙なること。

【五八】 辯無礙解。四無礙解の一。正理に契ふ無礙の言説を起すもの。
【五九】 十八不共法これ大乘たるを説く。

支等の相を了知する、是れを靜慮解脫等持等正雜染清淨智力と爲すと。世尊、云何が宿住隨念智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有種類の無量無數の宿住の事相を了知する、是れを宿住隨念智力と爲すと。世尊、云何が死生智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有種類の無量無數の死生の事相を了知する、是れを死生智力と爲すと。世尊、云何が漏盡智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸漏悉く盡き、無漏心解脫し、無漏慧解脫するを了知し、現法の中に於て自ら證を作し具足して住し能く正しく、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けずと了知する、是れを漏盡智力と爲すと。善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる四無所畏なり。何等をか四と爲すと。謂ゆる正等覺無畏、漏盡無畏、障法無畏、盡古道無畏なりと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が正等覺無畏なるやと。佛言はく善現、若し無所得を以て方便と爲し、自ら稱す、我れは是れ正等覺者なりと。設ひ沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間有りて法に依りて難を立て及び憶念せしめて言はく、是の法に於ては正等覺せるに非すと。我れ彼れに於て正見由無きを難す。彼れに於て見由無きを難するを以ての故に、安穩に住し怖き無く畏れ無きを得、自ら我れ四九大仙尊位に處すと稱し、大衆の中に於て正しく師子吼し五〇。妙梵輪を轉す。其の輪清淨正眞無上にして一切の沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間皆能く法の如く轉する者有ること無し。是れを正等覺無畏と爲すと。世尊、云何が漏盡無畏なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、自ら稱す、我れは已に悉く諸漏を盡くすと。設ひ沙門若しは婆羅門若しは天魔梵或は餘の世間有りて法に依りて難を立て及び憶念せしめて言はく、是の如き漏未だ悉く盡きざる有り。我れ彼れに於て正見由無きを難す。彼れに於て見由無きを難するを以ての故に安穩に住し怖き無く畏れ無きを得、自ら我れ大仙

【四七】 四無所畏これ大乘たるを説く。

【四八】 正等覺無畏。佛の四無畏の一。一切諸法を等しく覺知して餘人の難を畏れざること。

【四九】 大仙尊位。佛位の稱。

【五〇】 妙梵輪。妙法輪の異名。

【五一】 漏盡無畏。佛の四無畏の一。あらゆる煩惱を斷盡して外難の畏るゝなきこと。

大乘相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる十隨念なり。何等をか十と爲す。謂ゆる佛隨念、法隨念、僧隨念、戒隨念、捨隨念、天隨念、寂靜遠離隨念、入出息隨念、身隨念、死隨念なり。善現、是の如き十隨念、若し無所得を以て方便と爲さば當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる四靜慮、四無量、四無色定、八解說、八勝處、九次第定、十遍處等の所有善法に無所得を以て方便と爲さば當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる佛の十力なり。何等をか十と爲す。謂ゆる處非處智力、業異熟智力、種種界智力、種種勝解智力、根勝劣智力、遍行智力、靜慮解脫等持等至雜染清淨智力、宿住隨念智力、死生智力、漏盡智力なりと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が處非處智力なるやと。佛言はく、善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に因果等の法の處、非處相を了知する、是れ處非處智力と爲すと。世尊、云何が業異熟智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の過去未來現在の諸の業報を了知し、種種の因果相を受くる是れを業異熟智力と爲すと。世尊、云何が種種界智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の無量の界相を了知する、是れを種種界智力と爲すと。世尊、云何が種種勝解智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の無量の勝解相を了知する、是れを種種勝解智力と爲すと。世尊、云何が根勝劣智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の根の勝劣相を了知する、是れを根勝劣智力と爲すと。世尊、云何が遍行智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の遍行相を了知する、是れを遍行智力と爲すと。世尊、云何が靜慮解脫等持等至雜染清淨智力なるやと。善現、若し無所得を以て方便と爲し、如實に諸の有情類の靜慮・解脫・等持・等至・雜染・清淨・根・力・覺支・道

ともに無く、勝妙の樂、身に滿つる定。

【四四】 十隨念これ大乘たるを説く。

【四五】 四靜慮等諸定これ大乘なるを説く。

【四六】 佛の十力これ大乘と説く。

云何が 盡智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば貪瞋癡盡くるを知る、是れを盡智と爲すと。世尊、云何が 無生智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば有邊復た生ぜずと知る、是れを無生智と爲すと。世尊、如何が 如實智なるやと。善現、如來の一切智、一切相智、是れを如實智と爲す。善現、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる三無漏根なり。何等をか三と爲す。謂ゆる未知當知根・已知根・具知根なり、爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が未知當知根なるやと。佛言はく、善現、若し諸の學者、諸聖諦に於て未だ現觀を得ざる所有信根・精進根・念根・定根・慧根、是れを已知根・念根・定根・慧根、是れを未知當知根と爲すと。世尊、云何が已知根なるやと。善現、若し諸の學者、諸聖諦に於て已に現觀を得、已に聖果を得たる所有信根・精進根・念根・定根・慧根、是れを已知根と爲すと。世尊、云何が具知根なるやと。善現、謂ゆる諸の無學者若しは阿羅漢若しは獨覺若しは諸の菩薩の已に十地に住せる、若しは諸の如來應正等覺の所有信根・精進根・念根・定根・慧根、是れを具知根と爲す。善現、是の如き三根に若し無所得を以て方便と爲さば當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる三三摩地なり。何等をか三と爲す。謂ゆる有尋有伺三摩地・無尋唯伺三摩地・無尋無伺三摩地なり。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 有尋有伺三摩地なるやと。佛言はく、善現、若し欲惡不善法を離れ、有尋有伺、離に喜樂を生じ初靜慮に入り具足して住する、是れを有尋有伺三摩地と爲すと。世尊、云何が 無尋唯伺三摩地なるやと。善現、若し初靜慮、第二靜慮の中間定、是れを無尋唯伺三摩地と爲すと。世尊、云何が 無尋無伺三摩地なるやと。善現、若し第二靜慮乃至非想非非想處まで、是れを無尋無伺三摩地と爲す。善現、是の如き三三摩地に若し無所得を以て方便と爲さば當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の

【一〇】 願樂することなしと觀す。

【一一】 智（法智乃至如實智）これ大乘たるを説く。

【一二】 法智。欲界の四諦を證する無漏智。

【一三】 類智。欲界の四諦に迷ふ煩惱を斷ずる智。

【一四】 世俗智。世俗凡夫の智即ち、有漏智。

【一五】 他心智。他人の心念を知る智。

【一六】 苦智。苦諦の理に迷うて起る三界の煩惱を斷ずる無漏智。

【一七】 集智。集諦を知る智。

【一八】 滅智。滅諦の理を知る無漏智。

【一九】 道智。道諦を知る智。

【二〇】 盡智。阿羅漢に到つて起る無漏智。

【二一】 無生智。阿羅漢の最極智。

【二二】 如實智。佛智の總名、諸法の實相をあるがまゝに知る智。

【二三】 三無漏根。これ大乘たるを説く。

【二四】 三三昧これ大乘たるを説く。

【二五】 有尋有伺三摩地。麁覺、細觀の兩者の尙存する定。

【二六】 無尋唯伺三摩地。麁なる尋求の心所は無きも細かに分別する伺の心作用ある定。

【二七】 無尋無伺三摩地。覺觀

薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、一切法の自相皆空なりと觀じて其の心安住するを空解脫門と名づけ、亦た空三摩地と名づく、是れを第一と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、一切法の自相空なりと觀するが故に皆相有る無く其の心安住するを無相解脫門と名づけ、亦た無相三摩地と名づく。是れを第二と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、一切法の自相空なりと觀するが故に皆願ふ所無く其の心安住するを無願解脫門と名づけ亦た無願三摩地と名づく、是れを第三と爲す。善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる法智・類智・世俗智・他心智・苦智・集智・滅智・道智・靈智・無生智・如實智なり、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。爾の時尊者善現、佛に白して言さく、世尊、云何が法智なるやと。佛言はく、善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば五蘊等の差別相轉するを知る。是れを法智と爲すと。世尊、云何が類智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば、蘊界處及び諸の緣起の若しは總若しは別是れ無常等なるを知る、是れを類智と爲すと。世尊、云何が世俗智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば一切法は假設の名字なりと知る、是れを世俗智と爲すと。世尊、云何が他心智なるやと、善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば他の有情の心心所法及び修行證滅を知る。是れを他心智と爲すと。世尊、云何が苦智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば苦應に生ぜざるべしと知る、是れを苦智と爲すと。世尊、云何が集智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば集應に永く斷すべしと知る、是れを集智と爲すと。世尊、云何が滅智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば滅應に作證すべしと知る、是れを滅智と爲すと。世尊、云何が道智なるやと。善現、若し智、無所得を以て方便と爲さば道應に修習すべしと知る。是れを道智と爲すと。世尊、

明記して均等ならしむ。(2)擇法等覺支。智慧を以て法の眞偽を簡擇す。(3)精進等覺支。勇猛心を以て眞法を行ずる。(4)喜等覺支。心に善法を得て歡喜を生ずる。(5)輕安等覺支。身心を以て輕利安適ならしむ。(6)定等覺支。心を一境に住して散亂せしめず。(7)捨等覺支。諸の妄認を捨て、一切法を捨てて平心坦懷となる。(一)八聖道支。これ大乘たるを説く。

【三】正見等。中正にして理に契ひ涅槃に至る八種の道なれば八聖道支といふ。(1)正見。正しく四諦の理を見る。(2)正思惟。正しく四諦の理を思惟すること。(3)正語。非理の語をなさざること。(4)正業。身の一切の邪業を除き清淨の身業に住す。(5)正命。身口意の三業を清淨にし正法に順ひ五邪命を離る。(6)正精進。涅槃の道に努む。(7)正念。眞智を以て正道を憶念して邪念なきこと。(8)正定。眞智を以て無漏清淨の禪定に入る。

【三】三三摩地。これ大乘と説く。

【四】空三摩地。萬有はことごとく之れ空なりと觀ず。

【五】無相三摩地。すべて相對的差別の相なしと觀ず。

【六】無願三摩地。何ものを

羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、對三摩地を修し、斷行して神足を成就し、離に依り無染に依り、滅に依りて捨に廻向す、是れを第二と爲す。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、心三摩地を修し、斷行して神足を成就し、離に依り、無染に依りて捨に廻向す、是れを第三と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、觀三摩地を修し、斷行して神足を成就し、離に依り、無染に依りて捨に廻向す、是れを第四と爲す。善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる五根なり。何等をか五と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、修する所の^{一六}信根・精進根・念根・定根・慧根・善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる五力なり。何等をか五と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、修する所の^{一七}信力・精進力・念力・定力・慧力・善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる七等覺支なり、何等をか七と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、修する所の^{一八}念等覺支・擇法等覺支・精進等覺支・喜等覺支・輕安等覺支・定等覺支・捨等覺支を離に依り、無染に依りて捨に廻向す。善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる八聖道支なり。何等をか八と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、修する所の^{一九}正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定を離に依り、無染に依りて捨に廻向す、善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる三三摩地なり。何等をか三と爲す。善現、若し菩薩

【一五】 五根これ大乗と説く。

【一六】 信根等。之等の五法能く他の一切の善法を生ずる本

三寶四諦を信ずる。(1)信根。

勇猛に善法を修する。(2)精進根。

正法を憶念する。(3)念根。

正法を憶念する。(4)定根。心を一境に止めて散失せしめず。

(5)慧根。眞理を思惟する。

【一七】 五力これ大乗と説く。

【一八】 信力等。之等の五根増長して五障を治する勢力を有するの故に五力といふ。(1)信

力。諸の邪信を破す。(2)精進力。身の懈怠を破す。(3)念力。諸の邪念を破す。(4)定力。諸

の亂惑を破す。(5)慧力。三界の諸惑を破す。

【一九】 七等覺支。これ大乗と説く。

【二〇】 念等覺支等。無學果に到る修道に於て思惑を斷ずる。

覺支七種なれば七等覺支といふ。(1)念等覺支。當に定慧を

如く、外身に於て循身觀に住し、内外身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念じ世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に、其の應する所に隨ふも亦復た是の如し。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内外俱受心法に於て循受心法觀に住し熾然として精進し具さに正知を念じ世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に、其の應する所に隨ふも皆應に廣説すべし。善現、是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内外俱身受心法に於て循身受心法觀に住する時は是の觀を作すと雖も而かも所得無し、善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる四正斷なり。何等をか四と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、諸の未だ生ぜざる惡不善法に於て生ぜざらん爲の故に、欲を生じ策勵して正勤を發起し、心に策ち心を持する是れを第一と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、諸の已に生ぜし惡不善法に於て永く斷ぜんが爲の故に、欲を生じ策勵して正勤を發起し、心に策ち心を持する是れを第二と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、未だ生ぜざる善法を生ぜしめんが爲の故に、欲を生じ策勵して正勤を發起し、心に策ち心を持する是れを第三と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、已に生ぜし善法は安住し忘れず増廣して倍修滿せしめんが爲の故に欲を生じ策勵して正勤を發起し、心に策ち心を持する是れを第四と爲す。善現、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる四神足なり。何等をか四と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、欲三摩地を修し斷行して神足を成就し、離に依り無染に依り滅に依りて捨に廻向す、是れを第一と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波

【八】 四正斷これ大乘たるを説く。

【九】 第一。未生の惡に對して更に生ぜざらしめんが爲に勤めて精進す。

【一〇】 第二。已生の惡に對して除斷の爲に勤めて精進す。

【一一】 第三。未生の善に對して生ぜんが爲に勤めて精進す。

【一二】 第四。已生の善に對して增長せしめんが爲に勤めて精進す。

【一三】 四神足これ大乘たるを説く。

【一四】 四神足。四神足通なり。欲、勤、心、觀の四三摩地を修して神足を成就すとす。

自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脱を得ずんば終に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪婁を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。骸骨銀藉し、風吹き日曝らし雨灌ぎ霜封じ、積ること歳年有り色珂雪の如し。是の事を見已りて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脱を得ずんば終に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪婁を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。餘骨地に散じ、多く百歳或は多く千年を經、其の相變じて青狀猶ほ偏へんの色の如く、或は腐朽碎末して塵の如き有り、土と相和して分別すべからず。是の事を見已つて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脱を得ずんば終に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪婁を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て是の如き差別ある循身觀に住し、熾然として精進し具さに正知を念じ、世の貪婁を調伏せんと欲するが爲の故にするが

に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと、善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し、具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。已に骨礫と成り血肉都て盡き筋連れるを餘すのみ。是の事を見已りて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脫を得ずんば終に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。但だ衆骨を餘すのみ、其の色皓白なること雪珂貝しらたがの如く、諸筋糜爛し支節分離す。是の事を見已つて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脫を得ずんば終に是の如きに歸す、誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。白骨と成り已つて支節分散し異方に零落す。所謂足骨・膕骨・膝骨・髌骨・脛骨・脊骨・脇骨・胸骨・臍骨・臂骨・手骨・項骨・頰骨・頰骨・髑髏・各異處に在り。是の事を見已りて

諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る、死して一日を經或は二日乃至七日を經。諸の鵙鷲烏鵲鴉鴉虎豹豺狼野干狗等の種種の禽獸の或は啄み或は攫り骨肉狼藉し髓擧して食噉す。是の事を見已つて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脫を得ずんば終に是の如きに歸せん。誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。禽獸食し已りて不淨潰爛し膿血流離し、無量種の蟲蛆有りて雜出す、未だ解脫を得ずんば終に是の如きに歸せん。誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ諸の愚夫のみ迷謬して耽著すと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故にと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る。蟲蛆食し已りて肉離骨現れ支節相連り筋纏ひ血塗れ尙ほ腐肉を餘す、是の事を見已りて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脫を得ずんば終

牛の命を斷ち已つて復た利刀を用て其の身を分析し、剖きて四分と爲し、若しは坐し若しは立ちて如實に觀知するが如し。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、審かに自身を觀じ如實に念じて地水火風四界の差別を知るも亦復た是の如し。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念ずるは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ如實に念じて足より頂に至るまで種種の不淨其の中に充滿し外は薄皮の纏裹する所と爲る。所謂唯だ髮毛・爪齒・皮革・血肉・筋脈・骨髓・心肝・肺腎・脾膽・胸胃・大腸小腸・尿管・洩唾・涎淚・垢汗・淡膿・肪脂・腦膜・腦膠有るのみ、是の如き不淨、身中に充滿す。農夫或は諸の長者有り、倉中に種種雜穀の所謂る稻麻粟豆麥等を盛滿するに明目の者有りて倉を開きて之を觀れば即ち如實に其中唯だ稻麻粟等の雜穀のみ有るを知るが如し。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ、如實に念じて足より頂に至るまで唯だ種種不淨の臭物のみ有りて其の中に充滿せるを知るも亦復た是の如し。誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ愚者のみ迷謬して耽著す。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し、熾然として精進し具さに正知を念ずるは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、澹泊路を往きて棄てられし屍を觀る、死して一日を經或は二日乃至七日を經、其の身腫脹し色青瘀に變じ、臭爛して皮穿き膿血流出す、是の事を見已つて自ら我が身を念ふに是の如き性有り是の如き法を具す、未だ解脱を得ずんば終に是の如きに歸せん。誰れか智者の此の身を寶として玩ぶ有らん、唯だ

【六】 死人塚相不淨を觀ず。

【七】 澹泊。無欲脫俗の貌。

住する時住するを知り、坐する時坐するを知り、臥する時臥するを知る。如如の自身、威儀の差別、是の如く是の如く具さに正知を念ず。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し、熾然として精進し具さに正知を念ずるは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ、正しく往來を知り、正しく瞻視を知り、正しく俯仰を知り、正しく屈伸を知り、僧伽眠を服し、衣鉢を執持し、食を嘗め飲を嚙り臥息經行・坐起承迎・寤寢語嘿、諸定に入出する皆正知を念ず、善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て循身觀に住し、熾然として精進し、具さに正知を念ずるは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲め故なりと爲す。復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ、息入の時に於て如實に念じて息入を知り、息出の時に於て如實に念じて息出を知り、入息長き時に於て如實に念じて入息長きを知り、出息長き時に於て如實に念じて出息長きを知り、入息短き時に於て如實に念じて入息短きを知り、出息短き時に於て如實に念じて出息短きを知る。工輪師或は彼の弟子の輪勢長き時如實に念じて輪勢長きを知り、輪勢短き時如實に念じて輪勢短きを知るが如く、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ入息出息の若しは長き若しは短きを如實に念知するも亦復た是の如し。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内身に於て循身觀に住し熾然として精進し具さに正知を念ずるは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なりと爲す。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し審かに自身を觀じ、如實に念じて四界の差別を知る。所謂地界、水火風界なり。巧みなる屠師或は彼の弟子

【一】 如如。絶對の眞理の意、法性の理體不二平等なるを如といひ、彼此の法皆如なれば如如といふ。

【二】 僧が眠 (Sangha-śīpa) 比丘三衣の一、重又は合と譯す、割裁して更に之を合重せるが故に。

【三】 衣鉢。僧家の什具。

【四】 數息觀。

【五】 四大觀。

の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し外心に於て循心觀に住すと雖も而かも竟に心俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内外心に於て循心觀に住すと雖も而かも竟に心俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の^{五〇}法念住と爲す。善現、法念住とは、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内法に於て^{五一}循法觀に住すと雖も而かも竟に法俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、外法に於て循法觀に住すと雖も而かも竟に法俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内外法に於て循法觀に住すと雖も而かも竟に法俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の法念住と爲すと。

卷の第五十三

初分辯大乘品第十五之三

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内外俱身受心法に於て循身受心法觀に住し、熾然として精進し具さに正知を念するは世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故なるやと。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、審かに自身を觀す、行する時行するを知り、

【五〇】法念住。法は無我なりと觀ずる。

【五一】循法觀。法念住を云ふ、法に自主自在の性なきが故に無我なりと觀ずるもの。

し、是の故に名づけて無染著如虚空三摩地と爲す、善現、是の如き等の無量百千の三摩地有り、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる 四念住なり。何等をか四と爲す。謂ゆる身念住。

受念住・心念住・法念住なり。善現、身念住とは諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内身に於て 循身觀に住すと雖も而かも竟に身俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、外身に於て循身觀に住すと雖も而かも竟に身俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、内外身に於て循身觀に住すと雖も而かも竟に身俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の身念住と爲す。善現、受念住とは諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内身に於て 循受觀に住すと雖も而かも竟に受俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、外身に於て循受觀に住すと雖も而かも竟に受俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内外身に於て循受觀に住すと雖も而かも竟に受俱尋思を起さず、熾然として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の受念住と爲す。善現、心念住とは、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し内心に於て 循心觀に住すと雖も而かも竟に心俱尋思を起さず、熾念として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の心念住と爲す。善現、法念住とは、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し法に於て 循法觀に住すと雖も而かも竟に法俱尋思を起さず、熾念として精進し具さに正知を念す、世の貪憂を調伏せんと欲するが爲の故に。善現、是れを菩薩摩訶薩の法念住と爲す。

【二】 四念住身受心法の内と外と内外との十二種觀を列ぬ。
【三】 四念住。
【四】 身念住。身は不淨なりと觀する。
【五】 循身觀。身念處觀をいふ。此觀法に於て頭より足に至り次第に巡歴して三十六物皆不淨なりと觀すればかく名づく。

【六】 受念住。受(苦樂の感)は苦なりと觀する。
【七】 循受觀。受念住なり、樂は苦の因縁より生じ、又苦樂を生じ、世間に實樂なければ受は苦なりと觀す。

【八】 心念住。心(眼等の心識)は無常なりと觀する。
【九】 循心觀。心念住をいふ。心識は念々に生滅して更に常住する時無きを云ふ。

現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして功德を出生し、天福力により食を器中に涌かすが如くならしむ、是の故に名づけて器中涌出三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて燒諸煩惱三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の煩惱を燒きて遺燼無からしむ、是の故に名づけて燒諸煩惱三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて大智慧炬三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は智慧光を發し一切を照らす、是の故に名づけて大智慧炬三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて出生十力三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は佛の十力をして速に圓滿することを得せしむ、是の故に名づけて出生十力三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて開闡三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く有情の爲に法要を開闡し速に生死の大苦より解脱せしむ、是の故に名づけて開闡三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて壞身惡行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は有身を見ずと雖も而かも身惡行を息む、是の故に名づけて壞身惡行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて壞語惡行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は有聲を見ずと雖も語惡行を息む、是の故に名づけて壞語惡行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて壞意惡行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は有心を見ずと雖も而かも意惡行を息む、是の故に名づけて壞意惡行と爲すと。世尊、云何が名づけて善觀察三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の有情に於て能善く相性勝解を觀察して之を度脱す、是の故に名づけて善觀察三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて如虛空三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の有情に於て普ねく能く饒益し其の心平等なること大虛空の如し、是の故に名づけて如虛空三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無染著如虛空三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切法を觀するに都て所有無きこと、猶ほ虛空の染無く著無きが如

【四〇】燒諸煩惱三摩地。一切の煩惱を燒滅する三昧。

【四一】無染著如虛空三摩地。一切法無所得の理を觀する三昧。

此の三摩地に住する時は諸の等持の功德具足し淨滿月の諸の海水を増すが如くならしむ、是の故に名づけて滿月淨光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて大莊嚴三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして種種微妙希有の大莊嚴事を成就せしむ、是の故に名づけて大莊嚴三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無熱電光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は清淨の冷光を放つて有情類を照らし一切黑暗毒熱を息めしむ、是の故に名づけて無熱電光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて能照一切世間三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持及び一切法を照らし有情類をして咸く開曉を得せしむ、是の故に名づけて能照一切世間三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて救一切世間三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く世間種種の憂苦を救ふ、是の故に名づけて救一切世間三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて定平等性三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は等持の定散差別せるを見ず、是の故に名づけて定平等性三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無塵有塵平等理趣三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定及び一切法の有塵無塵の平等の理趣に了達す、是の故に名づけて無塵有塵平等理趣三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無諍有諍平等理趣三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法及び一切定の有諍無諍の性相差別せるを見ず、是の故に名づけて無諍有諍平等理趣三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無巢穴無標幟無愛樂三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の巢穴を破り諸の標幟を捨て諸の愛樂を斷じて執する所無し、是の故に名づけて無巢穴無標幟無愛樂三摩地と爲すやと。世尊、云何が名づけて決定安住眞如三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持及び一切法に於て常に眞如實相を棄捨せず、是の故に名づけて決定安住眞如三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて器中涌出三摩地と爲すやと。善

【三〇】 決定安住眞如三摩地。眞如實相の理を諦觀する三昧。

三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て其の相を見ず、是の故に名づけて無相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無濁忍相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切法に於て無濁忍を得、是の故に名づけて無濁忍相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて具一切妙相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定の妙相具足せざる無し、是の故に名づけて具一切妙相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて具總持三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く總て諸定の勝事を任持す、是の故に名づけて具總持三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて不意一切苦樂三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持の苦樂の相に於て觀察するを樂はず、是の故に名づけて不意一切苦樂三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無盡行相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定の行相盡くる有るを見ず、是の故に名づけて無盡行相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて攝伏一切正邪性三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の正邪邪性に於て諸見を攝伏して皆起らざらしむ、是の故に名づけて攝伏一切正邪性三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて斷憎愛三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定法に有憎有愛の相を見ず、是の故に名づけて斷憎愛三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無垢明三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て若しは明若しは垢ことく咸く皆見えず、是の故に名づけて無垢明三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて極堅固三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして不堅固無からしむ、是の故に名づけて極堅固三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて滿月淨光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し

【云】 具總持三摩地。此三昧に入れば善を持して失はず惡を持して起らしめずと云ふ。

【毛】 斷憎愛三摩地。此三昧に入れば怨憎親愛の煩惱斷滅すると云ふ。

【云】 離遠順三摩地。苦樂の境界を出離する禪定。

地法に悟入し語言を施設して恃む所無し。是の故に名づけて入一切施設語言三摩地と爲すと。世尊云何が名づけて堅固寶三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く無邊無退無壞微妙殊勝功德の珍寶を引く、是の故に名づけて堅固寶三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて一切法無所取著三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の中に於て取著する所無し、一切法離性相なるを以ての故に、是の故に名づけて一切法無所取著三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて電焰莊嚴三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は種種の光を發し諸の冥暗を照らし復た無量の功德を以て莊嚴す、是の故に名づけて電焰莊嚴三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて除遣三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は無邊の煩惱の習氣を除遣す、是の故に名づけて除遣三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて法炬三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の自相共相を照了す、是の故に名づけて法炬三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて慧燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の空無我の理を照了す、是の故に名づけて慧燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて趣向不退轉神通三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く無量不退難伏の最勝神通を引く、是の故に名づけて趣向不退轉神通三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて解脱音聲文字三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持解脱の一切の音聲文字の衆相寂靜なるを見る、是の故に名づけて解脱音聲文字三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて炬熾然三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て威德獨盛にして諸定を照了すること猶ほ燈炬の如し、是の故に名づけて炬熾然三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて嚴淨相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て其の相を嚴淨す、是の故に名づけて嚴淨相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無相

【三】 除遣三摩地。あらゆる煩惱の習氣を除くの故にかく云ふ。

【三】 法炬三摩地。此三昧に入れば諸法の自相共相を照了すること火炬の如きを云ふ。

【三】 慧燈三摩地。智慧の能く空無我の理を照了すること燈火の如きをいふ。

【三】 炬熾然三摩地。此三昧に入れば威德諸定を照了すること熾炬の如きをいふ。

【三】 無相三摩地。すべて相對的差別の相狀無しと觀する禪定。

法三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は三界法に於て皆能く超度す、是の故に名づけて超一切法三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて決判諸法三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の勝定及び一切法を見、諸の有情の爲に分死して亂る無し、是の故に名づけて決判諸法三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて散疑三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持及び一切法に於て所有疑網皆能く除散す、是の故に名づけて散疑三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無所住三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の所有住處を見ず、是の故に名づけて無所住三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて一相莊嚴三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法に而かも二相有るを見ず、是の故に名づけて一相莊嚴三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて引發行相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持及び一切法に於て能く種種の行相を引發すと雖も而かも都て能く引發する者を見ず、是の故に名づけて引發行相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて一行相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に二行相無きを見る、是の故に名づけて一行相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて離諸行相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に都て行相無きを見る、是の故に名づけて離諸行相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて妙行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして種種微妙の勝行を起すと雖も而かも執する所無からしむ、是の故に名づけて妙行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて達諸有底遠離三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持及び一切法に於て通達智を得、此の智を得已つて諸の有法に於て通達し遠離す。是の故に名づけて達諸有底遠離三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入一切施設語言三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切三摩

【元】散疑三摩地。一切の疑結を離るる定心なり。

【三〇】一行相三摩地。心を一行に定めて深く理を觀する三昧。

摩地に住する時は諸定の行中に於て見ると雖も而かも見ず、是の故に名けて具行三摩地と爲すと。
 世尊、云何が名づけて不變動三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て變動を見ず、是の故に名づけて不變動三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて度境界三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持の境界を超ゆ、是の故に名づけて度境界三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて集一切功德三摩地となすやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く諸定の所有功德を集め一切法に於て想を集むる無し、是の故に名づけて集一切功德三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無心住三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は心諸定に於て轉ずる無く墮する無し、是の故に名づけて無心住三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて決定住三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定心に於て決定して住すと雖も而かも其の相を知り了りて得可からず、是の故に名づけて決定住三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて淨妙華三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして皆清淨を得せしめ、嚴飾せる光顯るること猶ほ妙華の如し、是の故に名づけて淨妙華三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて具覺支三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切定をして七覺支に於て速に圓滿することを得せしむ、是の故に名づけて具覺支三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無邊辯三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の中に於て無邊辯を得、是の故に名づけて無邊辯三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無邊燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切法に於て皆能く照了すること猶ほ明燈の若し、是の故に名づけて無邊燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無等等三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして無等等なることを得せしむ、是の故に名づけて無等等三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて超一切

【二六】 決定住三摩地。菩薩の八、九地即ち眞實の行を得し不還不退の位に入る禪定。

【二七】 具覺支三摩地。此の三昧に入ると七覺支（涅槃に到る行道中第六の道法）を具足すとなす。

【二八】 無等等三摩地。一切衆生の無等の佛と等しきを觀ずる禪定。

に於て皆決定を得、是の故に名づけて決定三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無垢行三摩地二二と爲すと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く無邊清淨の勝行を發す、是の故に名づけて無垢行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて字平等相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持の字平等相を得、是の故に名づけて字平等三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて離文字相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て一字を得ず、是の故に名づけて離文字相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて斷所緣三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の境相を絶つ、是の故に名づけて斷所緣三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無變異三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の變異の相を得ず、是の故に名づけて無變異三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無品類三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の品類の異相を見ず、是の故に名づけて無品類三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入名相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の名相實際に悟入す、是の故に名づけて入相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無所作三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の所爲皆息まざる無し、是の故に名づけて無所作三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入決定名三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸法の決定名字に悟入して都て所有無く但だ假りに施設するのみ、是の故に名づけて入決定名三摩地と無すと。世尊、云何が名づけて無相行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定相に於て都て得る所無し。是の故に名づけて無相行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて離翳暗三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定の翳暗除遣せざる無し、是の故に名づけて離翳暗三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて具行三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三

【二二】無垢行三摩地。清淨行の三昧。

【二四】斷所緣三摩地。所緣の法たる六境の惑を斷ずる三昧。

【二五】無相行三摩地。一切の執着を離れ萬法を幻の如しと觀する無漏心の三昧。

けて妙安立三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持の妙に於て能く安立す、是の故に名づけて妙安立三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて寶積三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持を見ること皆寶聚の如し、是の故に名づけて寶積三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて妙法印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く諸の等持を印す、無印を以て印するが故に、是の故に名づけて妙法印と爲すと。世尊、云何が名づけて一切法平等性三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は法の平等性を離るる有るを見ず、是の故に名づけて一切法平等性三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて棄捨塵愛三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定法に於て塵愛を棄捨す、是の故に名づけて棄捨塵愛三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて法涌圓滿三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定法に於て塵愛を棄捨す、是の故に名づけて棄捨塵愛三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて法涌圓滿三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸佛の法をして涌現し圓滿ならしむ、是の故に名づけて法涌圓滿三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入法頂三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く永く一切法の暗を滅除し亦た諸定を超えて而かも上首と爲る、是の故に名づけて入法頂三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて寶性三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く無邊大功德の寶を出す、是の故に名づけて寶性三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて捨喧諍三摩地と爲すやと。善理、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の世間の種種の喧諍を捨つ、是の故に名づけて捨喧諍三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて飄散三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の等持の法執を飄散す、此の故に名づけて飄散三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて分別法句三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は善能く諸定の法句を分別す、是の故に名づけて分別法句三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて決定三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は法の等持

【一〇】寶積三摩地。摩尼寶珠の一切を映徹する如く、此三昧に入れば能く諸法の本際を親見するとなす。

【一一】妙法印三摩地。此三昧に入ると諸の深妙の功德智慧を得と云ふ。

【一二】寶性三摩地。寶性は如来藏の異名、此の三昧に入れば衆生の煩惱中に在りて能く眞如清淨の性を失はざればかへ名づく。

名づけて日燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定門に於て光を發して普ねく照らす、是の故に名づけて日燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて淨月三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て暗を除くこと月の如し、是の故に名づけて淨月三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて淨眼三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く五眼をして成く清淨を得せしむ、是の故に名づけて淨眼三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて淨光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て四無礙を得亦た彼の定をして皆能く發起せしむ、是の故に名づけて淨光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて月燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の有情の愚暗を除くこと月の如し。是の故に名づけて月燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて發明三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定門をして明を發して普ねく照らす、是の故に名づけて發明三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて應作不應作三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の等持の作すべからざるを知り亦た諸定をして此の如きの事を成ぜしむ、是の故に名づけて應作不應作三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて智相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の所有智相あまらを見る、是の故に名づけて智相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて金剛鬘三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の等持及び法に通達し、定及び法に於て都て見る所無し、是の故に名づけて金剛鬘三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて住心三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は心動搖せず轉ぜず照さず亦た虧損えんせず心有るを念ぜず、是の故に名づけて住心三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて普明三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定の明に於て普ねく能く照らす、是の故に名づけて普明三摩地と爲すと。世尊、云何が名づ

【七】淨眼三摩地。梵釋の諸天の淨身を一心を觀する三昧を云ふ。

【八】智相三摩地。眞實の智慧を生ずる三昧。

【九】住心三摩地。行者の道に安住する心相を觀する禪定。

す、是の故に名づけて無垢光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて妙樂三摩地と爲すやと。善現謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の等持妙樂を領受す、是の故に名づけて妙樂三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて電燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持を照らすこと電燈の焰の如し、是の故に名づけて電燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無盡三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の功徳を引きて盡く^{二六}る無く、而かも彼の盡無盡相を見ず、是の故に名づけて無盡三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて最勝幢相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は最勝幢の如く衆定相を超越ゆ、是の故に名づけて最勝幢相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて帝相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て自在相を得、是の故に名づけて帝相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて順明正流三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は明正流に於て並びに皆隨順す、是の故に名づけて順明正流三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて具爲光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持一切盡くる無きを見、而かも少法も盡不盡相有るを見ず、是の故に名づけて離盡三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて不可動轉三摩地に爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして動無く著無く退轉無く戲論無からしむ、是の故に名づけて不可動轉三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて寂靜三摩地に爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て皆寂靜を見る、是の故に名づけて寂靜三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無瑕隙三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして照らして瑕隙無からしむ、是の故に名づけて無瑕隙三摩地と爲すと。世尊、云何が

【二六】無盡三摩地。無盡の法、即ち無爲法を知る禪定。

無相住三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて不思議三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切の心及び心所を起さず、是の故に名づけて不思議三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて降伏四魔三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は四魔怨に於て皆並く降伏す、是の故に名づけて降伏四魔三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無垢燈三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は淨燈を持つが如く諸定を照了す、是の故に名づけて無垢燈三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無邊光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く大光を發し無邊際を照す、是の故に名づけて無邊光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて發光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持を照らし其れをして無間に種種殊勝の光明を引發せしむ、是の故に名づけて發光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて普照三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定門に於て皆能く普照す、是の故に名づけて普照三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて淨堅定三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の淨平等性を得、是の故に名づけて淨堅定三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて師子奮迅三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸垢に於て縱任に棄捨すること師子王の自在に奮迅するが如し、是の故に名づけて師子奮迅三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて師子嘯呻三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は勝神通を起し自在にして畏れ無く一切の暴惡の魔軍を降伏す、是の故に名づけて師子嘯呻三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて師子欠呿三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は、妙辯才を引き衆に處して畏れ無く一切の外道邪宗を摧滅す、是の故に名づけて師子欠呿三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無垢光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく能く一切の定垢を蠲除し亦た能く諸の勝等持を遍照

【三】降伏四魔三摩地。此の三昧に住して四魔を降伏する眞言を説くといふ。

【四】師子奮迅三摩地。佛此三昧に入れば大悲法界の身を奮ひ、應機の威を現じ、外道二乗を攝伏せしむること師子奮迅する時其の勢迅速勇猛なるが如きを云ふ。
【二】師子嘯呻三摩地。師子奮迅三摩地に同じ。

若し此の三摩地に住する時は諸の事業をして皆決定を得せしむること王印を獲欲する所皆成るが如し、是の故に名づけて王印三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて遍覆虚空三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て能く遍ねく覆護し簡別する所無きこと大虚空の如し、是の故に名づけて遍覆虚空三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて金剛輪三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく能く一切の勝定を住持し散壞せざらしむること金剛輪の如し、是の故に名づけて金剛輪三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて三輪清淨三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定・定者・定境に執せず、是の故に名づけて三輪清淨三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無量光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は種種の光を放つこと諸の數量に過ぐ、是の故に名づけて無量光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無著無障三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は一切法に於て執無く礙無し、是の故に名づけて無著無障三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて斷諸法轉三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く一切流轉の法を截る、是の故に名づけて斷諸法轉三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて棄捨珍寶三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の定相に於てすら尙ほ皆棄捨す、況んや諸の煩惱相を棄捨せざらんをや、是の故に名づけて棄捨珍寶三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて遍照三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は、遍ねく諸定を照らし彼れをして光顯せしむ、是の故に名づけて遍照三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて不昞三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は此の等持に於て其の心專一にして餘定餘法を取る無く求むる無し、是の故に名づけて不昞三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無相住三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は、諸定の法しほ少くも相の住す可き有るを見ず、是の故に名づけて

【一〇】金剛輪三摩地。五輪三昧の一。あらゆる煩惱に破られず、悉く之を斷滅して無學の證果を得る禪定。

【一一】三輪清淨三摩地。三輪とは布施に就いて施者と受者と施物の稱、此の三輪を減して無心に住する三昧をいふ。

【一二】無相住三摩地。諸法を幻の如しと觀じ、住著すべきなきことを觀する禪定。

能く開發す、是の故に名づけて放光三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて無忘失三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持の境界行相に於て皆能く記憶して遺す所無からしむ。是の故に名づけて無忘失三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて放光無忘失三摩地と爲すやと。善現謂ゆる若し此の三摩地に住する時は勝定光を放ちて有情類を照らし彼れをして曾て更し所の事を憶持せしむ、是の故に名づけて放光無忘失三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて精進力三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く諸定の精進勢力を發す、是の故に名づけて精進力三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて莊嚴力三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く諸定の莊嚴勢力を引く、是の故に名づけて莊嚴力三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて等涌三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の等持をして平等に涌現せしむ、是の故に名づけて等涌三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入一切言詞決定三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく一切に於て決定して言詞に皆能く悟入す、是の故に名づけて入一切言詞決定三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入一切名字決定三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく一切に於て決定して名字に皆能く悟入す、是の故に名づけて入一切名字決定三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて觀方三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時、諸定の方に於て普ねく能く觀照す、是の故に名づけて觀方三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて總持印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は總て能く諸の妙定印を住持す、是の故に名づけて總持印三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて諸法等趣海印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の勝定をして等しく皆趣入せしむること大海印の衆流を攝受するが如し、是の故に名づけて諸法等趣海印三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて王印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる

【九】精進力三摩地。精進根を増長せしめて能く身の懈怠を破する三昧。

する時は淨滿月の如く普ねく諸定を照らす。是の故に名づけて妙月三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて月幢相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は、普ねく能く一切の定相を執持すること淨滿月の妙光幢を垂るるが如し。是の故に名づけて月幢相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて一切法涌三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく能く諸の三摩地を涌出すること大泉池の衆の水を涌出するが如し。是の故に名づけて一切法涌三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて觀頂三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く一切の三摩地の頂を觀す、是の故に名づけて觀頂三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて法界決定三摩地と爲やと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は決定して一切法界を照了す、是の故に名づけて法界決定三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて決定幢相三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く決定して諸定の幢相を持す、是の故に名づけて決定幢相三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて金剛喻三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く諸定を推くも彼れの伏する所に非ず、是の故に名づけて金剛喻三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて入法印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は普ねく能く一切の法印に證入す、是の故に名づけて入法印三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて三摩地王三摩地と爲すと、善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定を統攝すること王の自在なるが如し、是の故に名づけて三摩地王三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて善安住三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸の功德を持つて傾動せざらしむ、是の故に名づけて善安住三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて善立定王三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定の王に於て善能く建立す、是の故に名づけて善立定王三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて放光三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は諸定に於て光普ねく

【六】觀頂三摩地。此の三昧に入ると、宛も山頂にて衆物を見渡す如く諸の三昧を見得るとなす。

【七】金剛喻三摩地。堅固銳利の體用を以て一切の煩惱を斷じ得る三昧。

【八】放光三摩地。意に隨ひて種種の色光を放ち、衆生樂ふ所に隨つて若くは熱、若くは冷、若くは不熱不淨なりとす。

入決定名三摩地・無相行三摩地・離翳暗三摩地・具行三摩地・不變動三摩地・度境界三摩地・集一切功德三摩地・無心住三摩地・決定住三摩地・淨妙華三摩地・具覺支三摩地・無邊辯三摩地・無邊燈三摩地・無等等三摩地・超一切法三摩地・決判諸法三摩地・散疑三摩地・無所住三摩地・一相莊嚴三摩地・引發行相三摩地・一行相三摩地・離諸行相三摩地・妙行三摩地・達諸有底遠離三摩地・入一切施設語言三摩地・堅固寶三摩地・於一切法無所取著三摩地・電焰莊嚴三摩地・除遣三摩地・無勝三摩地・法炬三摩地・慧燈三摩地・趣向不退轉神通三摩地・解脫音聲文字三摩地・炬熾然三摩地・嚴淨相三摩地・無相三摩地・無濁忍相三摩地・具一切妙相三摩地・具總持三摩地・不惹一切苦樂三摩地・無盡行相三摩地・攝伏一切正邪性三摩地・斷憎愛三摩地・離違順三摩地・無垢明三摩地・極堅固三摩地・滿月淨光三摩地・大莊嚴三摩地・無熱電光三摩地・能照一切世間三摩地・能救一切世間三摩地・定平等性三摩地・無塵有塵平等理趣三摩地・無諍有諍平等理趣三摩地・無巢穴無標幟無愛樂三摩地・決定安住真如三摩地・器中涌出三摩地・燒諸煩惱三摩地・大智慧炬三摩地・出生十力三摩地・開闢三摩地・壞身惡行三摩地・壞語惡行三摩地・壞意惡行三摩地・善觀察三摩地・如虛空三摩地・無染著如虛空三摩地なり。是の如き等の三摩地無量百千有り、是れ菩薩摩訶薩の大乗相なり。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が名づけて、健行三摩地と爲すやと。佛言はく、善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く一切の三摩地境を受け、能く無邊殊勝の健行を辦し、能く一切等持の導首爲り。是の故に名づけて健行三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて、寶印三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住する時は能く一切の三摩地境及び定行相所作の事業を印す。是の故に名づけて寶印三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて、師子遊戲三摩地と爲すやと。善現、若し此の三摩地に住する時は諸の等持に於て遊戲自在なり。是の故に名づけて師子遊戲三摩地と爲すと。世尊、云何が名づけて妙月三摩地と爲すやと。善現、謂ゆる若し此の三摩地に住

【二】以下百八三昧を釋す。

【三】健行三摩地。首楞嚴三昧をいふ。佛徳の堅固なる、諸魔の能く壞するなきを云ふ。

【四】寶印三摩地。法の實相を觀じ、又諸法無我、諸行無常、涅槃寂滅の三法印に入るを云ふ。

【五】師子遊戲三摩地。師子とは、師子即ち佛なり。佛此三昧に入る時、此大地を六種に震動せしめ、一切の地獄惡道の衆生をして皆解脫を蒙り、天上に生ずるを得しむと云ふ。

一切法の法住・法定・法性・法界・法の平等性・法の離生性・眞如・不虛妄性・不變異性・實際、皆他性に由るが故に空なり。是れを他性は他性空に由ると爲す。善現、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

卷の第五十二

初分辯大乘品第十五之二

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる健行三摩地・寶印三摩地・師子遊戲三摩地・妙月三摩地・月幢相三摩地・一切法涌三摩地・觀頂三摩地・法界決定三摩地・決定幢相三摩地・金剛喻三摩地・入法印三摩地・三摩地王三摩地・善安住三摩地・善立定王三摩地・放光三摩地・無忘失三摩地・放光無忘失三摩地・精進力三摩地・莊嚴力三摩地・等涌三摩地・入一切言詞決定三摩地・入一切名字決定三摩地・觀方三摩地・總持印三摩地・諸法等趣海印三摩地・王印三摩地・遍覆虛空三摩地・金剛輪三摩地・三輪清淨三摩地・無量光三摩地・無著無障三摩地・斷諸法轉三摩地・棄捨珍寶三摩地・遍照三摩地・不詢三摩地・無相住三摩地・不思惟三摩地・降伏四魔三摩地・無垢燈三摩地・無邊光三摩地・發光三摩地・普照三摩地・淨堅定三摩地・師子奮迅三摩地・師子頻申三摩地・師法缺呿三摩地・無垢光三摩地・妙樂三摩地・電燈三摩地・無盡三摩地・最勝幢相三摩地・帝相三摩地・順明正流三摩地・具威光三摩地・離盡三摩地・不可動轉三摩地・寂靜三摩地・無瓊隙三摩地・日燈三摩地・淨月三摩地・淨眼三摩地・淨光三摩地・月燈三摩地・發明三摩地・應作不應作三摩地・智相三摩地・金剛鬘三摩地・住心三摩地・普明三摩地・妙安立三摩地・寶積三摩地・妙法印三摩地・一切法平等性三摩地・棄捨塵愛三摩地・法涌圓滿三摩地・入法頂三摩地・寶性三摩地・捨喧譁三摩地・飄散三摩地・分別法句三摩地・決定三摩地・無垢行三摩地・字平等相三摩地・離文字相三摩地・斷所緣三摩地・無變異三摩地・無品類三摩地・入名相三摩地・無所作三摩地。

【三】法住等。法住乃至實際は何れも法性の異名。

【一】諸三昧即ち禪波羅蜜と大乗なるを説く。

處・十八界、若しは有色無色・有見無見、有對無對、有漏無漏、有爲無爲の法なり。此の一切法は一切法空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを一切法空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が不可得空なると。佛言はく、善現、不可得とは謂ゆる此の中一切法不可得なり。若しは過去の不可得、未來の不可得、現在の不可得、若しは過去に未來現在に得可き無く、若しは未來に過去現在に得可き無く、若しは現在に過去未來の得可き無し。此の不可得は不可得空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを不可得空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が無性空なると。佛言はく、善現、無性とは謂ゆる此の中少しも性の得可き無し。此の無性は無性空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを無性空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が自性空なると。佛言はく、善現、自性とは謂ゆる諸法の能く自性を和合せるなり。此の自性は自性空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを自性空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が無性自性空なると。佛言はく、善現、無性自性とは謂ゆる諸法は能和合性無く、所和合の自性有り。此の無性自性は無性自性空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを無性自性空と爲すと。復た次に善現、有性は有性空に由り、無性は無性空に由り、自性は自性空に由り、他性は他性空に由る。云何が有性は有性空に由るや。有性とは謂ゆる五蘊なり。此の有性は有性空に由る。五蘊の生性不可得なるが故に。是れを有性は有性空に由ると爲す。云何が無性は無性空に由るや。無性とは謂ゆる無爲なり。此の無性は無性空に由る。是れを無性は無性空に由ると爲す。云何が自性は自性空に由るや。謂ゆる一切法は皆自性空なり。此の空は智の所作に非ず、見の所作に非ず、亦た餘の所作に非ず。是れを自性は自性空に由ると爲す。云何が他性は他性空に由るや。謂ゆる若しは佛世に出で、若しは出でざるも

【七】不可得空。十八空の一、諸法の空無にして所得の實體なきを云ふ。

【八】無性空。十八空の一、性は體なり。一切諸法に實體なきを云ふ。

【九】自性空。十八空の一、萬有の體性空寂なるを云ふ。

【一〇】無性自性空。十八空の一、無性と自性と俱に空なるを云ふ。

【一一】有性。出離解脫の性あるものを云ふ。

【一二】無性。佛性なきを云ふ、即ち闡提の稱。

に。善現、是れを畢竟空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 無際空^二なると。佛言はく、善現、無際とは謂ゆる初中後際の得可き無く及び往來際の得可き無し。此の無際は無際空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを無際空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 散空^三なると。佛言はく、善現、散とは謂ゆる放有り棄有り捨有り得可し。此の散は散空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを散空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が無變異空^四なると。佛言はく、善現、無變異とは謂ゆる放無く棄無く捨無くして得可し。此の無變異は無變異空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを無變異空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 本性空^五なると。佛言はく、善現、本性とは謂ゆる一切法の本性、若しは有爲法性、若しは無爲法性なり。皆聲聞の所作に非ず獨覺の所作に非ず菩薩の所作に非ず如來の所作に非ず亦た餘の所作に非ず。此の本性は本性空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを本性空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 自相空^六なると。佛言はく、善現、自相とは謂ゆる一切法の自相なり。變礙は是れ色の自相、領納は是れ受の自相、取像は是れ想の自相、造作は是れ行の自相、了別は是れ識の自相なるが如く、是の如き等の若しは有爲法の自相、若しは無爲法の自相、此の自相は自相空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを自相空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 共相空^七なると。佛言はく、善現、共相とは謂ゆる一切法の共相なり。苦は是れ有漏法の共相、無常は是れ有爲法の共相、空無我は是れ一切法の共相なるが如く、是の如き等の無量の共相有り。此の共相は共相空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを共相空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が 一切法空^八なると。佛言はく、善現、一切法とは謂ゆる五蘊・十二

【二】無際空。十八空の一、世間一切の法は無際、諸法皆空にして無際の相また不可得なるを云ふ。

【三】散空。十八空の一、散とは相を別離するの義、諸法和合の故に有なるも離散すれば空なるを云ふ。

【四】本性空。十八空の一、一切諸法は因縁所生で實性なきを云ふ。

【五】自相空。十八空の一、總別二相共に空なるをいふ。

【六】一切法空。十八空の一、有爲無爲、不可説の一切諸法空寂なるを云ふ。

非ず壞に非ず本性爾るが故に。聲香味觸法は聲香味觸法空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを外空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が内外空なると。佛言はく、善現、内外とは謂ゆる内外法即ち是れ内六處・外六處なり。此の中内六處は外六處空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。外六處は内六處空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを内外空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が空空なると。佛言はく、善現、空とは謂ゆる一切法空なり。此の空は空空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを空空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が太空なると。佛言はく、善現、大とは謂ゆる十方即ち是れ東南西北四維上下なり。此の中東方は東方空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。南西北方四維上下は南西北方四維上下空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを大空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が勝義空なると。佛言はく、善現、勝義とは謂ゆる涅槃なり。此の勝義は勝義空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを勝義空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が有爲空なると。佛言はく、善現、有爲とは謂ゆる欲界・色界・無色界なり。此の中欲界は欲界空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。色無色界は色無色界空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを有爲空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が無爲空なると。佛言はく、善現、無爲とは謂ゆる生無く住無く異無く滅無し。此の無爲は無爲空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず、本性爾るが故に。善現、是れを無爲空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が畢竟空なると。佛言はく、善現、畢竟とは謂ゆる諸法の究竟不可得なり。此の畢竟は畢竟空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故

【五】内外空。十八空の一、内の六根及外の六塵を觀するに我我所なきを云ふ。

【六】空空。十八空の一、主觀も客觀も空、しかも空なりとするその空も亦本來空なるを云ひ、何ら執着すべきなしとする空觀。

【七】大空。十八空の一、東西南北等の方位の實體無きを云ふ。

【八】勝義空。十八空の一、勝義は涅槃の義、涅槃の空性を云ふ。

【九】有爲空。十八空の一、有爲の諸法は因縁の假和合にて自性なきを云ふ。

【一〇】無爲空。十八空の一、一切無爲法の不可得なるを云ふ。

【一一】畢竟空。十八空の一、一切の有爲法も無爲法も畢竟して空なるを云ふ。

言はく善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら六波羅蜜多に於て勤修して息まず、亦た他に六波羅蜜多に於て修し息まざるを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば善現、是れを菩薩摩訶薩の精進波羅蜜多と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多なると。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら能く巧みに便ち諸の靜慮・無量・無色に入り、終に彼の勢力に隨つて生を受けず、亦た能く他に諸の靜慮・無量・無色に入り已れの善巧に同ずるを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば善現、是れを菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多なると。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら能く如實に一切の法性を觀じ、諸法の性に於て執著する所無く、亦た他に如實に一切の法性を觀じ、諸法の性に於て執著する所無きを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば善現、是れを菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多と爲すと。善現、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩の大乗相と爲すと。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗相とは謂ゆる内空乃至無性自性空、是れ菩薩摩訶薩の大乗相なりと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が内空^三なると。佛言はく、善現、内とは謂ゆる内法即ち是れ眼耳鼻舌身意なり。此の中眼は眼空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性^四爾るが故に。耳鼻舌身意は耳鼻舌身意空に由る。何を以ての故に、常に非ず壞に非ず本性爾るが故に。善現、是れを内空と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が外空^四なると。佛言はく、善現、外とは謂ゆる外法即ち是れ色聲香味觸法なり。此の中色は色空に由る。何を以ての故に、常に

【二】十八空の大乗たるを明す。

【三】内空。十八空の一、内の六根に於て神我無きを云ふ。

【四】外空。十八空の一、身外の諸物悉く實體不可得なるを云ふ。

初分辯大乘品第十五之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が當に菩薩摩訶薩の大乗相を知るべき。云何が當に菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと知るべき。是の如き大乘は何の處より出で、何の處に至りて住するや、是の如き大乘は何の爲に住する所なる。誰れか復た是の大乗に乗りて出づるやと。佛、善現に告げたまはく、汝の間ふ云何が當に菩薩摩訶薩の大乗相を知るべきやとは謂ゆる六波羅蜜多は是れ菩薩摩訶薩の大乗相なり。謂ゆる布施波羅蜜多^多、乃至般若波羅蜜多なりと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の布施波羅蜜多なると。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら一切内外の所有を施し、亦た他に内外の所有を施すを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、善現、是れを菩薩摩訶薩の淨戒波羅蜜多と爲す。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の淨戒波羅蜜多なると。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら十善業道に住し、亦た他に十善業道に住するを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、善現、是れを菩薩摩訶薩の淨戒波羅蜜多と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の安忍波羅蜜多なると。佛言はく、善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を發し、大悲を上首と爲し、無所得を以て方便と爲し、自ら具さに安忍を増長し、亦た他に具さに安忍を増上するを勧め、此の善根を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、善現、是れを菩薩摩訶薩の安忍波羅蜜多と爲すと。善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の精進波羅蜜多なると。佛

【一】間を擧げて先づ六度と
れ大乘なるを辨ず。

應に住すべし、乃至應に無縛無解の一切相智に住すべし。無所得を以て方便と爲し、應に無縛無解の有情を成熟すべし、應に無縛無解の佛土を嚴淨すべし、應に無縛無解の諸佛に親近し供養すべし、應に無縛無解の法門を聽受すべし。滿慈子、是の菩薩摩訶薩は常に無縛無解の諸佛世尊に遠離せず、常に無縛無解清淨の五眼を遠離せず、常に無縛無解殊勝の六神通を遠離せず、常に無縛無解の陀羅尼門を遠離せず、常に無縛無解の三摩地門を遠離せず。滿慈子、是の菩薩摩訶薩は常に無縛無解の道相智を生ずべし、常に無縛無解の一切智、一切相智を證すべし。常に無縛無解の法輪を轉ずべし。常に無縛無解の三乘法を以て無縛無解の諸の有情を安立すべし。滿慈子、若し菩薩摩訶薩、無縛無解の六波羅蜜多を修行せば能く無縛無解を證す。一切法無所有の故に、遠離の故に、寂靜の故に、空の故に、無相の故に、無願の故に、無生の故に、無滅の故に、無染の故に、無淨の故に、縛無く解無し。滿慈子、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は無縛無解の大乗の鎧を擯る者と名づくべし。

【七】 陀羅尼門。總持、能持、能遮などと譯す、能く善法を保持して散せしめず、惡法を保持して起らしめざる力用。

【八】 三摩地門。定、等持、正受などと意譯す、心を一境に安住せしめて散亂せしめざる心的狀態。

【九】 三乘法。乘とは運載の義にて教法の意、その三とは聲聞乘（四諦の法）、緣覺乘（十二因緣の法）、菩薩乘（六度の法）を云ふ。

受想行識性乃至出世間の受想行識性は寂靜の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は空の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は空の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無相の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識は無相の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無願の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は無願の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無生の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は無生の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無滅の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識は無滅の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無染の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識は無染の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は無淨の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識は無淨の故に縛無く解無ければなり。

滿慈子、是の如く色受想行識は縛無く解無し。當に知るべし、是の如く眼處乃至意處、色處乃至法處眼界色界眼識界及び眼觸眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受、乃至意界法界意識界及び意觸意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受・地界乃至識界・苦聖諦乃至道聖諦・無明乃至老死愁歎苦憂惱・內空乃至無自性空・四靜慮乃至四無色定・四念住乃至八聖道支・空解脫門乃至無願解脫門・布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多・五眼六神通・佛の十力乃至一切相智・眞如乃至無爲・菩提薩埵・菩薩摩訶薩・無上正等菩提・無上正等覺者の一切法の其の應する所に隨つて縛無く解無きも亦復た是の如しと。滿慈子、諸の菩薩摩訶薩、是の如き無縛無解の法門に於て無所得を以て方便と爲し應に實の如く知るべし。是の如き無縛無解の四靜慮乃至四無色定、四念住乃至八聖道支、空乃至無願解脫門、布施乃至般若波羅蜜多、五眼六神通、佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智に於て無所得を以て方便と爲し、應に勤めて修學すべしと。滿慈子、諸の菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して應に無縛無解の四靜

【六】無生。一切法性は眞實空にして他によりて生ずるものに非ず又己の力にてのみ生ずるものにもあらざること。

善不善無記の色性は遠離の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は遠離の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は寂靜の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は寂靜の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は空の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は空の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無相の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無相の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無願の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無願の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無生の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無生の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無滅の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無滅の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無染の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無染の故に縛無く解無し。善不善無記の色性は無淨の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性は無淨の故に縛無く解無ければなり。

滿慈子、有染の色は縛無く解無く、有染の受想行識は縛無く解無し。無染の色は縛無く解無く、無染の受想行識は縛無く解無し。有罪の色は縛無く解無く、有罪の受想行識は縛無く解無し。無罪の色は縛無く解無く、無罪の受想行識は縛無く解無し。有漏の色は縛無く解無く、有漏の受想行識は縛無く解無し。無漏の色は縛無く解無く、無漏の受想行識は縛無く解無し。雜染の色は縛無く解無く、雜染の受想行識は縛無く解無し。清淨の色は縛無く解無く、清淨の受想行識は縛無く解無し。世間の色は縛無く解無く、世間の受想行識は縛無く解無し。出世間の色は縛無く解無く、出世間の受想行識は縛無く解無し。何を以ての故に、滿慈子、有染の色性乃至出世間の色性は無所有の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は無所有の故に縛無く解無し。清淨の色は縛無く解無く、清淨の受想行識は縛無く解無し。雜染の色は縛無く解無く、雜染の受想行識は縛無く解無し。有漏の色は縛無く解無く、有漏の受想行識は縛無く解無し。無漏の色は縛無く解無く、無漏の受想行識は縛無く解無し。世間の色は縛無く解無く、世間の受想行識は縛無く解無し。出世間の色は縛無く解無く、出世間の受想行識は縛無く解無し。何を以ての故に、滿慈子、有染の色性乃至出世間の色性は無所有の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は無所有の故に縛無く解無し。

有染の色性乃至出世間の色性は遠離の故に縛無く解無く、有染の受想行識性乃至出世間の受想行識性は遠離の故に縛無く解無し。有染の色性乃至出世間の色性は寂靜の故に縛無く解無く、有染の

【四】 雜染。一切有漏法の總名。

【五】 有染。有漏の異名。

故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無染の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無淨の故に縛無く解無く。幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無淨の故に縛無く解無し。

滿慈子、過去の色は縛無く解無く、過去の受想行識は縛無く解無し。未來の色は縛無く解無く、未來の受想行識は縛無く解無し。現在の色は縛無く解無く、現在の受想行識は縛無く解無し。何を以ての故に、滿慈子、過去未來現在の色性は無所有の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無所有の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は遠離の故に縛無く解無し、過去未來現在の受想行識性は遠離の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は寂靜の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は寂靜の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は空の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は空の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無相の故に縛無く解無く。過去未來現在の受想行識性は無相の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無願の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無願の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無生の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無生の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無滅の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無滅の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無染の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無染の故に縛無く解無し。過去未來現在の色性は無淨の故に縛無く解無く、過去未來現在の受想行識性は無淨の故に縛無く解無ければなり。滿慈子、善色は縛無く解無く、善受想行識は縛無く解無し。不善色は縛無く解無く、不善受想行識は縛無く解無し。無記色は縛無く解無く、無記受想行識は縛無く解無し。何を以ての故に、滿慈子、善不善無記の色性は無所有の故に縛無く解無く、善不善無記の受想行識性無所有の故に縛無く解無し。

と説く耶と。善現答へて言はく、是の如し是の如しと。滿慈子言はく、何等の色縛無く解無く、何等の受想行識等縛無く解無きやと。善現答へて言はく、幻の如き色は縛無く解無く、幻の如き受想行識は縛無く解無し。夢の如き色は縛無く解無く、夢の如き受想行識は縛無く解無し。像の如き色は縛無く解無く、響の如き色は縛無く解無く、響の如き受想行識は縛無く解無し。光影の如き色は縛無く解無く、光影の如き受想行識は縛無く解無し。空花の如き色は縛無く解無く、空花の如き受想行識は縛無く解無し。陽焰の如き色は縛無く解無し、陽焰の如き受想行識は縛無く解無し。尋香城の如き色は縛無く解無く、尋香城の如き受想行識は縛無く解無し。變化事の如き色は縛無く解無く、變化事の如き受想行識は縛無く解無し。何を以ての故に、滿慈子、幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無所有の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無所有の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は遠離の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き色性は遠離の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は寂靜の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は空の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は空の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無相の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無相の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無願の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無願の故に縛無く解無く、幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無生の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無生の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無滅の故に縛無く解無く、幻の如き受想行識性乃至變化事の如き受想行識性は無滅の故に縛無く解無し。幻の如き色性乃至變化事の如き色性は無染の

【一】空花。眼華ともいひ、虚空に花あるが如く見る一種の幻影、錯覺。妄心所計の諸相實體無きに譬ふ。

【二】陽焰。塵埃又は陽光などといひ、かげらふのこと。因縁所生の諸法に自性なきに譬ふ。

【三】尋香城。乾闥婆城の譯、爰氣樓のこと。物の幻有實無に譬ふ。

解無し。色性無願の故に縛無く解無く、受想行識性無願の故に縛無く解無し。色性無生の故に縛無く解無く、受想行識性無生の故に縛無く解無し。色性無滅の故に縛無く解無く、受想行識性無滅の故に縛無く解無し。色性無染の故に縛無く解無く、受想行識性無染の故に縛無く解無し。色性無淨の故に縛無く解無く、受想行識性無淨の故に縛無く解無ければなり。

(c)眼處乃至意處。(c)色處乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)眼界乃至諸受。

(c)地界乃至識界。(c)苦聖諦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)內空乃至無性自性空。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)四念住乃至八聖道支。(c)空解脫門乃至無願解脫門。

卷の第五十一

初分大乘鎧品第十四之三

(c)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)五眼・六神通。(c)佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。(c)眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・法定・法住・平等性・離生性・實際。(c)菩提。(c)薩埵。(c)菩薩摩訶薩。(c)無上正等菩提。(c)無上正等覺者。世尊、要を以て之を言はゞ一切法皆縛無く解無し。何を以ての故に、世尊、一切法性無所有の故に縛無く解無し、一切法性遠離の故に縛無く解無し。一切法性寂靜の故に縛無く解無し。一切法性空の故に縛無く解無し。一切法性無相の故に縛無く解無し。一切法性無願の故に縛無く解無し。一切法性無生の故に縛無く解無し。一切法性無滅の故に縛無く解無し。一切法性無染の故に縛無く解無し。一切法性無淨の故に縛無く解無ければなりと。

時に滿慈子、善現に問ふて言はく、尊者、色は縛無く解無しと説き、受想行識等は縛無く解無し

(c) 前卷の符號と同意に用ふ。

有情も亦た造無く作無し。所以は何ん、善現、我は造に非ず、不造に非ず、作に非ず、不作に非ずればなり。何を以ての故に、我は畢竟不可得なるが故に。有情、命著・生者・養者・士夫・禪修伽羅・意生・僞童・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者に造に非ず、不造に非ず、作に非ず、不作に非ず、何を以ての故に、有情乃至見者は畢竟不可得なるが故に。(b)善現、幻事は造に非ず、不造に非ず、作に非ず、何を以ての故に、何を以ての故に、幻事は畢竟不可得なるが故に。夢境・像・響・光影・空花・陽焰・尋香城、變化事は造に非ず、不造に非ず、作に非ず、何を以ての故に、夢境乃至變化事は畢竟不可得なるが故に。(a)色乃至識。(b)眼乃至意處。(c)色處乃至法處。故に、夢境乃至變化事は畢竟不可得なるが故に。(a)色乃至識。(b)眼乃至意處。(c)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)眼界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)眼界乃至諸受。乃至諸受。(b)地界乃至識界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)內空乃至無性自性空。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(b)眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定・法住・實際。(b)善喜薩、如來應正等覺。善現、是の因縁に由り一切智智は造無く作無し、一切有情も亦た造無く作無し。菩薩摩訶薩は是の事の爲の故に大乘の鏡を擧るなり。善現、此の義に由るが故に、菩薩摩訶薩、功德の鏡を擧ざるを、當に知るべし、是れを大乘の鏡を擧ると爲すと。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、(a)世尊、我れ佛の所説の義を解する如くんば色は縛無く解無し、受想行識に縛無く解無し。何を以ての故に。世尊、色性無所有の故に縛無く解無く、受想・行・識性無所有の故に縛無く解無し。色性遠離の故に縛無く解無く、受想行識性遠離の故に縛無く解無し。色性寂靜の故に縛無く解無く、受想行識性寂靜の故に縛無く解無し。色性空の故に縛無く解無く、受想行識性空の故に縛無く解無し。色性無相の故に縛無く解無く、受想行識性無相の故に縛無く

【三】命者。十六神我(知見)の。五陰法中に於て我の命根ありて連續して絶えずと妄計するもの。

【四】僞童。磨納縛迦(Muni)の譯。童子の地持。

【五】起者。十六神我の一。我見を有する人は自能く罪福を起すと妄計するもの。

【六】善現幻事非造非不造……夢境乃至變化不可得故……右の文を符號(b)にて略し以下は只だ異なる諸法のみを出す何者その諸法を「幻事乃至變化事」のある所に代入せば全文悉く等しきが故に。

【六】無縛無脫を説く。(c)「世尊、如我解佛所説義」の「如我解佛所説義」を除き、「世尊色無縛無解……受想行識性無淨故無縛無解」とし上文を符號(c)にて略し以下諸法の異なるもののみを出す何者「色乃至識」のある所にその諸法を代入せば全文悉く等しきが故に。

量無數無邊の有情を六波羅蜜多に安立し、乃至無量無數無邊の有情を無上菩提に安立するも亦復た是の如し、爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

卷の第五十

初分大乘鎧品第十四之二

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、我れ佛の所説の義を解する如くんば、菩薩摩訶薩、功德の鎧を擽ざるを當に知るべし是れを大乘の鎧を擽ると爲す。何を以ての故に、一切法の自相空なるを以ての故に。所以は何ん。世尊、(a)色の色相空、受想行識の受想行識相空なればなり。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)意界乃至諸受。(a)地界乃至識界。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)内容乃至無性自性空。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)五眼・六神道。(a)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(a)菩薩、擽功德鎧。世尊、此の因縁に由り菩薩摩訶薩、功德の鎧を擽ざるを當に知るべし是れを大乘の鎧を擽ると爲すと。佛、善現に告げたまはく、是の如し、是の如し、汝が所説の如し。

善現、當に知るべし、一切相智は造無く作無し。一切有情も亦た造無く作無し。菩薩摩訶薩、是の事の爲の故に大乘の鎧を擽るなりと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何の因縁の故に、一切相智は造無く作無く、一切有情も亦た造無く作無く、菩薩摩訶薩、是の事の爲の故に大乘の鎧を擽るやと。佛言はく、善現、諸の作者不可得なるに由るが故に、一切相智は造無く作無し、一切

【一】 空の故に功德の鎧を擽ざるを大乘の鎧を擽るとなすを明す。

(a) 「色相空………受想行識相空」

右の文を符號(a)にて略し以下諸法の異なるもののみを出す何者その諸法を右の文中の「色乃至識」のある所に相應して代入せば皆等しきが故に。

【二】 作者。十六神我の一。外道に神我を立つるもの我を以て作者とす、我を以て能く手足等を用ひて衆事を作すの故に名づく。

或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に種種の諸の有清類を作り、而かも彼の巧みなる幻もて自ら六波羅蜜多に安住せるを現じ、亦た幻する所の有情に勸め、是れをして安住せしむるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不たり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、善ねく十方各刹伽沙等の如き諸佛世界に於て、自ら其の身を現じ類に隨つて六波羅蜜多に安住し、亦た有情に勸め其れをして安住せしめ、乃至無上菩提を證得するまで常に捨離せざるも亦復た是の如し、爲す所有りと雖も而も一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、上に説けるが如き諸の功德の鎧を擧、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、一切有情を利益安樂して、聲聞獨覺の作意を離へず。謂ゆる(d)是の念を作さず、我れ當に爾所の有情を布施波羅蜜多に安立すべし。爾所の有情當に安立すべからずと。但だ是の念を作すのみ、我れ當無量無數無邊の有情を布施波羅蜜多に安立すべしと。是の念を作さず、我れ當に爾所の有情を淨戒乃至般若波羅蜜多に安立すべし、爾所の有情當に安立すべからずと。但だ是の念を作すのみ。我れ當に無量無數無邊の有情を淨戒乃至般若波羅蜜多に安立すべしと。(d)内空乃至無性自性空。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(d)預流果・一來・不還・阿羅漢果・獨覺菩提。(d)無上菩提。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擧ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に無量無數無邊の有情を作り、六波羅蜜多に安立し乃至無上菩提に安立するが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不たり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と無し、無

【九】一切平等の度生が大莊嚴たるを明す。

(d)「不作是念我當安立爾所有情於布施波羅蜜多爾所有情不當安立但作是念……我當安立無量無數無邊有情於淨戒乃至般若波羅蜜多」右の文を符號(d)にて略し以下は只だ諸法の異なるもののみを出す。但しその諸法は「布施乃至般若波羅蜜多」のある所に相應して代入すべきものとす。

嗚那庖多の有情に勸めて般若波羅蜜多に住せしむるや。善現、若し菩薩摩訶薩、自ら無戲論般若波羅蜜多に住し、諸法の生有り滅有り、染有り淨有るを見ず、及び此岸、彼岸の差別を得ず、亦た無量百千俱胝那庖多の有情に、是の如き無戲論慧に安住するを勸め、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を證得するに至るまで是の如き慧に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に種種の諸の有情類を作り、而かも彼の巧なる幻もて自ら無戲論慧に安住せるを現じ、亦た幻する所に勸め其れをして是の如き般若を修習せしむるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、自ら無戲論般若波羅蜜多に住し、亦た有情に是の如き無戲論慧を修習するを勸めて常に捨離せざるも亦復た是の如し、爲す所有りと雖も而も一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、上に説けるが如き諸の功德の鎧を擯、普ねく十方各殊伽沙等の如き諸佛世界に於て神通力を以て自ら其の身を變じて是の如き諸佛世界に遍滿し、諸の有情の樂ふ所に隨つて示現し、自ら布施波羅蜜多に住して慳貪者に勸めて布施に住せしめ、自ら淨戒波羅蜜多に住して犯戒者に勸めて淨戒に住せしめ、自ら安忍波羅蜜多に住して暴惡者に勸めて安忍に住せしめ、自ら精進波羅蜜多に住して懈怠者に勸めて精進に住せしめ、自ら靜慮波羅蜜多に住して亂心者に勸めて靜慮に住せしめ、自ら般若波羅蜜多に住して愚癡者に勸めて妙慧に住せしむ。是の如く菩薩摩訶薩、有情を六波羅蜜多に安立し已つて復た其の類音に隨つて爲に六波羅蜜多相應の法を説き、彼れをして聞き已つて乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得するまで六波羅蜜多相應の法に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲す。善現、巧みなる幻師、

【八】十方衆生通じて六度を
行ふを明す。

なる幻もて自ら熾然たる身心の精進を現じ、亦た幻する所に勸めて是の如き熾然たる精進を修せしむるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て身心精進して諸の悪法を斷じ諸の善法を修し、亦た有情に是の如き身心の精進を修習するを勸め常に捨離せざるも亦復是の如し、爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、自ら靜慮波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那由多の有情に勸めて靜慮波羅蜜多に住せしむ。善現、云何が菩薩摩訶薩、自ら靜慮波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那由多の有情に勸めて靜慮波羅蜜多に住せしむるや。善現、若し菩薩摩訶薩、一切法に於て平等定に住し、諸法の定有りて亂有るを見ず、而かも常に是の如き靜慮波羅蜜多を修習し、亦た無量百千俱胝那由多の有情に是の如き平等靜慮を修習するを勸め乃ち阿耨多羅三藐三菩提を證得するに至るまで是の如き定に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大衆の衆を攝ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在り、幻に種種の諸の有情類を作り、而かも彼の巧みなる幻もて自ら法に於て平等定に住するを現じ、亦た幻する所に勸めて是の如き平等靜慮を修せしむるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、一切法に於て平等定に住し亦た有情に是の如き平等靜慮を修習するを勸め常に捨離せざるも亦復た是の如し、爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、自ら般若波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那由多の有情に勸めて般若波羅蜜多に住せしむ。善現、云何が菩薩摩訶薩、自ら般若波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱

【七】 平等定。等持に同じ、平等に心性を保持するの意。

安忍波羅蜜多に住せしむ。善現、云何が菩薩摩訶薩、自ら安忍波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那庾多の有情に勸めて安忍波羅蜜多に住せしむるや。善現、若し菩薩摩訶薩、初發心より乃ち一切智智を證得するに至るまで安忍の鎧を擧、常に自ら念言すらく、假使ひ一切有情刀杖塊を持ち來りて害を加ふを見るも我が終に一念の忿心をも起さじ、諸の有情にも亦た是の如き忍を勧めんと。

善現、是の菩薩摩訶薩、心の所念の如く境觸違ふ無く、諸の有情に是の如き忍に住するを勧め乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得するまで、是の如き忍に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擧ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に種種の諸の有情類を作り、各各刀杖塊を執持し、幻師或は彼の弟子に害を加ふ。時に幻師等幻の有情に於て都て心に怨報を爲さんと欲するを起さず而かも彼れに是の如き安忍に住するを勸むるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りとなすや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、安忍の鎧を擧、自ら安忍波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那庾多の有情に勸めて安忍波羅蜜多に住せしめ、常に捨離せざるも亦復た是の如し。爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、自ら精進波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那庾多の有情に勸めて精進波羅蜜多に住せしむ。善現、云何が菩薩摩訶薩、自ら精進波羅蜜多に住し、亦た無量百千俱胝那庾多の有情に勸めて精進波羅蜜多に住せしむるや。善現、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て身心精進して諸の惡法を斷じ、諸の善法を修し、亦た無量百千俱胝那庾多の有情に是の如き身心の精進を修習するを勧め、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を證得するに至るまで是の如き精進に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擧ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に種種の諸の有情類を作り、而かも彼の巧み

一不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多に安住し或は世界を化する
こと吠琉璃の如く、或は自身を化して輪王等と爲し、有情類の須つ所に隨つて施與し、及び爲に六
波羅蜜多相應の法を宣説するも亦復た是の如し。爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての
故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、自ら淨戒波羅蜜多に住し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の
故に、轉輪王家に生じ轉輪王の位を紹ぎ、無量百千俱胝那庾多の有情を十善業道に安立し、或は復
た無量百千俱胝那庾多の有情を四靜慮若しは四無量、四無色定に安立し、或は復た無量百千俱胝那
庾多の有情を四念住若しは四正斷乃至八聖道支に安立し、或は復た無量百千俱胝那庾多の有情を空
解脫門若しは無相、無願、無脫門に安立し、或は復た無量百千俱胝那庾多の有情を布施波羅蜜多若し
は淨戒乃至般若波羅蜜多に安立し、或は復た無量百千俱胝那庾多の有情を五眼若しは六神通に安立
し、或は復た無量百千俱胝那庾多の有情を佛の十力若しは四無所畏乃至十八不共法、一切智乃至
一切相智に安立し、安立し已つて乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得するまで、是の如き法に於て常に
捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲す。善現、巧みなる幻師或
は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に無量の有情を作り、十善業道に住せしめ、或は復
た四靜慮乃至一切相智に住せしむるが如き、善現、汝が意に於て云何。是の如き幻事、實有りと爲
すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、有情の爲
の故に轉輪王家に生じ、轉輪王の位を紹ぎ無量百千俱胝那庾多の有情を十善業道に安立し、或は復
た無量百千俱胝那庾多の有情を四靜慮乃至一切相智に安立するも亦復た是の如し、爲す所有りと
雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、自ら安忍波羅蜜多に住し亦た無量百千俱胝那庾多の有情に勸めて

ことを得。菩薩其の既に衆苦より離れたるを知り、亦た爲に三寶の功德を稱讚す。彼れ聞き已つて身心安樂なることを得、自趣より没して天人の中に生じ、即ち諸佛菩薩を見奉ることを得、親子供養を承け正法音を稟く。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擧ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて、幻まじしに地獄・傍生・鬼界の諸の有情各衆苦を受くるを作し、亦復た光を放ちて大地を變動し、彼の有情の衆苦をして皆息ましめ、復た爲に佛法僧寶を稱讚し、彼れをして聞き已つて身心安樂ならしめ、自趣より没して天人の中に生じ、諸佛菩薩に承事供養し、諸佛の所に於て正法音を稟くるが如き、善現、汝が意に於て云何、是の如き幻事、實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、菩薩摩訶薩、是の如き等の諸の功德の鎧を擧るに大光明を放ちて大地を變動し、無量世界の有情の三惡趣の苦を拔濟し、天人に生じ佛を見、法を聞かしむるも亦復た是の如し。爲す所有りと雖も而かも一の實無し。何を以ての故に、善現、諸法の性空にして皆幻の如きが故に。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多に安住し、普ねく三千大千世界を化すること吠琉璃の如く、亦た自身を化して五轉輪王と爲し、七寶の眷屬導從圍繞す。其の中の有情食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、之を須ては衣を與へ、乘を須てば乘を與へ、塗香・末香・燒香・花鬘・房舎・臥具・燈燭・醫藥・金銀・眞珠・珊瑚・璧玉及び餘の種種六資生の具、其の須つ所に隨つて一切施與す。是の施を作し已つて復た爲に六波羅蜜多相應の法を宣説し、彼れをして聞き已つて乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得せしめ、六波羅蜜多相應の法に於て常に捨離せず。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擧ると爲す。善現、巧みなる幻師或は彼の弟子、四衢道に於て大衆の前に在りて幻に種種の貧窮孤露にして根支殘缺せる疾病の有情を作り、其の須つ所に隨つて皆幻に施與するが如き善現、汝が意に於て云何。是の如き幻事實有りと爲すや不やと。善現答へて言はく

【三】 四衢道。苦集滅道の四諦の理に譬へし語なれば此處にては且に街頭の意。

【四】 吠琉璃(Vaidurya)。瓊瑤のこと。七寶の一。

【五】 轉輪王(Cakravartin-king)とは三十二相を具足し、輪寶を感得し、其輪寶にて四方を降伏するの故に名づく。

此王輪寶の外に六種の寶を具し、合せて七寶有り、及び千子を具足すとす。

【六】 資生の具。人の生命を資助するものの意にて衣食住の具を云ふ。

初分大乘鎧品第十四之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊の説きたまへる如き菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯るとは、云何が名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲すやと。佛言はく、善現、(c)若し菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多の鎧を擯、淨戒乃至般若波羅蜜多の鎧を擯なば、善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲す。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)四念住乃至八聖道支。(c)内容乃至無性自性空。(c)五眼・六神通。(c)佛十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(c)佛身相の諸の功德。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き等の諸の功德の鎧を擯、大光明を放ちて遍ねく三千大千世界を照らし、亦た此の界をして六三に變動せしむるに其の中の地獄火等の苦具及び彼の有情の身心の痛惱皆除滅することを得。菩薩其の既に衆苦より離れたるを知りて便ち爲に三寶の功德を稱讚す。彼れ聞き已つて身心安樂なることを得、自趣より没して天人の中に生じ、即ち諸佛菩薩を見奉ることを得、親り供養を承け正法音を稟く。其の中の傍生互に相殘害し、鞭撻し驅逼する無量種の苦皆除滅することを得。菩薩其の既に衆苦より離れたるを知り、亦た爲に三寶の功德を稱讚す。彼れ聞き已つて身心安樂なることを得、自趣より没して天人の中に生じ、即ち諸佛菩薩を見奉ることを得、親り供養を承け正法音を稟く。其の中の鬼界・恐怖・飢渴・身心の焦惱、無量種の苦皆除滅することを得。菩薩其の既に衆苦より離れたるを知り、亦た爲に三寶の功德を稱讚す。彼れ聞き已つて身心安樂なることを得、自趣より没して天人の中に生じ、即ち諸佛菩薩を見奉ることを得、親り供養を承け正法音を稟く。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、大乘の鎧を擯ると爲す。若し菩薩摩訶薩、是の如き等の諸の功德の鎧を擯、大光明を放ちて遍ねく十方各殫伽沙等の如き諸佛世界を照らし亦た彼の界をして六三に變動せしむるに其の中の地獄・傍生・鬼界の所有衆苦皆除滅する

【一】六度の鎧を擯るを説く。

(c)「若し菩薩摩訶薩擯布施波羅蜜多鎧淨戒乃至般若波羅蜜多鎧……善現如是名爲菩薩摩訶薩擯大乘鎧」右の文を符號(c)にて略し以下諸法の異りのみを出す但しその諸法は六度の「布施乃至般若波羅蜜多」のある所に代入すべきものとす。

【二】大地の震動に六種あり、その六動に三相あり。即ち、六時に動するもの、六方に動するもの、六相に動するものを云ふ。

某の世界の中某の名の菩薩摩訶薩有り、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗り、久しからずして當に一切智智を得、天人等の爲に正法輪を轉すべし。某の輪は世間の天人魔梵聲聞等の衆皆轉する能はずと。是の如き展轉の聲遍ねく十方の天人等の衆に聞え皆歡喜し咸く是の言を作さく、是の如き菩薩は久しからずして當に一切智智を得正法輪を轉じて、^{一四}含識を利安すべしと。

【一四】含識。含靈、含情、含生などと同じ。心識を有するもの、即ち有情を云ふ。

至諸受。(b)地界乃至識界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)內容乃至無性自性空。(b)眞如・法界・法性・法定・法住・離生性・平等性・實際。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門乃至無願解脫門。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)五眼・六神通。(b)佛十力乃至十八不共法。一切智乃至一切相智。(b)無上正等菩提・無上正等覺者。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲之上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、初發心より乃ち無上菩提を證得するに至るまで恒に修して不退神通を圓滿し、有情を成熟し佛土を嚴淨し、一佛國より一佛國に至りて諸佛世尊を供養恭敬尊重讚歎し、諸佛の所に於て大乘相應の法を聽受す。既に聽受し已つて理の如く思惟し精勤し修學す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗ると爲す。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は大乗に乗りて一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊を供養恭敬尊重讚歎し、諸佛の所に於て正法を聽受し、有情を成就し佛土を嚴淨すと雖も而かも心初めより佛國等の想無し。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は不二地に住して諸の有情を觀じ、應に何の身を以て義利を得ば即便ち現受して彼れをして益を獲せしむや。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は乃ち一切智智を證得するに至るまで所生の處に隨つて大乘を離れず。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は久しからずして當に一切智智を得、人天等の爲に正法輪を轉すべし。是の如き法輪は一切の聲聞・獨覺・沙門・婆羅門・魔王・梵王・天龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路茶・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等、一切世間心轉ずる能はざる所なり。舍利子、諸の菩薩、是の如き等の方便善巧に由りて一切有情を利樂せんと欲するが爲に大乘に乗るを以ての故に復た摩訶薩と名づく。

舍利子、是の如く諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗る菩薩摩訶薩は、普ねく十方各刹伽沙等の如き世界の諸佛世尊に、大衆の中に於て歡喜讚歎せられ、是の如き言を作す、某の方

【六】菩薩大乘を辨ず。
【七】不二地に住して。菩薩が一實平等の理に悟入しての意。

【八】佛の教法を説かるゝことを云ふ。正法輪は佛の教法、轉とは教法を説くに譬ふ。

【九】乾達縛 (Gandharva)。乾闥婆、乾香婆、健陀羅などともいひ、香神、香香、嗅香などを求む、帝釋に奉侍して伎樂を奏するもの。八部衆の一。

【一〇】阿素洛 (Asura)。阿修羅、阿須倫などともいひ、非天、非類、不端正などと譯す。常に帝釋と戰鬥をなす神。八部衆の一。

【一一】揭路茶 (Ghurugi)。迦樓羅、迦留羅などといひ、金翅鳥、妙翅鳥などと譯す。四天下の大樹に居り、龍を取て食となす鳥。八部衆の一。

【一二】緊捺洛 (Kinnara)。人非人、歌神などと譯す。帝釋に侍して法樂を奏する樂神。八部衆の一。

【一三】莫呼洛伽 (Mahoraga)。摩呼洛伽、摩羅識などと譯す。大蟒神、大腹行などと譯す。地龍を云ふ。八部衆の一。

薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、般若波羅蜜多に乗るも般若を得ず、般若波羅蜜多を得ず、慧を修する者を得ず、愚癡者を得ず、過去・未來・現在法を得ず、善・不善・無記法を得ず、欲界・色界・無色界法を得ず、學・無學・非學非無學法を得ず、世間・出世間法を得ず、色・無色法を得ず、有見・無見法を得ず、有對・無對法を得ず、有漏・無漏法を得ず、有爲無爲法を得ず、遮る所の法を得ずんば舍利子、是れ菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に乗ると爲す。舍利子、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗ると爲すと。

復た次に舍利子、(a)若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、遣修せんが爲の故に四念住を修し遣修せんが爲の故に四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を修せば、舍利子、是を菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗ると爲す。(a)空解脱門乃至無願解脱門。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法・一切智乃至一切相智。(a)內空智乃至無性自性空智。復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲して如實に觀察す、菩薩摩訶薩は但だ假名有りて言説を施設すのみ。菩提及び薩埵俱に不可得なるが故にと。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗ると爲す。(b)若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲して如實に觀察す。色は但だ假名有りて言説を施設すのみ。色不可得なるが故に。受想行識は但だ假名有りて言説を施設すのみ。受想行識不可得なるが故に。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘に乗ると爲す。(b)眼・乃至意處。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)耳界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)意界乃至諸受。

(a)「若菩薩摩訶薩以應一切智智心大悲爲上首用無所得而爲方便爲遣修故修四念住爲遣修故修四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支舍利子は爲菩薩摩訶薩爲欲利樂諸有情故乘於大乘」右の文中「四念住乃至八聖道支」の所に次に出入諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下諸法のみ略出す。

(b)「菩提(Bodhi)。道或は覺と譯す。佛教所詮の理想たる佛陀覺者の智慧即ち佛果を云ふ。」

(c)「薩埵(Sattva)。有情、衆生などと譯す。生命あるもの稱。」

【五】不可得。空の異名、諸法の空無にして所得の實體なきを云ふ。

(k)「若菩薩摩訶薩以應一切智智心大悲爲上首用無所得而爲方便如實觀察色但有假名施設言說色不可得故受想行識不可得故舍利子は爲菩薩摩訶薩爲欲利樂諸有情故乘於大乘」右の文中「色乃至識」のある所に次に出入諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(b)にて略し以下その諸法のみ略出す。

卷の第四十九

初分摩訶薩品第十三之三

爾の時具壽舍利子、滿慈子に問ふて言はく、云何が名づけて菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に^二大乘に乗ると爲すやと。滿慈子言はく舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、布施波羅蜜多に乗るも布施を得ず、布施波羅蜜多を得ず、施者を得ず、受者を得ず、施さるる物を得ず、遮る所の法を得ずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、空施波羅蜜多に乗ると爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、淨戒波羅蜜多に乗るも淨戒を得ず、淨戒波羅蜜多を得ず、持戒者を得ず、犯戒者を得ず、遮る所の法を得ずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多に乗ると爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、安忍波羅蜜多に乗るも安忍を得ず、安忍波羅蜜多を得ず、能忍者を得ず、所忍の境を得ず、遮る所の法を得ずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多に乗ると爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、精進波羅蜜多に乗るも精進を得ず、精進波羅蜜多を得ず、精進者を得ず、懈怠者を得ず、遮る所の法を得ずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多に乗ると爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を用て方便と爲し、靜慮波羅蜜多に乗るも靜慮を得ず、靜慮波羅蜜多を得ず、修定者を得ず、散亂者を得ず、定の境界を得ず、遮る所の法を得ずんば舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に乗ると爲す。若し菩薩

【一】六度等一切不可得なりと觀るが大乘に乗ずる意なるを説く。
 【二】大乘(Mahayana)。大は小に簡ぶの稱、表は選載の義、即ち大教の意にて一切智を開かしむる教を云ふ。

す、學無學非學非無學法を知らざるに非ず。智^{三〇}。見所斷を知らず、智、修所斷を知らず、智、非所斷を知らず、見所斷・修所斷・非所斷法を知らざるに非ず。無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を而かも方便と爲し、智、世間を知らず、智、出世間を知らず、世間出世間法を知らざるに非ず。無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を方便と爲し、智、色を知らず、智、無色を知らず、色無色法を知らざるに非ず。智^{三一}。有見を知らず、有見無見法を知らざるに非ず。智、有對を知らず、智、無對を知らず、有對無對法を知らざるに非ず。智、有漏を知らず、智、無漏法を知らざるに非ず。智、有爲を知らず、智、無爲を知らず、有爲無爲法を知らざるに非ず。無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。舍利子、諸の菩薩は是の如き等の方便善巧に由りて一切有情を利樂せんと欲するが爲に大乘を發趣するを以ての故に復た摩訶薩と名づく。

舍利子、是の如く諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣する菩薩摩訶薩は普ねく十方各殊伽沙等の如き世界の諸佛世尊に、大衆の中に於て歡喜讚歎せられ、是の如き言を作す。某の方某の世界の中に某の名の菩薩摩訶薩有り、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣し有情を成就し、佛土を嚴淨し、神通に遊戲して作すべき所を作すと。是の如き展轉の聲、遍ねく十方の天人等の衆に聞え皆歡喜し咸く是の言を作さく、是の如き菩薩は速に當に作佛して一切有情を利益安樂すべしと。

【三〇】 見所斷等。見所斷、修所斷、非所斷を三斷と稱し煩惱を斷ずる階位について立てる三種なり。

【三一】 有見。智度論に説く二種見の一、常見とも稱し、有に執着する邪見を云ふ。

【三二】 無見。智度論に説く二種見の一、無に執着する邪見を云ふ。

【三三】 有對等。對とは礙の義、障礙の有無によりて有對、無對と稱す。

し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を方便と爲し、内空智乃至無情自性空智を起し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を方便と爲し、一切法に於て非亂非定智を起し、無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を而かも方便と爲し、一切法に於て非常非無常智・非樂非苦智・非我非無我智・非淨非不淨智・非空非不空智・非有相非無相智・非有願非無願智・非寂靜非不寂靜智・非遠離非不遠離智を起し、無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を方便と爲し、智、過去を知らず、智、未來を知らず、智、現在を知らず、智、三世法を知らざるに非ず、無所得を以て方便と爲して一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、無所得を而かも方便と爲し、智、善を知らず、智、不善を知らず、智、無記を知らず、三性法を知らざるに非ず、智、欲界を知らず、智、色界を知らず、智、無色界を知らず、三界法を知らざるに非ず。智、學を知らず、智、無學を知らず、智、非學非無學を知ら

先づ衆生を攝招する四種の行法。

【六】 五眼。肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼の稱。

【七】 六神通。神は不測の義、通は無礙の義、三乘の聖者の得る神妙不測無礙自在の六種の智慧。即ち天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通の稱。

【八】 四無所畏。佛菩薩が說法に當つて何ら畏れを感ぜざる四種の智徳。能持無畏、知根無畏、決礙無畏、答報無畏を菩薩の四無所畏といひ、正等覺無畏、瀧水盡無畏、說法障無畏、説出道無畏を佛の四無所畏となす。

【九】 四無礙解。或は四無礙智、四無礙辯ともいひ、菩薩の力用無礙自在なる、法無礙、義無礙、辭無礙、樂説無礙の四種。

智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、四無量の入住出の時に於て種種の等持・等至を引發し、能く其の中に於て大自在を得、彼の定の引奪する所と爲らず、亦た彼の勢力に隨つて生を受けずんば。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて靜慮波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、四無量を修し、無量の中に於て無情行相・苦行相・無我行相・空行相・無相行相・無願行相を以て如實に觀察し、大悲を捨てず、聲聞及び獨覺地に墮せずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて般若波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、是の如き等の方便善巧に依りて六種波羅蜜多を修習し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣す。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、具さに一切種の四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を修し、無所得を以て方便を爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、具さに一切種の布施・愛語・利行・同事を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、具さに一切種の五眼・六神通を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、具さに一切種の佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八不共法・一切智・道相智・一切相智を修

【三】 第三に種種の發趣大乘相を説き、人空無所得の進むを示す。

【四】 四念住。四念處ともいふ。小乘修行の階程に於て三賢位の五停心觀に次いで修する觀法、即ち常樂我淨の四顛倒を起す對象たる身受心法の四法の妄見を破するもの。

【五】 四正斷。四正勤、四意斷、四正勝などともいふ。三十七科の道品中、四念處に次で修する所の道品即ち斷斷、律儀斷、隨護斷、修斷の稱にて能く懈怠を斷ずるの故にかく名づく。

【六】 布施等。布施、愛語、利行、同事は四攝法と稱せられ、菩薩が衆生救済に當りて

と欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、諸の靜慮・無量・無色を修する時、諸の靜慮・無量・無色及び靜慮支に於て、無常行相・苦行相・無我行相・空行相・無相行相・無願行相を以て如實に觀察し、大悲を捨てず、聲聞及び獨覺地に墮せずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り般若波羅蜜多を修し諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、^{三〇}慈定に入る時はの如き念を作す、我れ當に一切有情を救拔して苦を離るることを得せしむべしと。喜定に入る時はの如き念を作す、我れ當に一切有情を讚勸し解説することを得せしむべしと。捨定に入る時はの如き念を作す、我れ當に等しく一切有情を益して諸漏を斷ぜしむべしと。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて布施波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、四無量の入住出の時に於て、終に聲聞獨覺に趣向せず、唯だ無上正等菩提のみを求めば。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて淨戒波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、四無量の入住出の時に於て、聲聞獨覺の作意を雜えず、專心に無上正等菩提に信忍欲樂せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて安忍波羅蜜多を修し諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、四無量の入住出の時に於て勤めて惡法を斷じ、勤めて善法を修し専ら菩提に趣き曾て暫くも捨つる無くんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、無量定に依りて精進波羅蜜多を修し諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智

【二〇】 第二に無量心と六度とを辨す。

【二一】 慈定等。慈定、悲定、喜定、捨定はそれぞれ菩薩の利他心、即ち慈悲喜捨の四心の禪定。

摩訶薩、無所得を以て方便と爲し、此の靜慮・無量・無色を持つて一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に、先に自らはの如き靜慮・無量・無色に安住し、善く分別し知り自在を得已つて復た是の念を作す。我れ當に一切智智に應ずる心を於て、大悲を上首と爲し、一切有情の諸の煩惱を斷ぜんが爲の故に、諸の靜慮・無量・無色を説き、分別開示して善く諸の定の愛味過患、出離及び入住出の諸行の相狀を了知せしむべしと。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り布施波羅蜜多を修し諸の有情を利樂せんと欲するが故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て、大悲を上首と爲し、諸の靜慮・無量・無色を説く時、聲聞獨覺心等の間雜する所と爲らずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り淨戒波羅蜜多を修し諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、諸の靜慮・無量・無色を説く時、是の如き法に於て信忍欲樂せば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り安忍波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが故に大乘を發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、諸の靜慮・無量・無色を修する時、自らの善現を以て有情の爲の故に無上正等菩提に廻求し、諸の善根に於て勤修して息まらずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り精進波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘は發趣すと爲す。若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て大悲を上首と爲し、諸の靜慮・無量・無色に依り、殊勝の等至・等持・解脫・勝處・遍處等の定を引發し、入住出に於て皆自在を得、聲聞獨覺等の地に墮せずんば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多に依り靜慮波羅蜜多を修し、諸の有情を利樂せん

【七】 等持。定の別名。三摩地と同じ、心を一境に住して平等に維持するの意。
【八】 勝處。勝和勝見を發して貪愛を捨てる禪定の稱。これ勝知勝見を起す依處なれば勝處と名づく。
【九】 遍處。十遍處をいふ、或は十一遍處ともいふ。青黃赤白地水火風空識の十法を觀じ其一に於て一切處に周遍せしむるもの。

方便善巧して般若波羅蜜多大功徳の鏡を擯ると爲す。舍利子、諸の菩薩は一切有情を利樂せんが爲に是の如き等大功徳の鏡を擯るに由るを以ての故に復た摩訶薩と名づく。

二 舍利子、是の如く一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鏡を擯る。菩薩摩訶薩は普ねく十方各處、個沙等の如き世界の諸佛世尊に、大衆の中に於て歡喜讚歎せられ、是の如き言を作さく、某

の方、某の世界の中、某の名の菩薩摩訶薩有り、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鏡を擯て有情を成熟し佛土を嚴淨し、神通に遊戲して作すべき所を作すと。是の如き展轉の聲、遍ねく十方の天人等の衆に聞こえ稱歡喜し、咸く是の言を作さく、是の如き菩薩は速に當に

一切有情を利益安樂すべしと。作佛して一

爾の時具壽舍利子、滿慈子に問うて言はく、云何が名づけて菩薩摩訶薩、諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に大乘を發趣すと爲すやと。滿慈子言はく、舍利子、菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に、六波羅蜜多大功徳の鏡を擯り已つて、復た諸の有情を利樂せんが爲の故に欲惡

不善法を離れ、有尋有伺離に喜樂を生じ、初靜慮に入り具足して住す。尋伺寂靜にして内等淨心一趣性にして無尋無伺定に喜樂を生じ第二靜慮に入り具足して住す。喜を離れ捨に住し念正知を具し身樂を受け、聖説の捨に住し念樂住を具し、第三靜慮に入り具足して住す。樂を斷じ苦を斷じ先の喜憂没し苦ならず樂ならず、捨念清淨にして第四靜慮に入り具足して住す。復た靜慮に依り慈俱心

を起す。行相廣大無二無量にして、無怨無害、無恨無惱遍滿し、善修勝周普く十方盡虛空窈法界に充溢す、慈心勝解具足して住す。悲喜捨俱心勝解行相も亦復た是の如し。此れに依りて加行し、復た一切の色想を超え、有對想を滅し、種種想を思惟せず、無邊空に入り、空無邊處具足して住す。

一切空無邊處を超え無邊識に入り、識無邊處具足して住す。一切識無邊處を超え、無所有に入り、無所有處具足して住す。一切無所有處を超え非想非非想處に入り具足して住す。舍利子、是の菩薩

無所有處具足して住す。一切無所有處を超え非想非非想處に入り具足して住す。舍利子、是の菩薩

【一】六度大功徳の鏡を擯るを結んで諸佛の讚歎を明す。

【二】作佛。菩薩の行を率へしもの、妄惑を斷じて眞覺を開くの謂にて成佛の意。

【三】發趣大乘を辨ず。先づ禪を説くは禪を行じ慈無量なるとき、大功徳の鏡破らるることなければなり。

【四】有尋有伺。尋とは所對の境を觀察する流注の謂にて舊に覺といひ、又その細想を伺と稱し、舊に觀と云ひ、三摩地の一にて初禪の根本定及び其未至定の稱。

【五】初靜慮。第二靜慮。第三靜慮。第四靜慮を四靜慮と云ひ、内道経道共に之を修して欲界の悉網を超へ、色界の四禪天に生ずるものなり。

【六】無所有。或は無所得、空の異名。

切法皆畢竟空なるを觀じ、大悲心を以て精進を行す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、入住出定及び定境、皆畢竟空なりと觀じて等至を修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て、般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、一切法・一切有情・一切波羅蜜多に於て住すること幻の如く、夢の如く像の如く響の如く光影の如く空花の如く尋香城の如く變化事想の如くにして、種種取著無き慧を修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、具さに六種波羅蜜多大功德の鎧を擯る。舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば、當に知るべし是の菩薩摩訶薩は大功德の鎧を擯ると。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は是の如く一一の波羅蜜多に安住し、皆六波羅蜜多を修して圓滿することを得せしむ。是の故に大功德の鎧を擯ると名づく。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、諸の靜慮及び無量無色定に入ると雖も而かも味著せず、亦た彼の勢力引く所と爲らず、亦た彼の勢力に隨つて生を受けず。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、方便善巧して般若波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、諸の靜慮及び無量、無色定に入り遠離見・寂靜見・空無相無願見に住すと雖も、而かも實際を證せず、聲聞及び獨覺地に入らずして一切の聲聞獨覺を勝伏す。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時

向し、靜慮等に依りて勝慧を引發し、一切法皆幻等の如しと觀じ、諸の惡慧をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する時、具さに六種波羅蜜多大功德の鎧を擯る。舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は大功德の鎧を擯ると。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功德の鎧を擯ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、施者、受者、施物を見ず、三輪清淨にして布施を行す。舍利子、是の如き名づけ、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、持戒及び破戒等を見ず、無著心を以て淨戒を修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、能忍、所忍等の事を見ず、騷空慧を以て安忍を修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て般若波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、一

【九】 般若波羅蜜。六波羅蜜の一、冥智妄見を去つて眞智を得る大行。

【三】 三輪。布施に就いて施者、受者、施物を三輪と云ひ、この三輪を滅して無心に住して行ずる施を三輪清淨の布施波羅蜜となす。

波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安靜心に住して布施を行じ、慳吝けんけん垢をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、淨定力に由り禁戒を護持し、犯戒垢をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、慈悲定に住して安忍を修し、忿恚等をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、靜定に安住し勤修の功德、諸の懈怠をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、昧亂障をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、昧亂障をして復た現前せざらしむ。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻

諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修行を勤修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、種種の難行忍行を勤修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、熾然として有利の苦行を勤修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、種種の靜慮、等至を勤修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、精進して修行するも慧に取著する無し。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功德の鎧を擯ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は大功德の鎧を擯ると。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利業せんと欲するが爲に大功德の鎧を擯ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、靜慮波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て靜慮

【七】等至。定の別名。三摩鉢底 (Samāpatti) の譯、等とは定中にて身心の平等安和なる義、至とは定能く此の平等安和に至らしむるの意。

【八】靜波羅蜜。六波羅蜜の一、精神を一境に集中して散亂せしめざる要法。

多大功德の鎧を擧るを爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、心を一縁に攝し安忍行を修し、苦事に遇ふと雖も而かも縁を異にせず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功徳の鎧を擧ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安忍法に於て住すること幻の如く夢の如く像の如く響の如く光影の如く空花の如く尋香城の如く變化事象の如く、一切の佛法を修集せんと欲するが爲に、一切有情を成熟せんと欲するが爲に、諸法空を觀じ怨害に執せず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功徳の鎧を擧ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、具さに六種波羅蜜多大功徳の鎧を擧る。舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は大功徳の鎧を擧ると。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、種種の難行施行を勤修す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功徳の鎧を擧ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、精進波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て精進波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、精勤して清淨の禁戒を護持す。舍利子、是の如きを名づけて

【六】毘梨耶波羅蜜。六波羅蜜の一、放逸、懈怠を遠ざけ、身心共に勇猛に善法を勤修して退轉せざるを云ふ。

厭はず取せず、持と犯と本性空なるに由るが故に。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功徳の鎧を壞ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、具さに六種波羅蜜多大功徳の鎧を壞る。舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は大功徳の鎧を壞ると。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鎧を壞ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安忍を以せんが爲には身命等に於て戀著する所無し。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功徳の鎧を壞ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安忍行に於て聲聞・獨覺・異生下劣の作意を離えず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功徳の鎧を壞ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安忍法に於て信忍欲樂す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功徳の鎧を壞ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て安忍波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、安忍行に於て勸修して息まず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、安忍波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜

【五】 區提波羅蜜。六波羅蜜の一。安然として諸苦を忍受する大行を云ふ。

淨戒を護らんが爲に諸の所有に於て都て慧著せず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功徳の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、淨戒行に於て尙ほ聲聞獨覺を趣求せず、況んや異生地をや。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功徳の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、淨戒法に於て信忍欲樂す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多大功徳の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、淨戒行に於て専ら大悲を以て上首と爲し、尙ほ二乗の作意を間雜せず、況んや異生心をや。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功徳の鎧を擯ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、淨戒法に於て住すること幻の如く夢の如く像の如く響の如く光影の如く空花の如く尋香城の如く變化事想の如く清淨戒に於て特まず著せず、破戒惡に於て

る時安忍波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、布施行に於て勤修して息まず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、布施行に於て一心に一切智智に廻向し、聲聞獨覺の作意を離えず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、布施法に於て住すること幻の如く夢の如く像の如く響の如く光影の如く空花の如く尋香城の如く變化事相の如く施者受者、施物を見ず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、具さに六種波羅蜜多大功德の鎧を擧る。舍利子、若し菩薩摩訶薩、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修行する時、六波羅蜜多相に於て取せず著せずば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は大功德の鎧を擧ると。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功德の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨戒波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て淨戒波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、

【二〇】尸羅波羅蜜。在家、出家、小乘、大乘などの一切の戒行を云ふ。

べし。亦た一切有情に教へて無相・無願解脫門を修せしめて、我れ當に自ら五眼に住すべし、亦た一切有情に教へて五眼を修せしめん。我れ當に自ら六神通に住すべし、亦た一切有情に教へて六神通を修せしめて、我れ當に自ら佛の十力に住すべし、亦た一切有情に教へて佛の十力を修せしめん。我れ當に自ら四無所畏乃至一切相智に住すべし、亦た一切有情に教へて四無所畏乃至一切相智を修せしめんと。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功德の鎧を擧ると爲す。

卷の第四十八

初分摩訶薩品第十三之二

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、身命等に於て都て惜む所無し。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、布施行に於て聲聞獨覺の作意を起さず。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多大功德の鎧を擧ると爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て布施波羅蜜多を修し、無所得を以て方便と爲し、一切有情と同じく共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、布施法に於て信忍欲樂する。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を修行す

【一】六度各各に六度相應大功德の鎧を擧るを説く。
【二】或は檀波羅蜜。六波羅蜜の一。財施、法施、無畏施の大行を云ふ。
【三】無上正等正覺と譯す。佛智の名。

するは少分の有情利樂を得んが爲にせざるが故に、乃ち一切有情利樂を得んが爲の故に菩提行を修するなり。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鎧を擧ると爲す。復た次に(f)舍利子、菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多に住して布施波羅蜜多を修行する時、少分の有情利樂を得んが爲にせざるが故に乃ち一切有情利樂を得んが爲の故に布施波羅蜜多を修す。(f)淨戒波羅蜜多。(f)安忍波羅蜜多。(f)精進波羅蜜多。(f)靜慮波羅蜜多。(f)般若波羅蜜多。舍利子、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩、一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功徳の鎧を擧ると爲す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩、大功徳の鎧を擧、有情を利樂するには齊限を無さず、謂ゆる是の念を作さざるなり。我れ爾所の有情に教へて無餘涅槃を得せしめ、爾所の有情、其れをして住せしめずと。然しめず。我れ爾所の有情に教へて無上菩提に住せしめ、爾所の有情、其れをして住せしめずと。然かも此の菩薩摩訶薩、普ねく一切有情をして無餘涅槃を得、及び無上菩提に住せしめんが故に是の如き大功徳の鎧を擧るなり。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩、是の如き念を作す、我れ當に自ら布施波羅蜜多を圓滿すべし、亦た一切有情に教へて布施波羅蜜多に於て修して圓滿せしめん。我れ當に自ら淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を圓滿すべし、亦た一切有情に教へて淨戒乃至般若波羅蜜多に於て修して圓滿せしめん。我れ當に自ら内空に住すべし、亦た一切有情に教へて内空に住せしめん。我れ當に自ら外空乃至無性自性空に住すべし、亦た一切有情に教へて外空乃至無性自性空に住せしめん。我れ當に自ら四靜慮に住すべし、亦た一切有情に教へて四靜慮を修せしめん。我れ當に自ら四無量、四無色定に住すべし、亦た一切有情に教へて四無量、四無色定を修せしめん。我れ當に自ら四念住に住すべし、亦た一切有情に教へて四念住を修せしめん。我れ當に自ら空解脫門に住すべし、亦た一切有情に教へて空解脫門を修せしめん。我れ當に自ら無相、無願解脫門に住す

(f)「舍利子菩薩摩訶薩住布施波羅蜜多修布施波羅蜜多……利樂故修布施波羅蜜多」右の文を符號(f)にて略す以下六度の名を異にするのみ。

(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)四念住乃至八聖道支。(c)空解脫門乃至無願解脫門。(c)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)五眼・六神通。(c)佛十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。時に舍利子、善現に問ふて言はく、若し心色等の法、心色等の性無きが故に成く取著すべからずんば則ち一切法皆平等にして差別有ること無かるべしと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如しと。舍利子言はく、若し一切法定めて別無くんば、云何が如來は心色等の法・種種差別有りと説きたまへるやと。善現答へて言はく、此れ乃ち如來、世俗の言説に隨つて此の種種の差別有りと施設したまへるなり、實義に由るに非すと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、若し一切の愚夫・異生・聲聞・獨覺・菩薩、如來の心色等の法皆本性空なるが故に、是れ眞無漏にして三界に墮せずんば則ち聖者・異生、及び一切智と非一切智とは皆平等にして差別有ること無かるべしと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如しと。舍利子言はく、若し諸の凡、聖定めて別無くんば、云何が如來は諸の凡聖種種差別有りと説きたまへるやと。善現答へて言はく、此れ亦た如來、世俗の言説に隨つて此の種種の差別有りと施設したまへるなり、實義に由るに非ず。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲すが故に、發す所の菩提心、無等等心に於て一切の聲聞獨覺心と共ならず、恃まず著せず、一切法に於て亦た取執無し。此の義に由るが故に摩訶薩と名づく」と。

三 爾の時具壽 滿慈子、佛に白して言さく、世尊、我れも亦た菩薩、此の義に由るが故に復た摩訶薩と名づくるを樂説せんと。佛言はく、滿慈子、汝の意に隨つて説けと。滿慈子言さく、世尊、諸の菩薩は一切有情を利樂せんと欲するが爲に大功德の鐙を擲て大乘に發趣し、大乘に乗るに由るが故に復た摩訶薩と名づく」と。時に舍利子、滿慈子に問ふて言はく、云何が菩薩摩訶薩は一切有情を利樂せんと欲する爲に大功德の鐙を擲るやと。滿慈子言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の 菩提行を修

- 【三】 滿慈子説法の要目を述ぶ。
- 【三】 滿慈子。滿願子、滿視子などともいふ。富樓那(彌勒)尊者の翻名。釋尊十大弟子中説法第一の阿羅漢。
- 【三】 大功德の鐙を擲るとは自行化他一切衆生の爲に六度を行ずるものなるを説く。
- 【三】 菩提行。佛果に到る佛道修行。

施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c)五眼・六神通。佛の十力心に於て取著すべからず、四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智に於ても亦た取著すべからざるや。何を以ての故に、是の如き諸心は皆心性無きが故にと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所言の如しと。時に舍利子・善現に答ふて言はく、若し一切心、心性無きが故に取著すべからずんば則ち色・色性無きが故に取著すべからず、受想行識、受想行識無きが故に亦た取著すべからず。(d)眼處乃至意識。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)眼界乃至諸受。(d)地界乃至識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)五眼・六神通。佛の十力佛の十力無きが故に取著すべからず、四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智・四無所畏乃至一切相智無きが故に取著すべからざるやと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如しと。時に舍利子・善現に問ふて言はく、若し一切智智心是れ眞無漏にして三界に墮せずんば則ち一切の愚夫・異生・聲聞・獨覺等の心も亦た是れ眞無漏にして三界に墮せざるべきや。何を以ての故に、是の如き諸心も亦た本性空なるが故に。所以は何ん、本性空の法は是れ眞無漏にして三界に墮せざるを以てなり。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如しと。(e)舍利子言はく、色も亦た是れ眞無漏にして三界に墮せざるべく、受想行識も亦た是れ眞無漏にして三界に墮せざるべし。何を以ての故に、色受想行識は皆本性空なるを以ての故に。所以は何ん、本性空の法は是れ眞無漏にして三界に墮せざるを以てなりと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、誠に所説の如しと。(e)眼處乃至意識。(e)色處乃至法處。(e)眼界乃至諸受。(e)耳界乃至諸受。(e)鼻界乃至諸受。(e)舌界乃至諸受。(e)身界乃至諸受。(e)眼界乃至諸受。(e)地界乃至識界。(e)苦聖諦乃至道聖諦。

(d)「色無色性故不應取著受想行識無受想行識性故亦不應取著」

右の文を符號(d)にて略し以下異なる諸法を出すのみとす但し「色乃至識」のある所にその諸法は代入すべきものとす。

(e)「舍利子言色亦應是眞無漏不墮三界受想行識亦應是……善現答言如是如是誠如所説」右の文を符號(e)にて略し以下異なる諸法のみを出す但しその諸法は(d)の場合の如く「色乃至識」のある所に代入すべきものとす。

行識見を起し乃至便ち佛陀見・轉法輪見を起す。是の菩薩摩訶薩は諸の有情の爲に無所得を以て而かも方便と爲し諸の見法を斷するを説く能はず。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧有らば、能く有情の爲に無所得を以て而かも方便と爲し諸の見法を斷するを説く、是の菩薩摩訶薩は色見受想行識見を起さず、乃至佛陀見・轉法輪見を起さざるなりと。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、我れも亦た菩薩此の義に由るが故に復た摩訶薩と名づくるを樂説せんと。佛言はく、善現、汝が意に隨ひて説けと、善現白して言さく、世尊、諸の菩薩は一切智智の爲に菩提心、無等等心を發すに由り、一切の聲聞獨覺心と共にならず、是の如き心に於ても亦た取著せず。何を以ての故に、世尊、彼の一切智智心は是れ眞無漏にして三界に墮せず、一切智智を求むる心も亦た是れ無漏にして三界に墮せず、是の如き心に於ては取著すべからざるが故に。此の菩薩は復た摩訶薩と名づく。時に舍利子、善現に問ふて言はく、云何が菩薩摩訶薩の無等等心は一切の聲聞獨覺心と共にざるやと。善現答へて言はく、諸の菩薩摩訶薩は初發心より諸法の生有り、滅有り、減有り、増有り、來有り、去有り、染有り、淨有るを見ず、舍利子、若し諸法の生有り、滅有り、減有り、増有り、來有り、去有り、染有り、淨有るを見ず、亦た聲聞心・獨覺心・菩薩心・如來心有るを見ざれば、舍利子、是れを菩薩摩訶薩の無等等心は一切の聲聞獨覺心と共にらずと名づく。諸の菩薩摩訶薩は是の如き心に於ても亦た取著せざるなりと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、若し是の如き心に於て取著すべからずんば則ち一切の愚夫、異生、聲聞、獨覺等の心に於ても亦取著すべからず、及び色心に於て取著すべからず、受想行識心に於ても亦た取著すべからず。(c)眼處乃至意處。(c)色處乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)意界乃至諸受。(c)地界乃至識界。(c)苦聖諦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)四靜慮乃至四無色定。(c)四念住乃至八聖道支。(c)空解脫門乃至無願解脫門。(c)布

【七】善現無等等心の故に摩訶薩なりと説く。

【八】無等等心。佛道心を云ふ。佛道は他に超絶して等しきものなければ無等等と名づく。

【九】佛心は法執、所知障を斷滅すれば二乘の無漏に對して眞無漏と稱す。

【一〇】異生。凡夫の異名。

(c)「於色心不應取著於受想行識心亦不應取著」右の文を所附の符號にて略し以下只だ異なる諸法を出すのみとす但しその諸法は「色乃至識」のある所に相應して代入すべきものとす。

爾の時具壽舍利子、佛に白して言さく、世尊、我れも亦た菩薩此の義に由るが故に復た摩訶薩と名づくるを樂説せんと。佛言はく、舍利子、汝の意に隨つて説けと。舍利子言はく、(b)世尊、諸の菩薩は能く有情の爲に無所得を以て而かも方便と爲し、我見・有情見・命者見・生者見・養者見・士夫見・補特伽羅見・意生見・儒童見・作者見・使作者見・起者見・使起者見・受者見・使受者見・知者見・見者見の法を斷するを説くに由るが故に、此の菩薩は復た摩訶薩と名づく。(b)常見 斷見。(b)有見・無見。(b)蘊見・處見・界見・諦見・緣起見。(b)四靜慮見乃至四無色定見。(b)四念住見乃至八聖道支見。(b)三解脱門見・六到彼岸見。(b)五眼見・六神通見。(b)佛十力見乃至十八不共法見、一切智見乃至一切相智見。(b)成熟有情見・嚴淨佛土見・菩薩見・佛陀見・轉法輪見。世尊、要を以て之を言はば諸の菩薩能く有情の爲に無所得を以て而かも方便と爲し、一切の見の法を斷するを説くに由るが故に此の菩薩は復た摩訶薩と名づくるなりと。

時に具壽善現、舍利子に問ふて言はく、若し菩薩摩訶薩能く有情の爲に無所得を以て而かも方便と爲し諸の見法を斷するを説くとは、何に緣りて菩薩摩訶薩、自ら有所得を而かも方便と爲して色見・受・想・行・識見を起し、眼處見乃至意識見を起し、色處見乃至法處見を起し、眼見乃至諸受見を起し。耳界見乃至諸受見を起し、鼻界見乃至諸受見を起し。舌界見乃至諸受見を起し。身界見乃至諸受見を起し、意界見乃至諸受見を起し、地界見乃至諸受見を起し、苦聖諦見乃至道聖諦見を起し、無明見乃至老死愁歎苦憂惱見を起し、四靜慮見乃至四無色定見を起し、四念住見乃至八聖道支見を起し、空解脱門見乃至無願解脱門見を起し、布施波羅蜜多見乃至般若波羅蜜多見を起し。五眼見・六神通見を起し、佛十力見乃至十八不共法見、一切智見乃至一切相智見を起し、成熟有情見・嚴淨佛土見・菩薩見・佛陀見・轉法輪見を起す耶と。具壽舍利子、善現に答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧無くんば、有所得を以て而かも方便と爲し、便ち色見、受想

【二〇】舍利弗諸見を斷する故に摩訶薩なりと説く。
 (b)「世尊由諸菩薩能爲有情以無所得而爲方便說斷我見有情見……知者見見者見法故此菩薩復名摩訶薩」
 右の文中「我見乃至知者見見者見」の十六知見のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之の符號(b)にて略し以下諸法のみ略出す。

常に能く法を愛し法を樂しみ法を欣きんひ法を喜ぶを以て、此の緣に由るが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何等をか法と爲し、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、常に此の法に於て愛樂欣喜するやと。佛、善現に告げたまはく、言ふ所の法とは謂ゆる一切の有情及び色・非色の法。皆自性無く都て不可得にして實相は壞れず。是れを名づけて法と爲す法を愛すと云へるは、謂ゆる此の法に於て欲希求を起こすなり。法を樂しむと言へるは、謂ゆる此の法に於て功德を稱讚するなり。法を欣ふと言へるは、謂ゆる此の法に於て歡喜して信受するなり。法を喜ぶと言へるは、謂ゆる此の法に於て慕ひ多く修習するなり。善現、是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て而かも方便と爲し、常に能く法を愛し法を樂しみ法を欣ひ法を喜び、亦た自ら恃みて而かも憍擧せざるが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べし。

(四) 復た次に善現、此の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て而かも方便と爲し、内空・外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空に住するを以ての故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べきことを得ん。(a) 四靜慮乃至四無色定。(a) 四念住乃至八聖道支。(a) 空乃至無願解脫門。(a) 布施乃至般若波羅蜜多。(a) 五眼、六神通、(a) 佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。復た次に善現、此の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、金剛喻三摩地に住し、乃至無所得を以て方便と爲して無著無爲無染解脫如虛空三摩地に住するが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べきことを得ん。善現、是の如き等の種種の因縁を以て此の菩薩摩訶薩は大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲ることを得べし。善現、是の故に菩薩は復た摩訶薩と名づくるなりと。

【四】 以下十八空、道品、佛法諸三昧に住して不可得なる故に上首たるを明す。

(a) 「復た善現……得於大有情衆中定當得爲上首」右の文を所附の符號にて略し以下は異なる諸法を出すに止む但しその諸法は「内空乃至無性自性空」の十八空に相應する所に入るべきものとす。

【五】 金剛喻三摩地。金剛の如く堅固強利なる禪定、有らゆる煩惱を斷破して最後の證果に入る禪定。

何者を名づけて菩薩摩訶薩の殊勝廣大の心と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、我れ應に初發心より乃ち無上正等菩提を證得するに至るまで、其の中間に於て誓つて當に貪欲心・瞋恚心・愚癡心・忿心・恨心・覆心・惱心・誑心・嫉心・慳心・憍心・害心・見慢等の心を起こさざるべし。亦復た聲聞獨覺地に趣向する心を起こさざるべしと。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩の殊勝廣大の心と爲す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て而かも方便と爲し此の心に安住し、亦た自ら恃みて而かも憍擧を生ぜざるが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べし。復た次に善現、此の菩薩摩訶薩、傾動す可からざる心を生じ決して退壞せざるを以て、此の心に由るが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何者を名づけて菩薩摩訶薩の傾動す可からざる心と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、我れ當に一切智智に應ずる心をして、修習して一切の修する所作すべき所の事を發起すべしと。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩の傾動すべからざる心と爲す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て而かも方便と爲し此の心に安住し、亦た自ら恃みて而かも憍擧を生ぜざるが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べし。復た次に善現、此の菩薩摩訶薩は利益安樂の心を發し決して傾動せざるを以て、此の心に由るが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何者を名づけて菩薩摩訶薩の利益安樂心と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、我れ當に^三未來際を窮め一切有情に於て爲に歸依の橋船洲渚と作り、救濟覆護して常に捨離せざるべしと。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩の利益安樂心と爲す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て而かも方便と爲し此の心に安住し、亦た自ら恃みて而かも憍擧を生ぜざるが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べし。復た次に善現、此の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、

【三】未來際。未來世の邊際。

入るべし。我れ當に一切の法相一理趣門なるを通達すべし。我れ當に一切の法相二理趣門乃至無邊理趣門なるを通達すべし。我れ當に一切法に於て修學して一理趣門の妙智に通達すべし。我れ當に一切法に於て修學して二理趣門の妙智乃至無邊理趣門の妙智に通達すべし。我れ當に修學して無邊の靜慮・無量・無色法門を引發すべし。我れ當に修學して無邊の三十七菩提分法・三解脱門・六到彼岸法門を引發すべし。我れ當に修學して無邊の五眼・六神通・十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八不共法・一切智・道相智・一切相智法門を引發すべしと。善現・是の如きを名づけて菩薩摩訶薩の金剛喻心と爲す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て而かも方便と爲し此の心に安住し、亦た自ら恃みて而かも憍擧せざるが故に、大有情衆の中に於て定めて上首と爲ることを得。復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、一切の地獄、傍生鬼界人天趣の中の諸の有情類の受くる所の苦惱、我れ當に代つて受け、彼れをして安樂ならしむべしと、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、我れ當に一有情の爲に無量百千俱胝な那庾多二大劫を經、諸の地獄の種種の劇苦を受くるも、無數の方便を以て教化して無餘涅槃を證せしめ、是の如く次第に一切有情の爲に一一に各無量百千俱胝那庾多大劫を經、諸の地獄の種種の劇苦を受くるも、亦た一一に各無數の方便を以て教化して無餘涅槃を證せしめ、是の事を作し已つて自ら善根を植ゑ、復た無量百千俱胝那庾多大劫を經て圓滿に菩提資糧を修集し、然る後阿耨多羅三藐三菩提を趣證すべしと。善現、是の如きを名づけて菩薩摩訶薩の金剛喻心と爲す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て而かも方便と爲し此の心に安住し亦た自ら恃みて而かも憍擧を生ぜざるが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べし。

復た次に善現、此の菩薩摩訶薩、殊勝廣大の心を發し決して退壞せざるを以て、此の心に由るが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、

【七】 三十七菩提分法。三十七道品の異名。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七法は菩提を成就する行法の支分品類なれば菩提分法と名く。

【八】 傍生。傍生の生類の義、畜生を云ふ。

【九】 俱胝(Koti)。印度の數量の名稱、億と譯す。

【一〇】 那庾多(Ananta)。百俱胝を一阿由多といひ、百阿由多を一那庾多とす。

【一一】 劫(Kalpa)。長時又は大時と譯す、無限の長時間の名稱。

【一二】 更に殊勝廣大心、不劫心等の諸心を述べて大士たるを明す。

卷の第四十七

初分摩訶薩品第十三之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何に緣りて菩薩は復た摩訶薩と名づくるやと。佛、善現に告げたまはく、菩薩は大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るべし、是の緣を以ての故に復た摩訶薩と名づく。具壽善現、復た佛に白して言さく、世尊、何者か是れ大有情衆にして菩薩は中に於て定めに當に上首と爲るべきやと。佛、善現に告げたまはく、大有情衆とは謂ゆる住種性、第八・預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺地及び初發心より乃ち不退轉地に至る菩薩摩訶薩、是れを大有情衆と名づく。菩薩は是の如き大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るべきが故に復た摩訶薩と名づく。具壽善現、復た佛に白して言さく、世尊、是の如き菩薩摩訶薩は何の因緣を以て大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るべきやと。佛、善現に告げたまはく、此の菩薩摩訶薩は金剛喻心を發すを以て決して退壞せず、此の心に由るが故に、大有情衆の中に於て定めて當に上首と爲るを得べしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何者を名づけて菩薩摩訶薩の金剛喻心と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を生ぜん、我れ當に堅固の鎧を壞、無邊生死の大曠野の中に於て、無量の煩惱冤敵を摧滅すべし。我れ當に無邊甚深の生死の大海を枯竭すべし。我れ當に内外に重る所の一切の身財を棄捨すべし。我れ當に一切有情に於て、等心にして大義利を作すべし。我れ當に三乗の法を以て一切有情を拔濟し、皆無餘依涅槃界に於て而かも般涅槃せしむべし。我れ當に三乗の法を以て一切有情を滅度すと雖も而かも實には有情の滅度を得る者を見ざるべし。我れ當に一切法に於て如實に無生無滅を覺了すべし。我れ當に純ら一切智智に應ずる心を以て六波羅蜜多を修行すべし。我れ當に修學し一切法に於て究竟に通達し遍ねく妙智に

【一】佛、菩薩摩訶薩を辨じて不動なる金剛の如しと説く。

【二】等心。一切衆生に於て怨親平等の心。又諸行等しく修する心。

【三】三乗の法。乘とは運載の義にて、法は彼岸より悟の彼岸に運ぶ教法の意。その三とは聲聞乘(四諦の法)、緣覺乘(十二因緣の法)、菩薩乘(六度の法)を云ふ。

【四】滅度。涅槃(Nirvāṇa)のこと。煩惱の障を滅して生死の苦界を超越した境界なる故にかく名づく。

【五】無生無滅。涅槃の眞理。生滅なき故にかく云ふ。

【六】究竟(Uttama)。最上、究極、畢竟などの意、佛陀の稱。

無漏法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる出世間の四靜慮・四無量・四無色定。四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支・三解脱門・六到彼岸・五眼・六神通・佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智。善現、此れ等を無漏法と名づく。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が有爲法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる欲界繫法・色界繫法・無色界繫法・五蘊・四靜慮・四無量・四無色定・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支・三解脱門・六到彼岸・五眼・六神通・佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智・所有一切の有生・有住・有異・有滅法、善現、是れを有爲法と名づく。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が無爲法なるやと。佛、善現に告げたまはく、若しは法の無生・無住・無異・無滅得可し、所謂貪盡・瞋盡・癡盡・眞如・法界・法性・法住・法定・不虛妄性・不變異性・離生性・平等性・實際なり、善現、此れ等を無爲法と名づく。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が共法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる世間の四靜慮・四無量・四無色定・五神通、善現、此れ等を共法と名づく。何を以ての故に、異生と共なるが故にと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が不共法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる無漏の四靜慮・四無量・四無色定・四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支・三解脱門・六到彼岸・五眼・六神通・佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲・大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智。善現、此れ等を不共法と名づく。何を以ての故に、異生と共ならざるが故に、善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の如き等の自相空の法に於て執著すべからず。何を以ての故に、諸法の自相分別す可からざるを以ての故に。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無二を以て方便と爲し一切法を覺すべし。何を以ての故に、一切法動相無きを以ての故に。善現、一切法に於て二無く動ずる無き、是れ菩薩の句義なり。是を以ての故に、句義無きは是れ菩薩の句義なりと。

【四】云何が有爲法なるや。

【五】云何が無爲法なるや。

【六】云何が共法なるや。

【七】云何が不共法なるや。

謂ゆる色有り諸色を觀る、是れ初解脫。內色想無く外色を觀る、是れ第二解脫。淨解脫の身證を作す、是れ第三解脫。一切の色想を超え有對の想を滅し種種の相を思惟せず無邊空に入り、空無邊處具足して住する、是れ第四解脫。一切の空無邊處を超え無邊識に入り、識無邊處具足して住する、是れ第五解脫。一切の識無邊處を超え無所有に入り、無所有處具足して住する是れ第六解脫。一切の無所有處を超え非想非非想處に入り具足して住する是れ第七解脫。一切の非想非非想處を超え滅想受定に入り具足して住する是れ第八解脫なり。九次第定有り、謂ゆる欲惡不善法を離れ、有尋有伺離に喜樂を生じ初靜慮に入り具足して住す是れ初定。尋伺寂靜にして內等淨心一趣性なり無尋無伺定に喜樂を生じ第二靜慮に入り具足して住する是れ第二定。喜を離れ捨に住し、念正知を具し、身樂を受け、聖説の捨に住し、念樂住を具し、第三靜慮に入り具足して住する、是れ第三定。樂を斷じ苦を斷じ、先の喜憂没して苦ならず樂ならず、捨念清淨に第四靜慮に入り具足して住する、是れ第四定。一切の色想を超え、有對想を滅し、種種想を思惟せず、無邊空に入り、空無邊處具足して住する、是れ第五定。一切の空無邊處を超え、無邊識に入り、識無邊處具足して住する、是れ第六定。一切の識無邊處を超え、無所有に入り、無所有處具足して住する、是れ第七定。一切の無所有處を超え、非想非非想處に入り具足して住する、是れ第八定。一切の非想非非想處を超え、滅想受定に入り具足して住する是れ第九定。內空・外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空・六到彼岸・五眼・六神通・佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智。善現、此れ等を出世間法と名づく。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が有漏法なるやと。佛、善現に告げたまはく、世間の五蘊・十二處・十八界・四靜慮・四無羂・四無色定。所有一切の三界に墮する法、善現、是れを有漏法と名づく。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が

もいひ、無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じ、羅漢果を悟る八種の禪定。

【三】九次第定。智慧者の間業なく次第を追うて修する九種の禪定(四禪、四無色、及滅盡定)を云ふ。

【三】云何が有漏法なるや。

【三】云何が無漏法なるや。

法・共法不共法なり。善現、是れを一切法と名づく。諸の菩薩摩訶薩、此の一切法に於て皆所有無く、礙無く、著無く應に學すべく應に知るべしと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が善法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる父母に孝順し、沙門婆羅門に供養し、師長に敬事し、施性福業事・戒性福業事・修性福業事・供侍病者俱行福・方便善巧俱行福・十善業道の所謂・離斷生命・離不與取・離欲邪行・離虛誑語・離離間語・離龜惡語・離雜穢語・無貪・無瞋・正見。十種想有り所謂・隨眠想・膿爛想・臭赤想・青瘀想・破壞想・啄噉想・離散想・骸骨想・焚燒想・一切世間不可樂想・四靜慮・四無量・四無色定。十隨念有り、所謂、佛隨念・法隨念・僧隨念・戒隨念・捨隨念・天隨念・入出息隨念・寂靜隨念・死隨念・身隨念なり。善現、此れ等を善法と名づくと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が不善法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる十不善業道の即ち斷生命・不與取・欲邪行・虛誑語・離間語・龜惡語・雜穢語・貪欲・瞋恚・邪見及び忿恨・覆惱・詔誑・矯害・嫉慳慢等なり。善現、此れ等を不善法と名づくと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が有記法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる無記の身業、無記の語業、無記の意業、無記の四大種、無記の五根、無記の六處、無記の無色法、無記の五蘊、無記の十二處、無記の十八界、無記の異熟法なり。善現、此れ等を無記法と名づくと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が世間法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる世間とは五蘊・十二處・十八界・十業道・四靜慮・四無量・四無色定・十二支緣起法なり。善現、此れ等を世間法と名づくと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が出世間法なるやと。佛、善現に告げたまはく、謂ゆる出世間とは四念住、四正斷・四神通・五根・五力・七等覺支・八聖道支・空解脫門・無相解脫門・無願解脫門・未知當知根・已知根・具知根・有尋有伺三摩地・無尋唯伺三摩地・無尋無伺三摩地・明解脫・念正知・如理作意・八解脫有り

- 【九】 共法不共法。共法とは各自の第八阿賴耶識により、自他共同して變現したる物象即ち山河大地等。不共法とは自他別別に感生したる法にて自己の身體は我一人の業によりて感得したるものなるが如し。
- 【一〇】 善法を説く。世間善は罪福因果三世應報を信じ世間を捨てて涅槃を證せんとする。
- 【一一】 十善業道。雜斷生命乃至正見の十善の行業は善處(天上若くは人中の帝位)に趣き生ずる道なれば業道と云ふ。
- 【一二】 十種想。隨眠想乃至十切世間不可樂想の修禪の時貪欲を離れ惡業を除かんが爲の十種の觀法。
- 【一三】 云何が不善法なるや。
- 【一四】 云何が有記法なるや。
- 【一五】 云何が無記法なるや。
- 【一六】 云何が世間法なるや。
- 【一七】 云何が出世間法なるや。
- 【一八】 未知當知根。已知根、具知根は三無漏根と稱し二十二根中の後の三。この三は無漏清淨の法を増勝せしむるが故に三無漏根と名づく。
- 【一九】 有尋有伺三摩地、無尋唯伺三摩地、無尋無伺三摩地を三摩地と稱し、色界無色界の諸定を尋(所對の境を觀察する宛想)伺(尋の細想)の有無に依つて分ちしもの。
- 【二〇】 八解脫。或は八背捨と

の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の戒蘊中破戒の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の定蘊中散亂の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の解脫蘊中非解脫の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の解脫智見蘊中非解脫智見の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の光明中衆の闇の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、佛光中一切の日月珠火電等の光明の句義無所有不可得、一切の四大王衆天乃至他化自在天、梵衆天乃至色究竟天の光明の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。何を以ての故に、善現、若しは菩提、若しは薩埵、若しは菩薩の句義是の如き一切皆相應に非ず、不相應に非ず、色無く見無く對無く、一相にして所謂無相なればなり。善現、諸の菩薩摩訶薩は一切法に於て皆所有無く、礙無く、著無く應に學すべく應に知るべしと。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何者か是れ一切法にして諸の菩薩摩訶薩に此の一切法に於て皆所有無く、礙無く、著無く應に學すべく應に知るべしと勸むるやと。佛、善現に告げたまはく、一切法とは謂ゆる善法非善法、有記法無記法、世間法出世間法、有漏法無漏法、有爲法無爲

【五】 前段の末句を受け、一切法を總擧す。

【六】 有記法無記法、善惡の記別の出来る法を有記法と云ひ、善にも非ず惡にも非ざるを無記法と稱す。

【七】 有漏法無漏法。煩惱を含有する世間のあらゆる事物條件を有漏法となし、煩惱なき悟界を無漏法とす。

【八】 有爲法無爲法。因縁所生の事物を有爲法と云ひ、本來自爾にして因縁所生に非ざるものを無爲法と云ふ。

乃至諸受。(f)身界乃至諸受。(f)眼界乃至諸受。(f)地界乃至諸受。(f)苦聖諦乃至道聖諦。(f)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(f)四靜慮乃至四無色定。(f)四念住乃至八聖道支。(f)空解脫門乃至無願解脫門。(f)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f)五眼・六神通。(f)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

善現、是の如きの法、無生無滅・無作無爲・無得無取・無染無淨にして句義無所有不可得なるが如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦復た是の如し。

復た次に(g)善現、色の畢竟淨相の句義無所有不可得、受想行識の畢竟淨相の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦復た是の如し。(g)眼處乃至意處。(g)色處乃至法處。(g)眼界乃至諸受。(g)耳界乃至諸受。(g)鼻界乃至諸受。(g)舌界乃至諸受。(g)身界乃至諸受。(g)眼界乃至諸受。(g)地界乃至諸受。(g)苦聖諦乃至道聖諦。(g)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(g)四靜慮乃至四無色定。(g)四念住乃至八聖道支。(g)空解脫門乃至無願解脫門。(g)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g)五眼・六神通。(g)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に善現、我の畢竟淨相の句義無所有不可得なり、我非有の故に、有情・命者・生者・養者・數取趣・意生・儒童・作者・使作者・起者・使記者・受者・使受者・知者・見者の畢竟淨相の句義無所有不可得なり、有情乃至見者非有の故なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、日出時の闇冥の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、劫燒き盡くる時の諸行の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩

(g)「善現如色畢竟淨相句義無所有不可得受想行識畢竟淨相句義……觀菩薩句義無所有不可得亦如是」右の文中「色乃至識」のある所に次下に出ず諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(g)にて略し以下諸法のみ略出す。

【四】智度論九に、「劫盡燒時一切衆生自然皆得禪定」とある。

識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に善現、如來應正等覺の内空相を行する句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の外空乃至無性自性空相を行する句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。(e)善現、如來應正等覺の四靜慮相を行する句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の四無量・四無色・四無色定相を行する句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。(e)四念住乃至八聖道支。(e)空解脫門乃至無願解脫門。(e)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e)五眼・六神通。(e)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に善現、有爲界中無爲界の句義無所有不可得、無爲界中有爲界の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、無生無滅・無作無爲・無得無取・無染無淨の句義皆無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如しと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、何の法か無生無滅・無作無爲・無得無取・無染無淨にして句義無所有不可得なるやと。(f)佛、善現に告げたまはく、色は無生無滅・無作無爲・無得無取・無染無淨にして句義無所有不可得なり。受想行識は無生無滅乃至無染無淨にして句義無所有不可得なり。

(f)眼處乃至意處。(f)色處乃至法處。(f)眼界乃至諸受。(f)耳界乃至諸受。(f)鼻界乃至諸受。(f)舌界

(e)「善現……………觀菩薩句義無所有不可得亦如是」右の文を符號(e)にて略し以下に異なる文字を出すのみとす。

【三】無義は諸法皆然るを説く。(f)「佛告善現」の代りに「善現」の語を以てし「善現無生無滅……………受想行識無生無滅乃至無染無淨句義無所有不可得」右の文を符號(f)にて略し異れ諸法のみを出す但しその諸法は「色乃至識」のある行に相應して代入すべきものとす。

卷の第四十六

初分菩薩品第十二之二

(b) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b) 五眼・六神通。(b) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に善現、幻士の内空を行ずる句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、幻士の外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空を行ずる句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。(c) 善現、幻士の四靜慮を行ずる句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、幻士の四無量・四無色定を行ずる句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。(c) 四念住乃至八聖道支。(c) 空解脫門乃至無願解脫門。(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 五眼・六神通。(c) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に(d) 善現、如來應正等覺の色相の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、如來應正等覺の受想行識相の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。(d) 眼處乃至意處。(d) 色處乃至法處。(d) 眼界乃至諸受。(d) 眼界乃至諸受。(d) 身界乃至諸受。(d) 身界乃至諸受。(d) 眼界乃至諸受。(d) 地界乃至諸受。(d) 鼻界乃至諸受。(d) 舌界乃至諸受。(d) 身界乃至諸受。(d) 眼界乃至諸受。(d) 地界乃至諸受。

(b) 前卷と同意に用ふ。

【一】菩薩の句義無所有不可得。

(c) 「善現如幻士行四靜慮……觀菩薩句義無所有不可得亦如是」

右の文を符號(c)にて略し以下は異なる諸法を出すのみとす但しその諸法は「四靜慮乃至四無色定」のある所に相應して代入すべきものとす。

(d) 「善現如來應正等覺色相……觀菩薩句義無所有不可得亦如是」

右の文中如來の「色乃至識相のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(d)にて略し以下その諸法を略出す。

【二】如來應正等覺。如來と應供と等正覺、即ち佛の三號。佛號を擧ぐるには一號、三號或は十號を以てす。

初分菩薩品第十二之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、言ふ所の菩薩とは是れ何の句義なるやと。佛、善現に告げたまはく、句義無きは是れ菩薩の句義なり。所以は何ん。善現、菩提は不生、薩埵は有るに非ざるが故に、句義無きは是れ菩薩の句義なり。善現、空中の鳥の跡の句義の無所有不可得なるが如く、菩薩の句義の無所有不可得なるも亦た是の如し。善現、幻事の句義の無所有不可得なるが如く、菩薩の句義の無所有不可得なるも亦た是の如し。善現、眞如の句義の無所有不可得なるが如く、菩薩の句義の無所有不可得なるも亦た是の如し。善現、眞如の句義の無所有不可得なるが如く、菩薩の句義の無所有不可得なるも亦た是の如し。善現、法界の句義、法性の句義、法住の句義、法定の句義、不虛妄の句義、不變異の句義、離生性の句義、平等性の句義、實際の句義の無所有不可得なるが如く、菩薩の句義の無所有不可得なるも亦た是の如し。

復た次に(b)善現、幻士の色の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義の無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。善現、幻士の受想行識の句義無所有不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、菩薩の句義の無所有不可得なるを觀するも亦た是の如し。

(b)眼處乃至意處。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至諸受。(b)耳界乃至諸受。(b)鼻界乃至諸受。(b)舌界乃至諸受。(b)身界乃至諸受。(b)意界乃至諸受。(b)地界乃至識界。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門乃至無願解脫門。

【一】無義無所有を義とするを説く。

【二】菩提(Bohij)。道又は覺と譯す。これに二義あり、一は佛陀覺者の智慧即ち佛果、二は佛果に到る無上の佛道。

【三】不生。永く涅槃に入て再び生死の果報を受けざる意にて、涅槃、阿羅漢などと異名同義。

【四】薩埵(Sattva)。菩提薩埵の略、菩薩と同義。

【五】無所有不可得。無所有不可得も共に空の異名。

【六】空華。虛空華又は眼華などもいふ。見るべき實體なきものを有るが如くに見ること即ち妄想を云ふ。

【七】法界等。法界、法性、法住、法定、不虛妄、不變異、離生性、平等性、實際及び眞如、虛空界、不思議界を法性の十二名となす。

(b)「善現如幻士色句義無所有不可得菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時觀菩薩句義無所有不可得亦如是善現如幻士受想行識句義無所有不可得菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時觀菩薩句義無所有不可得亦如是」右の文中幻士の「色乃至識」に相應する所に次下に出ず語法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(b)にて略し以下その語法のみ略出す。

空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得
空・無性空・自性空・無性自性空の有所得を觀するを教へ、有所得の四靜慮を修するを教へ、有所得
の四無量・四無色定を修するを教へ、有所得の四念住を修するを教へ、有所得の四正斷・四神足・五
根・五力・七等覺支・八聖道支を修するを教へ、有所得の空解脫門を修するを教へ、有所得の無相無
願解脫門を修するを教へ、有所得の布施波羅蜜多を修するを教へ、有所得の淨戒・安忍・精進・靜慮・
般若波羅蜜多を修するを教へ、有所得の五眼を修するを教へ、有所得の六神通を修するを教へ、有
所得の佛の十力を修するを教へ、有所得の四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八不共法・一
切智・道相智・一切相智を修するを教ゆ。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、
是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行す時、此の惡友の攝受する
所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて、其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。
是の故に菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、諸の惡友に於て應に速に捨離すべしと。

是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞いて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若し爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り苾芻等の形像を作し菩薩摩訶薩の所に來至し、^(a) 有所得を以て方便と爲し、色の常無常相得可しと説き、受想行識の常無常相得べしと説き、有所得を以て方便と爲し、色の樂苦相得可しと説き、受想行識の樂苦相得可しと説き、有所得を以て方便と爲し、色の我無我相得可しと説き、受想行識の我無我相得可しと説き、有所得を以て方便と爲し、色の淨不淨相得可しと説き、受想行識の淨不淨相得可しと説き、有所得を以て方便と爲し、色の空不空相得可しと説き、受想行識の空不空相得べしと説き、有所得を以て方便と爲し、色の無願有願相得可しと説き、受想行識の無願有願相得可しと説き、有所得を以て方便と爲し、色の寂靜不寂靜相得可しと説き、受想行識の寂靜不寂靜相得可しと説き、有所得を以て方便と爲し、色の遠離不遠離相得可しと説き、受想行識の遠離不遠離相得可しと説かん。

^(a) 眼處乃至意處。 ^(a) 色處乃至法處。 ^(a) 眼界乃至諸受。 ^(a) 耳界乃至諸受。 ^(a) 鼻界乃至諸受。 ^(a) 舌界乃至諸受。 ^(a) 身界乃至諸受。 ^(a) 眼界乃至諸受。 ^(a) 地界乃至識界。 ^(a) 苦聖諦乃至道聖諦。 ^(a) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。 ^(a) 四靜慮乃至四無色定。 ^(a) 四念住乃至八聖道支。 ^(a) 空解脫門乃至無願解脫門。 ^(a) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。 ^(a) 五眼・六神通。 ^(a) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智、善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞いて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若しは爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り菩薩摩訶薩の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至し、^(a) 有所得を觀するを教へ、^(a) 外空・内外空・空空・大

^(a) 「以有所得爲方便説色常無常相可得……説受想行識遠離不遠離相可得」
右の文を所付の符號にて略し以下は只だ異なる諸法のみを出す。但しその諸法は「色乃至識」のある所に相應して代入すべきものとす。

是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若し爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り、親教軌範の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至し、菩薩の勝行なる謂ゆる四念住乃至八聖道支、布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多を厭離せしめ、及び一切智智の謂ゆる五眼・六神通、佛の十力乃至一切相智を厭離せしむるを教へ、唯だ空・無相・無願の三解脱門のみを修習するを教へ。汝此の法を學せば速に聲聞或は獨覺果の究竟安樂を證せん。何すれど勤苦して無上正等菩提に求趣するを用ひんと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

卷の第四十五

初分譬喩品第十一之一四

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若しは爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り父母の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至し告げて言はく、子子汝當に精勤し求めて預流・一來・不還・阿羅漢果を證すべし、永く生死の大苦を離れ、速に涅槃の究竟安樂を證するを得るに足らん、何すれど遠く無上菩提に趣くを用ひん。菩提を求めんには要す無量無數の大劫を經、生死に輪廻し、有情を教化し、身を捨て命を捨て、支を斷じ節を斷じ、徒らに自ら勤苦するも誰れか汝の恩を荷はん、所求の菩提或は得、得ずと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば

【七】親教軌範。親教は鄒波駄耶(Uṣṭhīya)。軌範は阿闍梨(Acārya)。共に師僧の意。

り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若しは爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り佛の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至して言はく、善男子、(i)色空にして我・我所無く受想行識空にして我・我所無し。(i)眼處乃至意處。(i)色處乃至法處。(i)眼界乃至諸受。(i)耳界乃至諸受。(i)鼻界乃至諸受。(i)舌界乃至諸受。(i)身界乃至諸受。(i)意界乃至諸受。(i)地界乃至識界。(i)苦聖諦乃至聖諦。(i)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(i)四靜慮乃至四無色定。(i)四念住乃至八聖道支。(i)空解脫門乃至無願解脫門。(i)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(i)五眼・六神通。(i)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。咄善男子、諸法は皆空にして我・我所無し、誰れか能く六到彼岸を修習せん。誰れか復た能く無上菩提を證せん。設ひ菩提を證すとも何の所用にか爲さんと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若し爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り獨覺の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至して言はく、善男子、十方皆空なり。諸佛菩薩及び聲聞衆都て有る所無しと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは、若し爲に魔事魔過を説かず、謂ゆる惡魔有り聲聞の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至し、一切智智に應ずる作意を毀訾して深く厭離せしめ、聲聞獨覺に應ずる作意を讚歎して極めて愛樂せしむ。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば

(i)「色空無我所受想行識空無我所」右の文を(i)の符號にて略し以下は只だ異なる諸法のみ出す但し「色乃至識」のある所に相應してその諸法は代入すべきもの。

受持すべからず、讀誦すべからず、思惟すべからず、尋究すべからず、他の爲に宣說開示すべからずと。善現、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲れば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、諸の菩薩摩訶薩の惡友とは、若しは爲に魔事魔過を説かず。謂ゆる惡魔有り佛の形像を作して來り、菩薩摩訶薩に六波羅蜜多を厭離するを教へて言はく、善男子、汝今何すれぞ此の般若波羅蜜多を修することを用ふる、汝今何すれぞ此の靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多を修することを用ふるやと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは若しは爲に魔事魔過を説かず。謂ゆる惡魔有り佛の形像を作して來り、菩薩摩訶薩の爲に聲聞獨覺相應の法の所謂契經（くわいぎやう）乃至論議を説き、分別開示し勸めて修學せしむ。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば、是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖れ有るなり。

復た次に善現、菩薩摩訶薩の惡友とは若しは爲に魔事魔過を説かず。謂ゆる惡魔有り佛の形像を作して菩薩摩訶薩の所に來至して言はく、善男子、汝菩薩の種姓無し、眞實の菩提心無し、不退轉地を證得する能はず、亦た無上菩提を證すること能はずと。善現、若し爲に是の如き等の事を説きて覺悟せしめずんば是れを菩薩摩訶薩の惡友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有

【六】契經乃至論議とは、契經、祇夜、授記、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝目多、闍陀伽、毘佛略、阿存達摩、論議の所謂十二部經にて、佛の説法に十二の樣式有り、經文中に十二種の體裁あるが故にかく名づく。

便善巧無く、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞かば、其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

(g) 四念住乃至八聖道支。(g) 空解脱門乃至無願解脱門。(g) 五眼・六神通。(g) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

(h) 善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切相智に應ずる心を離れて色の内空・外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空を觀ぜば色空を觀するに於て得る所有り、恃む所有り、有所得を以て方便と爲すが故に。一切相智に應ずる心を離れて受想行識の内空乃至無性自性空を觀ぜば、受想行識空を觀するに於て得る所有り、恃む所有り、有所得を以て方便と爲すが故に。善現、是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧無く、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞かば其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

(h) 眼處乃至意處。(h) 色處乃至法處。(h) 眼界乃至諸受。(h) 耳界乃至諸受。(h) 鼻界乃至諸受。(h) 舌界乃至諸受。(h) 身界乃至諸受。(h) 眼界乃至諸受。(h) 地界乃至諸受。(h) 苦聖諦乃至道聖諦。(h) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(h) 四靜慮乃至四無色定。(h) 四念住乃至八聖道支。(h) 空解脱門乃至無願解脱門。(h) 布施波羅蜜乃至般若波羅蜜多。(h) 五眼・六神通。(h) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

爾の時善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、諸の惡友の攝受する所と爲らば、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るやと。佛、佛善現に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩の惡友とは若しは般若波羅蜜多相應の法を厭離するを教へ、若しは靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多相應の法を厭離するを教へ、謂ゆる是の言を作さん、咄善男子、汝等此の六到彼岸相應の法に於て修學すべからず。所以は何ん。此の法は定めて如來の所説に非ず、是の文頌は妄りに製造せし所なり。是の故に汝等聽習すべからず、

(h) 善現若し菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時離應一切相智心觀色内空……聞説如是甚深般若波羅蜜多其心有驚有恐有怖

右の文中「色乃至識」に相應する所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(h)にて略し以下その諸法のみ略出す。

【二】 無方便。惡友を廣説す。
【三】 惡友。善友の對、惡知識。惡説を以て人を邪道に陥らしむるもの。
【四】 善男子。善とは佛を信じ法を聞くもの美稱、釋尊が常に在家出家の男子を呼ばれし語。

【五】 六到彼岸。六波羅蜜の譯。菩薩の不行(波羅蜜)能く生死の此岸より涅槃の彼岸に到らしむればかく名づく。

至般若波羅蜜多。(e)五眼・六神通。(e)佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。

(f)復た次に善現、諸の菩薩摩訶薩の善友とは謂ゆる若し能く無所得を以て方便と爲し、四靜慮を修する法不可得なるを説き、四無量、四無色定を修する法不可得なるを説くと雖も而かも此の法に依り善根を勤修するを勧め、聲聞獨覺に廻向せしめず唯だ一切智智のみを證得せしむ。善現、是れを菩薩摩訶薩の善友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の善友の攝受する所と爲れば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。

(f)四念住乃至八聖道支。(f)空解脱門乃至無願解脱門。(f)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f)五眼・六神通。(f)佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧無きが故に、是の如き甚深波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚き有り恐れ有り怖き有るやと。

佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を離れて般若波羅蜜多を修行せば、般若波羅蜜多を修するに於て得る所有り恃む所有り。有所得を以て方便と爲すが故に。一切智智に應ずる心を離れて靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多を修行せば靜慮乃至布施波羅蜜多を修するに於て得る所有り恃む所有り。有所得を以て方便と爲すが故に。善現是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧無く、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞かば其の心驚き有り恐れ有り怖き有るなり。

(g)善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を離れて四靜慮を修行せば四靜慮を修するに於て得る所有り恃む所有り。有所得を以て方便と爲すが故に。一切智智に應ずる心を離れて四無量・四無色定を修行せば四無量・四無色定を修するに於て得る所有り恃む所有り、有所得を以て方便と爲すが故に。善現、是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、方

(f)「復た善現諸菩薩摩訶薩善友者謂若能以無所得爲方便雖說修四靜慮法不可得說修四無量四無色定法不可得……聞說如是甚深般若波羅蜜多其心不驚不恐不怖。右の文中「四靜慮」の乃至四無色定」のある所に次下に出す諸法を相應して代入せば他は皆同文なり故に之を符號(f)にて略し以下その諸法ののみ略出す。

【二】有所得。無所得の對。執着の心、分別の心を云ふ。

(g)「善現若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時離應一切智智心修行四靜慮於修四靜慮有所得有所恃以有所得爲方便故離應一切智智心修行四無量四無色定……聞說如是甚深般若波羅蜜多其心有驚有恐有怖右も(f)の場合と全く同方法により以下略出す。」

友の攝受する所と爲れば、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚かず恐れず怖かさるやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩の善友とは謂ゆる若し能く無所得を以て方便と爲して色の常無常相不可得なるを説き、受想行識の常無常相不可得なるを説き、色の樂苦相不可得なるを説き、受想行識の樂苦相不可得なるを説き、色の我無我相不可得なるを説き、受想行識の我無我相不可得なるを説き、色の淨不淨相不可得なるを説き、受想行識の淨不淨相不可得なるを説き、色の空不空不可得なるを説き、受想行識の空不空不可得なるを説き、色の無相有相相不可得なるを説き、受想行識の無相有相相不可得なるを説き、色の無願有願相不可得なるを説き、受想行識の無願有願相不可得なるを説き、色の寂靜不寂靜相不可得なるを説き、受想行識の寂靜不寂靜相不可得なるを説き、色の遠離不遠離相不可得なるを説き、受想行識の遠離不遠離相不可得なるを説き、及び此の法に依りて善根を勤修するを勧め、聲聞獨覺に廻向せしめず、唯だ一切智智のみを證得せしむ。善現、是れを菩薩摩訶薩の善友と爲す。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、此の善友の攝受する所と爲れば、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かさるなり。

(e) 眼處乃至意處。(e) 色處乃至法處。(e) 眼界乃至諸受。(e) 耳界乃至諸受。(e) 鼻界乃至諸受。(e) 舌界乃至諸受。(e) 身界乃至諸受。(e) 眼界乃至諸受。(e) 地界乃至諸受。(e) 苦聖諦乃至道聖諦。(e) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。

卷の第四十四

初分譬喩品第十一之三

(e) 四靜慮乃至四無色定。(e) 四念住乃至八聖道支。(e) 空解脫門乃至無願解脫門。(e) 布施波羅蜜多乃至

(e) 「佛告善現」の代りに「復次善現」の語を以てし
 「復次善現諸菩薩摩訶薩善友者謂若能以無所得爲方便説色常無常相不可得説受想行識常無常相不可得……若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時爲此善友之所攝受聞説如是甚深般若波羅蜜多其心不驚不怖」右の文中「色乃至法」の五蘊に相應する所に次に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(e)にて略し以下その諸法のみ略出す。
 【八】菩薩摩訶薩の善友。

(e) 前卷所用の符號を其儘用

意を捨てずんば、善現、是れを菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、精進波羅蜜多に著する所無しと爲く。是の如き菩薩摩訶薩は此の精進波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、聲聞獨覺に應ずる心を以て、一切法の常無常相不可得、樂苦相不可得、我無我相不可得、淨不淨相不可得、空不空相不可得、無相有相相不可得、無願有願相不可得、寂靜不寂靜相不可得、遠離不遠離相不可得なるを觀ぜずんば無所得を以て方便と爲すが故に。中に於て聲聞獨覺に應ずる心及び餘の非善心の而かも爲に散動するを起さず。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多に著する所無しと爲く。是の如き菩薩摩訶薩は此の靜慮波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。

善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の如き觀を作さん、色を空するが故に色空なるに非ず、色は即ち是れ空、空に即ち是れ色なり。受想行識も亦復た是の如し。(d)眼處乃至意處。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)意界乃至諸受。(d)地界乃至識界。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)四念住乃至八聖道支。(d)空解脫門乃至無願解脫門。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多に著する所無しと爲く。是の如き菩薩摩訶薩は此の般若波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるなりと。

爾の時善現、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、諸の善

【四】 無著精進波羅蜜多。

【五】 無著靜慮波羅蜜多。

(d) 「非空色故色空、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是」右の文を所附の符號にて略し以下は異なる諸法を出すに止む但しその諸法は「色乃至識」のある所に相應して代入すべきものとす。

【六】 無著般若波羅蜜多。

【七】 善友守護の縁を説く。

復た次に善現、若し菩薩摩訶薩、此の觀を作す時復た是の念を興こさん、我れ當に無所得を以て方便と爲し、諸の有情の爲に一切法の常無常相不可得・樂苦相不可得・我無我相不可得・淨不淨相不可得・空不空相不可得・無相有相相不可得・無願有願相不可得・寂靜不寂靜相不可得・遠離不遠離相不可得なるを説かんと。善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多に著する所無しと爲く。是の如き菩薩摩訶薩は此の布施波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞きて、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、聲聞獨覺に應ずる心を以て、一切法の常無常相不可得・樂苦相不可得・我無我相不可得・淨不淨相不可得・空不空相不可得・無相有相相不可得・寂靜不寂靜相不可得・遠離不遠離相不可得なるを觀ぜずんば無所得を以て方便と爲すが故に、善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に、是の如き甚深般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、れ怖かざるなり。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て方便と爲し、一切法の常無常相不可得・樂苦相不可得・我無我相不可得・淨不淨相不可得・空不空相不可得・無相有相相不可得・無願有願相不可得・寂靜不寂靜相不可得・遠離不遠離相不可得なるを觀じ、能く是の中に於て安忍し欲樂せば善現、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多に著する所無しと爲く。是の如き菩薩摩訶薩は此の安忍波羅蜜多に由り、方便善巧有るが故に、是の如き甚深般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。善現、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て一切法の常無常相不可得・樂苦相不可得・我無我相不可得・淨不淨相不可得・空不空相不可得・無相有相相不可得・無願有願相不可得・寂靜不寂靜相不可得・遠離不遠離相不可得なるを觀じ、無所得を以て方便と爲すと雖も而かも常に一切智智相應の作

【一】 無著布施波羅蜜多。

【二】 無著淨戒波羅蜜多。

【三】 無著安忍波羅蜜多。

し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智智に應ずる心を以て、色の常無常相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の常無常相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の樂苦相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の樂苦相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の我無我相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の我無我相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の淨不淨相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の淨不淨相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の空不空相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の空不空相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の無相有相相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の無相有相相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の無願有願相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の無願有願相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の寂靜不寂靜相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の寂靜不寂靜相不可得なるを觀じ。一切智智に應ずる心を以て、色の遠離不遠離相不可得なるを觀じ、受・想・行・識の遠離不遠離相不可得なるを觀せば、善現、是の如き菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧有るが故に、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞きて其の心驚かず恐れず怖かざるなり。

(c) 眼處乃至意處。(c) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至諸受。(c) 耳界乃至諸受。(c) 鼻界乃至諸受。(c) 舌界乃至諸受。(c) 身界乃至諸受。(c) 眼界乃至諸受。(c) 地界乃至識界。(c) 苦聖諦乃至道聖諦。(c) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 四靜慮乃至四無色定。

卷の第四十三

初分譬喩品第十一之二

(c) 四念住乃至八聖道支。(c) 空解脫門乃至無願解脫門。(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 五眼・六神通。(c) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

訶薩は能く一切智智を成辦すと。爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩摩訶薩、無上正等菩提を證し般若波羅蜜多を修學せんと欲する時は當に五幻士の如く般若波羅蜜多を修學し一切事に於て分別する所無かるべし。何を以ての故に、當に知るべし、幻士は即ち五蘊等、五蘊等は即ち幻士なるが故にと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、幻の如き五蘊等能く般若波羅蜜多を學せば一切智智を成辦するや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。何を以ての故に、是の幻の如き五蘊等無性を以て自性と爲し、無性の自性不可得なるが故に。善現、意に於て云何、夢の如く響の如く光影の如く像の如く空花の如く陽焰の如く尋香城の如く變化の如き五蘊等能く般若波羅蜜多を學し一切智智を成辦するや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。何を以ての故に、是の夢の如き五蘊等、乃至變化の如き五蘊等は五無性を以て自性と爲し、無性の自性不可得なるが故に。善現、意に於て云何、是の幻等の如き五蘊等の法、各異り有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と、何を以ての故に、是の幻等の如き色受想行識は即ち是れ夢等の如き色受想行識、是の幻等の如き色受想行識は即ち是れ幻等の如き六根等、是の幻等の如き六根等は即ち是れ幻等の如き色受想行識にして皆内空にして得可からざるに由るが故に、乃至皆無性自性空にして得可からざるに由るが故なりと。

六爾の時具壽善現復た佛に白して言さく、世尊、新發趣大乘の菩薩摩訶薩、是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞かば、其の心將に驚恐怖無しとするや不やと。佛、善現に告げたまはく、新發趣大乘の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、若し方便善巧無く、善友に攝受せられずして是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞かば其の心驚き有り恐れ有り怖き有らんと。爾の時善現白して言さく、世尊、何等の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、方便善巧有るが故に是の如き甚深の般若波羅蜜多を説くを聞き、其の心驚かず恐れず怖かざるやと。(c)佛、善現に告げたまはく、若

【四】幻士。奇術師。

【五】無性。性は體の義、一切諸法に實證無きをいふ。

【六】菩薩般若を行ずるものあることなしと附き疑を生ずるを以て方便を明す。

【七】善友。賀里也曇蜜怛羅 (Kalyāṇamitra) の譯、或は善知識、善親友、勝友などと譯す。佛法の正道を開示し勝益を得しむる師友、すべての善事を我と共に爲す益友の稱。(c)「佛告善現」の代りに「善現」の語を以てし。

「善現若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時以應一切智智心觀色常無常相不可得親受想行識常無常相不可得……聞說如是甚深般若波羅蜜多其心不驚不恐不怖」

右の文中「色乃至識」のある所に相應して次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之符號(c)にて略し以下諸法のみ略出す。

受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)地界乃至識界。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎憂惱。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)四念住乃至八聖道支。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)五眼・六神通。(a)佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。(a)無上等菩提。

佛、善現に告げたまはく、意に於て云何。幻に雜染有り清淨有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。善現、意に於て云何。幻に生有り滅有りや不やと。善現、答へて言はく、不なり世尊と。(b)善現、意に於て云何。若し法に雜染無く清淨無く生無く滅無くんば是の法能く般若波羅蜜多を學し一切相智を成辦するや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。善現、意に於て云何。若し法に雜染無く清淨無く生無く滅無くんば是の法能く靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多を學し一切相智を成辦するや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。(b)四靜乃至四無色定。(b)四念住乃至八聖道支。(b)空解脫門、乃至無願解脫門。(b)五眼・六神通。(b)佛の十力乃至十八佛不共法・一切智乃至相智。善現、意に於て云何。五蘊等の法・想・等想に異り言説を假立し菩薩摩訶薩有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。善現、意に於て云何。唯だ五蘊等の法・想・等想に於て言説を假立し、爲れを菩薩摩訶薩と謂ふのみなる耶と。善現答へて言はく、是の如し世尊と。善現、意に於て云何。是れ唯だ五蘊等の法・想・等想に於て言説を假立するのみならば雜染有り、清淨有り、生有り滅有りや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。善現、意に於て云何。若し法に想無く等想無く、假立無く言説無く、名無く名假無く、身無く身業無く、語無く語業無く、意無く意業無く、雜染無く清淨無く、生無く滅無くんば是の法能く般若波羅蜜多乃至一切相智を學して一切相智を成辦するや不やと。善現答へて言はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、能く是の如き無所得を以て方便を爲し般若波羅蜜多乃至一切相智を學せば當に知るべし、是の菩薩摩

【二】菩薩幻人別なきを説く。
 【三】雜染。一切有漏法の總稱。善、惡、無記の三性を兼ぬ。
 (b)「善現於意云何若法無雜染無清淨無生無滅是法能學般若波羅蜜多靜慮精進安忍淨戒布施波羅蜜多成辦一切相智不」善現答言不也世尊」
 右の文章を所附の符號にて略し以下只だ異なる諸法のみ出す但し「般若乃至布施波羅蜜多」のある所に相應して次下所出の諸善は代入すべきものとす。

卷の第四十二

初分譬喻品第十一之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く般若波羅蜜多を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多を學し一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべき。世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く四靜慮を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く四無量、四無色定を學し、一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべき。世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く四念住を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を學し、一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべき。世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く空解脫門を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く無相・無願解脫門を學し、一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべき。世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く五眼を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く六神通を學し一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべき。世尊、若し問ひ有りて言はん、幻士能く佛の十力を學し一切智智を成辦するや不や、幻士能く四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智を學し一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべきと。佛、善現に告げたまはく、我れ還つて汝に問はん、汝の意に隨つて答へよ。(a)善現、意に於て云何。色と幻と異り有りや不や、受想行識と幻と異り有りや不や。善現答へて言はく、不なり世尊と。何を以ての故に、色幻に異らず、幻色に異らず、色は即ち是れ幻、幻は即ち是れ色。受想行識も亦復た是の如し。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸

【二】 幻と諸法と異らざるを明す。

(a) 「善現於意云何色與幻有異不受想行識與幻有異不……」
右の文を所附の符號にて略し以下只だ異なる諸法のみ出す但し「色乃至諸法」のある所に相應してその諸法は代入すべきものとす。

多を修行する時、是れ般若波羅蜜多を學せば則ち能く一切智智を成辦するやと。佛、舍利子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多を見ず乃至一切相智を見ずんば、是れ般若波羅蜜多を學するなり、則ち能く一切智智を成辦す。何を以ての故に、無所得を以て方便と爲すが故に。舍利子言はく、是の菩薩摩訶薩は何の法に於て無所得を方便と爲すやと。佛言はく、是の菩薩摩訶薩は布施波羅蜜多に於て無所得を方便と爲し、淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多に於て無所得を方便と爲し、乃至佛の十力に於て無所得を方便と爲し、四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智に於て無所得を方便と爲すと。舍利子言はく、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、何が故に無所得を以て方便と爲すやと。佛言はく、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、內空を以ての故に無所得を方便と爲し、乃至無性自性空を以ての故に無所得を方便と爲す。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是れ般若波羅蜜多を學せば則ち能く一切智智を成辦すと。

眼・六神通。舍利子、⁽¹⁾佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。舍利子、愚夫異生は諸法に於て有性に執著するを以て諸法空に於て信受すること能はず。住せざるに由るが故に、聲聞・獨覺・菩薩・如來の所有聖法を成辦すること能はず、故に聖法に於て安住すること能はざるなり。是の故に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を學せんと欲し、一切智・道相智・一切相智を成辦せんと欲せば、當に無所得を以て方便と爲し應する如くして學すべしと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、菩薩摩訶薩有りて是の如き學を作すに般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦する能はずと爲すや不やと。佛、舍利子に告げたまはく、菩薩摩訶薩有りて是の如き學を作すに般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦すること能はざるなりと。舍利子言はく、世尊、何に緣りて菩薩摩訶薩有りて是の如き學を作すに般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦する能はざるやと。佛言はく、⁽¹⁾舍利子、若し菩薩摩訶薩、方便善巧無くして般若波羅蜜多に於て分別し執著し、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多に於て分別し執著せば是の如き菩薩摩訶薩は是の如き學を作すも般若波羅蜜多を學するに非ず、一切相智を成辦する能はざるなり。⁽¹⁾色乃至識。⁽¹⁾眼處乃至意處。⁽¹⁾色處乃至法處。⁽¹⁾眼界乃至諸受。⁽¹⁾耳界乃至諸受。⁽¹⁾鼻界乃至諸受。⁽¹⁾舌界乃至諸受。⁽¹⁾身界乃至諸受。⁽¹⁾意界乃至諸受。⁽¹⁾地界乃至識界。⁽¹⁾苦聖諦乃至道聖諦。⁽¹⁾無明乃至老死愁歎苦憂惱。⁽¹⁾四靜慮乃至四無色定。⁽¹⁾四念住乃至八聖道支。⁽¹⁾五眼、六神通。⁽¹⁾佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。舍利子、是の因緣を以て菩薩摩訶薩有りて是の如き學を作すも般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦すること能はずと。舍利子言はく、是の如き菩薩摩訶薩、是の如き學を作すも般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦する能はざる耶と。佛言はく、是の如き菩薩摩訶薩、是の如き學を作すも般若波羅蜜多を學するに非ずんば、一切相智を成辦する能はざるなりと。時に舍利子復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜

【二】一切相智。佛智の稱。聲聞緣覺の智を混ずる一切智（三智の一）と特に區別せんが爲にかく云ふ。

【一】「舍利子若菩薩摩訶薩無方便善巧於般若波羅蜜多分別執著於靜慮精進安忍淨戒布施波羅蜜多分別執著如是菩薩摩訶薩作如是學非學般若波羅蜜多不能成辦一切相智」右の文中「般若乃至布施波羅蜜多」のある所に相應して次に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號【一】で略し以下その諸法のみ略出す。

らず見ざるやと。佛言はく、色に於て知らず見ず、受・想・行・識に於て知らず見ず、乃至一切相智に於て知らず見ざるなり。諸法に於て知らず見ざるに由りて愚夫異生數の中に墮在して出離すること能はざるなりと。舍利子言はく、彼れ何處より出離すること能はざるやと。佛言はく、彼れ欲界より出離すること能はず、色界より出離すること能はず、無色界より出離すること能はざるなり。出離せざるに由りて聲聞法に於て成辦する能はず、獨覺法に於て成辦する能はず、菩薩法に於て成辦する能はず、如來法に於て成辦する能はざるなり。成辦せざるに由りて信受すること能はずと。舍利子言はく、彼れ何の法に於て信受する能はざるやと。佛言はく、彼れ色空に於て信受する能はず、受・想・行・識空に於て信受する能はず。乃至一切相智空に於て信受する能はざるなり。信受せざるに由りて則ち住すること能はずと。舍利子に言はく、何等の法に於て彼れ住すること能はざるやと。佛言はく、謂ゆる四念住に住すること能はず。四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支に住すること能はず。布施波羅蜜多に住すること能はず、淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多に住すること能はず、不退轉地に住すること能はず。五眼に住すること能はず、六神通に住すること能はず。佛の十力に住すること能はず、四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智に住すること能はざるなり。此れに由るが故に愚夫異生と名づく、諸法に於て有性に執著するを以てなりと。舍利子言はく、彼れ何の法に於て有性に執著するやと。佛言はく、舍利子、⁽ⁱ⁾ 彼れ色に於て有性に執著し、受・想・行・識に於て有性に執著す。舍利子、⁽ⁱ⁾ 眼處乃至意處。色處乃至法處。舍利子、⁽ⁱ⁾ 眼界乃至諸受。耳界乃至諸受。鼻界乃至諸受。舌界乃至諸受。身界乃至諸受。意界乃至諸受。舍利子、⁽ⁱ⁾ 地界乃至識界。舍利子、⁽ⁱ⁾ 欲界・色・無色界。舍利子、⁽ⁱ⁾ 苦聖諦乃至道聖諦。舍利子、⁽ⁱ⁾ 無明乃至老死愁歎憂惱。舍利子、⁽ⁱ⁾ 貪瞋癡、諸の見趣。舍利子、⁽ⁱ⁾ 四靜慮乃至四無色定。舍利子、⁽ⁱ⁾ 四念住乃至八聖道支。舍利子、⁽ⁱ⁾ 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。舍利子、⁽ⁱ⁾ 五

【四】有性。無性の對、出離解脱の性有るもの。

(i) 「彼れ色執著有性於受想行識執著有性」
右の文章を所附の符號にて略し以下只だ異なる諸法のみ出す但し「色乃至識」に相應する所にその諸法は代入すべきものとす。

(g)獨覺。(c)菩薩。(g)如來。舍利子言はく、世尊、説きたまふ所の畢竟淨とは是れ何等の義なるやと。佛言はく、諸法は出でず生ぜず没せず盡きず染著く淨無く得る無く爲す無し。是の如きを名づけて畢竟淨の義と爲すと。

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、菩薩摩訶薩是の如く學する時何の法を學すと爲すやと。佛、舍利子に告げたまはく、菩薩摩訶薩、是の如く學する時、一切法に於て都て學する所無し。

何を以ての故に、一切法は是の如くにして諸の愚夫異生の執する所の如く中に於て學すべき有るに非ざればなり。舍利子言はく、若し爾れば諸法は如何にして有るやと。佛言はく、(h)色は所有無く、受・想・行・識は所有無し、内空を以ての故に、外空の故に、内外空の故に、空空の故に、大空の故に、勝義空の故に、有爲空の故に、無爲空の故に、畢竟空の故に、無際空の故に、散空の故に、無變異空の故に、本性空の故に、自相空の故に、共相空の故に、一切法空の故に、不可得空の故に、無性空の故に、自性空の故に、無性自性空の故に。舍利子、(h)眼處乃至意處。(h)色處乃至法處。舍利子、(h)眼界乃至諸受。(h)眼界乃至諸受。(h)鼻界乃至諸受。(h)舌界乃至諸受。(h)身界乃至諸受。(h)意界乃至諸受。舍利子、(h)地界乃至識界。舍利子、(h)欲界・色・無色界。舍利子、(h)苦聖諦乃至道聖諦。舍利子、(h)無明乃至老死愁歎苦憂惱。舍利子、(h)貪瞋癡、諸の見趣。舍利子、(h)四靜慮乃至四無色定。舍利子、(h)四念住乃至八聖道支。舍利子、(h)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。舍利子、(h)五眼・六神通。舍利子、(h)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。舍利子、愚夫異生若し是の如き無所有の法に於て了達する能はずんば説いて無明と名づく。彼れ、無明及び愛の勢力に由りて、斷常二邊を分別し執著す、此れに由りて諸法の、無所有性を知らず見ずして諸法を分別す。分別するに由るが故に便ち色受想行識に執著し乃至一切相智に執著す。執著に由るが故に諸法の無所有性を分別す。此れに由りて法に於て知らず見ざるなり。舍利子言はく、何等の法に於て知

【一〇】 實相無所有の學たるを説く。

(h) 「色無所有受想行識無所有以內空故外空故……無性自性空故」
右の文章を所附の符號もて略し以下只だ異なる諸法を田すのみとす但し「色乃至識」のある所に相應して次下所出の諸法は代入すべきものとす

【一】 無明(Avidya)。癡の異名。十二因縁の第一。諸法の事理を明了に理解し得ない心の法。根本煩惱を云ふ。

【二】 斷常二邊。斷見と常見の二にて、これを邊見と名け五惡見の第二となす。有情の身心は一期にて斷絶すとすを斷見と云ひ、之に反して身心共に常住不滅となすを常見と云ひ、共に邪見。

【三】 無所有性。無所有は無所得といふた同じ、空の異名。

んと欲せば應に是の如く學すべく、四無量・四無色定を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。善現、菩薩摩訶薩、四念住を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。善現、菩薩摩訶薩、五眼を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。六神通を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。善現、菩薩摩訶薩、佛の十力を學せんと欲せば應に是の如く學すべく、四無所長・四無礙解・大慈・大悲・大喜・大捨・十八佛不共法・一切智・道相智・一切相智を學せんと欲せば應に是の如く學すべしと。時に舍利子、佛に白して言さく、世尊、菩薩摩訶薩、是の如く學することを作さば正しく般若波羅蜜多を學すと爲し、乃至正しく一切相智を學すと爲す耶と。佛、舍利子に告げたまはく、菩薩摩訶薩、是の如く學することを作すは正しく般若波羅蜜多を學すと爲す。無所得を以て方便と爲すが故に。乃至正しく一切相智を學すと爲す。無所得を以て方便と爲すが故にと。時に舍利子復た佛に白して言さく、世尊、菩薩摩訶薩、是の如く學することを作すは無所得を以て方便と爲して般若波羅蜜多を學し、乃至無所得を以て方便と爲して一切相智を學する耶と。佛、舍利子に告げたまはく、菩薩摩訶薩、是の如く學することを作すは無所得を以て方便と爲して般若波羅蜜多を學し、無所得を以て方便と爲して一切相智を學するなりと。舍利子言はく、無所得とは何等の法か得可からずと爲す耶と。佛言はく、(g)我は不可得なり、畢竟淨なるが故に。有情・命者・生者・養者・士夫・數取趣・意生・儒童・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者は不可得なり畢竟淨なるが故に。(g)色乃至識。(g)眼處乃至意識處。(g)色處乃至法處。(g)眼界乃至諸受。(g)眼界乃至諸受。(g)鼻界乃至諸受。(g)舌界乃至諸受。(g)身界乃至諸受。(g)意界乃至諸受。(g)地界乃至識界。(g)欲界色、無色界。(g)苦聖諦乃至道聖諦。(g)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(g)四靜慮乃至四無色定。(g)四念住乃至八聖道支。(g)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g)五眼・六神通。(g)佛の十力乃至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。(g)預流乃至阿羅漢。

【九】諸三昧を分別するを以て舍利弗これを得るを學般若と思ふ。故に不可得なるを明かにす。

(g)「我不可得畢竟淨故有情命者生者養者士夫數取趣意生儒童作者使作者起者使起者受者使受者知者見者不可得畢竟淨故」右の文中「我有情乃至知者見者」の十六知見に相應する所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(g)にて略し以下諸法を略出すのみとす

所と爲ると。舍利子是の菩薩摩訶薩は是の如き諸の三摩地に住すと雖も而かも此の諸の三摩地を見ず、亦た此の諸の三摩地に著せず、亦た念言せず、我れ已に此の諸の三摩地に入れり、我れ今此の諸の三摩地に入り、我れ當に此の諸の三摩地に入るべし、唯だ我れのみ能く入り、餘の能ふ所に非すと。彼れ是の如き等の尋思分別は斯の定力に由りて現行せずと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、別に實に菩薩摩訶薩の是の如き等の諸の三摩地に住する有りて、已に過去現在の諸佛に授記せらると爲す耶と。善現答へて言はく、不なり舍利子。何を以ての故に、舍利子、般若波羅蜜多是諸の三摩地に異らず、諸の三摩地は般若波羅蜜多に異らず、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多及び三摩地に異らず、般若波羅蜜多及び三摩地は菩薩摩訶薩に異らず、般若波羅蜜多は即ち是れ諸の三摩地なり、諸の三摩地は即ち是れ般若波羅蜜多なり、菩薩摩訶薩は即ち是れ般若波羅蜜多及び三摩地なり、般若波羅蜜多及び三摩地は即ち是れ菩薩摩訶薩なればなり。所以は何ん、一切の法性平等なるを以ての故に。舍利子言はく、若し一切の法性平等なれば此の三摩地示現す可きや不やと。善現答へて言はく、示現す可からずと。舍利子言はく、是の菩薩摩訶薩は此の三摩地に於て想解有りや不やと。善現答へて言はく、彼れ想解無しと。舍利子言はく、彼れ何が故に想解無きやと。善現答へて言はく、彼れ分別無きが故なりと。舍利子言はく、彼れ何が故に分別無きやと。善現答へて言はく、一切の法性都て所有無きが故に、彼れ定に於て分別を起こさざるなり、此の因縁に由りて是の菩薩摩訶薩は一切法及び三摩地に於て俱に想解無し。何を以ての故に、一切法及び三摩地は俱に所有無きを以て、所有無き中分別想解の由りて起る無きが故なりと。時に薄伽梵、善現を讀めて言はく、善哉善哉、汝の所説の如し、故に我れ説く汝、無評定に住すること聲聞衆中最も爲れ第一なりと。斯れに由りて我れ義と相應すと説く。善現、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を學せんと欲せば應に是の如く學すべく、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。善現、菩薩摩訶薩、四靜慮を學せ

【五】 現行。第八識内の種子が一切現象を開發するを云ふ。

【六】 法性 (Dharmatā)。不變不改の法の意。實相、眞如、法界、涅槃などと異名同義にて萬有の本體を云ふ。

【七】 薄伽梵 (Bhagavat)。佛十號の一。世尊と譯す。
【八】 無評定。定理に安住して他と評はざる禪定。

摩地・寶積三摩地・妙法印三摩地・一切法性平等三摩地・棄捨塵愛三摩地・法涌圓滿三摩地・入法頂三摩地・寶性三摩地・拾喧諍三摩地・飄散三摩地・分別法句三摩地・決定三摩地・無垢行三摩地・字平等相三摩地・離文字相三摩地・斷所緣三摩地・無變異三摩地・無種類三摩地・入名相三摩地・無所作三摩地・入決定名三摩地・行無相三摩地・離翳闇三摩地・具行三摩地・不變動三摩地・度境界三摩地・集一切功德三摩地・無心住三摩地・決定住三摩地・淨妙花三摩地・具覺支三摩地・無邊辯三摩地・無邊燈三摩地・無等等三摩地・超一切法三摩地・決判諸法三摩地・散疑三摩地・無所住三摩地・一相莊嚴三摩地・引發行相三摩地・一行相三摩地・離諸行相三摩地・妙行三摩地・達諸有底遠離三摩地・入一切施設語言三摩地・堅固寶三摩地・於一切法無所取著三摩地・電焰莊嚴三摩地・除遣三摩地・無勝三摩地・法炬三摩地・慧燈三摩地・趣向不退轉神通三摩地・解脫音聲文字三摩地・炬熾然三摩地・嚴淨相三摩地・無相三摩地・無濁忍相三摩地・具一切妙相三摩地・具總持三摩地・不喜一切苦樂三摩地・無盡行相三摩地・攝伏一切正邪性三摩地・斷憎愛三摩地・離違順三摩地・無垢明三摩地・極堅固三摩地・滿月淨光三摩地・大莊嚴三摩地・無執電光三摩地・能照一切世間三摩地・能救一切世間三摩地・定平等性三摩地・無塵有塵平等理趣三摩地・無諍有諍平等理趣三摩地・無巢穴無標幟無愛樂三摩地・決定安住眞如三摩地・器中涌出三摩地・燒諸煩惱三摩地・大智慧炬三摩地・出生十力三摩地・開闢三摩地・壞身異行三摩地・壞語惡行三摩地・壞意惡行三摩地・善觀察三摩地・如虛空三摩地・無染著加虛空三摩地なり。舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の如き等の諸の三摩地に於て恆に住して捨てずんば速かに無上正等菩提を證す。復た所餘の無量無數の三摩地門、陀羅尼門有り若し菩薩摩訶薩、能善く修學せば亦た速に阿耨多羅三藐三菩提を證せしむと。

爾の時具壽善現、佛の神力を承け舍利子に語つて言はく、若し菩薩摩訶薩の是の如き等の三摩地に住する者は、當に知るべし已に過去の諸佛の授記する所と爲り亦た現在十方の諸佛の授記する

【四】授記。佛が發心の衆生に對して當來必當作佛の記別を授與すること。

す。所以は何ん、般若波羅蜜多是都て無自性にして取る可からざるを以ての故なり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法及び般若波羅蜜多に於て都て取る所無く、執著する所無し。是れを菩薩摩訶薩の於一切法無所取著三摩地と名づく。此の三摩地は微妙殊勝廣大無量にして能く無邊無礙の作用を集む。一切の聲聞・獨覺と共にならず。舍利子、若し菩薩摩訶薩、此の三摩地に於て恆に住して捨てずんば速に無上正等菩提を證すと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、諸の菩薩摩訶薩、但だ此の三摩地のみに於て恆に住して捨てずんば速に無上正等菩提を證すと爲すや、更らに餘の諸の三摩地有りて恆に住して捨てずんば亦た菩薩摩訶薩をして速に無上正等菩提を證せしむと爲すやと。善現答へて言はく、但だ此の一三摩地に於てのみに非ず、更らに所餘の諸の三摩地有りて諸の菩薩摩訶薩恆に住して捨てずんば速に無上正等菩提を證すと。舍利子言はく、何者か是れなる耶と。善現答へて言はく、所謂 健行三摩地・寶印三摩地・師子遊戲三摩地・妙月三摩地・月幢相三摩地・一切法海三摩地・觀頂三摩地・法界決定三摩地・決定幢相三摩地・金剛噉三摩地・入法印三摩地・三摩地王三摩地・善安住三摩地・善立定王三摩地・放光三摩地・無忘失三摩地・放光無忘失三摩地・精進力三摩地・莊嚴力三摩地・等涌三摩地・入一切言詞決定三摩地・入一切名字決定三摩地・觀方三摩地・總持印三摩地・諸法等趣海印三摩地・王印三摩地・遍覆虚空三摩地・金剛輪三摩地・三輪清淨三摩地・無量光三摩地・無著無障三摩地・斷諸法轉三摩地・棄捨珍寶三摩地・遍照三摩地・不眴三摩地・無相住三摩地・不思議三摩地・降伏四魔三摩地・無垢燈三摩地・無邊光三摩地・發光三摩地・普照三摩地・淨堅定三摩地・師子奮迅三摩地・師子頻申三摩地・師子欠呿三摩地・無垢光三摩地・妙樂三摩地・電燈三摩地・無盡三摩地・最勝幢相三摩地・帝相三摩地・順明正流三摩地・具威光三摩地・離盡三摩地・不可動轉三摩地・寂靜三摩地・無瑕隙三摩地・日燈三摩地・月淨三摩地・淨眼三摩地・淨光三摩地・月燈三摩地・發明三摩地・應作不應作三摩地・智相三摩地・金剛鬘三摩地・住心三摩地・普明三摩地・妙安立三

【二】 諸三昧を廣説す。

【三】 健行三摩地乃至無染著加盧空三摩地を所謂百八三昧と稱す。これ佛の所説にして時人利根の故に皆信解を得たりといふ。(智度論四十七)

卷の第四十一

初分般若行相品第十之四

(f) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(g) 五眼・六神通。(h) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。

舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は方便善巧有りて般若波羅蜜多を修行して能く無上正等菩提を得。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て有を取らず、非有を取らず、亦有亦非有を取らず、非有非非有を取らず、不取に於て亦た取らずと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の因縁の故に、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て都て取る所無きやと。善現答へて言はく、一切法の自性不可得なるに由る。何を以ての故に、一切法無性を以て自性と爲すが故なり。此の因縁に由りて若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て若しは有を取り、若しは非有を取り、若しは亦有亦非有を取り、若しは非有非非有を取り、若しは不取を取らば般若波羅蜜多を行するに非ず。所以は何ん、一切法は都て無自性にして取る可からざるを以ての故なり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多に於て行を取らず、不行を取らず、亦行亦不行を取らず、非行非不行を取らず、不取に於て亦た取らずと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何の因縁の故に是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多に於て都て取る所無きやと。善現答へて言はく、般若波羅蜜多の自性不可得なるに由る。何を以ての故に、般若波羅蜜多は無性を以て自性と爲すが故なり。此の因縁に由りて若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、般若波羅蜜多に於て若しは行を取り、若しは不行を取り、若しは亦行亦不行を取り、若しは非行非不行を取り、若しは不取を取らば般若波羅蜜多を行するに非

(f) 前卷に同じ

【二】以下般若波羅蜜多の自性無性の理を説く。

るなり。色の無相有相を行ぜず、色の無相有相相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。
 受・想・行・識の無相有相を行ぜず、受・想・行・識の無相有相相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。色の無願有願を行ぜず、色の無願有願相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。
 受・想・行・識の無願有願を行ぜず、受・想・行・識の無願有願相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。色の寂靜不寂靜を行ぜず、色の寂靜不寂靜相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。
 受・想・行・識の寂靜不寂靜相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。色の遠離不遠離を行ぜず、色の遠離不遠離相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。
 受・想・行・識の遠離不遠離相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行するなり。舍利子、當に知るべし是れを菩薩摩訶薩方便善巧有りて般若波羅蜜多を修行すと爲すと。何を以ての故に、舍利子、色の色性空、受・想・行・識の受・想・行・識性空なればなり。舍利子、是の色は色空に非ず、是の色空は色に非ず、色は空を離れず、空は色を離れず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識も亦復た是の如し。
 (f) 眼處乃至意處。(f) 色處乃至法處。

卷の第四十

初分般若行相品第十之三

(f) 眼界乃至諸受。(f) 耳界乃至諸受。(f) 鼻界乃至諸受。(f) 舌界乃至諸受。(f) 身界乃至諸受。(f) 眼界乃至諸受。(f) 地界乃至識界。(f) 苦聖諦乃至道聖諦。(f) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(f) 四靜慮乃至四無色定。(f) 四念住乃至八聖道支。

(f) 前卷の符號の意と同じ

共法、一切智乃至一切相智。若し菩薩摩訶薩方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する時若し聲聞に於て及び彼の法に於て想勝解に住せば便ち聲聞に於て及び彼の法に於て加行を作し、若し獨覺菩薩如來に於て及び彼の法に於て想勝解に住せば便ち獨覺菩薩如來に於て及び彼の法に於て加行を作す、加行に由るが故に生老病死及び當來の苦より解脱すること能はず。舍利子、是の如き菩薩摩訶薩は尚ほ聲聞獨覺の涅槃地すら證すること能はず、若し無上正等菩提を得とせば是の處有ること無し。舍利子、若し菩薩摩訶薩是の如き等を作して般若波羅蜜多を修行せば當に知るべし此れを方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩と名づくこと。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、云何が當に諸の菩薩摩訶薩方便善巧有りて般若波羅蜜多を修行すと知るべきやと。(f) 善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、方便善巧有りて般若波羅蜜多を修行する時、色を行ぜず、色相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識を行ぜず、受・想・行・識相を行ぜざる。是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。色の常無常を行ぜず、色の常無常相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識の常無常を行ぜず、色の常無常相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。色の樂苦を行ぜず、色の樂苦相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識の樂苦を行ぜず、色の樂苦相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。色の我無我を行ぜず、色の我無我相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識の我無我を行ぜず、色の我無我相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。色の淨不淨を行ぜず、色の淨不淨相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識の淨不淨を行ぜず、色の淨不淨相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。色の空不空を行ぜず、色の空不空相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。受・想・行・識の空不空を行ぜず、色の空不空相を行ぜざる、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。

【三】無上正等菩提。阿耨多羅三藐三菩提の譯。佛陀の覺知を云ふ。

(f) 「善現答言」の代りに「舍利子」の語を以てし之を「若し菩薩摩訶薩有方便善巧修行般若波羅蜜多時不行不行色相不行般若波羅蜜多不行受想行識不行受想行識相不行般若波羅蜜多……舍利子は色非色空是色空非色色不離空空不離色色即是空空即是色受想行識亦復如是」の始めに置き換へて文中「色乃至識」の有る所に相應して次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(f)にて略し以下その諸法のみ略出す

卷の第三十九

初分般若行相品第十之二

(d) 苦聖諦乃至道聖諦。(d) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d) 四靜慮乃至四無色定。(d) 四念住乃至八聖道支。(d) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d) 五眼・六神通。(d) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。世尊、若し菩薩摩訶薩、方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する時、若し是の念を作さん、我れ般若波羅蜜多を行すと。是れ 有所得の行相にして般若波羅蜜多を行するに非ず。若し是の念を作さん、我れは是れ菩薩摩訶薩なりと。是れ有所得の行相にして般若波羅蜜多を行するに非ず。若し是の念を作さん、彼れ般若波羅蜜多を行すと。是れ有所得の行相にして般若波羅蜜多を行するに非ず。若し是の念を作さん、彼れは是れ菩薩摩訶薩なりと。是れ有所得の行相にして般若波羅蜜多を行するに非ず。若し是の念を作さん、是の如く般若波羅蜜多を修行するを般若波羅蜜多を修行すと爲すと。是れ有所得の行相にして般若波羅蜜多を行するに非ず。世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如き等を作して般若波羅蜜多を修行せば、當に知るべし此れを 方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩と名くと。爾の時具壽善現、舍利子に語つて言はく、(e) 若し菩薩摩訶薩、方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する時、若し色に於て想勝解に住せば便ち色に於て加行を作し、若し受・想・行・識に於て想勝解に住せば便ち受・想・行・識に於て加行を作す。加行に由るが故に生老病死及び當來の苦より解脱すること能はず。(e) 眼處乃至意處。(e) 色處乃至法處。(e) 眼界乃至諸受。(e) 耳界乃至諸受。(e) 鼻界乃至諸受。(e) 舌界乃至諸受。(e) 身界乃至諸受。(e) 眼界乃至諸受。(e) 地界乃至識界。(e) 苦聖諦乃至道聖諦。(e) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(e) 四靜慮乃至四無色定。(e) 四念住乃至八聖道支。(e) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e) 五眼・六神通。(e) 佛の十力乃至十八佛不

(d) 前卷と同意

【一】 有所得。無所得の對にて執着の心、分別の心を云ふ。

【二】 方便善巧。經道即ち衆生利益の手段に通ずる智の善巧なること。

(e) 「若菩薩摩訶薩無方便善巧修行般若波羅蜜多時若於色住想勝解便於色作加行若於受想行識住想勝解便於受想行識作加行由加行故不能解脫生老病死及當來苦」
右の文中「色乃至識」に相應する所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(e)にて略し以下其の諸法のみ略出す

行じ若しは受・想・行・識の常無常相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の樂苦を行
 じ若しは色の樂苦相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の樂苦を行じ若
 しは受・想・行・識の樂苦相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の我無我を行じ若し
 は色の我無我相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の我無我を行じ若し
 は受・想・行・識の我無我相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の淨不淨を行じ若し
 は色の淨不淨相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の淨不淨を行じ若し
 は受・想・行・識の淨不淨相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の空不空を行じ若し
 は色の空不空相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の空不空を行じ若し
 は受・想・行・識の空不空相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の無相有相を行じ若
 しは色の無相有相相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・相・行・識の無相有相を行
 じ若しは受・想・行・識の無相有相相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の無願有願
 を行じ若しは色の無願有願相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の無願
 有願を行じ若しは受・想・行・識の無願有願相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の
 寂靜不寂靜を行じ若しは色の寂靜不寂靜相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・
 行・識の寂靜不寂靜を行じ若しは受・想・行・識の寂靜不寂靜相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非
 ず。若しは色の遠離不遠離を行じ若しは色の遠離不遠離相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非
 ず。若しは受・想・行・識の遠離不遠離を行じ若しは受・想・行・識の遠離不遠離相を行ずるは般若波羅
 蜜多を行ずるに非ず。(d)眼處乃至意處。色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界
 乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)境界乃至諸受。(d)地界乃至識界。

(c) 乃至(り)迄正しくは眼
 耳鼻舌身意界乃至眼耳鼻舌身
 意觸に緣せられて生ずる所の
 指受とすべきも略を旨とする
 が故に本文の如く略す以下皆
 同方法によりて略すこととす。

可得なり。(c) 眼處乃至意處。(c) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至諸受。(c) 耳界乃至諸受。(c) 鼻界乃至諸受。(c) 舌界乃至諸受。(c) 身界乃至諸受。(c) 意界乃至諸受。(c) 地界乃至識界。(c) 苦聖諦乃至道聖諦。(c) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 內空乃至無性自性空。(c) 四靜慮乃至四無色定。(c) 五眼・六神通。(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 四念住乃至八聖道支。(c) 佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智。(c) 眞如・法界・法性・法住法定・實際・平等性・離生性。(c) 預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺。(c) 菩薩・如來。(c) 常無常乃至屬生死屬涅槃。(c) 過去未來現在。(c) 善不善無記乃至在內在外在兩間法。舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の如く般若波羅蜜多を學することを作さば便ち一切相智に近づくなり。是の菩薩摩訶薩、如如に一切相智に近づき、是の如く是の如く身清淨を得、語清淨を得、意清淨を得、相清淨を得、是の菩薩摩訶薩如如に身清淨を得、語清淨を得、意清淨を得、相清淨を得、是の菩薩摩訶薩如如に身清淨を得、語清淨を得、意清淨を得、相清淨を得、是の如く是の如く貪俱行心を生ぜず、瞋俱行心を生ぜず、癡俱行心を生ぜず、慢俱行心を生ぜず、誑誑俱行心を生ぜず、慳貪俱行心を生ぜず、一切見趣俱行心を生ぜず。是の菩薩摩訶薩、貪俱行心を生ぜず乃至一切見趣俱行心を生ぜざるが故に畢竟女人の胎中に墮せずして常に化生を受け、亦た永く諸の險惡趣に生ぜず。有情を利樂せんが爲の因縁たるをば除く。一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊を供養恭敬尊重讚歎し、有情を成熟し佛土を嚴淨し乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得して常に佛を離れず。舍利子、若し菩薩摩訶薩、上の如き功德勝利を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし、捨離すべからず。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、(d) 世尊、若し菩薩摩訶薩、方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行する時、若しは色を行じ若しは色相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識を行じ、若しは受・想・行・識相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは色の常無常を行じ若しは色の常無常相を行ずるは般若波羅蜜多を行ずるに非ず。若しは受・想・行・識の常無常を

【三】 諸法の取相皆行相たるを明す。
 (d) 「世尊若菩薩摩訶薩無方便善巧修行般若波羅蜜多時若行色若行色相非行般若波羅蜜多……若行受想行識遠離不遠離若行受想行識遠離不遠離相非行般若波羅蜜多」右の文章を所附の符號(d)にて略し以下異なる諸法のみ出す但し「色乃至識」に相應する所にその諸法は代入すべきものとす

阿羅漢・獨覺。(b)菩薩・如來。(b)常無常・樂苦・我無我・淨不淨・空不空・無相有相・無願有願・寂靜不寂靜・遠離不遠離・雜染清淨・生滅・有爲無爲・有漏無漏・善非善・有罪無罪・世間出世間・屬生死屬涅槃法。(b)過去未來現在。實の如く善・不善・無記。欲界繫・色界繫・無色界繫。學・無學・非學非無學・見所斷・修所斷・非所斷。在內・在外。在兩間法。善・不善・無記乃至在內、在外。在兩間法の自性を離るゝを知るを以て舍利子、此れに由るが故に、是の般若波羅蜜多を行ずる諸の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多に於て常に捨離せざるを知るなりと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、何者か是れ般若波羅蜜多の自性なる、何者か是れ靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多の自性なる。乃至何者か是れ在內・在外。在兩間法の自性なると。善現答へて言はく、無性は是れ般若波羅蜜多の自性なり、無性は是れ靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多の自性なり。乃至無性は是れ在內・在外。在兩間法の自性なり。舍利子、此れに由るが故に、般若波羅蜜多は般若波羅蜜多の自性を離れ、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多は靜慮乃至布施波羅蜜多の自性を離れ、乃至在內・在外。在兩間法は在內・在外。在兩間法の自性を離ると知るなり。舍利子、般若波羅蜜多は般若波羅蜜多の相を離れ、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多は靜慮乃至布施波羅蜜多の相を離れ、乃至在內・在外。在兩間法は在內・在外。在兩間法の相を離る。舍利子、自性も亦た自性を離れ、相も亦た相を離れ、自性も亦た相を離れ、相も亦た自性を離れ、自性の相も亦た相の自性を離れ、相の自性も亦た自性の相を離ると。時に舍利子、善現に語つて言はく、若し菩薩摩訶薩、此の中に於て學せば則ち能く一切相智を成辦するやと。善現報へて言はく、是の如し、是の如し、誠に所説の如し、若し菩薩摩訶薩、此の中に於て學せば則ち能く一切相智を成辦す。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法生ずる無く成辦する無しと知るが故に。舍利子言はく、何の因縁の故に、一切法生ずる無く成辦する無きやと。善現言はく、(c)色空の故に、色の生・成辦・不可得なり。受・想・行・識空の故に、受・想・行・識の生・成辦・不

(c) 常無常。樂苦我無我淨不淨空不空無相有相無願有願寂靜不寂靜遠離不遠離雜染清淨生滅有爲無爲有漏無漏善非善有罪無罪世間出世間屬生死屬涅槃善有罪無罪世間出世間屬生死屬涅槃
(d) 善不善無記。欲界繫色界繫無色界繫學無學非學非無學見所斷修所斷非所斷在內在兩間法

【二】無性。性は體の義一切諸法に實體無きを云ふ。

(e) 「色空故色生成辦不可得受想行識生成辦不可得」右の文章を所附の符號を以て略し以下只だ異なる諸法のみ出す但し「色乃至識」のある所にその諸法は代入すべきものとす。

は寂靜若しは不寂靜、若しは遠離若しは不遠離、若しは雜染若しは清淨、若しは生若しは滅、若しは有爲若しは無爲、若しは有漏若しは無漏、若しは善若し是非善、若しは有罪若しは無罪、若しは世間若しは出世間、若しは屬生死若しは屬涅槃、若しは過去若しは未來若しは現在、若しは善若しは不善若しは無記、若しは欲界繫若しは色界繫若しは無色界繫、若しは學若しは無學若しは非學非無學、若しは見所斷若しは修所斷若しは非所斷、若しは在內若しは在外若しは在兩間、是の如き諸法皆所有無く不可得なり。所以は何ん、內空に由るが故に、外空の故に、乃至無性自性空の故なり。舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、是の如く審諦に一切法は皆所有無く不可得なりと觀察せん時は心沈没せず亦た憂悔せず、其の心驚かず恐れず怖かざるなり。當に知るべし是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多に於て常に捨離せずと。

時に舍利子、善現に問ふて言はく、何に緣るが故に是の般若波羅蜜多を行する諸の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多に於て常に捨離せずと知るやと。善現答へて言はく、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、實の如く般若波羅蜜多は般若波羅蜜多の自性を離ると知り、實の如く靜慮・精進・安忍・淨戒・布施波羅蜜多是靜慮乃至布施波羅蜜多の自性を離ると知るを以て、舍利子、此れに由るが故に是の般若波羅蜜多を行する諸の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜多に於て常に捨離せずと知ると。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、^(b)實の如く色は色の自性を離ると知り、實の如く受・想・行・識は受・想・行・識の自性を離ると知り、^(b)眼處乃至意處、^(b)色處乃至法處、^(b)眼界乃至諸受、^(b)耳界乃至諸受、^(b)鼻界乃至諸受、^(b)舌界乃至諸受、^(b)身界乃至諸受、^(b)意界乃至諸受、^(b)地界乃至識界、^(b)苦聖諦乃至道聖諦、^(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱、^(b)內空乃至無性自性空、^(b)四靜慮乃至四無色定、^(b)五眼・六神通、^(b)四念住乃至八聖道支、^(b)佛の十力乃至十八不共法、一切智乃至一切相智、^(b)眞如・法界・法性・法住法定・實際・平等性・離生性、^(b)預流・一來・不還。

(b) 「如實知色離色自性受想行識離受想行識自性」
右の文章も所付の符號もて略し只だ異なる諸法を以下出すのみとす但し「五蘊」に相應する所にその諸法は代入すべきものとす

初分般若行相品第十之一

復た次に世尊、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時應に是の觀を作すべし。何者か是れ般若波羅蜜多なる、何が故に般若波羅蜜多と名づくる、誰の般若波羅蜜多なる、此の般若波羅蜜多は何の爲に用ふる所なると。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時審諦みぎらに觀察し、若し法所有無く不可得ならば是れを般若波羅蜜多と爲す。所有無く不可得の中に於て何をか徵責する所なると。時に舍利子、善現に問ふて言はく、此の中何の法か所有無く不可得なりと爲す耶と。善現答へて言はく、謂ゆる般若波羅蜜多の法は所有無く不可得なり、靜慮・精進・安忍・淨戒・布施・波羅蜜多の法は所有無く不可得なり。所以は何ん、內空に由るが故に、外空の故に、内外空の故に、空空の故に、大空の故に、勝義空の故に、有爲空の故に、無爲空の故に、畢竟空の故に、無際空の故に、散空の故に、無變異空の故に、本性空の故に。自相空の故に、共相空の故に、一切法空の故に、不可得空の故に、無性空の故に、自性空の故に、無性自性空の故に。舍利子、色法は所有無く不可得なり。受・想・行・識法は所有無く不可得なり、(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至諸受。(a)耳界乃至諸受。(a)鼻界乃至諸受。(a)舌界乃至諸受。(a)身界乃至諸受。(a)眼界乃至諸受。(a)地界乃至諸受。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)內容乃至無性自性空。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)五眼・六神通。(a)四念住乃至八聖道支。(a)佛の十力乃至十八不共法。一切智乃至一切相智。(a)眞如・法界・法性・法住法定・實際・平等性・離生性。(a)預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺。(a)菩薩・如來。舍利子、要を以て之を言はば若しは常若しは無常、若しは樂若しは苦、若しは我若しは無我、若しは淨若しは不淨、若しは空若しは不空、若しは無相若しは有相、若しは無願若しは有願、若し

【一】般若の體無所有を示す。

(a)「舍利子色法無所有不可得受想行識法無所有不可得」右の文章を所附の符號もて略し以下異れ。諸法のみ出す但し「色乃至識」の所に次下所出の諸法は代入するものとす

相門を以て一切智智に於て深く信解を生じ、此の信解に由りて、一切法に於て皆取著無し。諸法の實相は不可得なるを以ての故に。是の如き梵志^ムは離相門を以て一切智智に於て信解を得已つて、一切法に於て皆相を取らず、亦た無相を思惟せず。諸法は相、無相の法皆不可得なるを以ての故に。是の如き梵志は勝解力に由りて、一切法に於て取らず捨てざるなり。實相法の中には取捨無きが故に。時に彼の梵志、自信解に於て乃至涅槃に於て亦た取著せず。所以は何ん、一切法皆空にして取る可からざるを以ての故に。世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多も亦復た是の如し、一切法に於て取著する所無く能く此岸より彼岸に到るが故に。若し諸法に於て少しにても取著有らば則ち彼岸に於て能く到ると爲すに非ず。是の故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時一切の色を取らず、一切の受・想・行・識を取らず。一切法取る所無きを以ての故に、乃至一切陀羅尼門を取らず、一切三摩地門を取らず。亦た一切法取る所無きを以ての故に、是の菩薩摩訶薩、一切の色・一切の受・想・行・識乃至一切陀羅尼門、一切三摩地門の若しは總若しは別に於て皆取る所無しと雖も而かも本願所行の四念住乃至八聖道支未だ圓滿せざるを以ての故に、及び本願所證の佛の十力乃至一切相智未だ成辦せざるを以ての故に、其の中間に於て終に一切相を取らざるを以ての故に而かも般若涅槃せざるなり。是の菩薩摩訶薩、能く四念住乃至八聖道支を圓滿し及び能く佛の十力乃至一切相智を成辦すと雖も而かも四念住乃至八聖道支を見ず及び佛の十力乃至一切相智を見ず。何を以ての故に、是の四念住は即ち四念住に非ず、乃至八聖道支は即ち八聖道支に非ず及び佛の十力は即ち佛の十力に非ず乃至一切相智は即ち一切相智に非ず。一切法は法に非ず非法に非ざるを以ての故に。是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て取る所無しと雖も而かも能く一切の事業を成辦す。

【一八】梵志(Brahmachari)。
梵天の法を志求するもの稱。

此の諸相に於て取著せば名づけて煩惱と爲す。若し取相して、一切相智を修得せば、勝軍梵志にして、一切相智に於て信解すべからず。何等をか名づけて彼の信解相と爲す。謂ゆる般若波羅蜜多に於て深く淨信を生じ、勝解力に由りて一切相智を思惟觀察し、相方便を以てせず亦た非相方便を以てせざるなり。相と非相とは俱に取る可からざるを以ての故に。是の勝軍梵志・信解力に由りて佛法に歸越し隨信行者と名づくとも雖も而かも能く本性空を以て一切相智に悟入す、既に悟入し已つて色相を取らず、受・想・行・識相を取らず。乃至一切陀羅尼門相を取らず、一切三摩地門相を取らざるなり。何を以ての故に、一切法の自相皆空なるを以て、能取・所取俱に不可得なるが故なり。是の如く梵志、内に現觀を得るを以て一切相智を觀ぜず、外に現觀を得るを以て一切相智を觀ぜず、内外に現觀を得るを以て一切相智を觀ぜず、亦た現觀を得ざるを以て一切相智を觀ぜざるなり。所以は何ん、是の勝軍梵志、所觀の一切相智を見ず、能觀の般若を見ず、觀者及び觀所依處を見ざるなり。是の勝軍梵志、内色に於て一切相智を觀するに非ず、内受想行識に於て一切相智を觀するに非ず。外色に於て一切相智を觀するに非ず、内外受想行識に於て一切相智を觀するに非ず。内外色に於て一切相智を觀するに非ず、内外受想行識に於て一切相智を觀するに非ず。亦た色を離れて一切相智を觀するに非ず。亦た受・想・行・識を離れて一切相智を觀するに非ず。乃至内一切陀羅尼門に於て一切相智を觀するに非ず、外一切三摩地門に於て一切相智を觀するに非ず。内外一切陀羅尼門に於て一切相智を觀するに非ず、内外一切三摩地門に於て一切相智を觀するに非ず。亦た一切陀羅尼門を離れて一切相智を觀するに非ず、亦た一切三摩地門を離れて一切相智を觀するに非ず。何を以ての故に、若しは内若しは外若しは内外若しは離内外皆不可得なるが故なり。是の勝軍梵志は是の如き等の諸の離

【一六】勝軍の例を擧げて無相般若を述ぶ。

【一七】離相門。法華經所說三相の一にて涅槃の相無きもの。

神通。(e)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e)四念住乃至八聖道支。(e)佛の十力乃至十八不共法。一切智乃至一切相智。(e)諸字、諸字所引の若しは一言所引、若しは二言所引若しは多言所引。(e)諸法の若しは常若しは無常、諸法の若しは樂若しは苦、若しは我若しは無我、若しは淨若しは不淨、若しは寂靜若しは不寂靜、若しは遠離若しは不遠離。(e)一切陀羅尼門、一切三摩地門。

何を以ての故に、世尊、色は攝受すべからず、受・想・行・識は攝受すべからざればなり。色既に攝受すべからざれば便ち色に非ず、受・想・行・識既に攝受すべからざれば便ち受・想・行・識に非ず。所以は何ん、本性空なるが故なり。乃至一切陀羅尼門は攝受すべからず、一切三摩地門は攝受すべからず。陀羅尼門既に攝受すべからざれば便ち陀羅尼門に非ず、三摩地門既に攝受すべからざれば便ち三摩地門に非ず。所以は何ん、本性空なるが故なり。其の攝受・修行・圓滿する所の般若波羅蜜多も亦た攝受すべからず、是の如く般若波羅蜜多既に攝受すべからざれば便ち般若波羅蜜多に非ず。所以は何ん、本性空なるが故なり。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時は應に本性空を以て一切法を觀すべし。此の觀を作す時、一切法に於て心行する處無し。是れを菩薩摩訶薩の無所攝受三摩地と名づく。此の三摩地は微妙殊勝廣大無量にして能く無邊無礙の作用を集め、一切の聲聞獨覺と共にならず、其の成辦する所は一切相智も亦た攝受すべからず。是の如く一切相智既に攝受すべからざれば便ち一切相智に非ず。所以は何ん、內空を以ての故に、外空の故に、内外空の故に、空空の故に、大空の故に、勝義空の故に、有爲空の故に、無爲空の故に、畢竟空の故に、無際空の故に、散空の故に、無變異空の故に、本性空の故に、自相空の故に、共相空の故に、一切法空の故に、不可得空の故に、無性空の故に、自性空の故に、無性自性空の故なり。何を以ての故に、世尊、是の一切相智は取相して修得するに非ざればなり。所以は何ん、諸の取相は皆是れ煩惱なり。何等をか相と爲す。所謂色相・受・想・行・識相、乃至一切陀羅尼門相、一切三摩地門相なり。

物にて我に附屬するものゝ意、即ちすべて我によつて執着せられるもの稱。
【五】加行。Pratyoghaの新譯、舊譯には方便といふ。修行の功を増加する意にて正修行を責くる傍修行を云ふ。

壽善現、復た佛に白して言さく、(d)世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は色に住すべからず、受・想・行・識に住すべからず。何を以ての故に、世尊、色の色性空、受・想・行・識の受想・行・識性空なればなり。世尊、是の色は色空に非ず、是の色空は色に非ず。色は空を離れず、空は色を離れず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識も亦復た是の如し。是の故に世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は色に住すべからず、受・想・行・識に住すべからず。(d)眼處乃至意處。(d)色處乃至法處。(d)眼界乃至諸受。(d)耳界乃至諸受。(d)鼻界乃至諸受。(d)舌界乃至諸受。(d)身界乃至諸受。(d)意界乃至諸受。(d)地界乃至諸受。(d)苦聖諦乃至道聖諦。(d)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(d)四靜慮乃至四無色定。(d)五眼・六神通。(d)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(d)四念住乃至八聖道支。(d)佛の十力乃至十八不共法。一切智乃至一切相智。(d)諸字・諸字の所引若しは一言所引若しは二言所引若しは多言所引。

(d)諸法の若しは常、若しは無常、諸法の若しは樂、若しは苦、若しは我、若しは無我、若しは淨、若しは不淨、若しは寂靜、若しは不寂靜、若しは遠離、若しは不遠離。(d)眞如・法界・法性・實際・平等性・離生性。(d)一切陀羅尼門・一切三摩地門。

爾の時具壽善現復た佛に白して言さく、(e)世尊、若し菩薩摩訶薩、方便善巧無くして般若波羅蜜多を修行せん時に、我我所の執に纏擾せらるるが故に心便ち色に住し、受・想・行・識に住す。此の住に由るが故に色に於て、加行を作し、受・想・行・識に於て加行を作す。加行に由るが故に般若波羅蜜多を攝受すること能はず、般若波羅蜜多を修行すること能はず、般若波羅蜜多を圓滿すること能はず、一切相智を成辦すること能はざるなり。(e)眼處乃至意處。(e)色處乃至法處。(e)眼界乃至諸受。(e)耳界乃至諸受。(e)鼻界乃至諸受。(e)舌界乃至諸受。(e)身界乃至諸受。(e)意界乃至諸受。(e)地界乃至諸受。(e)苦聖諦乃至道聖諦。(e)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(e)四靜慮乃至四無色定。(e)五眼・六

(d)「世尊修行般若波羅蜜多諸菩薩摩訶薩不應住色不應住受想行識……是故世尊修行般若波羅蜜多諸菩薩摩訶薩不應住色不應住受想行識」右の文中「色乃至識」に相應する所に次下に出ず諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(d)にて略し以下その諸法のみ略出す。

(e)「世尊若菩薩摩訶薩無方便善巧修行般若波羅蜜多時我我所執所纏擾故心便ち色に住受想行識……不能成辦一切相智」右の文中「色乃至識」に相應する所に次下に出ず諸法を代入せば他は全部同文なり故に之を符號(e)にて略し以下其の諸法のみ略出す。
【四】我我所。我とは自我、自身をいひ、我所は身外の事

可からず。佛の十力乃至一切相智に於て説く可からず。幻の如く乃至變化事の如き五取蘊等に於て説く可からず。寂靜・遠離・無生・無滅・無染・無淨、諸の戲論を絶せる眞如・法界・法性・實際・平等性・離生性に於て説く可からず。常・無常乃至屬生死涅槃法に於て説く可からず。過去・未來・現在乃至在內・在外・在兩間法に於て説く可からず。十六種伽沙等の世界の若しは佛、若しは菩薩、若しは聲聞僧等に於て説く可からず。何を以ての故に、上の所説の如き諸法の集散は皆得可からず見る可からざるが故に。

世尊、上の説く所の五蘊等の名の説く可き處無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩及び般若波羅蜜多の名も亦た説く可き處無し。戒・定・慧・解脫・解脫・智見の名の説く可き處無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩及び般若波羅蜜多の名も亦た説く可き處無し。預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺・如來及び彼の諸法の名の説く可き處無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩及び般若波羅蜜多の名も亦た説く可き處無し。世尊、一切の若しは有の名若しは無の名皆説く可き處無きが如く、是の如く菩薩摩訶薩及び般若波羅蜜多の名も亦た説く可き處無し。所以は何ん。是の如き諸の名は皆住する所無く、亦た住せざるに非ざればなり。何を以ての故に。是の諸の名義既に所有無きが故に。是の諸の名皆住する所無く、亦た住せざるに非ず。世尊、我れ是の義に依るが故に、諸法に於て若しは集し若しは散ずるを得ず見ざるなり。云何が此れを菩薩摩訶薩と名づけ、此れを般若波羅蜜多と名づくと言ふ可けんや。世尊、我れ此の二の若しは義、若しは名に於て既に得ず見ざるなり。云何が我れをして般若波羅蜜多相應の法を以て諸の菩薩摩訶薩に教誡教授せしむるや。是の故に若し此の法を以て諸の菩薩摩訶薩に教誡教授せば必ず當に悔い有るべし。世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如き相狀を以て般若波羅蜜多を説くを聞かん時心沈没せず亦た憂悔せず、其心驚かず恐れず怖かずんば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は決定して已に不退地に住するを得、無所住を以て方便して住すと。爾の時具

【一〇】 十八界。色心共に迷ひ重き者の爲に立てられし五根五境の色と意根法境及び六識の心を云ふ。

【一一】 六界。或は六大とも云ひ、地水火風空識の六法にて此六法各分齊ある故に界と名づく。

【一二】 十想。見惑、思惑を斷じ無學道を修するもの、修道上の十種の觀想、即ち、無常想、苦想、無我想、食不淨想、世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離、盡想を云ふ。

【一三】 不住門を以て般若を直説す。

八佛不共法。(c)幻の如く夢の如く像の如く響の如く光の如く影の如く空華の如く陽焰の如く尋香城の如く變化事の如き。五取蘊等。(c)寂靜・遠離・無生・無滅・無染・無淨・諸の戲論を絶せる眞如・法界・法性・實際・平等性・離生性。(c)若しは常・若しは無常・若しは樂・若しは苦・若しは我・若しは無我・若しは淨・若しは不淨・若しは空・若しは不空・若しは無明・若しは有相・若しは無願・若しは有願・若しは寂靜・若しは不寂靜・若しは遠離・若しは不遠離・若しは雜染・若しは清淨・若しは生・若しは滅・若しは有爲・若しは無爲・若しは有漏・若しは無漏・若しは善・若しは非善・若しは有罪・若しは無罪・若しは世間・若しは出世間・若しは屬生死・若しは屬涅槃法。(c)若しは過去・若しは未來・若しは現在・若しは善・若しは不善・若しは無記・若しは欲界繫・若しは色界繫・若しは無色界繫・若しは學・若しは無學・若しは非學・若しは非無學・若しは見所斷・若しは修所斷・若しは非所斷・若しは在內・若しは在外・若しは在兩間法。(c)十方殞伽沙等の諸佛世界の一切如來應正等覺及び諸の菩薩聲聞僧等。世尊、我れ上の所説の如き諸法の若しは集し若しは散ずるを得ず見ざるなり。云何が此れは是れ菩薩摩訶薩なり、此れは是れ般若波羅蜜多なりと言ふ可けんや。世尊、我れ菩薩摩訶薩に於て及び般若波羅蜜多に於て既に得ず見ざるなり。云何が我れをして般若波羅蜜多相應の法を以て諸の菩薩摩訶薩に教誡教授せしむるや。是の故に若し此の法を以て諸の菩薩摩訶薩に教誡教授せば必ず當に悔い有るべし。

世尊、諸法は因縁和合して假名を施設す。菩薩摩訶薩及び般若波羅蜜多の此の二假名は五蘊に於て説く可からず。十二處・十八界・六界・四聖諦・十二緣起に於て説く可からず。貪瞋癡一切の纏結・隨眠・見・趣・不善根等に於て説く可からず。四靜慮・四無量・四無色定に於て説く可からず。五眼・六神通に於て説く可からず。我、有情乃至知者、見者に於て説く可からず。十隨念・十想に於て説く可からず。空・無想・無願・六波羅蜜多に於て説く可からず。四念住乃至八聖道支に於て説く

【一】尋香城。乾闥婆城(Chandrapur)の譯。憂氣樓のことにて物の幻有實無に譬ふ。

【二】五取蘊。有漏の五蘊を云ふ。

【三】無記。三性の一。善にも非ず惡にも非ざる性質のもの。

【四】見所斷。三所斷の一。見道に於て斷ずる所の八十八使の見惑を云ふ。

【五】修所斷。三所斷の一。修道に於て斷ずる所の八十一品の修惑及び色等の有漏法。

【六】非所斷。三所斷の一。一切の無漏法を云ふ。

【七】異門相對して菩薩名字の説くべきものなきを示す字。

【八】五蘊。十二處、十八界と共に三科と稱せられ、何れも凡夫實我の執を破せん爲に施設されしもの。五蘊は心に迷ふこと重きもの、爲に立てられしもの。

【九】十二處。色に迷ふこと重き者の爲に立てられし五根五境の色と意根法境の心を云

初分無住品第九之一

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、我れ菩薩摩訶薩に於て及び般若波羅蜜多に於て皆得ず見ざるなり。云何が我れをして般若波羅蜜多相應の法を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せしむるや。世尊、我れ諸法に於て若しは集し若しは散するを得ず見ざるなり。若し此の法を以て諸の菩薩摩訶薩を教誡教授せば或は當に悔い有るべし。世尊、我れ諸法に於て若しは集し若しは散するを得ず見ず、云何が此れは是れ菩薩摩訶薩、此れは是れ般若波羅蜜多なりと云ふ可けんや。世尊、是の菩薩摩訶薩の名及び般若波羅蜜多の名は皆住する所無く、亦た住せざるに非ず。何を以ての故に、是の二名義既に所有無きが故に。是の二名皆住する所無く、亦た住せざるに非ず。(c)世尊、我れ色、受・想・行・識に於て若しは集し若しは散するを得ず見ざるなり。云何が此れは是れ色乃至此れは是れ識なりと言ふ可けんや。世尊、是の色等の名は皆住する所無く、亦た住せざるに非ず。何を以ての故に、色等の名義既に名義無きが故に。色等の名は皆住する所無く、亦た住せざるに非ず。(c)眼乃至意處。(c)色乃至法處。(c)眼界乃至諸受。(c)耳界乃至諸受。(c)鼻界乃至諸受。(c)舌界乃至諸受。(c)身界乃至諸受。(c)意界乃至諸受。(c)地乃至識界。(c)苦乃至道聖諦。(c)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c)貪瞋癡一切の纏結隨眠見取不善根等。(c)四靜慮乃至四無色定。

卷の第三十七

初分無住品第九之二

(c)五眼・六神通。(c)我、有情乃至知者見者。(c)佛隨念・法隨念・僧隨念・戒隨念・捨隨念・天隨念・息隨念・厭隨念・死隨念・身隨念。(c)無常想・苦想・無我想・不淨想・死想、一切世不可樂想・厭食想・斷想・離想・滅想。(c)空乃至無願。(c)布施乃至般若波羅蜜多。(c)四念住乃至八聖道支。(c)佛の十力乃至十

【一】法愛を除かんが爲に暴散なきを説く。

【二】無住。法に自性無ければ住著する所なく、緣に隨つて起るを云ふ。

(c)「世尊我於色受想行識不得不見若集若散……色等名皆無所住亦非不住」

右の文章を所付の符號もて略し以下只だ異なる諸法のみ出す但し「色乃至識」に相應する所にその諸法の代入せば他は皆同文なること前例に同じ

(c) 前卷の符號を其儘使用す

神通。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)四念住乃至八聖道支。(b)佛の十力乃至十八不共法乃至無上正等菩提、時に舍利子、善現を讃めて言はく、善哉・善哉・誠三三に所説の如し。汝は眞の佛子なり。佛心より生じ、佛より生じ、佛法より生じ、法より三三化生し、佛法分を受け、財分を受けず。諸法の中に於て身自ら作證し、慧眼現見して能く説を起す。世尊は汝を聲聞衆の中、無諍定に住すること最も爲れ第一なりと説きたまへり。佛の所説の如く眞實にして虚虚からず。善現・菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多に於て應に是の如く學すべし。己に三九不退轉地に住して般若波羅蜜多を離れずと。善現・聲聞地を學せんと欲せば、當に般若波羅蜜多に於て應に勤めて聽習し讀誦し受持し、理の如く思惟すべく、其れをして究竟せしむべし。獨覺地を學せんと欲せば、當に般若波羅蜜多に於て應に勤めて聽習し讀誦し受持し、理の如く思惟すべく、其れをして究竟せしむべし。菩薩地を學せんと欲せば、當に般若波羅蜜多に於て應に勤めて聽習し讀誦し受持し、理の如く思惟すべく、其れをして究竟せしむべし。如來地を學せんと欲せば、當に般若波羅蜜多に於て應に勤めて聽習し讀誦し受持し、理の如く思惟すべく、其れをして究竟せしむべし。何を以ての故に、是の如き般若波羅蜜多の中には四〇三乗の法を廣説し開示せるが故に。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を學せば則ち遍ねく三乗を學し。亦た三乗の法に於て皆善巧を得と爲すと。

【三七】 善現の善解を讃す。

【三八】 化生。四生の一。諸天、諸地獄、及び劫初の人の如く依託する所無く忽然として生ずるものを云ふ。

【三九】 不退轉地。阿毘跋致(Avavartika)即ち不退の位地、これに種々の別あれど普通には菩薩初地の位を云ふ。

【四〇】 三乗の法。乘とは運載の義にて、迷の此岸より悟の彼岸に運び到る教法。その三とは聲聞乘(四諦の法)、緣覺乘(十二因縁の法)、菩薩乘(六度の法)を云ふ。

至十八佛不共法、一切智乃至一切相智。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、應に是の如く學すべし。菩提心應に知るべし、應に著すべからず。菩提心の名應に知るべし、應に著すべからず。無等等心應に知るべく、應に著すべからず。無等等心の名應に知るべく、應に著すべからず。廣大心應に知るべく、應に著すべからず。廣大心の名應に知るべく、應に著すべからず。何を以ての故に、是の心非心の本性淨なるが故にと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、是の心云何が本性清淨なるやと。善現答へて言はく、是の心の本性は貪相應に非ず、不相應に非ず。瞋相應に非ず、不相應に非ず。癡相應に非ず、不相應に非ず。諸の纏結、隨眠相應に非ず、不相應に非ず。諸の見・趣・漏・暴・障・取等相應に非ず、不相應に非ず。諸の聲聞・獨覺心等相應に非ず、不相應に非ず。舍利子、是の心は是の如く本性清淨なりと。舍利子言はく、是の心に心非心性有りと爲すや不やと。善言質して言はく、非心性中、有性無性得可しと爲すや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。善現答へて言はく、非心性中、有性無性既に不可得なり。如何が是の心に心非心性有りと爲すや不やと問ふ可けんやと。舍利子言はく、何等をか名けて心非心性と爲すやと。善現答へて言はく、一切法に於て變異無く分別無き、是れを心非心性と名づく。舍利子言はく、心變異無く、分別無きが如く色も亦た變異無く分別無き耶と。善現答へて言はく、是の如しと。心變異無く、分別無きが如く受・想・行・識も亦た變異無く、分別無き耶と答へて言はく、是の如しと。(b)心變異無く分別無きが如く眼處も亦た變異無く分別無き耶と。答へて言はく、是の如しと。心變異無く分別無きが如く、耳・鼻・舌・身・意處も亦た分別無き耶と。答へて言はく、是の如しと。(c)色處乃至法處。(d)眼界色界眼識界。(e)耳界聲界耳識界。(f)鼻界香界鼻識界。(g)舌界味界舌識界。(h)身界觸界身識界。(i)眼界色界眼識界。(j)地界乃至識界。(k)苦理諦乃至道理諦。(l)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(m)四靜慮乃至四無色定。(n)五眼六

る苦・無常・無我等の相の皆空寂なること。

【四】不可得空。十八空の一。萬有の眞相は有にも非ず、空にも非ずとなし、吾人の言語思慮を超へたる處に假に名づけし空をいふ。

【五】菩提心。上は佛道、佛果を求め、下衆生を救済せんとする大心。

【六】無等等心。無等等とは佛道又は佛の尊號、佛道心を云ふ。

【七】色處。……受想行識名應知不應著。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず而して「色乃至識」に相應する所に次下に出ず諸法に代人するものとする。前例に同じ。

【八】菩提心。上は佛道、佛果を求め、下衆生を救済せんとする大心。

【九】無等等心。無等等とは佛道又は佛の尊號、佛道心を云ふ。

【一〇】色處。……受想行識名應知不應著。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

(b) 「如心無變、異無分別、眼處亦無變異、無分別耶答言如是、如心無變異……無分別耳、身、舌、身、意處亦無變異、無分別耶。答言如是。」

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

右の文章を所付の符號もて略し以下只異なる諸法のみ出ず但し「眼處乃至意處」の六處に相應して次下に出ず諸法は代入するものとす。

爲空を觀じ、有爲空を見ず、有爲空を待たずして勝義空を觀ず、有爲空を待たずして無爲空を觀じ、無爲空を見ず、無爲空を待たずして有爲空を觀ず。無爲空を待たずして畢竟空を觀じ、畢竟空を見ず、畢竟空を待たずして無爲空を觀ず。畢竟空を待たずして無際空を觀じ、無際空を見ず、無際空を待たずして畢竟空を觀ず。無際空を待たずして散空を觀じ、散空を見ず、散空を待たずして無際空を觀ず。散空を待たずして無變異空を觀じ、無變異空を見ず、無變異空を待たずして散空を觀ず。無變異空を待たずして本性空を觀じ、本性空を見ず、本性空を待たずして無變異空を觀ず。本性空を待たずして自相空を觀じ、自相空を見ず、自相空を待たずして本性空を觀ず。自相空を待たずして共相空を觀じ、共相空を見ず、共相空を待たずして自相空を觀ず。共相空を待たずして一切法空を觀じ、一切法空を見ず、一切法空を待たずして共相空を觀ず。一切法空を待たずして不可得空を觀じ、不可得空を見ず、不可得空を待たずして一切法空を觀ず。不可得空を待たずして無性空を觀じ、無性空を見ず、無性空を待たずして不可得空を觀ず。無性空を待たずして自性空を觀じ、自性空を見ず、自性空を待たずして無性空を觀ず。自性空を待たずして無性自性空を觀じ、無性自性空を見ず、無性自性空を待たずして自性空を觀ず。舍利子、菩薩摩訶薩。般若波羅蜜多を修行する時、若し是の觀を作さば、菩薩の正性離生に入ると名づく。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩。般若波羅蜜多を修行する時、應に是の如く學すべし。(a)色應に知るべく、應に著すべからず。受・想・行・識應に學すべく、應に著すべからず。色の名應に知るべく、應に著すべからず。受・想・行・識の名應に知るべし、應に著すべからず。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界色界眼識界。(a)耳界聲界耳識界。(a)鼻界香界鼻識界。(a)舌界味界舌識界。(a)身界觸界身識界。(a)眼界法界意識界。(a)地界乃至識界。(a)苦聖諦乃至道聖諦。(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)五眼・六神通。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)四念住乃至八聖道支。(a)佛の十力乃

- 【三】 外空。十八空の一。客觀の一切の對境自性質體なく不可得なるを云ふ。
- 【三】 内外空。十八空の一。内身も外境も不淨にして清淨なる相なきを云ふ。
- 【四】 空空。十八空の一。主觀も客觀も空、而して空なりとするその空も亦本來空にて何等執着すべきなしとする空觀。
- 【五】 大空。十六空の一。大乘究竟の空寂即ち涅槃を云ふ。
- 【六】 勝義空。十六空の一。勝義とは涅槃なり、涅槃の空性を云ふ。
- 【七】 有爲空。十八空の一。有爲の諸法は因縁の假和合にて自性なきこと。
- 【八】 無爲空。十八空の一。一切無爲の諸法の不可得なること。
- 【九】 畢竟空。十八空の一。一切の有爲法も無爲法も畢竟して空なること。
- 【一〇】 無際空。十六空の一。一切諸法は際限ある無く、その際限の相も亦不可得なるを云ふ。
- 【一〇】 散空。離散すれば空となす。
- 【三〇】 自相空。智度論略說七空の一。諸法の自體相空寂なるを云ふ。
- 【三一】 共相空。諸法に共通す

行・識に於て無我に住して想著を起こし。色に於て不淨に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て不淨に住して想著を起こし。色に於て寂靜に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て寂靜に住して想著を起こし。色に於て遠離に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て遠離に住して想著を起こし。色に於て遠離に住して想著を起こし、復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩是の念言を作さん。是れ色に斷すべし、是れ受・想・行・識に斷すべし。此れに由るが故に色應に斷すべく、此れに由るが故に受・想・行・識に斷すべし。是れ苦應に遍ねく知るべし、此れに由るが故に苦遍ねく知るべし。是れ集應に永く斷すべし、此れに由るが故に集應に永く斷すべし。是れ滅應に作證すべし。此れに由るが故に滅應に作證すべし。是れ道應に修習すべし。此れに由るが故に道應に修習すべし。是れ雜染・是れ清淨・是れ應に親近すべし、是れ應に親近すべからず。是れ應に行すべし、是れ應に行すべからず。是れ道・是れ非道・是れ應に學すべし、是れ應に學すべからず。是れ布施波羅蜜多、是れ布施波羅蜜多に非ず。乃至是れ般若波羅蜜多、是れ般若波羅蜜多に非ず。是れ方便善巧、是れ方便善巧に非ず。是れ菩薩生、是れ菩薩離生なりと。舍利子、若し菩薩摩訶薩・般若波羅蜜多を修行する時、是の如き等の法に住して想著を生ずる、是れを菩薩の順道法愛と爲す。是の如き法愛を説いて名づけて生と爲す。宿食生じて能く過患を爲すが如しと。

時に舍利子、善現に問うて言はく、云何が菩薩摩訶薩は正性離生に入るやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩。般若波羅蜜多を修行する時、^(一)内空を見ず、^(二)内空を待たずして外空を觀じ、外空を見ず、^(三)外空を待たずして内空を觀す。外空を待たずして、^(四)内外空を觀じ、内外空を見ず、内外空を待たずして外空を觀す、^(五)内外空を待たずして、^(六)空空を觀じ、空空を見ず、空空を待たずして内外空を觀す。空空を待たずして、^(七)大空を觀じ、大空を見ず、大空を待たずして空空を觀す。大空を待たずして、^(八)勝義空を觀じ、勝義空を見ず、勝義空を待たずして大空を觀す。勝義空を待たずして、^(九)有

三種の法門即ち空解脫門、無相解脫門、無願解脫門を云ふ。
 【一】正性離生。無漏智を生じて煩惱を斷じて永く凡夫の生を離るるを云ふ。
 【二】菩薩已上が善法を要樂するを云ふ。又如來の大志に名づく。

【三】法愛念著なき正見を述ぶ。

【一】内空。外空。内外空。空。大空。勝義空。有爲空。無爲空。畢竟空。無際空。散空。無變異空。本性空。自相空。共相空。一切法空。不可得空。無性空。自性空。無性自性空。
 【二】内空。十八空の一。内の六根に於て神我なきをいふ。

地・寶印三摩地・妙月三摩地・月幢相三摩地・一切法印三摩地・灌頂印三摩地・法界決定三摩地・決定幢相三摩地・金剛喻三摩地・入一切法印三摩地・安住定王三摩地・王印三摩地・精進力三摩地・等涌三摩地・入一切言詞三摩地・入一切名字決定三摩地・觀方三摩地・陀羅尼印三摩地・無忘失三摩地・諸法等趣海印三摩地・遍覆虛空三摩地・三輪清淨三摩地・趣向不退轉神通三摩地・器中涌出三摩地・最勝幢相三摩地・燒諸煩惱三摩地・降伏四魔三摩地・大智慧炬三摩地・出生十力三摩地を得んと欲せば、菩薩摩訶薩、是の如き等の無量百千三摩地門を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、一切有情の心の所願を滿ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、是の如き殊勝の善根を滿じ、此の善根に由りて永く惡趣に墮せず、貧賤の家に生れず、聲聞及び獨覺地に墮せず、菩薩の頂に終に退墮せざらんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべしと、時に舍利子、善現に問うて言はく、云何が名づけて菩薩の頂に墮すと爲すやと。善現答へて言はく、若し諸の菩薩方便善巧無くして六波羅蜜多を行じ、方便善巧無くして、三解脱門に往せば聲聞或は獨覺地に墮し、菩薩の正性難生に入らず、是の如きを名づけて菩薩の頂に墮すと爲す。即ち此の頂に墮するを亦た名づけて生と爲すと時に舍利子、即ち復た問うて言はく、何に緣りて菩薩の頂に墮するを生と名づくるやと。善現答へて言はく、生とは謂ゆる、法愛なり。若し諸の菩薩、順道法愛せば説いて名づけて生と爲すと。舍利子言はく、何をか順道法愛と謂ふやと。善現答へて言はく、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色に於て空に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て空に住して想著を起こし。色に於て無相に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て無願に住して想著を起こし。色に於て無常に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て無常に住して想著を起こし。色に於て苦に住して想著を起こし、受・想・行・識に於て苦に住して想著を起こし。色に於て無我に住して想著を起こし、受・想・

【一】 支持するもの義、これに段食、飮食、思食、識食の四種ありとなす。

【二】 四暴流。暴流とは煩惱のこと、洪水の諸物を漂流する如く諸善を漂流するの故に云ふ。これに欲流、有暴流、見暴流、無明流の四種あり。

【三】 輓取。惱煩の總稱。輓かせらるゝにたとへしもの、取とは所對の境界を取著するの意。

【四】 四顛倒。迷妄なる見解の四にて、これに有爲の四倒と無爲の四倒との二種あり。

【五】 三漏。漏は煩惱の異名。三界煩惱の三種即ち(一)四靜慮、四無量、四無色定、欲漏有漏、無明漏を云ふ。

【六】 三不善根。三毒の別稱。【七】 四念住。四正斷。四神足。五根。五力。七等覺支。八聖道支。

【八】 佛十力。四無所畏。四無礙解。大慈大悲大喜大捨、十八不共法。

【九】 一切智。道相智、一切相智。

【一〇】 一切陀羅尼門。一切三摩地門。

【一一】 般若に應ぜざる墮頂と法愛とを辨す。

【一二】 三解脱門。三空門又は三三昧ともいひ、解脱を得る

漏⁽³⁾ 集・滅・道聖諦を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、漏⁽³⁾ ねく、無明を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、漏⁽³⁾ ねく、行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死愁歎苦憂惱を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 貪・瞋・癡を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 薩迦耶見・戒禁取・疑・欲貪・瞋恚を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く色貪・無色貪・無明・慢・掉舉を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く一切の 纏・結・隨眠を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 四食を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 四身繫・四顛倒を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 四暴流・靦取を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、永く 三不善根を斷ぜんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、十不善業道を遠離せん⁽⁴⁾ と欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、十不善業道を習行せん⁽⁴⁾ と欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、四念住を修せん⁽⁵⁾ と欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支、八聖道支を修せん⁽⁵⁾ と欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、佛の十力を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、佛の十力を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、一切智・道相智・一切相智を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨、十八佛不共法、一切智・道相智・一切相智を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、六神通自在を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、四靜慮・四無色定・滅盡定・次第・超越・順逆自在を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、一切陀羅尼門、三摩地門に於て皆自在を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、具覺支三摩地・師子遊戲三摩地・師子奮迅三摩地・師子頻伸三摩地・師子缺呿三摩地・健行三摩

(一) 無明。行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死愁歎苦憂惱
(二) 貪・瞋・癡は三界に於ける煩惱の根本にて、あらゆる善根を毒害するの故に三毒と名づく。
(三) 薩迦耶見(Sakkaya-ditthi) 有身見と譯し、五見の一。五蘊假和合のこの身に常一主宰の我ありと執する我見と一切の事物は如幻假有にて自他の所屬なきを我が所有なりと固執する我所見とを云ふ。
(四) 戒禁取。五見の一。牛戒狗戒など、非理の戒法を迷取して生天の因、解脱の道なりと思ふ邪見。
(五) 疑見。十種見の一。諸の諸理に於て猶豫を懷て決定の見なきを云ふ。
(六) 欲貪(貪見)十種見の一。自心順情の境に貪著して種々の妄見を生ずるもの。
(七) 瞋恚(恚見)十種見の一。迷心を以て一切違情の境に對して忿怒を起すもの。
(八) 纏。煩惱の異名。煩惱よく人の心身を自在ならしめざればかく云ふ。
(九) 結。煩惱の異名。煩惱能く衆生を繫縛して解脫せしめざれば名づく。
(一〇) 四食。食とは身命を養

初分勸學品第八

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、菩薩摩訶薩、布施波羅蜜多を滿せんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、淨戒・安忍・精進・靜慮、般若波羅蜜多を滿せんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく色を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく受・想・行・識を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく眼處を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく耳・鼻・舌・身・意處を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく聲・香・味・觸・法處を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく眼界、色界、眼識界及び眼觸、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく眼界、色界、眼識界及び眼觸、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく鼻界、鼻識界及び鼻觸、鼻觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく舌界、味界、舌識界及び舌觸、舌觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく身界、身識界及び身觸、身觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく意界、法界、意識界及び意觸、意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく地界を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく水・火・風・空・識界を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく苦聖諦を知らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。菩薩摩訶薩、遍ねく

【一】 知法斷惑得三昧等の般若習學によるを説く。

以下諸法の符號を變更す（依關法卷二）

（か） 布施波羅蜜多、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若波羅蜜多

（こ） 色。受想行識

（き） 眼處。耳・鼻・舌・身・意處

（け） 色處。聲・香・味・觸・法處

（こ） 眼界。色界、眼識界、及眼觸、眼觸爲緣所生諸受

（か） 耳界。聲界、耳識界、及耳觸、耳觸爲緣所生諸受

（こ） 鼻界。香界、鼻識界、及鼻觸、鼻觸爲緣所生諸受

（こ） 舌界。味界、舌識界、及舌觸、舌觸爲緣所生諸受

（こ） 身界。觸界、身識界、及身觸、身觸爲緣所生諸受

（り） 意界。法界、意識界、及意觸、意觸爲緣所生諸受

（ぬ） 地界。水・火・風・空・識界

（ろ） 苦聖諦。集・滅・道聖諦

何の因縁の故に是の菩薩摩訶薩は一切法に於て心沈没せず亦た憂悔せざるやと。佛言はく、善現、是の菩薩摩訶薩は普ねく一切の心心所法に於て得ず見ず、此の因縁に由りて、此の菩薩摩訶薩は一切法に於て心沈没せず亦た憂悔せざるなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、世尊、云何が是の菩薩摩訶薩は一切法に於て其の心驚かす恐れず怖かざるやと。佛言はく、善現、是の菩薩摩訶薩、普ねく一切の意界意識界に於て得ず見ず、是の如き菩薩摩訶薩は一切法に於て其の心驚かす恐れず怖かざるなり。善現、諸の菩薩摩訶薩、一切法に於て都て得る所無くんば應に般若波羅蜜多を行すべし。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、^三一切處に於て般若波羅蜜多を得ず、般若波羅蜜多の名を得ず、菩薩を得ず、菩薩の名を得ず、菩薩心を得ず。善現、應に是の如く諸の菩薩摩訶薩を教誡教授し、般若波羅蜜多に於て修學究竟せしむべしと。

【三】一切處。禪定の名。所親の境一切處に周遍するの故に名づく。十種有りて十一一切處或は十遍處と云ふ。

ず。法界・身界・觸界・身識界を見ず。身界・觸界・身識界を見ず。法界・意界・法界・意識界を見ず。意
 界・法界・意識界・法界を見ず。善現、法界・地界を見ず、地界・法界を見ず。法界・水・火・風・空・識界
 を見ず。水・火・風・空・識界・法界を見ず。善現、法界・苦聖諦界を見ず、苦聖諦界・法界を見ず。法
 界・集・滅・道聖諦界を見ず。集・滅・道聖諦界・法界を見ず。善現、法界・無明界を見ず、無明界・法界を
 見ず。法界・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有生・老死愁歎苦憂惱界を見ず。行乃至老死愁歎苦憂
 惱界・法界を見ず。善現、法界・欲界を見ず、欲界・法界を見ず。法界・色無色界を見ず。色無色界、法
 界を見ず。善現、有爲界・無爲界を見ず、無爲界・有爲界を見ず。何を以ての故に。善現、有爲を離れ
 て無爲を施設するに非ず、無爲を離れて有爲を施設するに非ざるが故に。善現、是の如く菩薩摩訶
 薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て都て見る所無し。一切法に於て見る所無き時、其の
 心驚かず恐れず怖かず。一切法に於て心沈没せず亦た憂悔せず。所以は何ん。是の菩薩摩訶薩、般
 若波羅蜜多を修行する時、色を見ず、受・想・行・識を見ず。眼處を見ず、耳鼻舌身處を見ず。色處を
 見ず、聲香味觸法處を見ず。眼界・色界・眼識界を見ず。耳界・聲界・耳識界を見ず。鼻界・香界・鼻識界を
 見ず。舌界・味界・舌識界を見ず。身界・觸界・身識界を見ず。意界・法界・意識界を見ず。地界を見ず。水・
 火・風・空・識界を見ず。苦聖諦を見ず。集・滅・道聖諦を見ず。無明を見ず、行・識・名色・六處・觸・受・
 愛・取・有生・老死愁歎苦憂惱を見ず。欲界を見ず、色無色界を見ず。有爲を見ず、無爲を見ず。食
 臘癯を見ず。貪臘癯の斷するを見ず。我を見ず、有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・儒童・
 作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者を見ず。聲聞を見ず。聲聞法を見ず。獨覺を見ず。
 獨覺法を見ず、菩薩を見ず。菩薩法を見ず。佛を見ず。佛法を見ず。無上正等菩提を見ざればな
 り。善現、是の如く菩薩摩訶薩は一切法に於て都て見る所無し。一切法に於て見る所無き時、其の心
 驚かず恐れず怖かず。一切法に於て心沈没せず亦た憂悔せずと。具壽善現、佛に白して言さく、世尊、

【六】 地界乃至識界を六大或は六界と云ひ、此の六法能く一切法界に周遍して有情非情を造作するの故にかく名づく。
 【七】 苦集滅道聖諦を四聖諦といひ、聖者知見の眞理即ち迷悟の因果を倒脱せるもの。
 【八】 無明乃至老死は十二因縁或は十二支と稱し、三世にわたつて生死に輪廻する法、即縁を十二分して觀察する法、即ち惑・業・苦の轉展を明かせるもの。

【九】 我乃至見者を十六知見又は十六神我と云ひ、未だ正道を見ない人が五陰等の法中に主宰を立て我々所ありと妄計せる十六の別知見。
 【一〇】 聲聞。舍羅婆迦 (Śrāvaka) の譯。佛の言教を聞き或は遺教によつて四諦の法を修し阿羅漢果を得る聖者。
 【一一】 獨覺。當に緣覺といひ、常に寂靜を樂み獨り自ら修行し、修行功成りて無佛の世に於て自ら覺悟して生死を離るるもの。

(j) 預流果乃至阿羅漢果。(j) 獨覺・菩提。(j) 一切の菩薩摩訶薩行。(j) 諸佛の無上正等菩提。

卷の第三十六

初分教誡教授品第七之二十六

(j) 諸佛の無上正等菩提。

世尊、色等の法及び増語、色等の常、無常等の法及び増語既に不可得なり。而かも色等の法、増語及び色等の常、無常等の法、増語是れ菩薩摩訶薩なりと言はば、是の處有ること無し。佛、善現に告げたまはく、善哉、善哉、是の如し、是の如し、汝が所説の如し、善現、色等の法及び色等の常、無常等の法不可得なるが故に、色等の法、増語及び色等の常、無常等の法、増語も亦た不可得なり。法及び増語不可得なるが故に、菩薩摩訶薩も亦た不可得なり。菩薩摩訶薩不可得なるが故に、所行の般若波羅蜜多も亦た不可得なり。善現、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時應に是の如く學すべし。

復た次に善現、汝先きと言ふ所の、我れ法の菩薩摩訶薩と名づく可き有るを見すとは是の如し、是の如し、汝が所説の如し、善現、諸法諸法を見ず、諸法、法界を見ず、法界諸法を見ず、法界法界を見ず、善現、法界色界を見ず、色界法界を見ず、法界受・想・行・識界を見ず、受・想・行・識界法界を見ず、善現、法界眼處界を見ず、眼處界法界を見ず、法界耳・鼻・舌・身・意界を見ず、耳・鼻・舌・身・意界法界を見ず。法界色處界を見ず、色處界法界を見ず。法界聲・香・味・觸・法處界を見ず。聲・香・味・觸・法處界法界を見ず。善現、法界・眼界・色界・眼識界を見ず。眼界・色界・眼識界・法界を見ず。法界・耳界・聲界・耳識界を見ず。耳界・聲界・耳識界・法界を見ず。法界・鼻界・香界・鼻識界を見ず。鼻界・香界・鼻識界・法界を見ず。法界・舌界・味界・舌識界を見ず。舌界・味界・舌識界・法界を見ず。

(j) 前卷に同じ
(ま) 預流果の淨より起る。
(ふ) 諸佛無上正等菩提の遠離に終る。

(j) 前卷に同じ
(ふ) 諸佛無上正等菩提の有爲より起る。

【一】善現の諸法深空に入りて疑はざるを讚す。
【二】善哉。深度(Paramita)の義譯。衆生空に達するを讚す。

【三】菩薩の定で菩薩たるべきものなき如く諸法自性なく畢竟空なるを明す。
【四】法界。達磨跋耆(Chandrapadarita)の譯にて法性又は實相とも云ふ。諸法各々自界をもつて分界不同なるを云ひ、或は眞如の理性の義にて諸の聖道を生ずるが故に名づく。
【五】色處界等。眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法の六境とを十二處と云ふ。處とは生長の義、六根が六境を受け入れて能く識を生長せしむるの故に名づく。

(j) 八解脫乃至十遍處。(j) 空解脫門乃至無解願脫門。(j) 陀羅尼門・三摩地門。

卷の第三十二

初分教誡教授品第七之二十二

(i) 陀羅尼門・三摩地門。(j) 極喜地乃至法雲地。(j) 五眼・六神通。(j) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八佛不共法。

卷の第三十三

初分教誡教授品第七之二十三

(i) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八佛不共法。(j) 大慈・大悲・大喜・大捨。(j) 三十二大士相・八十隨好。

卷の第三十四

初分教誡教授品第七之二十四

(i) 三十二大士相・八十隨好。(j) 無忘失法・恆住捨性。(j) 一切智乃至一切相智。(j) 預流果乃至阿羅漢果。

卷の第三十五

初分教誡教授品第七之二十五

初分教誡教授品第七之二十七―二十五

(j) 前卷に同じ
(ね) 八解脫の淨より起る
(る) 陀羅尼門の有罪に終る

(j) 前卷に同じ
(る) 陀羅尼門の有煩惱より起る
(る) 佛十力の有相に終る

(j) 前卷に同じ
(る) 佛十力の有願より起る
(る) 三十二大士相の有罪に終る

(j) 前卷に同じ
(の) 三十二大士相の有煩惱より起る
(ま) 預流果の無我に終る

地界乃至識界。

卷の第二十七

初分教誡教授品第七之十七

(i) 地界乃至識界。(j) 因緣乃至增上緣。(k) 緣所生法。

卷の第二十八

初分教誡教授品第七之十八

(i) 無明乃至老死。(j) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(k) 內容乃至無性自性空。

卷の第二十九

初分教誡教授品第七之十九

(i) 內容乃至無性自性空。(j) 真如乃至不思議界。(k) 四念住乃至八聖道支。

卷の第三十

初分教誡教授品第七之二十

(i) 四念住乃至八聖道支。(j) 菩薩諸乃至道聖諦。(k) 四靜慮乃至四無色定。(l) 八解脫乃至十遍處。

卷の第三十一

初分教誡教授品第七之二十一

(i) 地界の無我に終る

(j) 前卷に同じ
(k) 地界の淨より起る

(l) 前卷に同じ
(m) 内容の有相に終る

(n) 前卷に同じ
(o) 内容の有願より起る
(p) 四念住の世間に終る

(q) 前卷に同じ
(r) 四念住の雜染より起る
(s) 八解脫の無我に終る

増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の在內・在外・在兩間に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは可得、若しは不可得に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは可得、若しは不可得に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の可得、不可得、若しは受・想・行・識の可得、不可得、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の可得、不可得の増語及び受・想・行・識の可得、不可得の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは可得、若しは不可得に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは可得、若しは不可得に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。

卷の第二十四

初分教誡教授品第七之十四

(j) 眼處乃至意處。(i) 色處乃至法處。(j) 眼界乃至眼界。

卷の第二十五

初分教誡教授品第七之十五

(j) 眼界乃至眼界。(i) 色界乃至法界。(j) 眼識界乃至意識界。

卷の第二十六

初分教誡教授品第七之十六

(j) 眼觸乃至意觸。(j) 眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(j)

(j) 前卷に同じ

(j) 前卷の符號を其儘用ふ
(i) 眼界遠離にて終る

(j) 前卷に同じ
(i) 眼界の有爲より起る

世間・出世間、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の世間・出世間の増語及び受・想・行・識の世間・出世間の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは世間、若しは出世間に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは世間、若しは出世間に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは雜染、若しは清淨に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと云ふ耶と。世尊、若しは色の雜染・清淨若しは受・想・行・識の雜染・清淨、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の雜染・清淨の増語及び受・想・行・識の雜染・清淨の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは雜染、若しは清淨に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは雜染、若しは清淨に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは屬生死、若しは屬涅槃に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと云ふ耶と。世尊、若しは色の屬生死・屬涅槃、若しは受・想・行・識の屬生死・屬涅槃、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の屬生死・屬涅槃の増語及び受・想・行・識の屬生死・屬涅槃の増語有らんをや。此の増語既に非有なり如何が色の若しは屬生死、若しは屬涅槃に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは屬生死、若しは屬涅槃に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは在內、若しは在內、若しは在內、若しは在兩間に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは在內、若しは在內、若しは在內、若しは在兩間に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと云ふ耶と。世尊、若しは色の在內・在內、在兩間、若しは受・想・行・識の在內・在內、在兩間、尙ほ畢竟不可得なり性非有なるが故に。況んや色の在內・在內、在兩間の増語及び受・想・行・識の在內・在內、在兩間の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは在內、若しは在內、若しは在兩間に即せる

しは滅に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは善、若しは非善に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは善、若しは非善に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若くは色の善・非善、若しは受・想・行・識の善・非善、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の善・非善の増語及び受・想・行・識の善・非善の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは善、若しは非善に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは有罪、若しは無罪に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは有罪、若しは無罪に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有煩惱・無煩惱の増語及び受・想・行・識の有煩惱・無煩惱の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは有煩惱、若しは無煩惱に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは無罪に即せる増語は菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは有煩惱、若しは無煩惱に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは有煩惱、若しは無煩惱に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有煩惱・無煩惱の増語及び受・想・行・識の有煩惱・無煩惱の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは有煩惱、若しは無煩惱に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは世間、若しは出世間に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは世間、若しは出世間に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の世間・出世間、若しは受・想・行・識の

【五】世間。遷流間隔の義にて生滅無常の迷界を云ふ。
 【六】出世間。生滅無常の迷界を出離した解脱の境界。

増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の遠離・不遠離、若しは受・想・行・識の遠離・不遠離、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の遠離・不遠離の増語及び受・想・行・識の遠離・不遠離の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは遠離、若しは不遠離に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは遠離、若しは不遠離に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩に非ずと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは有爲、若しは無爲に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有爲・無爲、若しは受・想・行・識の有爲・無爲、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の有爲・無爲の増語及び受・想・行・識の有爲・無爲の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは有爲、若しは無爲に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは有爲、若しは無爲に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは有漏、若しは無漏に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ず、受・想・行・識の若しは有漏、若しは無漏に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有漏・無漏、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の有漏・無漏の増語及び受・想・行・識の有漏・無漏の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは有漏、若しは無漏に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは有漏、若しは無漏に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは生、若しは滅に即せる増語は菩薩摩訶薩に非ずと言ふ耶と。世尊、若しは色の生・滅、若しは受・想・行・識の生・滅、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の生・滅の増語及び受・想・行・識の生・滅の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは生、若しは滅に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは生、若

が色の若しは空、若しは不空に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは空、若しは不空に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは^一有相、若しは^二無相に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは有相、若しは無相に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有相・無相、若しは受・想・行・識の有相・無相、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の有相・無相の増語及び受・想・行・識の有相、若しは無相に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは有願、若しは無願に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の有願、若しは無願に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の有願・無願、若しは受・想・行・識の有願・無願、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の有願や、無願の増語、及び受・想・行・識の有願・無願の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは有願、若しは無願に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは有願、若しは無願に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは寂靜、若しは不寂靜に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは寂靜、若しは不寂靜に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の寂靜、不寂靜、若しは受・想・行・識の寂靜、不寂靜、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の寂靜、不寂靜の増語及び受・想・行・識の寂靜、不寂靜の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは寂靜、若しは不寂靜に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは寂靜、若しは不寂靜に即せる増語は是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは遠離、若しは不遠離に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは遠離、若しは不遠離に即せる

【三】有相。造作の相又は虛假の相あるもの。心に執着せられたる境界。
【四】無相。體なく又執着無き境界。

現、汝復た何の義を觀じて色の若しは樂、若しは苦に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは樂、若しは苦に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の樂・苦、若しは受・想・行・識の樂・苦、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の樂、苦の増語及び受・想・行・識の樂・苦の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは樂、若しは苦に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは樂、若しは苦に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは我、若しは無我に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは我、若しは無我に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の我・無我、若しは受・想・行・識の我・無我、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の我、無我的増語及び受・想・行・識の我・無我的増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは我、若しは無我に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは我、若しは無我に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは淨、若しは不淨に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは淨、若しは不淨に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の淨、不淨、若しは受・想・行・識の淨、不淨、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の淨、不淨の増語及び受・想・行・識の淨、不淨の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは淨、若しは不淨に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは淨、若しは不淨に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは空、若しは不空に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識の若しは空、若しは不空に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の空・不空、若しは受・想・行・識の空・不空、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の空・不空の増語及び受・想・行・識の空・不空の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何

(i) 五眼・六神通。

卷の第二十二

初分教誡教授品第七之十二

(i) 佛の十力・四無礙解・十八佛不共法。(ii) 大慈・大悲・大喜・大捨。(iii) 三十二大士相・八十隨好。(iv) 無忘失法・恆住捨性。(v) 一切智乃至一切相智。

卷の第二十三

初分教誡教授品第七之十三

(i) 預流果乃至阿羅漢果。(ii) 獨覺・菩提。(iii) 一切の菩薩摩訶薩行、諸佛の無上正等菩提。

(i) 爾の時に佛、具壽善現に告げたまはく、汝何の義を觀じて色に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。具壽善現答へて言はく、世尊、若しは色、若しは受・想・行・識尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の増語及び受・想・行・識の増語有らんをや。此の増語は既に非有なり。如何が色に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善現、汝復た何の義を觀じて色の若しは常若しは無常に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らず。受・想・行・識の若しは常、若しは無常に即せる増語は菩薩摩訶薩に非らずと言ふ耶と。世尊、若しは色の常・無常、若しは受・想・行・識の常・無常、尙ほ畢竟不可得なり。性非有なるが故に。況んや色の常・無常の増語及び受・想・行・識の常・無常の増語有らんをや。此の増語既に非有なり。如何が色の若しは常、若しは無常に即せる増語是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識の若しは常、若しは無常に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりと言ふ可けんやと。善

(i) 前卷に同じ

(ii) 前卷に同じ

(i) 「爾時佛告具壽善現」の代りに「復次善現」の語を以てし「汝觀何義言即色増語非菩薩摩訶薩即受想行識増語非菩薩摩訶薩耶具壽善現答言世尊若色若受想行識尙畢竟不可得……即受想行識若可得若不可得増語是菩薩摩訶薩」右の文中「色乃至識」のある所に次下に出ず諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(j)にて略し以下その諸法のみ略出す。

【一】具壽(Aryamaṇa)。法壽を具有する者の意。受戒得度を經たる僧の通稱なるも普通通に師長より子弟を呼ぶに用ふる語。

【二】不可得。空の異名。

卷の第十八

初分教誡教授品第七之八

(i)眼界乃至眼界。(i)色界乃至法界。(i)眼識界乃至意識界。(i)眼觸乃至意觸。眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。

(i) 前卷の符號を其儘用ふ

卷の第十九

初分教誡教授品第七之九

(i)地界乃至識界。(i)因緣乃至増上緣。(i)緣所生の法。(i)無明乃至老死。(i)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。

(i) 前卷に同じ

卷の第二十

初分教誡教授品第七之十

(i)内空乃至無性自性空。(i)眞如乃至不思議界。(i)四念住乃至八聖道支。(i)苦聖諦乃至道聖諦。(i)四靜慮乃至四無色定。

(i) 前卷に同じ

卷の第二十一

初分教誡教授品第七之十一

(i)八解脫乃至十遍處。(i)空解脫門乃至無願解脫門。(i)陀羅尼門・三摩地門。(i)極喜地乃至法雲地。

(i) 前卷に同じ

の不寂靜に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の不寂靜に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の遠離に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の遠離に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の不遠離に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の不遠離に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の有爲に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の有爲に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の無爲に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の無爲に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の有漏に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の有漏に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の無漏に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の生に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の生に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の滅に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の滅に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の善に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の善に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の非善に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の有罪に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の有罪に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の無罪に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の無罪に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の有煩惱に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の有煩惱に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の無煩惱に即せる増語

(h) 眼處乃至意識。(h) 色處乃至法處。(h) 眼界乃至意界。(h) 色界乃至法界。(h) 眼識界乃至意識界。(h) 眼觸乃至意觸。(h) 眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(h) 地界乃至識界。(h) 因緣乃至增上緣。(h) 緣所生の法。(h) 無明乃至老死。(h) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(h) 内容乃至無性自性空。(h) 四念住乃至八聖道支。(h) 苦聖諦乃至道聖諦。(h) 四靜慮乃至四無色定。(h) 八解脫乃至十遍處。(h) 空解脫門乃至無願解脫門。(h) 陀羅尼門・三摩地門。

卷の第十七

初分教誡教授品第七之七

(h) 極喜地乃至法雲地。(h) 五眼・六神通。(h) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八佛不共法。(h) 大慈・大悲・大喜・大捨。(h) 三十二大士相・八十隨好。(h) 無忘失法・恒住捨性。(h) 一切智乃至一切相智。

世尊、色等の法及び眞如、既に不可得にして而かも色等の法、眞如に即する是れ菩薩摩訶薩なり、或は色等の法眞如に異る是れ菩薩摩訶薩なり。或は色等の法、眞如の中に菩薩摩訶薩有り。或は菩薩摩訶薩の中に色等の法、眞如有り。或は色等の法、眞如を離れて菩薩摩訶薩有りと言はば、是の處有ること無し。佛、善現に告げたまはく、善哉善哉、是の如し、是の如し、汝が所説の如し。善現、色等の法不可得なるが故に、色等の法、眞如も亦た不可得なり。法及び眞如不可得なるが故に、菩薩摩訶薩も亦た不可得なり。菩薩摩訶薩不可得なるが故に所行の般若波羅蜜多も亦た不可得なり。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、應に是の如く學すべし。

(i) 復た次に善現、言ふ所の菩薩摩訶薩とは意に於て云何、色に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の常に即せる増語是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識の常に即せる増語、是れ菩薩摩訶薩

(h) 前巻の符號を其借用ふ

(i) 「復た善現所言菩薩摩訶薩者於意云何即色増語……即受想行識不可得増語是菩薩摩訶薩不、不也世尊」
右の文章を所付の符號にて略し以下只だ異なる諸法のみ出す。その諸法は「色乃至識」の五蘊の在る所に入る可きこと前例に同じ。

(g) 内容乃至無性自性空。(g) 四念住乃至八聖道支。(g) 苦聖諦乃至道聖諦。(g) 四靜慮乃至四無色定、(g) 八解脫乃至十遍處。(g) 空解脫門乃至無願解脫門。(g) 陀羅尼門・三摩地門。(g) 極喜地乃至法雲地(g)、五眼・六神通。

卷の第十六

初分教誡教授品第七之六

(g) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八佛不共法。(g) 大慈・大悲・大喜・大捨。(g) 三十二天士相・八十隨好。(g) 無忘失法・恒住捨性。(g) 一切智乃至一切相智。

(h) 爾の時佛、具壽善現に告げたまはく、汝何の義を觀じて色眞如に即する菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識眞如に即するは菩薩摩訶薩に非らず。色眞如に異るは菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識眞如に異るは菩薩摩訶薩に非らず。菩薩摩訶薩の中に色眞如有るに非らず、菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識眞如有るに非らず。色眞如を離れて菩薩摩訶薩有るに非らず、菩薩摩訶薩の中に色眞如有るに非らず、菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識眞如有るに非らずと言ふ耶と。具壽善現白して言さく、世尊、若しは色、若しは受・想・行・識尙畢竟不可得なり、性有るに非らざるが故に、況んや色眞如及び受・想・行・識眞如有らんをや、此の眞如既に有るに非らず。如何が色眞如に即するは是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識眞如に即するは是れ菩薩摩訶薩、色眞如に異るは是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識眞如に異るは是れ菩薩摩訶薩、色眞如の中に菩薩摩訶薩有り、受・想・行・識眞如の中に菩薩摩訶薩有り。菩薩摩訶薩の中に色眞如有り、菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識眞如有り、色眞如を離れて菩薩摩訶薩有り、受・想・行・識眞如を離れて菩薩摩訶薩有りと言ふ可けんや。

(g) 前卷の符號を其儘用ひしもの。

(h) 「爾時佛告具壽善現」の代りに「復次善現」の語を以てし「汝觀何義言即色眞如非菩薩摩訶薩即受想行識眞如非菩薩摩訶薩……非離受想行識眞如有菩薩摩訶薩耶具壽現白言……離受想行識眞如有菩薩摩訶薩」の中の五種のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(h)にて略し以下その諸法のみ略出す。

(f) 苦聖諦 乃至道聖諦。(f) 四靜慮 乃至四無色定。(f) 八解脫 乃至十遍處。(f) 空解脫門 乃至無願解脫門。(f) 陀羅尼門・三摩地門。(f) 極喜地 乃至法雲地。(f) 五眼・六神通。(f) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八佛共法。(f) 大慈・大悲・大喜・大捨。(f) 三十二大士相・八十隨好。(f) 無忘失法・恒住捨性。(f) 一切智 乃至一切相智。

世尊、菩提薩埵及び色等の法、既に不可得なり。而かも色等の法に即する是れ菩薩摩訶薩なり。或は色等に異る是れ菩薩摩訶薩なり。或は色等の法の中に菩薩摩訶薩有り。或は菩薩摩訶薩の中に色等の法有り。或は色等の法を離れて菩薩摩訶薩有りと言はば、是の處、有ること無し。佛、善現に告げたまはく、善哉善哉、是の如し、是の如し、汝が所説の如し。善現、色等の法不可得なるが故に。所行の般若波羅蜜多も亦た不可得なり。善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時應に是の如く學すべし。

(g) 復た次に善現、言ふ所の菩薩摩訶薩とは意に於て云何。色眞如に即する是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識眞如に即する是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色眞如に異る是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識眞如に異る是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色眞如の中に菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。受・想・行・識眞如の中に菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。菩薩摩訶薩の中に色眞如有りや不や。不なり世尊。菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識眞如有りや不や。不なり世尊。色眞如を離れて菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。受・想・行・識眞如を離れて菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。

(g) 眼處乃至意處。(g) 色處乃至法處。(g) 眼界乃至境界。(g) 色界乃至法界。(g) 眼識界乃至意識界。(g) 眼觸乃至意觸。(g) 眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(g) 地界乃至識界。(g) 因緣乃至增上緣。(g) 緣所生の法。(g) 無明乃至老死。(g) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。

(f) 前卷の符號を其儘用ふ

(g) 「復た善現所言菩薩摩訶薩者於意云何即色眞如是菩薩摩訶薩不也世尊即受想行識眞如是菩薩摩訶薩……離受想行識眞如有菩薩摩訶薩不也世尊」
右も(f)の場合の如く五蘊のある所に次下に出す諸法を代入して以下略すこととす。

通。(c)佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法。(d)大慈・大悲・大喜・大捨。(e)三十二大士相・八十隨好。(e)無忘失法・恒住捨性。(e)一切智乃至一切相智。

(f)爾の時佛、具壽善現に告げたまはく、汝何の義を觀じて色に即するは菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識に即するは菩薩摩訶薩に非らず、色に異るは菩薩摩訶薩に非らず、受・想・行・識に異るは、菩薩摩訶薩に非らず、色の中に菩薩摩訶薩有るに非らず、受・想・行・識の中に菩薩摩訶薩有るに非らず、菩薩摩訶薩の中に色有るに非らず、菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識有るに非らず、色を離れて菩薩摩訶薩有るに非らず、受・想・行・識を離れて菩薩摩訶薩有るに非らずと言ふ耶と。具壽善現白して言さく、世尊、若しは菩提、若しは薩埵、若しは色、若しは受・想・行・識尙畢竟不可得なり、性有るに非ざるが故に。況んや菩薩摩訶薩有らんをや。此れ既に有に非らず。如何が色に即する是れ菩薩摩訶薩・受・想・行・識に即する是れ菩薩摩訶薩、色に異る是れ菩薩摩訶薩、受・想・行・識に異る是れ菩薩摩訶薩、色の中に菩薩摩訶薩有り、受・想・行・識の中に菩薩摩訶薩有り。菩薩摩訶薩の中に色有り、菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識有り。色を離れて菩薩摩訶薩有り、受・想・行・識を離れて菩薩摩訶薩有りと言ふ可けんやと。

(f)眼處乃至意處。(f)色處乃至法處。(f)眼界乃至眼界。(f)色界乃至法界。(f)眼識界乃至意識界。(f)眼觸乃至意觸。(f)眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(f)地界乃至識界。(f)因緣乃至增上緣。(f)緣所生の法。(f)無明乃至老死。(f)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(f)內空乃至無性自性空。(f)眞如乃至不思議界。(f)四念住乃至八聖道支。

卷の第十五。

初分教誡教授品第七之五

初分教誡教授品第七之四一五

101

(f)「爾時佛告具壽善現」の代りに「復次善現」として「汝觀何義言即色非菩薩摩訶薩即受・想・行・識有菩薩摩訶薩……非離受・想・行・識有菩薩摩訶薩耶具壽善現白言……離受・想・行・識有菩薩摩訶薩」右の文中「色乃至識」のある所に全部次下に出す諸法を夫々相應して代入せば他は皆同文なり故に之を符號(f)にて略し以下その諸法のみ略出す。
【一】薩埵(Sattva)。有情と譯す。衆生といふに同じ。

善根をして皆生長することを得せしめ、善く生長し已つて、樂聞する所に隨つて諸佛の正法皆聽受するを得、既に聽受し已つて、乃至妙菩提の座に安坐して無上正等菩提を證得するまで、能く忘失せず、普ねく一切陀羅尼門・三摩地門に於て皆自在を得。是の如く善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するには應に實の如く名假、法假を覺るべし。

復た次に善現、言ふ所の菩薩摩訶薩とは、意に於て云何。色に即する是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識に即する是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色に異る是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。受・想・行・識に異る是れ菩薩摩訶薩なりや不や。不なり世尊。色の中に菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。受・想・行・識の中に菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。菩薩摩訶薩の中に色有りや不や。不なり世尊。菩薩摩訶薩の中に受・想・行・識有りや不や。不なり世尊。色を離れて菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。受・想・行・識を離れて菩薩摩訶薩有りや不や。不なり世尊。(e)眼處乃至意處。(e)色處乃至法處。(e)眼界乃至意界。(e)色界乃至法界。(e)眼識界乃至意識界。(e)眼觸乃至意觸。(e)眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(e)地界乃至識界。

(e)因緣乃至增上緣。(e)緣所生の法。

卷の第十四

初分教誡教授品第七之四

(e)無明乃至老死。(e)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(e)內空乃至無性自性空。(e)眞如乃至不思議界。(e)四念住乃至八聖道支。(e)苦聖諦乃至道聖諦。(e)四靜慮乃至四無色定。(e)八解脫乃至十遍處。(e)空解脫門乃至無願解脫門。(e)陀羅尼門・三摩地門。(e)極喜地乃至法雲地。(e)五眼六神

【四】一法の定んで菩薩なるものなく諸法和合の假設なるを説く。

【復次善現所言菩薩摩訶薩者於意云何即色是菩薩摩訶薩不也世尊即受想行識是菩薩摩訶薩不……離受想行識有菩薩摩訶薩不也世尊一右の文中「色乃至識」のある所に次に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(e)にて略し以下その諸法のみ略出す。

(e) 前卷に用ひし符號を其儘用ふ

諸受の若しは樂若しは苦若しは不苦不樂。(d)地界 乃至識界。(d)因縁乃至増上縁及び縁より生ずる所の法。(d)無明 乃至老死愁歎苦憂惱。(d)有爲界・無爲界。(d)有漏界・無漏界。(d)布施 乃至般若方便善巧妙願力智波羅蜜多。(d)內空 乃至無性自性空。(d)眞如 乃至不思議界。(d)四念住 乃至八聖道支。(d)苦聖諦 乃至道聖諦。(d)四靜慮 乃至四無色定。(d)八解脫 乃至十遍處。(d)空解脫門 乃至無願解脫門。(d)陀羅尼門・三摩地門。(d)極喜地 乃至法雲地。(d)五眼・六神通。(d)佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法。(d)大慈・大悲・大喜・大捨。(d)三十二大士相・八十隨好。(d)無忘失法・恒住捨性。(d)一切智 乃至一切相智。(d)預流果乃至獨覺菩提。(d)一切の菩薩摩訶薩行・諸佛の無上正等菩提。(d)我乃至見者。異生に著せず聖者に著せず菩薩に著せず如來に著せず名に著せず相に著せず嚴淨佛土に著せず成熟有情に著せず方便善巧に著せず、所以は何ん、一切法皆無所有にして能著所著著處著時不可得なるを以ての故に。是の如く善現、諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行する時一切法に於て所著無きが故に便ち能く布施乃至般若方便善巧妙願力智波羅蜜多を増益し亦た能く內空乃至無性自性空に安住し亦た能く眞如乃至不思議界に安住し亦た能く四念住乃至八聖道支を増益し亦た能く苦集滅道聖諦に安住し亦た能く四靜慮乃至四無色定に安住し亦た能く八解脫乃至十遍處を増益し、亦た能く空乃至無願解脫門を増益し、亦た能く菩薩の正性離生に趣入し。亦能く菩薩の不退轉地に安住し、亦た能く一切陀羅尼門・三摩地門を圓滿し、亦た能く極喜地 乃至法雲地を圓滿し、亦た能く五眼・六神通を圓滿し亦た能く佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法を圓滿し、亦た能く大慈大悲大喜大捨を圓滿し、亦た能く三十二大士相、八十隨好を圓滿し、亦た能く無忘失法・恒住捨性を圓滿し、亦た能く一切智乃至一切相智を圓滿し、亦た菩薩の最勝神通を得、神通を具し已つて、一佛國より一佛國に至り、諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故に、自らの佛土を嚴淨せんと欲するが爲の故に。如來應正等覺を見たてまつらんが爲に及び見已つて供養恭敬尊重讚歎せんが爲に、諸の

【一】異生。凡夫の異名。聖者に異なる生類の意或は六道の輪廻して種種別異の果報を受くるの故に名づく。
【二】無所有。或は無所得といふ。空の異名。

【三】不退轉地。功德善根の愈増進して退失退轉なき位地。

復た次に善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、若しは菩薩摩訶薩、若しは般若波羅蜜多、若しは此の二名、俱に有爲界中に在るを見ず、亦た無爲界中に在るを見ず。何を以ての故に。善現、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て分別を起さず、異分別無ければなり。善現、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て無分別に住し、能く布施波羅蜜多を修し、亦た能く淨戒、乃至般若波羅蜜多を修し、能く內空に住し、亦た能く外空、乃至無性自性空に住し、能く眞如に住し、亦た能く法界、乃至不思議界に住し、能く四念住を修し、亦た能く四正斷、乃至八聖道支を修し、能く苦聖諦に住し、亦た能く集、乃至道聖諦に住し、能く四靜慮を修し、亦た能く四無量・四無色定を修し、能く八解脫を修し、亦た能く八勝處、乃至十遍處を修し、能く空解脫門を修し、亦た能く無相・無願解脫門を修し、能く一切陀羅尼門を修し、亦た能く一切三摩地門を修し、能く極喜地を修し、亦た能く離垢地、乃至法雲地を修し、能く五眼を修し、亦た能く六神通を修し、能く佛の十力を修し、亦た能く四無所畏、乃至十八佛不共法を修し、能く無忘失法を修し、亦た能く恒住捨性を修し、能く一切智を修し、亦た能く道相智、一切相智を修す。善現、是の菩薩摩訶薩は是の如き時に於て、菩薩摩訶薩を見ず、菩薩摩訶薩の名を見ず。般若波羅蜜多を見ず、般若波羅蜜多の名を見ず。唯だ正しく一切智智を勤求するのみ何を以ての故に、善現、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに一切法に於て善く實相に達し、其の中の無染淨を了知するが故に。

復た次に善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、應に實の如く名は假りの施設なり、法は假りの施設なりと覺るべし。善現、是の菩薩摩訶薩、名法の假に於て實の如く覺り已つて(d)色に著せず、受・想・行・識に著せず。(d)眼處、乃至意處。(b)色處、乃至法處。(d)眼界、乃至意界。(d)色界、乃至法界。(d)眼識界、乃至意識界。(d)眼觸、乃至意觸。(d)眼觸、乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の

(d) 「不著色、不著受想行識」右の九字を所附の符號(d)にて略し以下只だ「色乃至識」のある所に入るべき諸法を略出するに止む。

は出世間を觀すべからず。色の若しは（一四）雜染、若しは清淨を觀すべからず、受・想・行・識の若しは雜染、若しは清淨を觀すべからず。色の若しは屬生死、若しは屬涅槃を觀すべからず、受・想・行・識の若しは屬生死、若しは屬涅槃を觀すべからず。色の若しは在內、若しは在外、若しは在兩間を觀すべからず。受・想・行・識の若しは在內、若しは在外、若しは在兩間を觀すべからず。色の若しは可得、若しは不可得を觀すべからず、受・想・行・識の若しは可得、若しは不可得を觀すべからず。

(c) 眼處（三）乃至意處。(c) 色處 乃至法處。(c) 眼界 乃至意界。(c) 色界 乃至法界。(c) 眼識界 乃至意識界。(c) 眼觸 乃至意觸。(c) 眼觸に緣せられて生ずる所の樂受・苦受・不苦不樂受。(c) 地界 乃至識界。

卷の第十二

初分教誡教授品第七之二

(c) 因緣 乃至増上緣。(c) 緣より生ずる所の法。(c) 無明 乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 布施波羅蜜多 乃至般若波羅蜜多。(c) 內空 乃至無性自性空。(c) 眞如 乃至不思議界。(c) 四念住 乃至八聖道支。(c) 聖諦 乃至道聖諦。(c) 四靜慮 乃至四無色定。(c) 八解脫 乃至十遍處。(c) 空解脫門 乃至無願解脫門。(c) 陀羅尼門・三摩地門。(c) 極喜地 乃至法雲地。(c) 五眼・六神通。

卷の第十三

初分教誡教授品第七之三

(c) 佛の十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法。(c) 大慈・大悲・大喜・大捨。(c) 三十二大士相・八十隨好。(c) 無忘失法・恒住捨性。(c) 一切智 乃至一切相智。(c) 預流果 乃至獨覺菩提。(c) 一切の菩薩摩訶薩行、諸佛の無上正等菩提。

【一四】 雜染。一切有漏法の總名にて善惡無記の三性をかねしもの。

(c) 前卷と同意。

(c) 前卷と同じ。

の如く一切は但だ……(以下(甲)ニ同ジ)。

是の如く善現、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、一切法に於て名假、法假及び教授假を應に正しく修學すべし。

(c)復た次に善現、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色の若しは常、若しは無常を觀すべからず、受・想・行・識の若しは常、若しは無常を觀すべからず。色の若しは樂、若しは苦を觀すべからず。色の若しは我、若しは無我を觀すべからず。色の若しは淨、若しは不淨を觀すべからず。色の若しは空、若しは不空を觀すべからず、受・想・行・識の若しは我、若しは無我を觀すべからず。色の若しは淨、若しは不淨を觀すべからず。色の若しは空、若しは不空を觀すべからず、受・想・行・識の若しは有相、若しは無相を觀すべからず。色の若しは有願、若しは無願を觀すべからず、受・想・行・識の若しは有願、若しは無願を觀すべからず。色の若しは寂靜、若しは不寂靜を觀すべからず。色の若しは遠離、若しは不遠離を觀すべからず。色の若しは有爲、若しは無爲を觀すべからず。色の若しは有漏、若しは無漏を觀すべからず。色の若しは生、若しは滅を觀すべからず。受・想・行・識の若しは生、若しは滅を觀すべからず。色の若しは善、若しは非善を觀すべからず。受・想・行・識の若しは善、若しは非善を觀すべからず。色の若しは有罪、若しは無罪を觀すべからず、受・想・行・識の若しは有罪、若しは無罪を觀すべからず。色の若しは有煩惱、若しは無煩惱を觀すべからず、受・想・行・識の若しは有煩惱、若しは無煩惱を觀すべからず。色の若しは世間、若しは出世間を觀すべからず、受・想・行・識の若しは世間、若し

【二】名假、法假及教授假は三假施設又は三波羅攝提(三波羅攝提)といひ、般若經に於て凡情の實我實法の執を破せんが爲に明かされた三種の假。

(c)「復た善現諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時不應觀色若常若無常不應觀受想行識若常若無常……不應觀受想行識若可得若不可得」

右の文中「色乃至識」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號

(c)にて略し以下その諸法のみ略出す。

【一】遠離。無爲法の性、空にして一切の事相、繫縛を脱するを云ふ。

【二】有爲。爲は造作の義、すべて因縁和合によりて生成せる事物を云ふ。

【三】有漏。漏は漏泄の義にて煩惱の異名、すべて煩惱を含有する事物の稱。

り。是の如き假法は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる菩薩摩訶薩と爲し、謂ゆる般若波羅蜜多及び此の二名と爲すのみ。是の如き三種は但だ假名のみ有り、此の諸の假名は内に在らず、外に在らず、兩間に在らず、不可得の故に。

(a)眼處⁽²⁾乃至意處。(a)色處⁽³⁾乃至法處。(a)眼界⁽⁴⁾乃至意界。(a)色界⁽⁵⁾乃至法界。(a)眼識界⁽⁶⁾乃至意識界。(a)眼觸⁽⁷⁾乃至意觸。(a)眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受⁽⁸⁾乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。

(甲)復た次に善現、譬へば内身の所有頭頸肩膊手臂腹背胸脇腰脊髀膝膕脛足等は但だ是れ假名のみなるが如く是の如く名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる内身の所有頭頸乃至足等と爲すのみ。是の如く一切は但だ假名のみ有り、此の諸の假名は内に在らず外に在らず兩間に在らず不可得の故に。是の如く善現、若しは菩薩摩訶薩、若しは般若波羅蜜多、若しは此の二名皆是れ假法なり。是の如き假法は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる菩薩摩訶薩と爲し、謂ゆる般若波羅蜜多及び此の二名と爲す。是の如き三種は但だ假名のみ有り。此の諸の假名は内に在らず外に非ず兩間に非ず、不可得の故に。

復た次に善現、譬へば外事の所有草木根莖枝葉華果等の物但だ是れ假名なるが如く、是の如く名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる外事の所有草木根莖枝葉華果等の物と爲すのみ。是の如く一切は但だ……(以下(甲)ニ同ジ)。

復た次に善現、譬へば過去・未來・現在の一切の如來應正等覺は但だ是れ假名のみなるが如く是の如く名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる過去・未來・現在の一切の如來應正等覺と爲すのみ。是の如く一切は但だ……(以下(甲)ニ同ジ)。

復た次に善現、譬へば幻事夢境響像陽焰光影若しは尋香城變化事等但だ是れ假名のみなるが如く是の如く名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる幻事乃至變化事等と爲すのみ。是

(甲)「復た善現譬如内身所有頭頸……如是三種但有假名此諸假名不在内不在外不在兩間不可得故」
右の文全體を符號(甲)にて略し以下只だ異なる所のみ出す

波羅蜜多と名づく可き有るをも見ず。是の如き二名も亦た有るを見ず。云何が我れをして諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣説し、諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して般若波羅蜜多に於て修學究竟せしめたまふやと。佛言はく、善現、菩薩摩訶薩は但だ名のみ有り、謂ゆる菩薩摩訶薩と爲す。般若波羅蜜多は但だ名のみ有り、謂ゆる般若波羅蜜多と爲す。是の如き二名も亦た但だ名のみ有り。善現、此の三名は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説のみ。是の如き假名は内に在らず、外に在らず、兩間に在らず、不可得の故に。

善現、當に知るべし。譬へば我は但だ是れ假名のみなるが如く、是の如く名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説のみ。謂ゆる之を我と爲す。是の如く有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・儒童・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者も亦た但だ是れ假名のみ。是の如き名假は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる有情乃至見者と爲すのみ。是の如く一切は但だ假名のみ有り。此の諸の假名は内に在らず、外に在らず、兩間に在らず。不可得の故に。是の如く善現、若しは菩薩摩訶薩、若しは般若波羅蜜多、若しは此の二名は皆是れ假法なり。是の如き假法は不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる菩薩摩訶薩と爲し、謂ゆる般若波羅蜜多及び此の二名と爲すのみ。是の如き三種は但だ假名のみ有り。此の諸の假名は内に在らず、外に在らず、兩間に在らず、不可得の故に。

(a) 復た次に善現、譬へば色は但だ是れ假法なるが如く、是の如く法は假にして不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説のみ。謂ゆる之を色と爲す。是の如く受・想・行・識も亦た但だ是れ假法のみ。是の如き法は假にして不生不滅なり。唯だ有想・等想・施設・言説を謂ゆる受・想・行・識と爲す。是の如く一切は但だ假名のみ有り、此の諸の假名は内に在らず、外に在らず、兩間に在らず、不可得の故に。是の如く善現、若しは菩薩摩訶薩、若しは般若波羅蜜多、若しは此の二名皆是れ假法な

【四】不可得。空の異名。諸法の空無にして所得の實體無きを云ふ。

【五】或乃至見者は十六神我或は十六知見と稱し、未だ正道を見ざる人が五陰等の法中に主宰を立て我我所ありと妄計して十六の別を立つるもの。

我 (Atman)。常、一、主、宰の四義を有する自己主體の中心たる自我を云ふ。佛教は之を否定して諸法無我となす。

【六】儒童。磨納縛迦 (Mānava) の譯。童子の總稱。

【七】作者。五陰法中には我れ身力手足ありて能く事を任ずと妄計すること。

【八】起者。五陰法中にて我れ能く後世罪福の業を起すと妄計すること。

【九】受者。五陰法中にて我れ身當に罪福の果報を受くべしと妄計すること。

(a) 復た善現譬如色但是假法如是法假不生不滅唯是有想等施設言説謂之爲色如是受等行識亦但是假法……不在内不在外不在兩間不可得故

右の文中「色乃至識のある所に次に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

初分教誡教授品第七之一

爾の時に佛、具壽^一善現に告げたまはく、汝辯才を以て當に菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣説し、諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して般若波羅蜜多に於て修學し究竟せしむべしと。時に諸の菩薩摩訶薩衆及び大聲聞・天龍・藥叉・人・非人等咸く是の念を作さく。今尊者善現、自らの慧辯才の力を以に當に菩薩摩訶薩衆の爲に、般若波羅蜜多相應の法を宣説すべしと爲すや。諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して般若波羅蜜多に於て修學究竟せしむるに、當に佛の威神力を承くべしと爲す耶と。具壽善現、諸の菩薩摩訶薩衆及び大聲聞・天龍・藥叉・人・非人等の心の所念を知り、便ち具壽舍利子に告げて言はく、諸佛の弟子の所説の法教は當に皆佛の威神力を承くと知るべし。何を以ての故に。舍利子、諸佛の他の爲に法要を宣説するは、彼れ佛の教を承け精勤修學して便ち能く諸法の實性を證得し、是れに由つて他の爲に宣説する所有ればなり。皆^二法性と能く相違せず。故に佛の言ふ所は燈の傳照の如し。舍利子、我れ當に佛の威神加被を承け、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣説し、諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して般若波羅蜜多に於て修學究竟せしむべきも自らの慧辯才の力を以てするに非らず。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多相應の法は諸の聲聞獨覺の境界に非らざればなり。

爾の時具壽善現、佛に白して言さく、世尊、佛の勅したまふ所の如き、汝辯才を以て當に菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣説し、諸の菩薩摩訶薩を教誡教授して般若波羅蜜多に於て修學究竟せしむべしと。世尊、此の中何の法をか名づけて菩薩摩訶薩と爲し、復た何の法有りてか名づけて般若波羅蜜多と爲す。世尊、我れ法の菩薩摩訶薩と名づく可き有るを見ず。亦た法の般若

【一】菩薩に般若を教ふと云ふも般若も菩薩も亦名字も假名なること我家生五蘊諸法の假名なるが如くなるを明す。
【二】善現。須菩提(Subhūti)の譯。佛十大弟子の一人にて、佛は此人をして般若の空理を説かしむ。

【三】法性(Dharmata)。實相、眞如、泮界、涅槃など異名團體なり。眞如が萬法の體となり、染、淨、有情數、非情數の何れに於ても其性不改不變なるを法性と云ふ。

爾の時東南方……此れより西北方に……(他ハ(甲)ニ同ジ)。

爾の時西南方……此れより東北方に……(他ハ(甲)ニ同ジ)。

爾の時西北方……此れより東南方に……(他ハ(甲)ニ同ジ)。

爾の時下方……此れより上方に……(他ハ(甲)ニ同ジ)。

爾の時上方……此れより下方に……(他ハ(甲)ニ同ジ)。

爾の時に四大王衆天乃至他化自在天、梵衆天乃至色究竟天各無量種種の香鬘カク所謂塗香・末香・燒香・樹香・菓香、諸の馨和香・悅意華鬘・生類ニ華鬘・龍鬘華鬘、並びに無量種種の衆カクの雜華鬘を持ち、及び無量種種の天華五・唱鉢羅華ニ・鉢特摩華セ・俱某陀華ハ・奔荼利華ハ・微妙音華ハ・大微妙音華及び餘の無量種種の天華を持ちて佛所に來至し、供養恭敬尊重讚歎し、佛足を頂禮し、却つて一面に住せり。爾の時十方の諸の來れる菩薩摩訶薩衆及び餘の無量の欲、色界天所獻の種種の寶幢・幡蓋・珍瓔・妙樂種種の香華、佛の神力を以て上つて空中に踊り臺蓋を合成し、遍ねく三千大千佛土を覆ふ。

臺の頂の四角上に各寶幢有り、臺蓋の寶幡皆瓔珞を垂れ、勝幡・妙綵・珍異の華鬘、種種に莊嚴し、甚だ愛樂す可し。時に此の會中に百千俱胝那庾多の有情有り、皆座より起ち、合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊、我れ等未來に願はくは作佛して相好威德今の世尊の如く、國土莊嚴し、聲聞、菩薩、天人の衆會、轉ずる所の法輪、並びに今の佛の如くなるを得んことをと。爾の時世尊、其の心願もて已に諸法に於て、無生忍を悟り、一切の不生不滅無作無爲を了達せるを知ろしめして即便ち微笑したまふに、面門復た種種の色光を出す。尊者阿難即ち座より起ちて、合掌恭敬し白して言さく、世尊、何の因、何の緣にて此の微笑を現じたまふやと。佛、阿難に告げたまはく、是の座より起てる百千俱胝那庾多の衆は、已に諸法に於て無生忍を悟り、當來世に於て六十八俱胝大劫を經、菩薩行を修し、華積劫中に當に作佛することを得べし、皆同じく一號にして覺分華如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵と謂ふと。

【四】華鬘(Kumamata)。

印度に於ける男女共に多くの花を結び合せて首又は身の飾りとなす風俗なるも、又以て佛前を莊嚴するの具となす。

【五】唱鉢羅華(Chyula)。

青蓮華。

【六】鉢特摩華(Tamra)。

紅蓮華。

【七】俱某陀華(Kumuda)。

黃蓮華。

【八】奔荼利華(Pungarika)。

白蓮華。

【九】無生忍。生滅を遠離せる眞如實相の理に安住して動かざるをいふ。初地或は七八九地に於て得べき悟。

【一〇】華積劫。一智度論四十二に經文を據して「是諸人於未來來世。過六十八億劫。當一作佛。劫名華積。佛皆號覺華。」とあり。

初分現舌相品第六

爾の時世尊、廣長舌相を現じ、遍ねく三千大千世界を覆ひたまふ。復た舌相より無量無數の種種の色光を出し、普ねく十方殞伽沙等の諸佛世界を照らす。(甲)是の時東方殞伽沙等の諸の佛土の中に、各無量無數の菩薩摩訶薩有り、斯の光を覩已つて各其の佛に詣り、頂禮恭敬し白して言さく、世尊、是れ誰れの神力ぞ。復た何の縁を以てか此の瑞有ると。時に彼の諸佛各菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子、此れより西方に佛世界有り、名づけて堪忍と曰ふ。佛を釋迦牟尼佛如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵と號づく。今菩薩摩訶薩衆の爲に大般若波羅蜜多を説き廣長舌相を現じ、遍ねく三千大千世界を覆ひたまへり。復た舌相より無量無數の種種の色光を出し普ねく十方殞伽沙等の諸佛世界を照せり。今見る所の光は即ち是れ彼の佛の舌相の現する所なりと。時に諸の菩薩摩訶薩是の事を聞き已つて歡喜踊躍し、各佛に白して言さく、我れ等堪忍世界に往き、釋迦牟尼佛及び諸の菩薩摩訶薩衆を觀禮し供養し、并びに般若波羅蜜多を聽かんと欲す。唯だ願はくは世尊、哀愍して聽許したまへと。時に彼の諸佛各告げて言はく、今正しく是れ時なり。汝の意に隨つて往けと。一一の佛土の無量無數の菩薩摩訶薩衆、各佛足を禮し右に繞ぐることを七匝して、無量の寶幢幡蓋香鬘瓔珞金銀等の華を嚴持し種種上妙の伎樂を奏撃し、須臾の間を経て此の佛所に至り、供養恭敬尊重讚歎し、佛足を頂禮し、却つて一面に住しぬ。

爾の時南方殞伽沙……此れより北方に佛世界有り(他ハ(甲)ニ同シ)。

爾の時西方……此れより東方に……(他ハ(甲)ニ同シ)。

爾の時北方……此れより南方に……(他ハ(甲)ニ同シ)。

爾の時東北方……此れより西南方に……(他ハ(甲)ニ同シ)。

【一】舌相の示現を説く。
 【二】廣長舌相。如來三十二相の一。虛妄なきを表はすの相なり。
 (甲)是時東方殞伽沙……劫住一面以下右の文章を所付の符號にて略し、異なる所のみ出す。

【三】須臾(Muhurta)。極少の時刻を表はす語。

は淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・若しは廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・若しは無想有情天・若しは無繁天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天・若しは空無邊處天・識無邊處天・無所有處天・非想非非想處天・世に出現す。此の菩薩摩訶薩に由るが故に預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺・菩薩摩訶薩、及び諸の如來應正等覺有りて世に出現するを得。此の菩薩摩訶薩に由るが故に世間に種種の資生樂具有りてるを得、諸の有情の與に大饒益を作す。此の菩薩摩訶薩に由るが故に世間に種種の資生樂具有りて出現するを得。所謂飲食・衣服・臥具・房舍・燈明・末尼・眞珠・瑠璃・螺貝・璧玉・珊瑚・金銀等の寶世に出現す。要を以て之れを言はば一切世間の人天等の樂、及び涅槃の樂皆是の如き菩薩摩訶薩有るに由らざる無し。所以は何ん。是の菩薩摩訶薩は自ら正しく布施(2)乃至般若波羅蜜多を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく内空(3)乃至無性自性空(4)に安住し、亦た他をして安住せしめ、自ら眞如(5)乃至不思議界(6)に安住し、亦た他をして安住せしめ、自ら正しく四念處(7)乃至八聖道支(8)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく苦集滅道聖諦(9)に安住し、亦た他をして安住せしめ、自ら正しく四靜慮(10)・四無量(11)・四無色定(12)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく八解脫(13)乃至十遍處(14)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく空無相無願解脫門(15)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく諸の菩薩地(16)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく五眼六神通(17)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく佛の十力(18)乃至十八不共法(19)を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく無忘失法(20)・恒住捨性を修行し、亦た他をして修行せしめ、自ら正しく一切智(21)・道相智(22)・一切相智(23)を修行し、亦た他をして修行せしむ。是の故に此の般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩に由りて、一切の有情皆殊勝の利益安樂を得るなりと。

【註】末尼(Mani)。摩垢、如意、無垢、殊などと譯す。寶珠の名。

(b) 淨戒波羅蜜多 乃至般若波羅蜜多。

(b) 內空 乃至無性自性空。(b) 真如 乃至不思議界。(b) 四念住 乃至八聖道支。(b) 苦集滅道聖諦。(b) 四靜慮・四無量・四無色定。(b) 八解脫 乃至十遍處。(b) 空・無相・無願解脫門。(b) 陀羅尼門・三摩地門。(b) 菩薩摩訶薩地。(b) 五眼・六神通。(b) 佛の十力 乃至十八不共法。(b) 無忘失法・恆住捨性。(b) 一切智・道相智・一切相智。

世尊、如來も亦た般若波羅蜜多を修行し、能く種種の功德を修行し安住し圓滿し具足するに由るが故に無等等の色を得、無等等の受・想・行・識を得、無等等の菩提を證し、無等等の法輪を轉じ、無量の諸の有情類を度脱し、殊勝の利益安樂を獲せしめたまふ。過去・未來・現在の諸佛も亦た般若波羅蜜多に於て精勤修學して種種の功德皆悉く圓滿し、已に無上正等菩提を證し、當に無上正等菩提を證すべく、現に無上正等菩提を證し、妙法輪を轉じ、無量の衆を度して殊勝の利益安樂を獲せしむ。是の故に世尊、若し菩薩摩訶薩、一切法に於て度りて彼岸に至らんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は、一切世間の若しは天、若しは人、阿素洛等、皆應に供養恭敬尊重讚歎守護し般若波羅蜜多に於て精進修行するに無障無礙ならしむべし。

爾の時世尊、諸の聲聞及び諸の菩薩摩訶薩等に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所説の如し。般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は、一切世間の若しは天、若しは人、阿素洛等皆供養恭敬尊重讚歎守護し般若波羅蜜多に於て精進修行するに無障無礙ならしむべし。何を以ての故に。此の菩薩摩訶薩に由るが故に、世間の人天有りて出現するを得ればなり。所謂利帝利大族・婆羅門大族・長者大族・居士大族、若しは轉輪王、若しは四大王衆天・三十三天・夜摩天・觀史多天・樂變化天・他化自在天、若しは梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天、若しは光天・少光天・無量光天・極光淨天、若し

卷の第十

初分讚勝德品第五

爾の時具壽舍利子。具壽大目連。具壽大飲光。具壽善現等、衆の識る所を望む諸の大苾芻、及び苾芻尼、並びに諸の菩薩摩訶薩衆、^三鄒波素迦、鄒波斯迦、皆座より起ちて恭敬合掌し、俱に佛に白して言さく、(a)世尊、菩薩摩訶薩の所有般若波羅蜜多は是れ大波羅蜜多なり。(a)是れ廣波羅蜜多なり。(a)是れ第一波羅蜜多なり。(a)是れ勝波羅蜜多なり。(a)是れ妙波羅蜜多なり。(a)是れ微妙波羅蜜多なり。(a)是れ算波羅蜜多なり。(a)是れ高波羅蜜多なり。(a)是れ最波羅蜜多なり。(a)是れ極波羅蜜多なり。(a)是れ上波羅蜜多なり。(a)是れ無上波羅蜜多なり。(a)是れ無上上波羅蜜多なり。(a)是れ等波羅蜜多なり。(a)是れ無等波羅蜜多なり。(a)是れ無等波羅蜜多なり。(a)是れ無待對波羅蜜多なり。(a)是れ如虛空波羅蜜多なり。(a)是れ自相空波羅蜜多なり。(a)是れ共相空波羅蜜多なり。(a)是れ一切法空波羅蜜多なり。(a)是れ不可得空波羅蜜多なり。(a)是れ無性空波羅蜜多なり。(a)是れ無生波羅蜜多なり。(a)是れ無減波羅蜜多なり。(a)是れ無染波羅蜜多なり。(a)是れ無諍波羅蜜多なり。(a)是れ寂靜波羅蜜多なり。(a)是れ遠離波羅蜜多なり。(a)是れ寂止波羅蜜多なり。(a)是れ調伏波羅蜜多なり。(a)是れ明呪波羅蜜多なり。(a)是れ誠諦波羅蜜多なり。(a)是れ開破一切功德波羅蜜多なり。(a)是れ成就一切功德波羅蜜多なり。(a)是れ能破一切波羅蜜多なり。(a)是れ不可屈代波羅蜜多なり。

(b)世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は最尊最勝最上最妙にして大勢力を具し能く無等等の布施を修行し能く無等等の布施を圓滿し、能く無等等の布施波羅蜜多を具し、能く無等等の自體を得。所謂無邊殊勝の相好妙莊嚴身もて能く無等等の妙法を證す、所謂無上正等菩提なり。

【一】般若の勝妙を讚歎す。
 【二】苾芻 (比丘) は比丘、苾芻尼 (比丘尼) は比丘尼なり。
 【三】鄒波素迦は優婆塞、鄒波斯迦は優婆夷に同じ。
 (a) 「世尊、菩薩摩訶薩所有般若波羅蜜多」以下右の十五字を所附の符號にて略し只だ異なる所のみ出す。
 (b) 「世尊修行般若波羅蜜多……能修行無等等布施能圓滿無等等布施能具足無等等布施波羅蜜多……所謂無上正等菩提」右の文中「布施波羅蜜多」とある所に以下に出ず諸法を相應して代入せば他は皆同文なり故に之を符號(b)にて略し以下その諸法のみ略出す但し「復如、內空、若聖諦の三は、能修行」とある所を「能安住」と改むるものとす。

の佛土の功德莊嚴微妙殊勝なり。爾の時に當つて此の堪忍界の功德莊嚴の及ぶ能はざる所なり。時に此の衆會の無量百千の諸の有情類、各願を發して言さく、我が修する所の諸の純淨業を以て願はくは當に彼れ彼れの佛土に往生すべしと。爾の時世尊、其の心願を知りて即ち復た微笑し、面門又た種種の色光を出だす。時に阿難陀復た座より起ち、恭敬して佛に微笑の因縁を問へり。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝今此の座より而かも起てる無量百千の諸の有情を見しや不やと。阿難白して言さく、唯然已に見たりと。佛、阿難に告げたまはく、是の諸の有情此より壽盡きて、彼の願力に隨つて各彼れ彼れの佛土に往生するを得、諸佛の所に於て菩薩行を修し乃ち無上正等菩提に至る。所生の處に在りて常に佛を離れず、供養恭敬尊重讚歎し、布施乃至般若波羅蜜多を精勤修習し、內空乃至無性自性空に安住し、眞如乃至不思議界に安住し、四念住乃至八聖道支を修行し、苦集滅道聖諦に安住し、四靜慮・四無量・四無色定を修行し、八解脫乃至十遍處を修行し、空・無相・無願解脫門を修行し、一切陀羅尼門・三摩地門を修行し、菩薩摩訶薩地を修行し、五眼・六神通を修行し。佛の十力、乃至十八不共法を修行し、無忘失法・恒住捨性を修行し、一切智・道相智・一切相智及び餘の菩薩摩訶薩行を修行し、圓滿するを得已つて俱時に成佛す。皆同じく一號にして莊嚴王如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵と謂ふと。

平等性の中に於て安立し大饒益を作す。舍利子、是の菩薩摩訶薩は此の因縁に由りて現法の中に於て十方界一切の如來應正等覺に共に護念せらるるを得、亦た十方一切の菩薩摩訶薩衆に共に稱讚せらるるを得、亦た一切の聲聞獨覺の梵行を修する者に敬愛せらるるを得、亦た一切世間の天人阿素洛等に供養恭敬尊重讚歎せらる。舍利子、是の菩薩摩訶薩は此の因縁に由りて所生の處に隨つて眼常に愛す可からざる色を見ず。耳常に愛す可からざる聲を聞かず。鼻常に愛す可からざる香を嗅がず。舌常に愛す可からざる味を嘗めず。身常に愛す可からざる觸を覺らず。意常に愛す可からざる法を取らず。舍利子、是の菩薩摩訶薩、此の因縁に由りて獲る所の功德轉增轉勝し乃至無上正等菩提まで常に退轉無しと。佛は甚深般若波羅蜜多の勝功德を説きたまふ時に當つて、會中無量の大苾芻衆より而かも起ち、各種種新淨の上服を持ちて世尊に奉獻す。奉り已つて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發す。爾の時世尊、即便ち微笑し、面門より種種の色光を出だしたまふ。時に阿難陀即ち座より起ち偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け、合掌恭敬し佛に白して言さく、世尊、何の因、何の縁もて此の微笑を現じたまへるや。諸佛の微笑したまふは因縁無きに非ず。唯だ願くは世尊、哀愍して爲に説きたまへと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、此の座より起てる無量の苾芻、是れより已後六十一劫、星喻劫の中に當に作佛することを得べし。皆同じく一號にして、大幢相如來應正等覺行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵と謂ふ。是の諸の苾芻、此より歿し已つて、當に東方の不動佛國に生じ、彼の佛所に於て梵行を勤修すべし。爾の時復た六十百千の諸天子衆有り、佛所説の甚深般若波羅蜜多の功德勝利を聞きて皆無上正等覺心を發す。世尊記したまはく、彼れ當に慈氏如來の法の中に於て淨信にして出家し梵行を勤修すべしと。慈氏如來皆爲に授記し、當に無上正等菩提を得て正法輪を轉じ無量の衆を度して皆常樂涅槃を證得せしむべし。爾の時此の間の一切の衆會、佛の神力を以て皆十方各千佛土の諸佛世尊及び彼の衆會を見る。彼の諸

【三】 得益受記を明す。

【二】 阿耨多羅三藐三菩提三善提無上正覺と譯す。

【一】 面門。口、面頰、鼻口の間、の三種あり。

【三】 薄伽梵。婆伽婆ともいひ、世尊と譯す。

【二】 慈氏。(Maitreya)。彌勒の義譯。

素者に著せず。精進者に著せず、懈怠者に著せず。靜慮者に著せず、散亂者に著せず。般若者に著せず、愚癡者に著せず。舍利子、是の菩薩摩訶薩、爾の時に當つて著・不著に於て亦た所著無し。何を以ての故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法畢竟空に達するが故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、爾の時に當つて毀罵に著せず、讚歎に著せず。損害に著せず、饒益に著せず。輕慢に著せず、恭敬に著せず。何を以ての故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法畢竟不生に達し。無生法中毀罵、讚歎の法有ること無きが故に。損害・饒益の法有ること無きが故に。輕慢・恭敬の法有ること無きが故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は爾の時に當つて毀罵者に著せず、讚歎者に著せず。損害者に著せず。饒益者に著せず、輕慢者に著せず、恭敬者に著せず。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法皆本性空なりと達するが故に。本性空中毀罵・讚歎者有ること無きが故に。損害・饒益者有ること無きが故に。輕慢・恭敬者有ること無きが故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、爾の時に當つて著・不著に於て亦た所著無し。何を以ての故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して永く一切の著・不著を斷するが故に。此の如く舍利子、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時、獲る所の功德は最上最妙不可思議なり。一切の聲聞及び諸の獨覺皆有るに非ざる所なり。舍利子、此の菩薩摩訶薩、是の如き功德既に圓滿し已つて復た殊勝の布施愛語利行同事を以て有情を成熟し、復た種種堅固の大願勇猛精進を以て佛土を嚴淨し、斯れに由つて疾く所求の無上正等菩提を證す。

三 復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切有情の若しは劣若しは勝若しは好若しは醜に於て平等心を起こす。是の菩薩摩訶薩は一切有情に於て平等心を起こし已つて復た利益安樂の心を起こす。是の菩薩摩訶薩は一切有情に於て利益安樂の心を起こし已つて一切法性に於て皆平等を得。是の菩薩摩訶薩は一切法性に於て平等を得已つて普ねく能く一切有情を一切法

【二〇】無生法。生滅を遠離せる眞如實相の理體を云ふ。

【二一】平等を説く。

勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・精進・靜慮。般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・精進・靜慮。般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・精進・靜慮。般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・精進・靜慮。般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。

是の如く舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、六種波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして去來無きが故に。布施無く、慳貪無く、唯だ假りの施設のみなるが故に。淨戒無く犯戒無く。唯だ假りの施設のみなるが故に。安忍無く忿恚無く。唯だ假りの施設のみなるが故に。精進無く懈怠無く、唯だ假りの施設のみなるが故に。靜慮無く散亂無く、唯だ假りの施設のみなるが故に。般若無く愚癡無く、唯だ假りの施設のみなるが故に。是の菩薩摩訶薩、趣入に著せず、不趣入に著せず。已度に著せず、非已度に著せず。布施に著せず、慳貪に著せず。淨戒に著せず、犯戒に著せず。安忍に著せず、忿恚に著せず。精進に著せず、懈怠に著せず。靜慮に著せず、散亂に著せず。般若に著せず、愚癡に著せず。舍利子、是の菩薩摩訶薩、爾の時に當つて亦た布施者に著せず、慳貪者に著せず。淨戒者に著せず、犯戒者に著せず。安忍者に著せず、忿

慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・精進・靜慮・波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・精進・靜慮・波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・精進・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・寂靜・散亂の心を起こさざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・精進・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤

るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして勤勇・懈怠・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・精進・波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・靜慮・波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智・一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。

施・慳貪・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・精進波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・精進・靜慮波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・精進・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・靜慮・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして持戒・犯戒・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒・精進・靜慮波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして慈悲・忿恚・勤勇・懈怠・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、安忍・靜慮・般若波羅蜜多に安住し一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして慈悲・忿恚・寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由

菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、靜慮、般若波羅蜜多に安住し、一切智一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして寂靜・散亂・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・安忍波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・慈悲・忿恚の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・精進波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・靜慮波羅蜜多に安住し、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・寂靜・散亂の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・精進波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・靜慮・波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・寂靜・散亂の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・智慧・愚癡の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・靜慮波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・淨戒・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・持戒・犯戒・寂靜・散亂の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・精進波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・勤勇・懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・靜慮・波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施・慳貪・慈悲・忿恚・寂靜・散亂の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施・安忍・般若波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠

一切相智を圓滿することを得。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多に安住し、一切智、

一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして惠施慳貪の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩

摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、淨戒波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。

畢竟空にして持戒、犯戒の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波

羅蜜多を修行する時、安忍波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして慈悲、忿

恚の心を起さざるに由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、

精進波羅蜜多に安住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして勤勇、懈怠の心を起さざる

に由るが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、靜慮波羅蜜多に安

住し、一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして寂靜、散亂の心を起さざるに由るが故に。復た次

に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、還つて般若波羅蜜多に住し、一切智、

一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして、智慧、愚癡の心を起さざるに由るが故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施、淨戒波羅蜜多に安住し、

一切智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして、惠施、慳貪、持戒、犯戒の心を起さざるに由るが故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施、安忍波羅蜜多に安住し、一切

智、一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして、惠施、慳貪、慈悲、忿恚の心を起さざるに由るが故に。復た

次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施、精進波羅蜜多に安住し、一切智、

一切相智道を嚴淨す。畢竟空にして、惠施、慳貪、勤勇、懈怠の心を起さざるに由るが故に。復た次に

舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時、布施、靜慮波羅蜜多に安住し、一切智、一

【一】 六波羅蜜淨を説く。

【二】 布施波羅蜜多。施與行爲なり。これに、財施(金銀財寶などすべて物質に關する施與)、法施(清淨心を以て教法を説く)、無畏施(肉體的及精神的の努力或は意志の施與)の三あり。

【三】 淨戒波羅蜜多。在家、出家、小乘、大乘などの一切の戒行をいふ。

【四】 安忍波羅蜜多。如何なる苦痛をも耐へ忍んで瞋恨怨惱などの念を生ぜざるをいふ。

【五】 精進波羅蜜多。身心共に勇猛に善法を勤修して退轉せざるをいふ。

【六】 靜慮波羅蜜多。眞理を思惟して精神を散亂せしめざるをいふ。

【七】 般若波羅蜜多。諸法に透達し邪智妄見を去つて眞智を得ることを云ふ。

すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。天眼智證通の性に著せず。天眼智證通の事に著せず。能く是の如き天眼智證通を得る者に著せず。著・不著に於て俱に所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に、自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の念を作さず、我れ今、天眼智通を引發し、爲に自ら娛樂し、爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智を得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時引發する所の天眼智證通波羅蜜多と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の漏盡智證通波羅蜜多なるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の漏盡智證通有り、能く實の如く十方各殊伽沙の如き界の一切有情の若しは自、若しは他の漏の盡・不盡を知る。此の通は金剛喻定に依止し、諸の障習を斷じ、方に圓滿なることを得。不退轉の菩薩地を得る時、一切の漏に於て亦た名づけて盡くと爲す。畢竟現在前を起さざるが故に。菩薩此の漏盡通を得と雖も聲聞及び獨覺地に墮せず、唯だ無上正等菩提にのみ趣き、復た餘の義利を希求せざるが故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き漏盡智の用を具すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。漏盡智證通の性に著せず。漏盡智證通の事に著せず。能く是の如き漏盡智證通を得る者に著せず。著・不著に於て俱に所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に、自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の念を作さず。我れ今、漏盡智通を引發し、爲に自ら娛樂し、爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智を得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の漏盡智證通波羅蜜多と爲す。是の如く舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、能く清淨の六神通波羅蜜多を圓滿す。此の六神通波羅蜜多の圓滿清淨に由るが故に、便ち一切智智の謂ゆる一

【三】漏盡智證通。六通の一。一切の煩惱を斷盡して涅槃の境を證して無礙なるもの。

き性、是の如き類、是の如き食、是の如き久住、是の如き壽限、是の如き長樂、是の如き受樂、是の如き受苦、彼處より没し此の間に來生し、此の間より没し彼處に往生し、是の如き狀貌じやうぼう、是の如き言説、若しは略、若しは廣、若しは自、若しは他、諸の宿住の事皆能く隨念す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き宿住智の用を具すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。宿住隨念智證通の性に著せず。宿住隨念智證通の事に著せず。能く宿住隨念智證通を得る者に著せず。著・不著に於て俱に所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に、自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は是の念を作さず、我れ今、宿住智通を引發し、爲に自ら娛樂し、爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智を得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の宿住隨念智證通波羅蜜多と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の二天眼智證通波羅蜜多なるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の天真智證通有り、最勝清淨にして人天の眼に過ぎ、能く實の如く十方各殊伽沙界の情、非情類の種種の色像を見る。所謂普ねく諸の有情類の死時、生時、妙色、麁色、若しは勝、若しは劣、善趣、惡趣、諸の是の如き等の種種の色像を見る。此れに因りて復た諸の有情類、業の力用に隨つて生の差別を受くるを知る。是の如き有情は身妙行を成就し、語妙行を成就し、意妙行を成就して賢聖を讚美し正見の因縁により、身壞命終して當に善趣に昇り、或は天上に生じ、或は人中に生じ、諸の妙樂を受くべし。是の如き有情は身惡行を成就し、語惡行を成就し、意惡行を成就し、賢聖を誹毀し邪見の因縁により、身壞命終して當に惡趣に墮し、或は地獄に生じ、或は傍生に生じ、或は鬼界に生じ、或は邊地の下賤、穢惡の有情類の中に生じ、諸の劇苦を受くべしと。是の如き有情の種種の業類、果の差別を受くるを皆實の如く知る。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き天眼の作用を具

【二】天眼智證通。六通の一。衆生の生死苦樂の相及び一切世間の種種の形色を見るに障礙なき通力。

靜心ならば如實に不寂靜心と知る。若し 掉心たうしんならば如實に掉心と知り、若し不掉心ならば如實に不掉心と知る。若し定心ならば如實に定心と知り、若し不定心ならば如實に不定心と知る。若し解脫心ならば如實に解脫心と知り、若し不解脫心ならば如實に不解脫心と知る。若し有漏心ならば如實に有漏心と知り、若し無漏心ならば如實に無漏心と知る。若し 有聲心うゑしんならば如實に有聲心と知り、若し無聲心ならば如實に無聲心と知る。若し有上心ならば如實に有上心と知り、若し無上心ならば如實に無上心と知る。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き他心智の用を具すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。他心智證通の性に著せず。他心智證通の事に著せず。能く是の如き他心智證通を得る者に著せず。著・不著に於て所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に。自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の念を作さず我れ今他心智通を引發し、爲に自ら娛樂し、爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智を得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時引發する所の他心智證通波羅蜜多と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時引發する所の宿住隨念智證通なるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の宿住隨念智證通有り、能く實の如く十方各剎伽沙の如き界の一切有情の諸の宿住の事を知る。所謂若しは自、若しは他、一心・十心・百心・千心、多く百千心の頃あひだの諸の宿住の事を隨念し、或は復た一日・十日・百日・千日、多く百千日の諸の宿住の事を隨念し、或は復た一月・十月・百月・千月、多く百千月の諸の宿住の事を隨念し、或は復た一歳・十歳・百歳・千歳、多く百千歳の諸の宿住の事を隨念し、或は復た一劫・十劫・百劫・千劫、多く百千劫乃至無量無數百千俱胝那由多劫の諸の宿住の事を隨念し、或は復た前際まへまへの所有諸の宿住の事を隨念す。謂ゆる是の如き時、是の如き處、是の如き名、是の如

【八】 掉心。掉擧心なり。心をして高擧せしめ安靜せしめざる煩惱。

【九】 有聲心。勉めて倦まざる心。

【一〇】 宿住隨念智通。自己及び六道衆生の生涯を自在無礙に知る通力。

讚歎する聲、有爲に棄背する聲、菩提に趣向する聲、有漏を厭患する聲、無漏を欣樂する聲、三寶を稱揚する聲、異道を摧伏する聲、論議決擇の聲、經典を諷誦する聲、諸惡を斷ずるを勸むる聲、衆善を修するを教ふる聲、苦難を救濟する聲、慶慰歡樂の聲、是の如き等の聲、若しは大若しは小なるを聞くに皆能く漏ねく聞き無障無礙なり。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き天耳の作用を具すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。天耳智證通の性に著せず。天耳智證通の事に著せず。能く是の如き天耳智證通を得る者に著せず。著・不著に於て俱に所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に、自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の念を作さず。我れ今、天耳智通を引發して爲に自ら嬉樂し、爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智を得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の天耳智證通波羅蜜多と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、^七他心智證通波羅蜜多を引發せらるるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の他心智證通有り、能く實の如く十方各殊伽沙の如き界の他の有情類の心心所法を知る。所謂漏ねく知るに他の有情類、若し有貪心ならば如實に有貪心と知り、若し離貪心ならば如實に離貪心と知る。若し有瞋心ならば如實に有瞋心と知り、若し離瞋心ならば如實に離瞋心と知る。若し有愛心ならば如實に有愛心と知り、若し離愛心ならば如實に離愛心と知る。若し有取心ならば如實に有取心と知り、若し離取心ならば如實に離取心と知る。若し聚心ならば如實に聚心と知り、若し散心ならば如實に散心と知る。若し小心ならば如實に小心を知り、若し大心ならば如實に大心と知る。若し舉心ならば如實に舉心と知り、若し下心ならば如實に下心と知る。若し寂靜心ならば如實に寂靜心と知り、若し不寂

【七】他心智證通。自在無礙に他人の心中を知り得る神通。

等をか六と爲す。一には神境智證通波羅蜜多、二には天耳智證通波羅蜜多、三には他心智證通波羅蜜多、四には宿住隨念智證通波羅蜜多、五には天眼智證通波羅蜜多、六には漏盡智證通波羅蜜多なり。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の神境智證通波羅蜜多なるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の神境智證通有り、無量種の大神變事を起す。所謂十方各殊伽沙の如き界の大地等の物を震動し、一を變じて多と爲し、多を變じて一と爲し、或は顯れ或は隱れ、迅速にして礙り無く、山崖壁壁直ちに過ぎて空の如く、虚を凌たり往來すること猶飛鳥の如く、地中に没すること水に没すること如く、水上に經行すること、地を經行するが如く、身煙焰を出すこと高原を燎くが如く、體衆流を注ぐこと雪嶺を銷かすが如く、日月の神徳威勢當り難きに手を以て按摩し光明隱蔽す。乃至淨居まで身を轉すること自在なり。斯の如く神變無量無邊なり。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の如き神境智の用を具すと雖も而かも其の中に於て自ら高擧せず。神境智證通の性に著せず。神境智證通の事に著せず、能く是の如き神境智證通を得る者に著せず。著不著に於て俱に所著無し。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法自性空に達するが故に、自性離の故に、自性本來不可得の故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は是の念を作さず。我れ今神境智通を引發し爲に自ら娛樂し爲に他を娛樂せしむと。唯だ一切智智のみを得たりと爲すをば除く。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、引發する所の神境智證通波羅蜜多と爲す。爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時引發する所の天耳智證通波羅蜜多なるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩の天耳智證通有り最勝清淨にして人の天の耳に過ぎ、能く實の如く十方各殊伽沙の如き界の情、非情類の種種の音聲を聞く。所謂遍ねく一切の地獄聲・傍生聲・鬼界聲・人聲・天聲・聲聞聲・獨覺聲・菩薩聲・如來聲・生死を訶毀する聲、涅槃を

【二】神境智證通。六通の一。不思議に境界を變現する通力の意にて、三乘の聖者、この智に依つて證得すといふ。

【三】淨居。淨居天なり。色界第四禪の不還果を證した聖者の生ずる天處。

【四】一切智智。聲聞、緣覺の一切智と區別して佛智を云ふ。

【五】天耳智證通。六通の一。自在に一切の言語音聲を證知してして通達無礙なるもの。

【六】傍生。傍生の生類の義にて畜生のこと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は淨佛眼を得るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は菩提心無間にして亦剛喻定に入り、一切相智を得、佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法等・無量無邊不可思議殊勝の功德を成就す。爾の時無障無礙の解脫佛眼を成就す。諸の菩薩摩訶薩は是の如き清淨の佛眼を得るに由り、一切の聲聞獨覺の智慧境界を超過し見ざる所無く聞かざる所無く覺らざる所無く識らざる所無く一切法に於て一切相を見る。舍利子、是れを菩薩摩訶薩淨佛眼を得と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は要らず無上正等菩提を得て乃ち是の如き清淨の佛眼を得るなり。

舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の如き清淨の五眼を得んと欲せば當に勤めて布施乃至般若波羅蜜多を修習すべし。何を以ての故に、舍利子、是の如き六種波羅蜜多是總じて一切の清淨の善法を攝す。謂ゆる聲聞善法・獨覺善法・菩薩善法・如來善法なり。舍利子、若し正しく問ふて言はん、何の法か能く一切の善法を攝すと。應に正しく答へて言ふべし、甚深般若波羅蜜多なりと。何を以ての故に、舍利子、甚深般若波羅蜜多是是れ諸の善法の生母、養母なればなり。能く布施乃至般若波羅蜜多及び五眼等無量無邊不可思議の勝功德を能く生じ能く養ふが故に。舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の如き清淨の五眼を得んと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。舍利子、若し菩薩摩訶薩、無上正等菩提を得んと欲せば當に是の如き清淨の五眼を學すべし。舍利子、若し菩薩摩訶薩能く是の如き清淨の五眼を學せば定んで無上正等菩提を得と。

卷の第九

初分轉生品第四之三

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜多を修行する時能く六神通波羅蜜多を引發す。何

【三〇】金剛喻定。金剛三昧、金剛定、頂三昧ともいふ。あらゆる煩惱を斷破して最後の證果に入る金剛の如く堅固強利なる禪定を云ふ。

【一】神通自在を得るを説く。

上正等菩提に於て當に受記を得べし、此の菩薩摩訶薩は無上正等菩提に於て不退轉を得、此の菩薩摩訶薩は無上正等菩提に於て猶ほ退轉す可きがごとし、此の菩薩摩訶薩は已に不退轉に住せり、此の菩薩摩訶薩は未だ不退轉に住せず、此の菩薩摩訶薩は神通已に圓滿せり、此の菩薩摩訶薩は神通未だ圓滿せず、此の菩薩摩訶薩は神通已に圓滿せるが故に能く十方殞伽沙等の諸佛世界に住し、一切の如來應正等覺及び諸の菩薩摩訶薩衆を供養・恭敬・尊重・讚歎す、此の菩薩摩訶薩は已に神通を得たり、此の菩薩摩訶薩は未だ神通を得ず、此の菩薩摩訶薩は已に無生法忍を得たり、此の菩薩摩訶薩は未だ無生法忍を得ず、此の菩薩摩訶薩は已に殊勝根を得たり、此の菩薩摩訶薩は未だ殊勝根を得ず、此の菩薩摩訶薩は已に佛土を嚴淨せり、此の菩薩摩訶薩は未だ佛土を嚴淨せず、此の菩薩摩訶薩は已に有情を成熟せり、此の菩薩摩訶薩は未だ有情を成熟せず、此の菩薩摩訶薩は已に大願を得たり、此の菩薩摩訶薩は未だ大願を得ず、此の菩薩摩訶薩は已に諸佛に共に稱譽せらるゝを得たり、此の菩薩摩訶薩は未だ諸佛に共に稱譽せらるゝを得ず、此の菩薩摩訶薩は已に諸佛に親近せり、此の菩薩摩訶薩は未だ諸佛に親近せず、此の菩薩摩訶薩は壽命無量なり、此の菩薩摩訶薩は壽命有量なり、此の菩薩摩訶薩、當に無上正等菩提を得べき時、二九 苾芻僧無量なり。此の菩薩摩訶薩、當に無上正等菩提を得べき時、苾芻僧有量なり、此の菩薩摩訶薩、當に無上正等菩提を得べき時、菩薩僧無し、此の菩薩摩訶薩は専ら利他行を修す。此の菩薩摩訶薩は兼ねて自利行を修す、此の菩薩摩訶薩は難行苦行有り、此の菩薩摩訶薩は難行苦行無し、此の菩薩摩訶薩は一生所繫と爲る、此の菩薩摩訶薩は多生所繫と爲る、此の菩薩摩訶薩は已に最後有に住せり、此の菩薩摩訶薩は未だ最後有に住せず、此の菩薩摩訶薩は已に妙菩提の座に坐せり、此の菩薩摩訶薩は未だ妙菩提の座に坐せず、此の菩薩摩訶薩は魔來燒する無し、此の菩薩摩訶薩は魔來燒する有りと知る。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、淨法眼を得と爲す。

【二八】無生法忍。不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位にて、初住不退の菩薩位。

【二九】苾芻 (Bhikkhu)。比丘に同じ。

修道を増上するに由りて五順上分結を盡くして阿羅漢果を得と知る。又た實の如く此れは空無相無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして不還果を得、復た修道を増上するに由りて五順上分結を盡くして阿羅漢果を得と知る。舍利子、是れを菩薩摩訶薩淨法眼を得たりと爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨法眼を得て能く實の如く、是の如き一類の補特伽羅を知る、空無相無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて能く實の如く所有集法は皆是れ滅法なりと知ると。此れを知るに由るが故に五根に勝ちて諸の煩惱を斷じ展轉して獨覺菩提を證得することを得。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、淨法眼を得と爲す。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨法眼を得、能く實の如く知る、此の菩薩摩訶薩最初發心して布施波羅蜜多を修行し、淨般若乃至般若波羅蜜多を修行し、信根・精進根、及び方便善巧を成就するが故に身を受け善法を増長するを思ふ。是の菩薩摩訶薩は或は刹帝利大族に生じ、或は婆羅門大族に生じ、或は長者大族に生じ、或は居士大族に生じ、或は四大王衆天に生じ、或は三十三天に生じ或は夜摩天に生じ、或は覩史多天に生じ、或は樂變化天に生じ、或は他化自在天に生ず。是の如き處に住して有情を成熟し、諸の有情の心の愛樂する所に隨つて能く種種上妙の樂具を施し、亦た能く種種の佛土を嚴淨し、亦た種種上妙の供具を以て諸佛世尊を供養・恭敬・尊重・讚歎し、聲聞獨覺等の地に墮せず、乃至無上正等菩提まで終に退轉せず。舍利子、是れを菩薩摩訶薩淨法眼を得と爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨法眼を得、能く實の如く此の菩薩摩訶薩は無上正等菩提に於て已に受記を得たり、此の菩薩摩訶薩は無上正等菩提に於て正しく受記を得、此の菩薩摩訶薩は無

するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして不還果を得、復た増上修道に由りて五順上分結を盡くし阿羅漢果を得、色貪・無色貪・無明・慢・掉舉、是れを五順上分結と謂ふ。又た實の如く此れは無相解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして不還果を得、復た修道を増上するに由りて五順上分結を盡くして阿羅漢を得と知る。又た實の如く此の無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして阿羅漢果を得と知る。又た實の如く此れは空無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして阿羅漢果を得と知る。又た實の如く此れは空無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして阿羅漢果を得と知る。又た實の如く此れは無相無願解脫門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脫智見を起し、解脫智見に由りて永く三結を斷じて預流果を得、復た初めて道を修するを得るに由りて欲貪瞋を薄くして一來果を得、復た上品修道に由りて欲貪瞋を盡くして阿羅漢果を得、復た

【五】 無間定。四定の一。世第一法位に於て上品の如實智を發して所取、能取の空なることを印可する定。

【六】 三結。預流果を得る人の斷ずる所の三種の煩惱、即ち見結(我見をいふ)、戒取結(邪戒を行ふこと)、疑結(正理を疑ふこと)を云ふ。

【七】 正順上分結。色界、無色界の生死を感ずべき五種の煩惱、即ち(1)色愛結(色界の五妙欲に貪着する煩惱)、(2)無色愛結(無色界の禪定の境界に貪着する煩惱)、(3)掉結(二界の衆生の心念掉動して禪定を退失する煩惱)、(4)慢結(二界の衆生自ちを恃み他を凌ぐ傲慢の煩惱)、(5)無明結(二界の衆生癡闇の煩惱)を云ふ。

得の天眼皆見る能はず亦た知る能はず。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨天眼を得、能く十方殍伽沙等の諸の世界の中の諸の有情類の此に死し彼に生ずるを見、亦た實の如く知る。舍利子、是れを菩薩摩訶薩淨天眼を得と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は淨慧眼を得るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨慧眼を得、法に若しは有爲若しは無爲有るを見ず。法に若しは有漏若しは無漏有るを見ず。法に若しは世間若しは出世間有るを見ず。法に若しは有罪若しは無罪有るを見ず。法に若しは雜染若しは清淨有るを見ず。法に若しは有色若しは無色有るを見ず。法に若しは有對若しは無對有るを見ず。法に若しは過去若しは未來若しは現在有るを見ず。法に若しは欲界繫、若しは色界繫若しは無色界繫有るを見ず。法に若しは善若しは不善若しは無記有るを見ず。法に若しは見所斷若しは修所斷若しは非所斷有るを見ず。法に若しは學若しは無學若しは非學非無學有るを見ず。乃至一切法の若しは自性若しは差別都て見る所無し。舍利子、是の菩薩摩訶薩は淨慧眼を得、一切法に於て見るに非ず、見ざるに非ず。聞くに非ず、聞かざるに非ず。覺るに非ず、覺らざるに非ず。識るに非ず、識らざるに非ず。舍利子、是れを菩薩摩訶薩淨慧眼を得と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は淨法眼を得るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は淨法眼を得、能く實の如く補特伽羅の種種の差別を知る。謂ゆる實の如く此れは是れ隨信行、此れは是れ隨法行、此れは是れ無相行、此れは空に住し、此れは無相に住し、此れは無願に住すと知る。又た實の如く此れは空解脱門に由りて五根を起し、五根に由りて無間定を起し、無間定に由りて解脱智見を起し、解脱智見に由りて永く三結を斷じ預流果を得と知る。薩迦耶見、戒禁、取疑、是れを三結と謂ふ。復た初めて道を修

【七】有爲。(Samskṛta)。爲とは造作の義にて造作を有するを有爲といひ、すべて因縁所生の事物の稱。

【八】無爲。(Asamvṛta)。因縁の造作なきをいふ。即ち眞如の稱にして法性、法界、實相、涅槃などいづれも之が異名。

【九】欲界、色界、無色界に繫屬する法をそれぞれ欲界繫、色界繫、無色界繫と云ふ。

【一〇】見所斷、修所斷、非所斷を三斷と稱す。(1)見所斷は見道位で斷ずる煩惱即ち小乘をいふ八十八使の見惑。(2)修所斷は修道位で斷ずる煩惱即ち小乘の八十一品の思惑(修惑)大乘の本能的なる煩惱障所知障。(3)非所斷とは上述の二道にて斷ぜられざる有爲無爲一切の無漏法。

【一一】補特伽羅。(Pudgala)。舊に人又は衆生と譯し、新に數取趣と譯す。數は五趣を取て輪廻するの義。

【一二】隨信行。他の知識の言教を信受し、之に隨順して修行すること。

【一三】隨法行。自ら教法を思念し、之に隨順して修行すること。

【一四】無相行。二十七賢聖の一。世第一法位の後、預流果に至る見道十五心の間をいふ。

く百一四 踰繕那梵名を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く二百踰繕那を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く三百踰繕那を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く四百五百六百乃至千踰繕那を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く一瞻部洲一五を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く二大洲界を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く三大洲界を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く四大洲界を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く大千世界を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く中千世界を見る。菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能く大千世界を見る。舍利子、是れを菩薩摩訶薩、淨肉眼を得と爲すと。

爾の時舍利子、復た佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は淨天眼を得るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、淨天眼を得、能く一切四大王衆天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。能く一切三十三天・夜摩天・兜率多天・樂變化天・他化自在天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩淨天眼を得、能く一切梵衆天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。能く一切梵輔天・梵會天・大梵天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩淨天眼を得、能く一切少光天・無量光天・極光淨天の見る所を見亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩淨天眼を得、能く一切淨天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。能く一切少淨天・無量淨天・遍淨天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩淨天眼を得、能く一切廣天・無量廣天・廣果天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩淨天眼を得、能く一切無想有情天の天眼の見る所を見、亦た實の如く知る。諸の菩薩摩訶薩天眼を得、能く一切無繁天の天眼の見る所を見亦た實の如く知る。能く一切無熱天・善現天・善見天の色究竟天の天眼の見る所を見、亦た實の如く知る。舍利子、菩薩摩訶薩有り、天眼の見る所は一切四大王衆天乃至色究竟天所

【一四】踰繕那 (Yajnu) 舊稱由旬。里程を計る稱目なり。

【一五】瞻部洲。舊稱閻浮洲。須彌四洲の一にて、吾人の住む此の洲の稱。

【一六】小千世界、中千世界、大千世界を以て三千大千世界と稱し、古代印度に於ける世界觀。日月、須彌山、四大洲、四天王、三十三天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、梵世天を一世界となし、此一世界を千個合せたのを小千世界といひ、小千世界の千集まりしを中千世界といひ、中千世界を千合せて大千世界となす。

すと雖も而かも八解脫を得ず。八勝處・九次第定・十遍處を修すと雖も而かも八勝處・九次第定・十遍處を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、空解脫門を修すと雖も而かも空解脫門を得ず。無相、無願解脫門を修すと雖も而かも無相無願解脫門を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、一切陀羅尼門を修すと雖も而かも一切陀羅尼門を得ず。一切三摩地門を修すと雖も而かも一切三摩地門を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、極喜地を修すと雖も極喜地を得ず。離苦地乃至法雲地を修すと雖も而かも離苦地乃至法雲地を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に五眼を修すと雖も而かも五眼を得ず。六神通を修すと雖も而かも六神通を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に佛の十力を修すと雖も而かも佛の十力を得ず。四無所畏乃至十八佛不共法を修すと雖も而かも四無所畏乃至十八佛不共法を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に三十二大士相を修すと雖も而かも三十二大士相を得ず。八十隨好を修すと雖も而かも八十隨好を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、無忘失法を修すと雖も而かも無忘失法を得ず。恒住捨性を修すと雖も而かも恒住捨性を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に一切智を修すと雖も而かも一切智を得ず。道相智、一切相智を修すと雖も而かも道相智、一切相智を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、一切の菩薩摩訶薩行を修すと雖も而かも一切の菩薩摩訶薩行を得ず。諸佛の無上正等菩提を修すと雖も而かも諸佛の無上正等菩提を得ず。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の成ずる所の勝智と名づく。諸の菩薩摩訶薩此の智を成ずるに由るが故に、速かに能く一切の佛法を圓滿す。能く一切の佛法を圓滿すと雖も而かも諸法に於て執無く取無し、一切法の自性空なるを以ての故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多を修行し五眼を淨むることを得、所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼なり。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、淨肉眼を得るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩有り淨肉眼を得、明了に能

【三】五眼清淨を辨ず。

無上正等菩提の舍利子、是の因縁に由るが故に、諸の菩薩摩訶薩、六種波羅蜜多を修行し増上熾盛に菩提道に趣くに能く制する者無し。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜多に安住し、速かに能く一切智智を圓滿し勝智を成ずるが故に、一切の險惡趣の門を關閉し、人天の貧窮下賤を受けず、諸根具足し形貌端嚴にして、世間天人阿素洛等咸共に尊重・恭敬・供養すと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、何等をか名づけて是の菩薩摩訶薩の成ぜし所の勝智と爲すやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、是の菩薩摩訶薩、此の智を成ずるが故に、普ねく十方殑伽沙等の諸佛世界の一切の如來應正等覺を見たてまつり、普ねく彼の佛の所説の正法を聞き、普ねく彼の會の一切の聲聞菩薩僧等を見、亦た彼の土の清淨功德莊嚴の相を見る。舍利子、是の菩薩摩訶薩、此の智を成ずるが故に世界想を起さず、如來想を起さず、正法想を起さず、菩薩想を起さず、聲聞想を起さず、獨覺想を起さず、自想を起さず、他想を起さず、佛土想を起さず。又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩、此の智に由るが故に布施波羅蜜多を行すと雖も而かも布施波羅蜜多を得ず。淨戒乃至般若波羅蜜多を行すと雖も而かも淨戒乃至般若波羅蜜多を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、內空に住すと雖も而かも內空を得ず。外空乃至無性自性空に住すと雖も而かも外空乃至無性自性空を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に一眞如に住すと雖も而かも眞如を得ず。法界乃至不思議界に住すと雖も而かも法界乃至不思議界を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に、四念住に修すと雖も而かも四念住を得ず。四正斷乃至八聖道支を修すと雖も而かも四正斷乃至八聖道支を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に苦聖諦に住すと雖も而かも苦聖諦を得ず。集滅道聖諦に住すと雖も而かも集滅道聖諦を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に四靜慮を修すと雖も而かも四靜慮を得ず。四無量、四無色定を修すと雖も而かも四無量、四無色定を得ず。諸の菩薩摩訶薩此の智に由るが故に八解脫を修

【一】阿素洛。阿修羅(Araṇya, 非天、非類、不端正等と譯す。印度神にて常に帝釋と戰鬥をなす神。

【二】眞如。部多多他多(Bhūta-tatuhata)の譯。諸法の體性虛妄を離れて眞實なれば眞といひ、常住にして不變不改なれば如と稱す。大乘佛教に於ては宇宙萬有の本體を云ふ。

り、初發心より常に樂みて十善業道を受持し、聲聞心を起さず、獨愛心を起さず、諸の有情に於て恒に悲心を起して其の苦を抜かんと欲し、恒に慈心を起して其れに樂を與へんと欲す。舍利子、我れ亦た是の如き菩薩摩訶薩は能く身語意三種の龜重を淨むと説く。有情を利樂し心力勝れるが故に。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多を修行するに菩提の道を淨むと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が名づけて菩薩摩訶薩の菩提道と爲すやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩六種波羅蜜多を修行するに身業及び身の龜重を得ず、語業及び語の龜重を得ず、意業及び意の龜重を得ず、布施波羅蜜多を得ず乃至般若波羅蜜多を得ず、聲聞を得ず、獨覺を得ず、如來を得ず。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の菩提道と名づく。何を以ての故に、菩提道は一切法に於て皆得ざるを以ての故に。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有りて布施乃至般若波羅蜜多を修行し菩提道に趣くに能く制する者無しと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、何に緣りて菩薩摩訶薩の六種波羅蜜多を修行して菩提道に趣くに能く制する者無きやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩六種波羅蜜多を修行する時(a)色に著せず受想行識に著せず、(a)眼處乃至意處、(a)色處乃至法處、(a)眼界乃至眼界、(a)色界乃至法界、(a)眼識乃至意識界、(a)眼觸乃至意觸、(a)眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受、(a)地界乃至識界、(a)因緣乃至増上緣及び緣より生ずる所の法、(a)無明乃至老死愁歎苦憂惱、(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多、(a)內空乃至無性自性空、(a)眞如乃至不思議界、(a)四念住乃至八聖道支、(a)苦聖諦乃至道聖諦、(a)四靜慮乃至四無色定、(a)八解脫乃至十遍處、(a)空解脫門乃至無願解脫門、(a)一切陀羅尼門、一切三摩地門、(a)極喜地乃至法雲地、(a)五眼、六神通、(a)佛の十力乃至十八不共法、(a)三十二大士相、八十隨好、(a)無忘失法、恒住捨性、(a)一切智乃至一切相智、(a)預流果乃至獨覺菩提、(a)一切の菩薩摩訶薩行、諸佛の

【九】聲聞。舍羅婆迦(Śrāvaka)の譯。佛の言教或は法を聞きて四諦の法を修し、三生六十劫の間に見思の二惑を斷じて阿羅漢果を得る聖者を云ふ。

【一〇】獨覺。(Pratyek-buddhi)緣覺に同じ。十二因緣の法を觀じて煩惱を斷盡して涅槃の證果を得る聖者を云ふ。

(a)「不著色不著受想行識」右の文中「色乃至識」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を(a)の符號にて略し以下その諸法のみ略出す。

般若波羅蜜多に安住し、常に邪見に盲冥せる有情の爲に、法の照明と作り、亦た此の明を持つて常に以て自ら照らし乃至無上正等菩提まで此の法の照明會て捨離せず。舍利子、是の菩薩摩訶薩、此の因縁に因りて諸の佛法に於て常に現起することを得。是の故に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに身語意の三に於て罪業有らば暫くも起るを容るる無かれと。

爾の時に舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が名づけて諸の菩薩摩訶薩の罪の身業有り罪の語業有り罪の意業有りと爲すと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の如き念を作さん、此れは是れ身我なりと。此れに由るが故に而かも身業を起す。此れは是れ語我なりと。此れに由るが故に而かも語業を起す。此れは是れ意我なりと。此れに由るが故に而かも意業を起す。舍利子、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩の罪の身業有り、罪の語業有り、罪の意業有りと名づく。又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに身及び身業を得ず、語及び語業を得ず、意及び意業を得ず。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、身語意及び彼の業を得ば便ち慳貪・犯戒・忿恚・懈怠・散亂・無慧の心を起す。若し此の心を起さば菩薩摩訶薩と名づけず。是の故に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに此の念を生ぜば、是の處ことより有ること無し。又た舍利子、諸の菩薩摩訶薩、布施乃至般若波羅蜜多を修行し、身語意三種の龜重を起さば是の處有ること無し。何を以ての故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は六種波羅蜜多を修行して能く一切身の龜重を淨むるが故に、能く一切語の龜重を淨むるが故に、能く一切意の龜重を淨むるが故にと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は能く身語意三種の龜重を淨むるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、六種波羅蜜多を修行するに身及び身の龜重を得ず、語及び語の龜重を得ず、意及び意の龜重を得ず。是の如く舍利子、諸の菩薩摩訶薩は六種波羅蜜多を修行して能く身語意三種の龜重を淨む。又た舍利子、若し菩薩摩訶薩有

【八】業等の所得あるは不淨、不可得なるは清淨なるを別決す。

薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも般若波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習して具さに一切の毘鉢舍那を修し、諸の有情に勸めて亦た是の如き智慧を修習せしめ速かに圓滿せしむ。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜多を修行し、方便善巧して身を化すること佛の如く、遍ねく地獄傍生鬼界若しは人若しは天に入り、其の類智に隨つて爲に正法を説き、殊勝の利益安樂を獲せしむ。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り布施乃至般若波羅蜜多に住し、身を化するること佛の如く、遍ねく十方阿僧祇等の諸佛世界に至り、諸の有情の爲に正法を宣説し、諸佛世尊を供養・恭敬・尊重・讚歎し、諸佛の所に於て正法を聽聞し、佛土を嚴淨し、周ねく十方最勝佛土の微妙淨相を覽る。而かも使ち自ら最極莊嚴清淨の佛土を起こし、中に安處せる一生所繫の諸の大菩薩に於て速かに所求の無上正等菩提を證得せしむ。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多を修行し、三十二大士相、八十隨好を具し、圓滿に莊嚴し、諸根猛利にして最勝清淨なり。衆生を見る者愛敬し清淨の心を起さざる無し。斯れに因りて勸導し、其の根欲に隨つて漸く三乘涅槃を證得せしむ。是の如く舍利子、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するには應に清淨の身語意業を學すべし。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多を修行し、諸根の最勝明利を得と雖も而かも此れを恃みて自ら他を重輕せず。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初發心より乃至未だ不退轉地を得ざるまで恆に施戒波羅蜜多に住し、一切時に於て惡趣に墮せず。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初發心より乃至未だ不退轉地を得ざるまで常に十善業道を捨離せず。復た次に舍利子、其菩薩摩訶薩有り、施戒波羅蜜多に住し、轉輪王と作り七寶を成就し、法を以て教化し非法を以てせず、有情を十善道に安立し、亦た財寶を以て諸の貧乏に施す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、施戒波羅蜜多に住し、多く百千轉輪王の教を受け、無量百千の諸佛に值遇し、供養・恭敬・尊重・讚歎し、空しく過ぐる者無し。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至

【五】 毘鉢舍那 (Vipassana) 種種觀察、觀、見等と譯す。正慧の決擇なり。

【六】 身業、語(口)業、意業を三業と稱す。(1)身業は身に起す所の業にて殺生、偷盜、邪淫の三。(2)語(口)業とは口に起す業の意にて妄語、綺語、兩舌、惡口の四。(3)意業とは意に起す業にて貪欲、瞋恚、愚癡の三毒の稱。

【七】 十善業道。十善とは人天の十戒にて不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不愚癡を云ふ。この十善の行業に之れに相應せる善道即ち天上若くは人中の帝位の如き善き世界に趣き生ずる道の故に名づく。

大劫を経て乃ち無上正等菩提を證す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多以安住し、常に勤め精進して有情を饒益し、口常に無義語を説引せず。身意無義業を起引せず。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種の波羅蜜多を修行し、常に勤め精進して有情を饒益し、一佛國より一佛國に至り、諸の有情の三惡趣の道を斷じ、方便して善趣の道の中に安立す。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも布施波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習して諸の有情に一切の樂具を施し、常に懈息する無し。一切の有情、食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乘を須てば乘を與へ、衣を須てば衣を與へ、花香を須てば花香を與へ、瓔珞を須てば瓔珞を與へ、房舍を須てば房舍を與へ、床榻を須てば床榻を與へ、臥具を須てば臥具を與へ、燈明を須てば燈明を與へ、財穀を須てば財穀を與へ、珍寶を須てば珍寶と與へ、伎樂を須てば伎樂を與へ、侍衛を須てば侍衛を與へ、其の須つ所に隨つて種種の資具、歡喜して施與し乏しき所無からしめ、施し已つて。三善提の道を勸修す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも淨戒波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習して身語意の清淨の律儀を具し、諸の有情に勸めて亦た是の如き律儀を修習せしめ速かに圓滿せしむ。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも安忍波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習して一切の忿恚等の心を遠離し諸の有情に勸めて亦た是の如き安忍を修習せしめ速かに圓滿せしむ。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも精進波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習し具足して一切の善法を修行し、諸の有情に勸めて亦た是の如き精進を修習せしめ速かに圓滿せしむ。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六種波羅蜜多に住すと雖も而かも靜慮波羅蜜多を以て常に上首と爲し、勇猛に修習して具さに一切の勝奢摩他を修し、諸の有情に勸めて亦た是の如き勝定を修習せしめ速かに圓滿せしむ。復た次に舍利子、菩

【三】三善提。(Sambodhi)。正等覺と譯す。

【四】奢摩他(Samatha)禪定七名の一。寂靜能滅等と譯す。正定に住し昏沈掉舉等の散亂を離るるなり。

無相・無願・解脫門を修行し、苦集滅道聖諦に安住し、八解脫乃至十遍處を修行し、頤流果、若しは一來果、若しは不退果、若しは阿羅漢果、若しは獨覺菩提を得せしむ。舍利子、是の菩薩摩訶薩は已に布施乃至般若波羅蜜多を修行すと雖も、已に內空乃至無自性自性空に住すと雖も、已に眞如乃至不思議界に住すと雖も、已に一切陀羅尼門、三摩地門を修すと雖も、已に極喜地乃至法雲地を修すと雖も、已に五眼六神通を修すと雖も、已に佛の十力乃至十八不共法を修すと雖も、已に無忘失法、恆住捨性を修すと雖も、已に一切智・道相智・一切相智を修すと雖も、而かも無上正等菩提を取らず。是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、方便善巧して諸の有情をして布施乃至般若波羅蜜多を修行し、乃至一切智・道相智・一切相智を修行して無上正等菩提を證得す。舍利子、一切の聲聞獨覺の果、智は即ち是れ菩薩摩訶薩の忍なり。舍利子、當に知るべし是の菩薩摩訶薩は不退轉地に住し般若波羅蜜多に安住して能斯の事を爲すと。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、久しく已に布施乃至般若波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法に安住して觀更多天宮を嚴淨す。舍利子、當に知るべし是の菩薩摩訶薩は此の賢劫中定めて無上正等菩提を得と。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜多を修行し、已に四靜慮・四無量・四無色定を得、已に四念住乃至八聖道支を得、已に空・無相・無願解脫門を修し、已に八解脫乃至十遍處を修し、已に布施乃至般若波羅蜜多を修し、已に一切陀羅尼門、三摩地門を修し、已に菩薩摩訶薩地を修し、已に五眼、六神通を修し、已に佛の十力乃至十八不共法を修し、已に無忘失法、恆住捨性を修し、已に一切智・道相智・一切相智を修すと雖も而かも聖諦に於て現に未だ通達せず。舍利子、當に知るべし是の菩薩摩訶薩は一生所繫なりと。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、布施乃至般若波羅蜜多を修行し、諸の世界に遊び一佛國より一佛國に至り、淨土を嚴淨し、有情を無上覺に安立す。舍利子、是の菩薩摩訶薩は要らず無量無數

多及び餘の菩薩摩訶薩行を修習し、初發心に已に便ち般若波羅蜜多と相應し、無量無數百千俱胝那廣多の菩薩摩訶薩の與に前後圍遶せられて諸の佛土に遊び、一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊を供養・恭敬・尊重・讚歎し、有情を成熟し、佛土を嚴淨す。

卷の第八

・初分轉生品第四之二

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜多を修行して四靜慮及び四無量、四無色定定を得、九等至に於て次第に超越し、順逆に入出し、自在に遊戲す。諸の聲聞獨覺等の境に非ず。是の菩薩摩訶薩、時に初靜慮に入り、初靜慮より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて第二靜慮に入り、第二靜慮より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて第三靜慮に入り、第三靜慮より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて第四靜慮に入り、第四靜慮より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて空無邊處定に入り、空無邊處定より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて識無邊處定に入り、識無邊處定より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて無所有處定に入り、無所有處定より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて非想非非想處定に入り、非想非非想處定より起ちて減盡定に入り、減盡定より起ちて初靜慮に入る有り。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して、諸の等至に於て方便善巧して次第に超越し自在に遊戲す。然かも其の中に於て染無く著無し。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、已に四念住乃至八聖道支を得と雖も、已に空解脫門、無相解脫門、無願解脫門を得と雖も、已に苦集滅道聖諦に住すと雖も、已に八解脫乃至十遍處を得と雖も、而かも預流果、若しは一來果、若しは不還果、若しは阿羅漢果若しは獨覺菩提を取らず。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行し方便善巧して諸の有情をして四念住乃至八聖道支を修行し、空、

【一】等至。三摩鉢底 (Samāpatti) の譯。定の別名。定を修むれば身心平等安和なれば等といひ、定能くこの境に至らしむるの故に等至と名づく。
【二】減盡定、(Nirodha-samāpatti)。二無心定の一。すべての心想を減盡して寂靜となる定にて、無色界の第四非想非非想處天の禪定を云ふ。

て會て憍慢無し、復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六神通を得て自在に遊戯し、一世界より一世界に至り、諸の世界に佛名法名僧名を聞かざる有らば、是の菩薩摩訶薩、彼の世界に往いて、佛法僧寶を稱揚讚歎し、諸の有情をして深く淨信を生ぜしめ、是れに由りて長夜に利益安樂す。是の菩薩摩訶薩、此に於て命終して有佛界ブツノカミに生じ、諸の菩薩摩訶薩行を修し漸次に所求の無上正等菩提を證得して諸の有情類を利益安樂す。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初發心シツトクシツより勇猛精進して初靜慮を得、第二第三第四靜慮を得、慈無量を得、悲・喜・捨無量を得、空無邊處定を得、識無邊處定・無所有處定・非想非非想處定を得、布施波羅蜜多を修行し、淨戒乃至般若波羅蜜多を修行し、內空に安住し、外空乃至無自性自性空に安住し、眞如に安住し、法界乃至不思議界に安住し、四念住を修行し、四正斷乃至八聖道支を修行し、苦聖諦に安住し、集・滅・道聖諦に安住し、八解脫を修行し、八勝處・九次第定・十遍處を修行し、空解脫門を修行し、無相、無願解脫門を修行し、一切陀羅尼門を修行し、一切三摩地門を修行し、極喜地を修行し、離苦地乃至法雲地を修行し、五眼を修行し、六神通を修行し、佛の十力を修行し、四無所畏乃至十八不共法を修行し、無忘失法を修行し、恆住捨性を修行し、一切智を修行し、道相智・一切相智を修行す。是の菩薩摩訶薩は、欲界セに生ぜず、色界シクに生ぜず、無色界ムシクに生ぜず、常に能く諸の有情を益する處に生じて一切の有情を利益安樂す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、先に已に布施乃至般若波羅蜜多を修行し、初めて發心し已て便ち善薩の正性離生に入り、乃至不退轉地を證得す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、先に已に六波羅蜜多及び餘の無量無邊の佛法を修習し、初めて發心し已て便ち能く眞轉して無上正等菩提を證得し、妙法輪を轉じて無量の衆を度し、無餘依大涅槃界に於て而かも般涅槃し、般涅槃の後説く所の正法世に住すること一劫、或は一劫の餘、無邊の諸の有情類を利樂す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、先に已に六波羅蜜

【二】 欲界、色界、無色界を三界と稱し、一切生物の生死流轉して止まざる迷界を三大別せるも、(1)欲界とは六欲天の總稱にて、此界は皆諸欲に耽る有情の所處、(2)色界とは欲界の如く粗惡なるものに非ざる、微妙なる形體(色)を有する世界、(3)無色界とは形色を離れて唯だ精神のみの存する世界。

入り、空無邊處定に入り、識無邊處定・無所有處定・非想非非想處定に入り、布施波羅蜜多を修行し、淨戒乃至般若波羅蜜多を修行し、内空に安住し、外空乃至無性自性空に安住し、眞如に安住し、法界乃至不思議界に安住し、四念住を修行し、四正斷乃至八聖道支を修行し、苦聖諦に安住し、集・滅・道聖諦に安住し、八解脫を修行し、八勝處・九次第定・十遍處を修行し、空解脫門を修行し、無相、無願、無作門を修行し、一切陀羅尼門を修行し、一切三摩地門を修行し、五眼を修行し、六神通を修行し、佛の十力を修行し、四無所畏乃至十八不共法を修行し、無忘失法を修行し、恆住捨性を修行し、一切智を修行し、道相智・一切相智を修行す。是の菩薩摩訶薩は靜慮・無羣・無色の勢力に隨つて生ぜず。現前に現在の如來應正等覺に奉事し親近し供養し、是の佛所に於て梵行を勤修し此處より没して觀更多天に生じ、彼の壽量を盡くすも諸根缺くる無く、具さに正知を念ず。無量無數百千一四俱胝一五那庾多の天衆に圍遶導從せられ神通に遊戲して人中に來生し、現に苦行を修して無上正等菩提を證得し妙法輪を轉じて無量の衆を度す。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六神通を得、欲界に生ぜず、色界に生ぜず、無色界に生ぜず、諸の佛土に遊び、一佛國より一佛國に至り、無量の如來應正覺を供養・恭敬・尊重・讚歎し、諸の菩薩摩訶薩行を修し、漸次に所求の無上正等菩提を證得す。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六神通を得て自在に遊戲し、一佛國より一佛國に至るに經る所の佛土に聲聞獨覺等の名有る無く、唯だ一乘の眞二六梵行者のみ有り。是の菩薩摩訶薩、諸の佛土に於て、無量の如來應正等覺を供養・恭敬・尊重・讚歎して般若波羅蜜多を修行し、漸次圓滿して佛土を嚴淨し、有情を成熟して常に懈廢すること無し、復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、六神通を得て自在に遊戲し、一佛國より一佛國に至るに經る所の佛土、有情の壽量數二七へ知る可からず。是の菩薩摩訶薩、諸の佛土に於て、無量の如來應正等覺を供養・恭敬・尊重・讚歎して般若波羅蜜多を修行し、漸次圓滿して佛土を嚴淨し有情を成熟し

釋ここに居る。四方に各各八天あり、喜見城天を加へて三十三天となれば斯く名づく。
 (3) 夜摩天は善時又は時分と譯す。此天の衆生は身長二由旬、衣の重さ三銖にて遊華の開合で雲を分ち、壽二千歲、人間の二百歳を以て一日一夜となすといふ。
 (4) 觀更多天は兜率天(前田)(5)樂變化天は化樂天とも稱せらる。此天に在れたる有情は、自ら五塵の欲を變化して娛樂するの故にかく名づく。
 (6) 他化自在天は欲界の天主にて正法を害する魔王。此天快樂をなすに自ら變現するを要せず、下天の化作せし樂事をかりて自在に己が樂として遊戲するの故にかく名づく。
 【二】梵世。梵世界の稱にて色界の諸天を總じて云ふ。輕欲を離れたる梵天の住處なるが故にかく名づく。
 【三】俱胝。拘胝、拘胝、俱胝等ともいふ。普通億と譯されてゐるが、印度の數量の名で一千萬のこと。
 【四】那庾多。(Nayuta)。數目的名、億に相當す。
 【二〇】梵行者。梵天の行法を修するもの、即ち清淨無欲の行者を云ふ。

重・讚歎し、常に甚深の般若波羅蜜多を遠離せず。當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は此の賢劫中に定めて無上正等菩提を得と。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、慈無量に入り、悲・喜・捨無量に入り、空無邊處生に入り、識無邊處定に入り、無所有處定に入り、非想非非想處定に入る。是の菩薩摩訶薩は方便善巧有るが故に靜慮・無量・無色の勢力に隨つて生ぜず、還つて欲界の若しは、刹帝利大族、若しは、婆羅門大族、若しは長者大族、若しは居士大族に生ず。諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故なり。貪染後有の爲の故に生ぜず。復た次に菩薩摩訶薩有り、初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、慈無量に入り、悲・喜・捨無量に入り、空無邊處定に入り、識無邊處定・無所有處定・非想非非想處定に入る。是の菩薩摩訶薩は方便善巧有るが故に、靜慮・無量・無色の勢力に隨つて生ぜず、或は四大王衆天に生じ、或は三十三天に生じ、或は夜摩天に生じ、或は觀自在天に生じ、或は樂變化天に生じ、或は他化自在天に生ず。諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故に、及び諸の佛土を嚴淨せんが爲の故に、常に諸佛に値ひ供養・恭敬・尊重・讚歎して空過する者無し。復た次に、舍利子、菩薩摩訶薩有り、初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、慈無量に入り、悲・喜・捨無量に入り、空無邊處定に入り、識無邊處定・無所有處定・非想非非想處定に入る。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して方便善巧有るが故に、此處に於て没し、梵世中に生じ大梵王と作り、威徳熾盛にして餘の梵衆に過ぐるること多く百千倍なり。自天處より諸の佛土に遊び、一佛國より一佛國に至る。其の中に菩薩摩訶薩有りて未だ無上正等菩提を證せざる者は勸めて無上正等菩提を證せしめ、已に無上正等菩提を證し未だ法輪を轉ぜざる者は請ふて法輪を轉ぜしむ。諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故なり。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、一生所繫にして方便善巧有るが故に初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、慈無量に入り、非・喜・捨無量に

【八】賢劫。或は善劫とも稱し、四劫中に於ける現在の住劫をいふ。現在此の世界の存在期なる住劫二十増減(増減とは一増一減の義には無量の時間を表はす)中には多くの賢者出世するの故に賢劫と名づくといふ。

【九】刹帝利。Kshatriya。古代印度民族四姓の一にて婆羅門族に次ぐ貴族。軍事、政治を司り又は王者たるものにて王士族或は王族と稱せらるる階級。

【一〇】婆羅門。Brahman。古代印度民族四姓の一にて僧族といふべき種姓。専ら宗教學問を司る最上位の階級。

【一一】貪染後有。貪染とは五欲の境に貪著し染著するをいひ、後有は生地輪迴に於ける未來世の身心を云ふ。

【一二】四大王衆天乃至他化自在天を六欲天と稱す。(1)四王天は須彌山の半腹四萬由旬に在る四天にて東方に持國、南方に增長、西方に廣目、北方に多聞の四天王領する故にかく名づく。四天王は三十三天の帝釋に仕へて八部鬼神を支配し佛法を信ずる者を護るといふ。(2)三十三天は忉利天の譯。須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處に在り、城廓又八萬由旬にて喜見城と名け帝

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、方便善巧無きが故に初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、亦た能く布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行す。是の菩薩摩訶薩は靜慮を得るが故に長壽天に生ず。彼の壽盡くるに隨ひて人間に來生し、諸佛に值遇して供養・恭敬・尊重・讚歎し、布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を行すと雖も而かも諸根味鈍にして甚だ明利ならず、諸の爲す所有るは極めて善巧に非ず。

復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、亦た能く布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行す。是の菩薩摩訶薩、方便善巧無きが故に諸の靜慮を捨てて而かも欲界に生ず。當に知るべし是の菩薩摩訶薩も亦た諸根味鈍にして甚だ明利ならず、諸の爲す所有るは極めて善巧に非ず。復た次に舍利子、菩薩摩訶薩有り、初靜慮に入り、第二第三第四靜慮に入り、慈無量に入り、悲喜捨無量に入り、空無邊處定に入り、識無邊處定・無所有處定・悲想非非想處定に入り、布施波羅蜜多を修行し、淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行し、內空に安住し、外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空に安住し、眞如に安住し、法界・法性・不虛妄住・不變異性・平等性・離生性・法定法住・實際・虛空界・不思議界に安住し、四念住を修行し、四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を修行し、苦聖諦に安住し、集・滅・道聖諦に安住し、八解脫を修行し、八勝處・九次第定・十遍處を修行し、空解脫門を修行し、無相・無願解脫門を修行し、一切陀羅尼門を修行し、一切三摩地門を修行し、五眼を修行し、六神通を修行し、佛の十力を修行し、四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八不共法を修行し、無忘失法を修行し、恒住捨性を修行し、一切智を修行し、道相智、一切相智を修行す。是の菩薩摩訶薩は方便善巧有るが故に、靜慮・無量・無色の勢力に隨ひて生ぜず。所生の處に隨ひて常に如來應正等覺に遇ひ、供養・恭敬・尊

【六】長壽天。天人の長壽なるものにて、例へばその壽五百大劫なる色界第四禪の無想天、或は三界に於ける最長壽(八萬劫)なる無色界の第四處非想非非想天の如きもの。

【七】初靜慮乃至第四靜慮を四靜慮と稱し、色界の四禪定の謂なり。(1)初禪とは有尋有伺定なり。尋とは能なる覺、伺とは細なる觀をいふ。此の定にはこの兩者を有するとす。(2)二禪とは無尋有伺定なり。此の定中には能なる尋求の心所はなきも細かに分別する伺の心作用ありとなす。(3)三禪は無尋無伺定なり。覺觀共に無く勝妙の樂、身に滿つる定をいふ。(4)四禪とは捨念法事定なり。二禪の無覺の喜、三禪の無覺無觀の樂を捨て、内面些の憎愛もなく一念平等清淨なる定をいふ。

初分轉生品第四之一

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、般若波羅蜜多に安住する諸の菩薩摩訶薩は、何處より没して此の間に來生し、此處より没して當に何處にか生すべきと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、般若波羅蜜多に安住する諸の菩薩摩訶薩は、有るひは他方の佛土より没して此の間に來生し、有るひは親史多天より没して此の間に來生し、有るひは人中より没して此の人中に生ず。舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、他方の佛土より没して此に來生せば、是の菩薩摩訶薩は速かに般若波羅蜜多と相應す。般若波羅蜜多と相應するに由るが故に、轉生して便ち深妙の法門疾く現前することを得、此れより已後恒に般若波羅蜜多と速かに相應することを得、所生の處に在りて常に佛に值ひたてまつることを得、供養・恭敬・尊重・讚歎し、能く般若波羅蜜多をして漸く圓滿することを得せしむ。舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、親史多天より没して此に來生せば、是の菩薩摩訶薩多く、一生所繫と爲り、布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多自在に現前して常に忘失せず。亦た一切陀羅尼門、三摩地門に於て自在に現前して常に忘失せず。舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、人中より没して人中に生ぜば是の菩薩摩訶薩、不退轉なるをば除き、其の根昧鈍にして般若波羅蜜多を勤修すと雖も而かも能く速かに般若波羅蜜多と相應すること能はず。又た一切陀羅尼門、三摩地門に於て未だ自在を得ず。又た舍利子、汝の後に問ふ所の般若波羅蜜多に安住する諸の菩薩摩訶薩は此の間より没し當に何處に生すべきかとは、舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多と恒に相應するに由るが故に、此處より没して餘の佛土に生じ、一佛國より一佛國に至り、在在生ずる處常に諸佛世尊に值遇するを得、供養・恭敬・尊重・讚歎し、乃至無上正等菩提まで終ひに佛を離れず。

【一】前品に於て般若相應を説き衆生壽命なしとす。今この見地に住する者の生死往來の相を説く。

【二】具壽。(Jumbhivijaya)。法壽を具有する者の意では受戒得度を経たる比丘の通稱。通例師長より後進子弟を呼ぶの稱。

【三】親史多天。兜率天(Trayastrimsa)の妙足、止足、知足等と譯す。欲界六天の第四。須彌山の頂上十二萬由旬の處に在り七寶の宮殿ありて無量の諸天之に住す。

【四】一生所繫。一生補處に同じ。一生を經れば佛位を補ふべき等覺の位屬に在るを云ふ。

【五】未來は當受相なれば既に後世往生相を説く。

性、有情性に非ざるを知るが故に般若波羅蜜多を修行す。舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩、諸の相應中空と相應するは最も爲れ第一なり。般若波羅蜜多と相應するは最尊最勝にして能く及ぶ者無し。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、是の如き相應は普ねく能く如來の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜捨・十八不共法・三十二大士相・八十隨好・無忘失法・恒住捨性・一切智・道相智・一切相智、及び餘の無量無邊の佛を引發す。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、是の如き般若波羅蜜多と相應するが故に、畢竟慳貪・犯戒・忿恚・懈怠・散亂・惡慧・障礙の心を起さず、布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多任運に現前し、間無く斷無し。

來果)の聖者が更に欲界に殘れる三品の思惑を斷じて、十九天に上り再び欲界に還り來ることなきによりかく名づく。

【四】阿羅漢 Arhan。四果の一。不還果の聖者が色界、無色界の思惑七十品を斷じて得る極果にして、此處に於て一切の煩惱悉く斷じ三明六通を得て神變飛行自在、永く生死を脱すとす。

【四一】受記。受決或は受蒞とも云ひ、佛より當來必當作佛の記別を受くるを云ふ。

【四二】妙法輪を轉ずとは佛の教法を説かることを云ふ。法輪 Dharmacakra とは釋尊所説の正法の稱、衆生の惡を摧破すること輪寶の能く山岳・巖石を輾摧するに譬へていひ、かく正法の開説を轉法輪といふ。

【四三】授記。和伽羅 Vyākaraṇa。十二部經(或は十二分經)の一。佛が發心の衆生に對して當來必當作佛の記別を授與するを云ふ。

す、最尊・最勝・最上・最妙・最高・最極・無上・無上上・無等・無等等なり。何を以ての故に、舍利子、此の般若波羅蜜多相應第一なるが故に。即ち是れ空相應、即ち是れ無相相應、即ち是れ無願相應なり。此の因縁に由つて最も第一たり。舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩、是の如き般若波羅蜜多と相應する時、當に知るべし、即ち爲れ【四〇】受記作佛なり、若しは受記に近しと。舍利子、是の菩薩摩訶薩、此の相應に由りて能く無量無數無邊の有情の爲に大饒益を作す。舍利子、是の菩薩摩訶薩、是の念を作さず、我れ般若波羅蜜多と相應すと。是の念を作さず、我れ受記を得て當に作佛し、若しは受記に近くべしと。是の念を作さず、我れ能く佛土を嚴淨すと。是の念を作さず、我れ能く有情を成熟すと。亦た是の念を作さず、我れ當に求むる所の無上正等菩提を證得し、妙法輪を轉じ、無量の衆を度すべしと。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩、法の法界より離るる有るを見ず、法界の諸法より離るるを見ず、諸法即ち是れ法界なるを見ず、法界即ち是れ諸法なるを見ず、法の般若波羅蜜多を修行する有るを見ず、法の佛の【四一】授記を得る有るを見ず、法の當に無上正等菩提を得べき有るを見ず、法の佛土を嚴淨する有るを見ず、法の有情を成熟する有るを見ざればなり。何を以ての故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、我想・有情想・命者想・生者想・養者想・士夫想・補特伽羅想・意生想・儒童想・作者想・使作者想・起者想・使起者想・受者想・使受者想・知者想・見者想を起さざるが故に。所以は何ん、我れ有情等しく畢竟不生にして亦復不滅なり、彼れ既に畢竟不生不滅なれば云何が當に能く般若波羅蜜多を修行し、及び種種の功德勝利を得べき。舍利子、是の菩薩摩訶薩は有情の生するを見ざるが故に、般若波羅蜜多を修行す。有情の滅するを見ざるが故に般若波羅蜜多を修行す。諸の有情空なるを知るが故に般若波羅蜜多を修行す。諸の有情不可得なるを知るが故に般若波羅蜜多を修行す。諸の有情遠離なるを知るが故に般若波羅蜜多を修行す。諸の有情の本

微見する智慧の眼にて聲聞緣覺の二乘はこの慧眼によつて一切を空なりと觀じ有相差別の執着を離る。【四】法眼とは一切諸法を分明に觀じて其の眞相を觀察する眼。【五】佛眼とは佛、即ち覺者の眼。具足して法性を覺了するの故にかく名づく。

【四〇】 十八佛不共法。身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、解脫知見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙の總稱。佛のみの有する獨特の法にて二乗や菩薩には共同りとなす。

【四一】 預流果。須陀洹 *Saddhāmaṇava*。四果の一。八十八使の見惑(智的煩惱)を斷じて三惡道に墮つることなき得果。

【四二】 一來果。斯陀含 *Sakadāgāmi*。四果の一。初果見道の人が更に欲界の思惑(情意的煩惱)九品のうち六品を斷じたる位にて、残り三品の惑の爲に今一度下界に來生するの故に一來と名づく。

【四三】 不還果。阿那含 *Anāgāmi*。四果の一。第二果(一

諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、五眼と空と相應するを見ず。亦た空と五眼と相應するを見ず。六神通と空と相應するを見ず、亦た空と六神通と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、佛の十力と空と相應するを見ず、亦た空と佛の十力と相應するを見ず、四無所畏、四無礙解・大慈大悲大喜大捨、十八佛不共法と空と相應するを見ず、亦た空と四無所畏乃至十八佛不共法と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、三十二大士相と空と相應するを見ず、亦た空と三十二大士相と相應するを見ず。八十隨好と空と相應するを見ず、亦た空と八十隨好と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無忘失法と空と相應するを見ず、亦た空と無忘失法と相應するを見ず。恒住捨性と空と相應するを見ず、亦た空と恒住捨性と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智と空と相應するを見ず、亦た空と一切智と相應するを見ず。道相智、一切相智と空と相應するを見ず、亦た空と道相智、一切相智と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、預流果と空と相應するを見ず、亦た空と預流果と相應するを見ず。一來・不還・阿羅漢果、獨覺菩提と空と相應するを見ず、亦た空と一來・不還・阿羅漢果、獨覺菩提と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切の菩薩摩訶薩行と空と相應するを見ず、亦た空と一切の菩薩摩訶薩行と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切の菩薩摩訶薩行と空と相應するを見ず、亦た空と一切の菩薩摩訶薩行と相應するを見ず。諸佛の無上正等菩提と空と相應するを見ず、亦た空と諸佛の無上正等菩提と相應するを見ず。

舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩、若し能く是の如く相應せば、是れを第一と空と相應すと爲す。舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩、是の如き空と相應するに由るが故に、聲聞獨覺等の地に墮せず、佛土を嚴淨し、有情を成熟して速かに無上正等菩提を證す。舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩、諸の相應中、般若波羅蜜多と相應するを最第一と爲す。

胎、田世より老いて死に至るまでをいひ、此間に又惑により業を造り苦を招くこと循環際まりなきものなり。

【三二】苦、集、滅、道の四法【四】聖諦或は四眞、四諦(四聖諦)などと呼び、釋尊成道後最初の説法にて聲聞(羅漢)の道が、諦は不變如實の眞相の意なり。(1)苦諦(Saṃkhara-dharma)とは現在(Chikhaṇa-dharma)とは現在の苦の原因を觀察してそれが煩惱による業なることを微見すること。(3)滅諦(Nirodha-dharma)とは集の因を滅すれば果の苦は自ら除かれるその結果が滅諦即ち涅槃寂靜の證果であると示すもの。(4)道諦(Marga-dharma)とは此の滅諦を得るための實修の方法を説けるものにて苦本を滅せんが爲に惑業を斷つ所の諸種の道品即ち佛道修行の實踐法を示せるものなり。

【三三】五眼、肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼の總稱。(1)肉眼とは佛眼に對して人間肉身の眼を云ふ。(2)天眼とは天趣の眼。また禪定によつて得たる心眼にて内外、遠近、明暗をよく見透す。(3)慧眼とは萬有の事象に對して能く眞相を

空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空と空と相應するを見ず、亦た空と外空乃至無性自性空と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眞如と空と相應するを見ず、亦た空と眞如と相應するを見ず。法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定・法住・實際・虛空界・不思議界と空と相應するを見ず、亦た空と法界乃至不思議界と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、四念住と空と相應するを見ず、亦た空と四念住と相應するを見ず。四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支、八聖道支と空と相應するを見ず、亦た空と四正斷乃至八聖道支と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、苦聖諦と空と相應するを見ず、亦た空と苦聖諦と相應するを見ず。集・滅・道聖諦と空と相應するを見ず、亦た空と集・滅・道聖諦と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、四靜慮と空と相應するを見ず、亦た空と四靜慮と相應するを見ず。四無量・四無色定と空と相應するを見ず、亦た空と四無量・四無色定と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、八解脫と空と相應するを見ず、亦た空と八解脫と相應するを見ず。八勝處・九次第定・十遍處と空と相應するを見ず、亦た空と八勝處・九次第定・十遍處と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、空解脫門と空と相應するを見ず、亦た空と空解脫門と相應するを見ず。無相無願解脫門と空と相應するを見ず、亦た空と無相無願解脫門と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切陀羅尼門と空と相應するを見ず、亦た空と一切陀羅尼門と相應するを見ず。一切三摩地門と空と相應するを見ず、亦た空と一切三摩地門と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、極喜地と空と相應するを見ず、亦た空と極喜地と相應するを見ず。離苦地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地と空と相應するを見ず、亦た空と離垢地乃至法雲地と相應するを見ず。

大所成にして、有情は六大所成なり。
 〔三七〕無明乃至老死を十二因縁、十二支又は縁起觀といふ。三世に亘つて生死に輪廻する因縁を十二分して觀察する法にて、惡業苦の轉縁を明かにせしものなり。(1)無明 *Avidya* 煩惱の根本。諸法の事理を明了に理解し得ざるをいふ。即ち惑。(2)行 *Samskara* 無明の迷見から犯す惡行爲をいふ。即ち業。以上之惑と業に依りて次の苦を生ず。(3)識 *Vijnana* 生を現世にうけて母胎に入る結生の初念。(4)名色 *Namairupa* 母胎内に在つて身心は漸く發育するが尙ほ六根具足の働のない状態。(5)六處 *Sadhatana* 六入とも稱し、六根具足より出胎迄の間。(6)觸 *Sparsa* 出胎後外界に接觸すること。未だ苦の感覺無き時期。(7)受 *Upeksa* 外界より受くる苦樂の感覺明かになる時期。(8)愛 *Tanha* 愛欲の念を生ずる時期。(9)取 *Upanna* 愛欲盛にして欲するものを取り求めんとする時期。(10)有 *Byava* 愛取等によりて未來の果を決定する業を作ること。(11)生 *Jana* 以上の惡業の結果として未來に轉生し相應の身を受ること。(12)老死 *Talamana* 未來世にて托

空と色界と相應するを見ず、聲・香・味・觸・法界と空と相應するを見ず、亦た空と聲・香・味・觸・法界と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眼識界と空と相應するを見ず、亦た空と眼識界と相應するを見ず。耳・鼻・舌・身・意識界と空と相應するを見ず、亦た空と耳・鼻・舌・身・意識界と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眼觸と空と相應するを見ず、亦た空と眼觸と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受と相應するを見ず。耳・鼻・舌・身・意識觸に緣ぜられて生ずる所の諸受と空と相應するを見ず、亦た空と耳・鼻・舌・身・意識觸に緣ぜられて生ずる所の諸受と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、他界と空と相應するを見ず、亦た空と地界と相應するを見ず。水・火・風・空・識界と空と相應するを見ず、亦た空と水・火・風・空・識界と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、因緣と空と相應するを見ず、亦た空と因緣と相應するを見ず。等無間緣・所緣緣・増上緣及び緣より生ずる所の法と空と相應するを見ず、亦た空と等無間緣・所緣緣・増上緣及び緣より生ずる所の法と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無明と空と相應するを見ず、亦た空と無明と相應するを見ず。行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死愁歎苦憂惱と空と相應するを見ず。亦た空と行乃至老死愁歎苦憂惱と相應するを見ず。

諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多を空と相應するを見ず、亦た空と布施波羅蜜多と相應するを見ず。淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多と空と相應するを見ず、亦た空と淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、內空と空と相應するを見ず、亦た空と內空と相應するを見ず。外空・內外空・空空・大空・勝義

五蘊(蘊は積集の義、この五要素が積集して一身萬有を形成するの故に名づく)と稱す。(1)色とは物質、形象のこと。四大及び四大より形成せられたる肉體。五根及びその對境たる五境等を含む。(2)受とは苦樂、快不快等を感じる心的作用。感覺、感情、知覺に相當する。(3)想はすべて受けた感覺について思慮をなす心的作用。表象觀念又は概念等。(4)行はすでに取象し觀念せるものについて更に取捨の働きを起す心的作用にて、造作の義。(5)識とは了別の義にして智の働きを意味する語にて以上の四蘊がこゝに至つて種種の意識分別を起すを云ひ、漠然と心といふに當る。

【三二】眼、耳、鼻、舌、身、意の六官と稱す。根とは能生の義にて、眼根は色境に對して眼識を生じ、乃至意根は法境に對して意識を生ずるの故に名くるなり。

【三三】色塵香味觸法を六境と稱す。この六法は次第の如く眼耳鼻各身意の六根所對の境界なれば六境と云ふ。

【三四】地、水、火、風、空、識を六大或は六界と稱す。この六法一切法界に遍滿して有情非情を造作するの故に大と名づくるなり。即ち非情は五

是の菩薩摩訶薩は法と法と若しは相應し、若しは相應せず、若しは等しく、若しは等しからざる有るを見ざるが故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の念を作さず、我れ法界に於て若しは疾く^{三三}等覺を現じ、若しは疾く等覺を現ぜずと。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩、少法能く法界に於て等覺を現するを見ざるが故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、法の法界を離るる者有るを現す。法界の諸法を離るる有るを見ず。亦た諸法即ち是れ法界なるを見ず。法界即ち是れ諸法なるを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の念を作さず。法界は能く諸法の因縁と爲ると。是の念を作さず、諸法は能く法界の因縁と爲ると。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の念を作さず。此の法は能く法界を證し、此の法は能く法界を證せずと。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は尚ほ法をだに見ず、況んや法の能く法界を證し、或は能く證せざる有るを見んをや。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色と^{三三}空と相應するを見ず、亦た空と^{三三}色と相應するを見ず。受・想・行・識と空と相應するを見ず、亦た空と受・想・行・識と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眼處と空と相應するを見ず、亦た空と眼處と相應するを見ず、耳・鼻・舌・身・意處と空と相應するを見ず、亦た空と耳・鼻・舌・身・意處と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色處と空と相應するを見ず、亦た空と色處と相應するを見ず。聲・香・味・觸・法處と空と相應するを見ず、亦た空と聲・香・味・觸・法處と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、眼界と空と相應するを見ず、亦た空と眼界と相應するを見ず、耳・鼻・舌・身・意界と空と相應するを見ず、亦た空と耳・鼻・舌・身・意界と相應するを見ず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、色界と空と相應するを見ず、亦

もいひ、定、等持、正受、調直定、正心行處などと譯す。心を一境一處に安住せしめて散亂せしめざる心的狀態を云ふ。

【三九】無上正等菩提。無上正等正覺なり。阿耨多羅三藐三菩提の新譯にして、佛の悟を云ふ。

【四〇】法界。達勝款都(Mahāttmadhātū)、法性或は實相ともいふ。法界に多義あるも且らく二義を以て分別し、一は事に就き他は理に約す。事に就かば諸法各自體ありて分界不同なる故名づけ、理に約せば眞理の理性を云ひ、諸の聖道を生ずるが故にかく名づくるなり。

【三一】等覺。佛の異稱。諸佛の覺悟平等一如の故にかく云ふ。(智度論說)

【三二】空。梵語śūnyāの譯。因縁所生の法にして、究竟して實體なく自性なきをいふ。又實體なく自性なきを云ふ。これに種種の別目を説くも要するに我空と法空の二に約せらる。即ち主觀、客觀すべての否定にして、我空は自我の實在を認め、法空は世界の實在に實體を認める迷執の否定なり。

【三三】色、受、想、行、識を

て爾所の界中の諸佛菩薩を供養・恭敬・尊重・讚歎すと。是の念を作さず、我れ漏盡智證通を以て遍ねく十方殞伽沙等の諸佛世界の一切有情の漏盡き、盡きざるを觀すと。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと云ふべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の如き般若波羅蜜多と相應するが故に、善能く無量無數無邊の有情を無餘依般涅槃界に安立し、一切の惡魔は其の便を得ず、所有煩惱は皆能く伏滅し、世間の衆事欲する所意に隨ひ、十方各の殞伽沙の如き界の一切の如來應正等覺、及び諸の菩薩摩訶薩衆、皆共に是の如き菩薩を護念して一切の聲聞獨覺等の地に退墮せしめず。十方各の殞伽沙界の如き四大王衆天・三十三天・夜摩天・觀多天・樂變化天・他化自在天・梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天・光天・少光天・無量光天・極光淨天・淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・無繁天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天及び餘の一切の聲聞獨覺、皆共に是の如き菩薩を擁衛し、諸の爲す所有るに障礙無からしめ、身心の疾惱咸く瘡除するを得、設ひ罪業有りて當來世に於て應に苦報を招くべきも轉じて輕受と現す。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は諸の有情に於て慈悲遍ねきが故に。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する威神力の故に、少しの加行を用て便ち能く最勝自在の陀羅尼門、三摩地門を引發して速かに現起せしめ、所生の處に隨つて常に一切の如來應正等覺に奉事することを得、乃至所求の無上正等菩提を得得するまで其の中間に於て常に佛を離れず。舍利子、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時、是の如き般若波羅蜜多を相應するが故に、是の如き等の無量無數不可思議微妙の功德を得。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の念を作さず。法と法と若しは相應し、若しは相應せず、若しは等しく、若しは等しからざる有り。何を以ての故に、舍利子、

自在なる四種の力用、即ち法無礙、義無礙、辭無礙、樂說無礙の稱。
【一〇】 預流果、一來果、不還果、阿羅漢果を四果と稱し、聲聞乘の聖果の四種差別なり。
【一一】 法性、實相、眞如、法界、涅槃等と異名同義。不變不改の法の意にして大乘佛敎にては萬有の本體の義となす。
【一二】 天眼智證通乃至漏盡智證通を六通と稱し、何れも智を以て體とし、智慧が事物を證知すること通達無礙なる力用を分別せしものなれば智證通と云ふ。
【一三】 恒何沙に同じ、數の多きに譬ふ。
【一四】 無餘依般涅槃界。煩惱障を斷じ灰身滅智して寂滅せし境界。有漏の依身なきが故に無餘依と云ひ、圓寂なれば涅槃と云ふ。
【一五】 加行。梵語 Pratyoga の新譯。修行の功を増加する意にて、正位に入る準備として一段の力を加へて修行すること。
【一六】 陀羅尼門。梵音 Dhāraṇī 門。總持、能持、能遮等と譯す。種種の善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用をいふ。
【一七】 三摩地門。梵音 Samāhi 門。三摩提、三摩帝、三昧と

妙智の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、預流果を超越せんが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。一來・不還・阿羅漢果・獨覺菩提を超越せんが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切の菩薩摩訶薩の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸佛の無上正等菩提の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。何を以ての故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに諸の法性の差別を見ざるが故なり。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに是の如き法と相應するが故に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、天眼智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。天耳智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。他心智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。宿住隨念智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。神境智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。漏盡智證通の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。何を以ての故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、尙ほ修する所の般若波羅蜜多だに有るを見ず、況んや當に菩薩、如來の修する所の六神通事有るを見るべけんをや。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに是の如き法と相應するが故に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の念を作さず、我れ天眼智證通を以て遍ねく十方、殘伽沙等の諸佛世界の一切有情、此に死し彼れに生するを見ると。是の念を作さず、我れ天耳智證通を以て遍ねく十方、殘伽沙等の諸佛世界の諸佛菩薩所説の法音を聞くと。是の念を作さず、我れ他心智證通を以て遍ねく十方、殘伽沙等の諸佛世界の一切有情の心所法を知ると。是の念を作さず、我れ宿住隨念智證通を以て遍ねく十方、殘伽沙等の諸佛世界の一切有情の諸の宿住の事を憶ふと。是の念を作さず、我れ神境智證通を以て遍ねく十方、殘伽沙等の諸佛世界に至つ

【一】 八解脱。無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じて羅漢果を悟る八種の禪定。
【二】 八勝處。勝知勝見を發して三界の食愛を遠離する八種の禪定。

【三】 九次第定。四禪四無色、滅受想定の九種の禪定を他心の間雜なく次第を追ひて修する禪定。

【四】 十遍處。十一一切處とも云ひ、青黃赤白地水火風空識の十法を觀じ其の一々に於て一切處に周遍せしむるなり。

【五】 空解脱門。三解脱門の一。萬有ことなく因縁生にして、自性實體無き空なりと觀ず。

【六】 無相解脱門。三解脱門の一。すべて相對的差別の相狀なしと觀ず。

【七】 無願解脱門。三解脱門の一。一切生死法中に於て願求し造作を欲する念を離るる禪定。

【八】 極喜地乃至法雲地は大乗菩薩十地にして菩薩修道位十種の稱。

【九】 四無所畏。略して四無畏といひ、佛菩薩が説法に際して何等畏れを感じざる四種の智徳を云ふ。これに佛の四無畏、菩薩の四無畏の二種あり。

【一〇】 四無礙解。菩薩の無礙

退轉地を得んが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。有情を成熟せんが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。佛土を嚴淨せんが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、四念住の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。苦聖諦の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。集・滅・道聖諦の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、四靜慮の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。四無量・四無色定の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、八解脫の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。八勝處・九次第定・十遍處の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、空解脫門の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。無相・無願解脫門の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切陀羅尼門の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。一切三摩地門の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、極喜地の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、肉眼の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。天眼・慧眼・法眼・佛眼の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、佛の十力の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。四無所畏・四無礙解、大慈大悲大喜捨、十八不共法の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、三十二大士相の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。八十隨好の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、無忘失法の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。恒住捨性の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、一切智の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。道相智・一切相智・一切相微

初分相應品第三之四

四五

【四】 四念住。四念處とも云ふ。小乘の行人が五停心觀の後、修する、身念處、受命處、心念處、法念處、の四種の觀法。
 【五】 四正斷。四意斷又は四正勝とも云ふ。煩惱を斷ずる四法。即ち、斷斷、律儀斷、隨護斷、修斷の稱。
 【六】 七等覺支。七菩提分或は七覺分とも云ふ。涅槃に到る行道三十七種の中の第六の道法。即ち、擇法覺支、精進覺支、喜覺支、輕安覺支、念覺支、定覺支及び行捨覺支の稱。
 【七】 八聖道支。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の稱。邪非を離るるの故に正といひ、能く通じて涅槃に到るの故に道と云ふなり。
 【八】 四靜慮。色界の四禪定。
 【九】 四無量。菩薩の廣大無量なる利他の心を、慈・悲・喜・捨の四無量心に別して云ふ。
 【一〇】 四無色定。四空定とも云ひ。十二門禪中の四禪、即ち、空無邊處定、識無邊處定、無所有處定、非想非非想處定なり。

(c) 菩提聖諦乃至道聖諦。(c) 四靜慮乃至四無色定。(c) 八解脫乃至十遍處。(c) 空解脫門乃至無願解脫門。
 (c) 一切陀羅尼門 一切三摩地門。(c) 極喜地乃至法雲地。(c) 五眼、六神通。(c) 佛の十力乃至十八不
 共法。(c) 三十二大士相、八十隨好。(c) 無忘失法、恆住捨性。(c) 一切智乃至一切相智。(c) 預流果乃至
 阿羅漢果・獨覺・菩提。(c) 一切の菩薩摩訶薩行、諸佛の無上正等菩提。

舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は是の念を作さず。我れ般若波羅蜜多を行すと。是
 の念を作さず。我れ般若波羅蜜多を行ぜすと。是の念を作さず。我れ般若波羅蜜多を亦たは行じ亦
 たは行ぜすと。是念を作さず、我れ般若波羅蜜多を行するに非らず行ぜざるに非らずと。舍利子、
 般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應す
 と言ふべし。

卷の第七

初分相應品第三之四

* 復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、布施波羅蜜多の爲の故に般若波
 羅蜜多を修行せず。淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の
 菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、^二 内空の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。外空・内外空・
 空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無餘空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法
 空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩薩摩訶薩、般
 若波羅蜜多を修行する時、眞如の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。法界・法性・不虛妄性・不變異
 性・平等性・離生性・法定・法住・實際・虛空界・不思議界の爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。諸の菩
 薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、^三 正性離生に入らんが爲の故に般若波羅蜜多を修行せず。不

本 續いて般若の修習相應を
 明す。

【一】 布施波羅蜜多乃至般若
 波羅蜜多を六波羅蜜又は六度
 と稱し、生死の此岸より涅槃
 の彼岸に到る菩薩の修行法な
 り。

【二】 内空乃至無性自性空は
 十八空と稱し、智度論に説け
 る般若の空の體及び用の觀察
 種別なり。

【三】 正性離生。無漏智を生
 じて煩惱を斷じ、永く異生
 (凡夫)の生を離るゝこと。

一切智と菩提と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、一切智は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ一切智なるが故に。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

(c) 復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、色の有に著せず、色の非有に著せず、受・想・行・識の有に著せず、受・想・行・識の非有に著せず。色の常に著せず、色の無常に著せず、受・想・行・識の常に著せず、受・想・行・識の無常に著せず。色の樂に著せず、色の苦に著せず、受・想・行・識の樂に著せず。受・想・行・識の苦に著せず。色の我に著せず、色の無我に著せず。受・想・行・識の我に著せず、受・想・行・識の無我に著せず。色の寂靜に著せず、色の不寂靜に著せず。受・想・行・識の寂靜に著せず、受・想・行・識の不寂靜に著せず。色の空に著せず、色の不空に著せず、受・想・行・識の空に著せず、受・想・行・識の不空に著せず。色の無相に著せず、色の有相に著せず、受・想・行・識の無相に著せず、受・想・行・識の有相に著せず。色の無願に著せず、色の有願に著せず、受・想・行・識の無願に著せず、受・想・行・識の有願に著せず。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、是の如き法と相應するが故に當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

(c) 眼處乃至意處。(c) 色處乃至法處。(c) 眼界乃至意界。(c) 色界乃至法界。(c) 眼識界乃至意識界。

卷の第六

初分相應品第三之三

(c) 眼觸乃至意觸。(c) 眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(c) 地界乃至識界。(c) 因緣乃至増上緣及び緣より生ずる所の法。(c) 無明乃至老死愁歎苦憂惱。(c) 布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(c) 內空乃至無自性空。(c) 眞如乃至不思議界。(c) 四念住乃至八聖道支。

(c) 「復た舍利子諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多不著色有不著色非有不著受想行識有不著受想行識非有……舍利子諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多與如是法相應故當言與般若波羅蜜多相應」
右の文中「色乃至識」の五蘊のある所には悉く次下所出の諸法を夫夫代入せば他は皆同文なり故に之を(c)にて略し以下その諸法のみ略出す。

(c) 前卷の(c)を其儘特に依用す。

觀ぜず。何を以ての故に、尙ほ未來有るをだに見ず、況んや一切智と未來と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜんをや。一切智と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、尙ほ現在有るをだに見ず、況んや一切智と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜんをや。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、是の如き法と相應するが故に、般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

(b)復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、一切智と色と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、尙ほ色有るをだに見ず、況んや一切智と色と若しは相應し若しは相應せざるを觀ぜんをや。一切智と受・想・行・識と若しは相應し若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、尙ほ受・想・行・識有るをだに見ず、況んや一切智と受・想・行・識と若しは相應し若しは相應せざるを觀ぜんをや。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

(b)眼處乃至意處。(b)色處乃至法處。(b)眼界乃至意界。(b)色界乃至法界。(b)眼識界乃至意識界。(b)眼觸乃至意觸。(b)眼觸緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸緣ぜられて生ずる所の諸受。(b)地界乃至識界。(b)因緣乃至增上緣及び緣より生ずる所の法。(b)無明乃至老死愁歎苦憂惱。(b)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(b)內空乃至無性自性空。(b)四念住乃至八聖道支。(b)苦聖諦乃至道聖諦。(b)四靜慮乃至四無色定。(b)八解脫乃至十遍處。(b)空解脫門乃至無願解脫門。(b)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(b)極喜地乃至法雲地。(b)五眼、六神通。(b)佛の十力乃至十八佛不共法。(b)三十二大士相、八十隨好。無忘失法、恒住捨性。(b)一切智乃至一切相智。(b)佛、菩提。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、一切智と佛と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、一切智に即ち是れ佛、佛に即ち是れ一切智なるが故に。

(b)「復た舍利子諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多不觀一切智與色若相應若不相應……何以故尙不見有受想行識……當言與般若波羅蜜多相應」の右の文中「色乃至識」のある所に次下に出す諸法を代入せば他は皆同文なり故に之を符號(b)にて略し以下その諸法のみ略出す。

次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、一切法の自相空に入り已つて、色の若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。受・想・行・識の若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。是の菩薩摩訶薩は色と^一前際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、前際を見ざるが故なり。受・想・行・識と前際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、前際を見ざるが故なり。色と^二後際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、後際を見ざるが故なり。受・想・行・識と後際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、後際を見ざるが故なり。色と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、現在を見ざるが故なり。受・想・行・識と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、現在を見ざるが故なり。復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、前際と後際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。前際と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。後際と前際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。後際と現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。現在と前際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。現在と後際と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。前際と後際、現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。後際と前際、現在と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。舍利子、三世空なるが故なり。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに、一切智と過去と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に、尙ほ過去有るをだに見ず、況んや一切智と過去と若しは相應し、若しは相應せざるを觀ぜんをや。一切智と未來と若しは相應し、若しは相應せざるを

【一】前際。三際の一。過去世のこと。

【二】後際。三際の一、未來世を云ふ。

【三】一切智。三智の一。一切法の空相(總相)を知る智。聲聞緣覺の智となす。

卷の第五

初分相應品第三之二

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに(a)色の若しは相應し若しは相應せざるを見ず。受・想・行・識の若しは相應し若しは相應せざるを見ず。(a)眼處乃至意處。(a)色處乃至法處。(a)眼界乃至意界。(a)色界乃至法界。(a)眼識界乃至意識界。(a)眼觸乃至意觸。(a)眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受乃至意觸に緣ぜられて生ずる所の諸受。(a)地界乃至識界。(a)因緣乃至増上緣。(a)緣より生ずる所の諸法。(a)無明乃至老死・愁・歎・苦・憂・惱。(a)欲界、色、無色界。(a)布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多。(a)内空乃至無性自性空。(a)眞如乃至不思議界。(a)四念住乃至八聖道支。(a)苦聖諦集・滅・道聖諦。(a)十善業道乃至八近住戒。(a)施性福業事、戒性・修性福業事。(a)四靜慮乃至四無色定。(a)八解脫戒乃至十遍處。(a)空解脫門乃至無願解脫門。(a)一切陀羅尼門、一切三摩地門。(a)極喜地乃至法雲地。(a)五眼、六神通。(a)佛の十力乃至十八不共法。(a)三十二大士相、八十隨好。(a)無忘失法、恒住捨性。(a)一切智道相智・一切相智・一切相微妙智。(a)一切智智・永拔一切煩惱習氣。(a)預流果乃至獨覺菩提。(a)一切の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行するに、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべきを知るべし。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、空と空と相應し、相應せざるを觀ぜず。無相と無相と相應し、相應せざるを觀ぜず。無願と無願と相應し、相應せざるを觀ぜず。何を以ての故に。舍利子、空・無相・無願は皆相應、不相應無きが故なり。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し、是の如き法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。復た

【二】 第四卷迄は適宜省略せしも第五卷以後は大體「大般若經開法」により省略し且つ「相應品三之一」の本文の如く分説せず脚註の如く連續し得るものは連續して適宜省略し尙ほ省略せる所はそれに適當する符號(い)(ろ)(は)を傍付す。

(a) 「不見色若相應若不相應不見受想行識若相應若不相應」右の文中「色乃至識」のある所に次に出す諸法を代入せば他は皆同なり故に之を符號(a)にて略し以下その諸法のみ略出す。

是れ染法、若しは是れ淨法なるを見ざればなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は色と受と合ふを見ず。受と想と合ふを見ず、想と行と合ふを見ず、行と識と合ふを見ず。何を以ての故に、舍利子、少法と少法と合ふこと有る無ければなり。本性空なるが故に。所以は何ん。舍利子、諸の色空は彼の色に非らず。諸の受・想・行・識空は彼の受・想・行・識に非ざればなり。何を以ての故に。舍利子、諸の色空は彼の變礙相に非らず。諸の受空は彼の領納相に非らず。諸の想空は彼の取像相に非らず、諸の行空は彼の造作相に非らず、諸の識空は彼の了別相に非らず。何を以ての故に、舍利子、色は空に異らず、空は色に異らず、色は即ち是れ空。空は即ち是れ色なり。受・想・行・識は空に異らず、空は受・想・行・識に異らず、受・想・行・識は即ち是れ空、空は即ち是れ受・想・行・識なればなり。何を以ての故に、舍利子、是の諸法の空相は不生不滅・不染不淨・不増不減・過去に非らず、未來に非らず、現在に非らざればなり。舍利子、是の如き空中には色無く、受・想・行・識無く、地界無く、水・火・風・空・識界無く、眼處無く、耳・鼻・舌・身・意識無く、色處無く、聲・香・味・觸・法處無く、眼界無く、耳・鼻・舌・身・意識無く、色界無く、聲・香・味・觸・法界無く、眼識界無く耳・鼻・舌・身・意識界無く、眼觸無く、耳・鼻・舌・身・意識觸無く、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受無く、耳・鼻・舌・身・意識に緣ぜられて生ずる所の諸受無く、無明の生ずる無く、無明の滅する無く、行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有生・老死愁歎苦憂惱の生ずる無く、行乃至老死愁歎苦憂惱の滅する無く、苦聖諦無く、集・滅・道聖諦無く、得無く、現觀無く、預流無く、預流果無く、一來無く、一來果無く、不還無く、不還果無く、阿羅漢無く、阿羅漢果無く、獨覺無く、獨覺菩提無く、菩薩無く、菩薩行無く、佛無く、佛菩提無し。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は是の如き等の法と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

【一】 色即是空、空即是色。共に對句をなす。一切差別の現象はそのまゝ空にして無差別平等なりと觀するを云ふ。

【二】 現觀。聖諦現觀のこと。現前に四諦の法を觀するを云ふ。

薩は 三十二大土相空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。八十隨好空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、無忘失法空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。恒住捨性空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は一切智空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。道相智、一切相智空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は一切智智空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。永拔一切煩惱習氣空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、預流果空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。一來・不還・阿羅漢果・獨覺菩提空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は一切の菩薩摩訶薩行空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。諸佛の無上正等菩提空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、我空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・孺童・作者・使作者・起者・受者・使受者・知者・見者空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は是の如き等の空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は是の如き等の空と相應する時、色の若しは相應し、若しは相應せざるを見ず。受・行・識の若しは相應し、若しは相應せざるを見ず。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は色の若しは是れ生法、若しは是れ滅法なるを見ず。受・想・行・識の若しは是れ生法、若しは是れ滅法なるを見ず。色の若しは是れ染法、若しは是れ淨法なるを見ず。受・想・行・識の若しは

(ろ) 三十二大土相。八十隨好。

(お) 無忘失法。恒住捨性、

(く) 一切智。道相智、一切相智

(や) 一切智智。永拔一切煩惱習氣

(ま) 預流果。一來、不還、阿羅漢果、獨覺菩提

(ふ) 一切菩薩摩訶薩行。諸佛無上正等菩提

(こ) 我。有情、命者、生者、養者、士夫、補特伽羅、意生、孺童、作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者、

に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、十善業道空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。五近事戒、八近住戒空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、施性福業事空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。戒性、修性福業事空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、四靜慮空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。四無量、四無色定空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、八解脫空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。八勝處、九次第定、十遍處空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、空解脫門空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。無相、無願、解脫門空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、一切陀羅尼門空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、極喜地空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。離垢地、發光地、焰慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應するが故に、當に般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、五眼空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、佛の十力空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。四無所畏、四無礙解、大慈大悲大喜大捨、十八不共法空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶

(れ) 十善業道。五近事戒、八近住戒

(ろ) 施性福業事。戒性、修性福業事

(つ) 四靜慮。四無量、四無色定

(れ) 八解脫。八勝處、九次第定、十遍處

(な) 空解脫門。無相、無願解脫門

(ら) 一切陀羅尼門。一切三摩地門

(ち) 極喜地。離垢地、發光地、焰慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地。
(ろ) 五眼。六神通

(る) 佛十力。四無所畏、四無礙解、大慈大悲大喜大捨、十八不共法

若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、地界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。水・火・風・空、識界と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、因緣空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。等無間緣、所緣緣、増上緣及び諸緣より生ずる所の諸法空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、無明空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死愁歎苦憂惱空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。

舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、布施波羅蜜多空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、內空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眞如空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定法住・實際・虛空界・不思議界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、四念住空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、苦聖諦空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。集・滅・道聖諦空と相應するが故に、當

(リ) 地界。水、火、風、空、識界

(ハ) 因緣。等無間緣、所緣緣、増上緣

(ニ) 無明。行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死愁歎苦憂惱

(セ) 布施波羅蜜多。淨戒、安忍、精進、靜慮、般若波羅蜜多

(ワ) 內空。外空、内外空、空空、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無際空、散空、無變異空、本性空、自相空、共相空、一切法空、不可得空、無性空、自性空、無性自性空

(カ) 眞如、法界、法性、不虛妄性、不變異性、平等性、離生性、法定法住、實際、虛空界、不思議界、四念住、四正斷、四神足、五根、五力、七等覺支、八聖道支

(タ) 苦聖諦。集、滅、道聖諦

初分相應品第三之一

* 爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は何の法と相應するが故に當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべきやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、色空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。受・想・行・識空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼處空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。耳・鼻・舌・身・意識空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。聲・香・味・觸・法界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。耳・鼻・舌・身・意識空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、色界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。聲・香・味・觸・法界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼識界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。耳・鼻・舌・身・意識界空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼觸空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。耳・鼻・舌・身・意識空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。舍利子、般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩は、眼觸に緣ぜられて生ずる所の諸受空と相應するが故に、當に般若波羅蜜多と相應すと言ふべし。耳・鼻・舌・身・意識觸に緣ぜられて生ずる所の諸受空と相應するが故に、當に般若

(*) 般若の修習相應を明す。

(一) 色、受、想、行、識、以下斯る諸法の出る時は皆略出す(ろ)は(に)等皆然り

(ろ) 眼處。耳、鼻、舌、身、意處

(は) 色處。聲、香、味、觸、法處

(に) 眼界。耳、鼻、舌、身、意界

(任) 色界。聲、香、味、觸、法界

(へ) 眼識界。耳、鼻、舌、身、意識界

(と) 眼觸。耳、鼻、舌、身、意觸

(ち) 眼觸爲緣所生諸受。耳、鼻、舌、身、意識爲緣所生諸受

力・七等覺支・八聖道支・空・無願・解脫門・菩提薩道聖諦を施し、又た有情に布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若・方便・善巧・妙願力智波羅蜜多を施し、又た有情に內空・外空・内外空・空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空を施し、又た有情に一切法・眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・難生性・法定・法住・實際・虚空界・不思議界を施し、又た有情に陀羅尼門・三摩地門・菩薩の十地を施し、又た有情に五眼・六神通を施し、又た有情に如來の十力・四無所畏・四無礙解・大悲・大喜・大捨・十八不共法を施し、又た有情に無忘失法・恒住捨性を施し、又た有情に一切智・道相智・一切相智を施し、又た有情に布施・愛語・利行・同時・成熟有情・嚴淨佛土方便善巧を施し、又た有情に預流・一來・不還・阿羅漢果・獨覺菩提を施し、又た有情に一切の菩薩摩訶薩行・諸佛の無上正等菩提を施す。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は、諸の有情に是の如き等の類、無量、無數無邊の善法を施す。故に菩薩は大施主たりと説く。此れに由つて已に諸の施主の恩を報するなり。是れ眞の福田にして勝福を生長すと。

内外空・空・空・空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空。一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空有りて世間に出現し、一切法の一九眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定・法住・實際・虛空界・不思議界有りて世間に出現し、八解脱・八勝處・九次第定・十遍處有りて世間に出現し、一切の陀羅尼門・三摩地門・菩薩の十地有りて世間に出現し、五眼六神通有りて世間に出現し、佛の十方・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法有りて世間に出現し、無忘失法・恒住捨性有りて世間に出現し、一切智・道相智・一切相智有りて世間に出現し、有情を成熟し佛土を嚴淨する等無量無數無邊の善法有りて世間に出現す。是の如き諸の善法有るに由るが故に、世間に便ち刹帝利大族・婆羅門大族・長者大族・居士大族有り、是の如き諸の善法有るに由るが故に、世間に便ち四大王衆天・三十三天・夜摩天・覩史多天・樂變化天・他化自在天有り。是の如き諸の善法有るに由るが故に、世間に便ち梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天・光天・少光天・無量光天・極光淨天・淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・無想有情天・無繫天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天有り。是の如き諸の善法有るに由るが故に世間に便ち空無邊處天・識無邊處天・無所有處天・非想非非想處天有り。是の如き諸の善法有るに由るが故に、世間に便ち預流・一來・不還・阿羅漢・獨覺有り。是の如き諸の善法有るに由るが故に、世間に便ち菩薩摩訶薩、及び諸の如來應正等覺有るなりと。

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は復た二〇須く施主の恩に報すべしと爲すや不やと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は復た諸の施主の恩に報ゆることを須二一ひす。何を以ての故に、已に多二二報するが故なり。所以は何ん、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は天施主と爲りて諸の有情に無量の善法を施す。謂ゆる有情に十善業道・五近事戒・八近住戒・四靜慮・四無量・四無色定・施戒・修性の一九三福業事を施し、又た有情に四念住・四正斷・四神足・五相・五

【一九】眞如乃至不思議界は所謂法性十二異名なり。

【二〇】三福業。俱舍論に施類福(大富の福果を感ずる)、戒類福(生天の福果を感ずる)、修類福(解脱の福果を感ずる)を以て三福となす。

是の念を作す。我れ當に布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行すべし。乃至、我れ當に永く一切の煩惱の習氣を抜き、無上正等菩提を證得すべしと、方便して無量無數無邊の有情を無餘依涅槃界に安立す。是を以ての故に舍利子、當に知るべし、一切の聲聞獨覺所有の智慧を、般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧に比するに百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、百千分の一にも及ばず、俱胝分の一にも及ばず、百俱胝分の一にも及ばず、千俱胝分の一にも及ばず、百千俱胝分の一にも及ばず、數分・算分・計分・喩分、乃至即波尼殺曇分の亦た一にも及ばざるなりと。

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊云何が菩薩摩訶薩は能く聲聞獨覺等の地を超えて能く菩薩の不退轉の地を得、能く無上佛菩提道を淨むるやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は初發心より布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若・方便・善巧・妙願力智波羅蜜多を修行して空無相無願の法に住し、即ち能く一切の聲聞獨覺等の地を超過して能く菩薩不退轉の地を得、能く無上佛菩提道を淨むと。時に舍利子復を佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は何等の地に住して能く一切の聲聞獨覺の與（あま）に眞福田（しんぶくた）と作るやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は初發心より布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若・方便・善巧・妙願力智波羅蜜多を修行して空無相無願の法に住し、乃至妙菩提の座に安坐して、常に一切の聲聞獨覺の與（あま）に眞福田と作る。何を以ての故に、舍利子、菩薩摩訶薩に依るを以ての故に一切の善法、世間に出現すればなり。謂ゆる菩薩摩訶薩に依るが故に十善業道・五近事戒・八近住戒・四靜慮・四無量（しむりやう）・四無色定（しむじきぢやう）・施性福業事・戒性福業事・修性福業事等有りて世間に出現す。又た菩薩摩訶薩に依るが故に、四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支、空無相無願解脫門、苦集滅道聖諦等有りて世間に出現す。又た菩薩摩訶薩に依るが故に、布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多有りて世間に出現し、內空・外空・

【三〇】 淨佛道を明す。

【二九】 眞福田。田は生長の義にて、應に供養すべきものに供養せば能く諸の福徳を得ること宛も農夫の田畝播種して秋收の利あるが如きを云ふ。又、如來、比丘の事を云ふ。

【三〇】 四無色定。四空定ともいひ、十二門禪中の四禪、即ち空無邊處定、識無邊處定、無所有處定、非想非非想處定をいふ。

慮・四無量・四無色定を修行すべし。我れ當に殊勝の八解脫・八勝處・九次第定・十遍處を修行すべし。我れ當に殊勝の空無相無願解脫門を修行すべし。我れ當に內空・外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空に安住すべし。我れ當に眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定・法住・實際・虛空界・不思議界に安住すべし。我れ當に殊勝の苦集滅道聖諦に安住すべし。我れ當に一切の陀羅尼門・三摩地門を修行すべし。我れ當に極喜地・離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地を修行すべし。我れ當に菩薩の神通を圓滿し有情を成熟して佛土を嚴淨すべし。我れ當に五眼・六神通を圓滿すべし。我れ當に佛の十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八佛不共法を圓滿すべし。我れ當に三十二大士相・八十隨好を圓滿すべし。我れ當に無忘失法・恒住捨性を圓滿すべし。我れ當に一切智・道相智・一切相智を圓滿して、永く一切の煩惱の習氣を拔きて無上正等菩提を證得すべしと。方便して無量無數無邊の有情を無餘依涅槃界に安立すべきや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝と、佛言はく、舍利子、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は皆是の念を作す。我れ當に布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行すべし。乃至我れ當に永く一切の煩惱の習氣を拔き、無上正等菩提を證得すべしと、方便して無量無數無邊の有情を無餘依涅槃界に安立すと。

舍利子、譬へば螢火ひいくの是の如き念無きが如し、我が光能く遍ねく瞻部洲を照らし普ねく大明ならしめんと。是の如く一切の聲聞獨覺は是の如き念無し。我れ當に九布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行すべし。乃至我れ當に永く一切の煩惱の習氣を拔き、無上正等菩提を證得すべしと、方便して無量無數無邊の有情を無餘依涅槃界に安立す。舍利子、譬へば日輪の光明熾盛にして、瞻部洲を照らすに周遍せざる無きが如く、是の如く般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は常に

【九】布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若波羅蜜多を六波羅蜜又は六度と稱す。波羅蜜 (Pāramitā) は究竟、到彼岸、度などと譯す。菩薩の修行能く一切自行化他の事を究竟すれば究竟と名づけ、此大行に乗じて能く生死の彼岸より涅槃の彼岸に到るの故に到彼岸と稱し、能く諸法の廣遠を度すれば度となす。

眠分の一にも及ばず、百千俱眠分の一にも及ばず、數分、算分、計分、喻分、乃至毘波尼般曇分の亦た一にも及ばず。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩の智慧は能く一切の有情をして般涅槃に趣かしむればなり。一切の聲聞獨覺の智慧は是の如くならざるが故に。又舍利子、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧は一切の聲聞獨覺の智慧も及ぶ能はざるが故に。

爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、若しは聲聞乘・預流・一來・不還・阿羅漢果の智慧、若しは獨覺乘の智慧、若しは菩薩摩訶薩の智慧、若しは諸の如來應正等覺の智慧、是の諸の智慧は皆差別無く、相違背せず、生無く滅無く、自性皆空なり。若し法差別無く、相違せず、生滅無く自性空ならば是の法の差別既に不可得なり。云何が世尊、般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧は一切の聲聞獨覺の智慧の及ぶ能はざる所なりと説きたまふやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、意に於て云何、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧、成ずる所の勝事は一切の聲聞獨覺の智慧にも此の事有りや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝と。又た舍利子、意に於て云何、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧もて是の念言を作さく、我れ當に一切相微妙智・一切智・道相智・一切相智を修行して一切の有情を利益安樂すべしと。彼れ一切法に於て一切相を覺り已て、方便して一切の有情を無餘依涅槃界に安立す。一切の聲聞獨覺の智慧にも此の事有りや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝と。又た舍利子、意に於て云何、一切の聲聞獨覺の能く是の念を作す。我れ當に無上正等菩提を證得すべしと、方便して一切の有情を無餘依涅槃界に安立するや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝と。又た舍利子、意に於て云何、一切の聲聞獨覺の能く是の念を作す。我れ當に布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を修行すべし。我れ當に殊勝の四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を修行すべし。我れ當に殊勝の四念

是の菩薩摩訶薩の智慧は能く一切の有情をして般涅槃に趣かしむればなり。一切の聲聞獨覺の智慧は是の如くならざるが故に。又た舍利子、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧は、一切の聲聞獨覺の智慧も及ぶ能はざるが故に。舍利子、瞻部洲を置き假使ひ汝及び大目乾連四大洲に滿つること稻麻竹葦甘蔗林等の如くならんに、所有智慧を般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の智慧に比するに百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、百千分の一にも及ばず、俱眠分の一にも及ばず、百俱眠分の一にも及ばず、千俱眠分の一にも及ばず、何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩の智慧は能く一切の有情をして般涅槃に趣かしむればなり。一切の聲聞獨覺の智慧は是の如くならざるが故に。又た舍利子、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧は一切の聲聞獨覺の智慧も及ぶ能はざるが故に。舍利子、四大洲を置き假使ひ汝及び大目乾連一三千大千世界に滿つること稻麻竹葦甘蔗林等の如くならんに所有智慧を、般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の智慧に比するに百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、百千分の一にも及ばず、俱眠分の一にも及ばず、百俱眠分の一にも及ばず、千俱眠分の一にも及ばず、何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩の智慧は、能く一切の有情をして般涅槃に趣かしむればなり。一切の聲聞獨覺の智慧は是の如くならざるが故に。又た舍利子、般若波羅蜜多を修行する一菩薩摩訶薩の一日の中に於て修する所の智慧は一切の聲聞獨覺の智慧も及ぶ能はざるが故に。舍利子、一三千大千世界に假使汝及び大目乾連を置き、十方殫伽沙等の世界に充滿すること稻麻竹葦甘蔗林等の如くならんに所有智慧を、般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の智慧に比するに百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、百千分の一にも及ばず、俱眠分の一にも及ばず、百俱眠分の一にも及ばず、千俱眠分の一にも及ばず、

大捨・十八不共法は但だ名のみ有り、三十二大士相は但だ名のみ有り、八十隨好は但だ名のみ有り、無忘失法は但だ名のみ有り、恆住捨性は但だ名のみ有り、一切智は但だ名のみ有り、道相智、一切相智は但だ名のみ有り、一切智智は但だ名のみ有り、永く煩惱の習氣相續するを抜くは但だ名のみ有り、預流果は但だ名のみ有り、一來・不還・阿羅漢果は但だ名のみ有り、獨覺菩提は但だ名のみ有り、一切の菩薩摩訶薩行は但だ名のみ有り、諸佛の無上正等菩提は但だ名のみ有り、世間法は但だ名のみ有り、^三出世間法は但だ名のみ有り、有漏法は但だ名のみ有り、無漏法は但だ名のみ有り、^四有爲法は但だ名のみ有り、無爲法は但だ名のみ有り、舍利子、我の如きは但だ名のみ有り、謂ゆる之を我れ實に不可得なりと爲す。是の如く有情・命者・生者・養者・士夫・補特伽羅・意生・儒童・作者・使者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者も亦た名のみ有り、謂ゆる爲れ有情乃至見者は不可得空なるを以ての故に、但だ世俗に隨つて假りに客名を立つるのみ。諸法も亦た爾なり、執著すべからず。是の故に菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、我乃至見者有るを見ず、亦た一切の法性有るを見ず。

舍利子、諸の菩薩摩訶薩は是の如き甚深の般若波羅蜜多を修行す。諸佛の慧をば除き、一切の聲聞獨覺等の慧の及ぶ能はざる所なり。不可得空を以ての故に。所以は何ん、是の菩薩摩訶薩、名・所名に於て俱に所得無し、觀見せず執著無きを以ての故に。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、若し能く是の如く般若波羅蜜多を修行せば、善く甚深般若波羅蜜多を修行すと名づく。舍利子、假使汝及び大目乾連の瞻部洲に滿つること阿麻竹葦甘蔗林等の如くならんに所有智慧を、般若波羅蜜多を行する一菩薩摩訶薩の智慧に比するに百分の一にも及ばず、千分の一にも及ばず、百千分の一にも及ばず、俱毘分の一にも及ばず、百俱毘分の一にも及ばず、千俱毘分の一にも及ばず、百千俱毘分の一にも及ばず、數分・算分・計分・喻分・乃至 鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。何を以ての故に、舍利子、

【一】 世間法。三界所有の有情非情惡業の因縁より生ぜし有漏無常なるものをいひ、四聖諦中の苦集二諦を云ふ。
 【二】 出世間法。三乗の修する四諦、十二因縁、六度などの行法を云ふ。
 【三】 有漏法。漏は漏泄の義で煩惱の異名、煩惱を含有する事物を有漏と稱し、一切世間の事體は盡く有漏法となす。
 【四】 無漏法。煩惱を離れたる出世間の事體を盡く無漏法となす。
 【五】 補特伽羅 (Pudgala) 個性を云ふ。諸趣に往來する意にて數取趣と譯す。
 【六】 衆生空法空を雜説し、能觀者も空なるを示す。
 【七】 鄔波尼殺曇 (Upanishad) 近少、微細、因等と譯す數の極なり。

ぜす。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、應に是の如く觀すべし。菩薩は但だ名のみ有り、佛は但だ名のみ有り、般若波羅蜜多是但だ名のみ有り、色は但だ名のみ有り、受・想・行・識は但だ名のみ有り、眼處は但だ名のみ有り、耳・鼻・舌・身・意處は但だ名のみ有り、色處は但だ名のみ有り、聲・香・味・觸・法處は但だ名のみ有り、眼界は但だ名のみ有り、耳・鼻・舌・身・意界は但だ名のみ有り、眼識界は但だ名のみ有り、耳・鼻・舌・身・意識界は但だ名のみ有り、眼觸は但だ名のみ有り、耳・鼻・舌・身・意觸は但だ名のみ有り、因緣は但だ名のみ有り、等・無聞緣・所緣緣・増上緣は但だ名のみ有り、緣より生ずる所の諸法は但だ名のみ有り、無明は但だ名のみ有り、行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有生・老死愁歎苦憂惱は但だ名のみ有り、布施波羅蜜多是但だ名のみ有り、淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多是但だ名のみ有り、內空は但だ名のみ有り、外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自性空・無性自性空は但だ名のみ有り、四念住は但だ名のみ有り、四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支は但だ名のみ有り、空解脱門は但だ名のみ有り、無相無願解脱門は但だ名のみ有り、苦聖諦は但だ名のみ有り、集・滅・道聖諦は但だ名のみ有り、四靜慮は但だ名のみ有り、四無量、四無色定は但だ名のみ有り、八解脱は但だ名のみ有り、八勝處・九次第定・十遍處は但だ名のみ有り、陀羅尼門は但だ名のみ有り、三摩地門は但だ名のみ有り、極喜地は但だ名のみ有り、正觀地は但だ名のみ有り、種性・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地は但だ名のみ有り、發光地・焰慧地・地・第八地・見地・薄地・離欲地・已辦地・獨覺地・菩薩地・如來地は但だ名のみ有り、五眼は但だ名のみ有り、六神通は但だ名のみ有り、如來の十力は但だ名のみ有り、四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜

【二】無明乃至老死を十二因緣、十二支或は緣起觀と稱す。三世に亘つて生死の輪廻する因緣を十二分して觀察する法にて、惡業苦の轉展を明かにせしもの。

爲す、自他を染するが故に。欲を魁^{くわい}と爲す、去來^{こらい}に於て今常に害を爲すが故に。欲を怨敵と爲す、長夜に何求し衰損を作すが故に。欲は草炬の如く、欲は苦果の如く、欲は利劍の如く、欲は火聚の如く、欲は毒器の如く、欲は幻惑の如く、欲は闇井の如く、欲は詐親^ま、旃荼羅等の如し。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は是の如き等の無量の過門を以て諸欲を訶毀し、既に善く諸欲の過失を了知す。寧ろ眞實に諸の欲事を受くること有るも、但だ所化^{まじやう}の有情を饒益せんが爲に方便善巧して諸欲を受くるを示すのみと。爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜多を行すべきやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時應に是の如く觀すべし。實に菩薩有るも、菩薩有るを見ず、菩薩の名を見ず、般若波羅蜜多を見ず、般若波羅蜜多の名を見ず、行するを見ず、行ぜざるを見ず。何を以ての故に。舍利子、菩薩の自性は空なり、菩薩の名も空なり。所以は何ん、色の自性は空なり、空に由らざるが故に。色空なれば色に非らず。色は空を離れず、空は色を離れず、色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識の自性は空なり、空に由らざるが故に。受・想・行・識、空なれば受・想・行・識に非らず。受・想・行・識は空を離れず、空は受・想・行・識を離れず、受・想・行・識は即ち是れ空なり、空は即ち是れ受・想・行・識なり。何を以ての故に、舍利子、此の但だ名有るを謂つて菩提と爲し、此の但だ名有るを謂つて薩埵と爲し、此の但だ名あるを謂つて菩提薩埵と爲し、此の但だ名有るを謂つて之を色・受・想・行・識を爲すのみ。是の如く自性は生無く滅無く染無く淨無し。菩薩摩訶薩、是の如く般若波羅蜜多を行ぜば生を見ず滅を見ず染を見ず淨を見ず。何を以ての故に、但だ假りに客名を立て、法に於て別別に分別を起こすなり。假りに客名を立て言説を起こすに隨て、如如^{にょにょ}に言説し、是の如く是の如く執著を生起す。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行する時、是の如き等の一切に於て見ず、見ざるに由るが故に執著を生

【五】 旃荼羅 (Chandala)。首陀羅ともいひ、屠者、殺者、暴惡、下姓等と譯す。印度四姓の中、最下の奴隸賤民階級。詐親とは裏切るを云ふ。

【六】 所化。教化を施す者即ち能化に對して、教化さるるもの稱。

【七】 般若の行要を説く。

【八】 色、受、想、行、識を五蘊と稱す。蘊とは積集の義、以上の五要素が積集して一身萬有を形成すとす。

【九】 菩提薩埵 (Bodhisattva)。菩薩の具名。覺有情と譯す。

【一〇】 如如。楞伽經所說五法の一。法性の理體不平等なるを如といひ、彼此の法皆如なるが故に如如といふ、絕對の眞理の意。

光淨天・淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・無繁天・無熱天・善現天・普見天・色究竟天・歡喜欣悅して咸是の念を作さく、我れ等當に是の如き菩薩に請ひて、速かに無上正等菩提を證し、妙法輪を轉じて一切を饒益せんと。舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行して六種波羅蜜多を増益せん時、彼の世界の諸の善男子善女人等、若しは見若しは聞いて皆大いに歡喜し、咸是の念を作さく、我れ等願はくは是の如き菩薩の爲に當に父母兄弟姊妹・妻子眷屬・知識朋友と作るべし。此れに因りて方便して諸の善業を修し、亦た當に無上菩提を證得すべしと。時に彼の世界の四大王衆天、乃至色究竟天、若しは見、若しは聞き、皆大いに歡喜して咸是の念を作さく、我れ等當に種種に方便を作し是の菩薩をして非梵行を離れ、初發心より乃ち成佛に至るまで常に梵行を修せしむべし。所以は何ん。若し色欲に染せば梵天に生ずるさへ尙能く障と爲る、況んや無上正等菩提を得んをや。是の故に菩薩の欲を斷じ出家して梵行を修する者は能く無上正等菩提を得て斷ぜざる者非ざるなりと。時に舍利子、佛に白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は要らず當に父母妻子諸の親友有るべしと爲す耶と。佛、具壽舍利子に告げて言はく、或は菩薩の具さに父母妻子眷屬有りて而かも菩薩摩訶薩行を修する有り、或は菩薩摩訶薩の妻子有る無く初發心より乃至成佛まで常に梵行を修し童眞を壞せざる有り、或は菩薩摩訶薩の方便善巧して五欲を受くるを示し出家を厭捨して梵行を修行し方に無上正等菩提を得る有り。舍利子、譬へば幻師或は彼の弟子の善く幻法に於て種種五妙の欲具を幻作りし、中に於て自ら恣に共に相娛樂するが如し、意に於て云何、彼の幻の所作、實有りて爲すや不やと。舍利子言はく、不なり世尊、不なり善逝と。佛言はく、舍利子、菩薩摩訶薩も亦復た是の如し、諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故に方便善巧して五欲を化受するも、實には是の事無し、然かも此の菩薩摩訶薩、五欲の中に於て深く厭患を生じ、五欲の過失に染せられず、無量門を以て諸欲を訶毀す。欲を熾火と爲す、身心を燒くが故に。欲を穢惡と

【三】善逝。須伽陀(Sagata)、妙往又は好去とも譯す。佛十號の一。佛は如實に涅槃の彼岸に往き再び生死海に退没することなきが故にかく名づく。

【四】五欲。これに二あり、一は、財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲を云ひ、二には、色、聲、香、味、觸の五境をいふ。これ等の五は何れも能く諸欲を惹起するの故に五欲と名づく。

梵行を勤修し、諸の有情に於て慈悲喜捨し、相憐愍せざるに豈に善ならざらむ哉と。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上菩提を得、我が佛土の中の諸の有情類、種種の殊勝の功徳を成就して餘の佛土の中の諸佛菩薩威光に稱讃すべきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上正等菩提を得て化事既に般涅槃後に廻ねく、正法滅盡の期有る無く、常に有情の爲に饒益事を作すべきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上正等菩提を得、十方各死伽沙の如き界の諸の有情類我が名を聞く者必ず無上正等菩提を得べきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。舍利子、諸の菩薩摩訶薩、此れ等無量無數不可思議希有の功徳を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

卷の第四

初分學觀品第二之二

佛、舍利子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行して已に能く是の如き功徳を成就せば、爾の時三千大千世界の四大天王、皆大いに歡喜して成是の念を作す、我れ等今、應に四鉢を以て此の菩薩に奉ること、昔、天王の先佛に鉢を奉りしが如くすべしと。是の時三千大千世界の三十三天・夜摩天・覩史多天・變變化天、他化自在天皆大いに歡喜して成是の念を作さく、我れ等皆當に是の如き菩薩を供養恭敬尊重讚歎し、阿素洛の鬼黨をして損減せしめ、諸の天衆の眷屬をして増益せしむべしと。是の時三千大千世界の梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天・光天・少光天・無量光天・極

【一】 以下諸天の讚嘆加護並に般若空觀修行の要旨を述ぶ。

【二】 佛成道の際四天王來りて各一の鉢を獻ず、佛之を受けて四鉢を以て重疊し、按へて一鉢となして之を用ひたりとの故事。

何れの時に於てか當に國位を捨て、出家の日に即ち無上正等菩提を成じ、是の日に還へりて妙法輪を轉じ、即ち無量無數の有情をして遠摩離垢して淨法眼を生ぜしめ、復た無量無數の有情をして永く諸漏を盡くして心慧解脱せしめ、亦た無量無數の有情をして皆無上正等菩提に於て不退轉を得せしむべきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上正等菩提を得、無量無數の聲聞菩薩、弟子衆と爲り一たび説法する時に、無量無數の有情類、座より起たずして同時に阿羅漢果を證得し、無量無數の有情類、座より起たずして同じく無上正等菩提に於て不退轉を得べきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか壽量盡くる無く、身に無量無邊の光明有り、相好莊嚴し觀る者厭ふ無く、行く時千葉の蓮花有りて自然に涌現し、毎に其の足を承け、地上に千輻輪を現ぜしめ、擧步經行するに大地震動すと雖も然かも地居の有情を擾惱せず、廻顧せんと欲する時舉身皆轉じ、足の履む所盡く金剛際にして車輪の量の如く地も亦た隨つて轉ぜんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか舉身の支節皆無量無數の光明を放ちて遍ねく十方無邊の世界を照らし、所照の處に隨つて諸の有情の爲に大饒益を作さんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上正等菩提を得、我が佛土の中に一切の貪欲、瞋恚、愚癡等の名有る無く、亦た地獄、傍生、鬼界の惡趣有るを聞かざるべきと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無上正等菩提を得、我が佛土の中の諸の有情類妙慧を成就すると餘の佛土の如くにして、毎に念言を作す、布施調伏し安忍勇進し寂靜諦觀して諸の放逸を離れ、

【妄】貪欲、瞋恚、愚癡を三毒と稱す。此の三に三界に於ける煩惱の根本にて、あらゆる善根を毒害するの故にかく名づく。

の爲に法を説くに容止^{しんじ}肅然^{しんぜん}ならんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん。我れ何れの時に於てか身・語・意の業皆悉く清淨にして智慧に隨つて行ぜんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん。我れ何れの時に於てか足、地を履まざることを四指量の如くにして自在に面かも行かんと、是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無量百千俱胝那由他の四大王衆天・三十三天・夜摩天・觀自在天・樂變化天・他化自在天・梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天・光天・少光天・無量光天・極光淨天・淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・無熱天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天、及諸の龍神の供養恭敬尊重讚歎し、導き從ひ圍繞して菩薩樹に詣ることを得べきこと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか當に無量百千俱胝那由他の四大王衆天、乃至色究竟天及び諸の龍神の菩提樹下に於て寶衣を以て座と爲すことを得べきこと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか菩提樹下に結跏趺坐し、衆の妙相を以て莊嚴せられ、手にて大地を撫で、彼の地神並びに諸の眷屬をして俱時に踊現し爲に證明を作さしめんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか菩提樹に坐して衆魔を降伏し無上正等菩提を證得せんと。是の菩薩摩訶薩、斯の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか無上正等覺を證得し已つて地方に隨つて行住坐臥する所悉く金剛たらんと。是の菩薩摩訶薩、是の事を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ

【五〇】 身業、語業、意業を三業と稱す。人間の身心に於ける一切の作爲行動及びその勢力の發源なり。

【五一】 菩提樹(Bodhi-tree or Bodhi-vr̥kṣa)。道樹或は覺樹と譯す。釋尊は佛陀伽耶の卑波羅(Bihar)樹下に於て大菩提に到り給ひし故に此樹を釋尊の菩提樹と呼ぶ。過去の諸佛各各異なる菩提樹をもつ。

諸の悪行を捨て、諸の善行を修せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして、己が威力を以て盲者能く觀、聾者能く聽き、癡者能く言ひ、狂者念するを得、亂者定まるを得、貧者富を得、露者衣を得、飢者食を得、渴者飲を得、病者除こり愈ゆるを得、醜者端嚴なるを得、形殘者具足するを得、根缺者圓滿するを得、迷悶者醒悟するを得、疲頓者安泰なるを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして、己が威力を以て、慈心相向ふこと父の如く母の如く兄の如く弟の如く姉の如く妹の如く友の如く親の如く相逢害せず展轉して爲に利益安樂を作さしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして己が威力を以て、惡趣に在る者は皆惡趣より脱し、來りて善趣に生じ、善趣に在る者は常に善趣に居して惡趣に墮せざらしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして己が威力を以て、惡業を習ふ者は皆善業を修して常に厭倦無からしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして己が威力を以て、諸の犯戒者は皆戒蘊に住し、諸の散亂者は皆定蘊に住し、諸の愚癡者は皆慧蘊に住し、未だ解脫を得ざる者は皆解脫蘊に住し、未だ解脫知見を得ざる者は皆解脫知見蘊に住せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殞伽沙等の世界の有情をして己が威力を以て、未だ見諦せざる者には見諦することを得せしめ、預流果に住し、或は一來果、或は不還果、或は阿羅漢果を證得せしめ、或は獨覺菩提を證得せしめ、或は乃至無上正等菩提を證得せしめんと欲せば懈に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、諸佛殊勝の威儀を學し、諸の有情をして之を觀て厭ふ無く、一切の惡を息め、一切の善を生ぜしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、是の思惟を作さん、我れ何れの時に於てか象王の如く視衆

【五】善趣。衆生が善業の因により善き果報を受けて趣き生ずべき所をいふ。六道の中、天上、人間の二趣、又は修羅を加へた三趣を云ふ。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、天眼を以て普ねく十方殑伽沙等の諸佛世界の一切の如來應正等覺を見たてまつらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、天耳を以て普ねく十方殑伽沙等の諸佛世界の一切の如來應正等覺所説の正法を聞きたてまつらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、實の如く十方各殑伽沙の如き界の一切の如來應正等覺の心所法を知らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殑伽沙等の諸佛世界の一切の轉所に於て正法を聽聞し、常に懈廢無く所聞の法に隨つて乃ち無上正等菩提に至るまで終に忘失せざらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在の十方世界の種種の佛土を見たてまつらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在・十方諸佛の所説の一切の契經・經・論・記別・習錄・白話・因緣・本事・本生・方廣・希法・譬喻・論議に於て、諸の聲聞等の若しは聞けると聞かざると皆能く甚深の義趣に通達せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在・十方諸佛の所説の法門に於て、自ら能く受持し、讀誦通利し、善く義趣を解し、他の爲に廣説せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在・十方の諸佛の所説の法門に於て、自ら能く如實に説の如く修行し、亦た能く方便して他を勧めて如實に説の如く修行せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殑伽沙等の幽冥世界に於て、及び一一の世界の中間の日月等の光の照らさざる所の處に於て爲に光明と作らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方殑伽沙等の熾闇世界に於て其の中の有情邪見熾盛にして惡行を信ぜず妙行を信ぜず、惡行妙行の異熟するを信ぜず、前世を信ぜず、後世を信ぜず、善諦を信ぜず、集諦を信ぜず、滅諦を信ぜず、道諦を信ぜず。布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若等の行、能く世間・出世間の果を獲るを信ぜず、佛名・法名・僧名を聞かざるに、方便して開化し、正見を起こし、三寶の名を聞き、歡喜して信受し、

【五】契經(Sūtra)修多羅重説と譯す、應頌(Gāthā)祇夜重頌とも譯す、記別(Yākyaru)和伽羅那、授記とも譯す、諷頌(Gāthā)伽陀自説(Udāna)優陀那、讚歎とも譯す、因緣(Nīti)尼陀那、本事(Hyātaka)伊帝目多、本生(Jātaka)閻多希法(Cāhāntu-dharma)阿浮達摩又は阿毘達摩、未曾有とも譯す、譬喻(Avāṇā)阿波陀那、論議(Upaniśad)【五】苦集滅道の四法を四聖諦、四眞、四諦(Chārīyānubāthyān)などと稱し、釋尊成道後最初の説法にて聲聞(羅漢)の道云なり。諸は不變如實の眞相の意。(1)苦諦(Dukkha-sacca)とは現在の事實を示して人世はすべて苦なりと觀せしめること。(2)集諦(Samudaya-sacca)とは現在之苦の原因を觀察してそれが煩惱による業なること散見すること。(3)滅諦(Nirodha-sacca)とは業の因を滅すれば果之苦は自ら除かれるその結果が滅諦即ち涅槃寂靜の證果であること示す。(4)道諦(Mārga-sacca)とは滅諦を得る爲の實修の方法を説けるもので苦本を滅せんが爲に、慳業を斷つ所の諸種の道品即ち佛道修行の實踐法を示せるもの。

多を滿す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して般若波羅蜜多を修行し、諸法の若しは性、若しは相皆不可得なりと了達せば是の如き般若は方便善巧して能く般若・布施・淨戒・安忍・精進・靜慮波羅蜜多を滿す。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在、一切の如來應正等覺の所有功德を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、能く遍ねく有爲、無爲の諸法の彼岸に到らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、過去・未來・現在の諸法の眞如・法界・法性、^{四九}無生・實際を窮めんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切の聲聞獨覺の與に而かも導首爲らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、諸佛の與に親侍者爲らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、諸佛の與に內眷屬爲らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に大眷屬を具するを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、身器を淨くし世間の供養恭敬を受くるに堪へんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、永く諸の犯戒の心を起さざらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、永く諸の懈怠心を棄捨せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、永く諸の散亂心を靜息せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、永く諸の惡慧心を遠離せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、普ねく一切有情の施性禪業事・戒性福業事・修性福業事・供侍福業事・有依福業事に安んじせんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、五眼の所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

【四九】有爲 (Samskṛta)。爲とは造作の義にて造作を有するを有爲といふ。すべて因縁所生の事物の稱。
【五〇】無爲 (Asamskṛta)。因縁の造作なきを無爲といふ。即ち眞如の稱にて、法性、法界、實相、涅槃などいづれもこれが異名。
【五一】無生。一切法(或有)の性は眞實空で他によりて生ぜるものにもあらず又已の力によりてのみ生ずるものにも非ざること。
【五二】內眷屬は釋尊に於ける阿難密跡力士等、大眷屬は舍利弗目連須菩提彌勒文殊等の如し。

靜慮は方便善巧して能く般若波羅蜜多を滿す。是の如き靜慮は方便善巧して能く布施波羅蜜多を滿す。是の如き靜慮は方便善巧して能く淨戒波羅蜜多を滿す。是の如き靜慮は方便善巧して能く安忍波羅蜜多を滿す。是の如き靜慮は方便善巧して能く精進波羅蜜多を滿すと知り、能く實の如く是の如き般若は方便善巧して能く般若波羅蜜多を滿す。是の如き般若は方便善巧して能く布施波羅蜜多を滿す。是の如き般若は方便善巧して能く淨戒波羅蜜多を滿す。是の如き般若は方便善巧して能く安忍波羅蜜多を滿す。是の如き般若は方便善巧して能く精進波羅蜜多を滿す。是の如き般若は方便善巧して能く靜慮波羅蜜多を滿すと知るなり。

時に舍利子、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行するに能く實の如く知るや。是の如き布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若は方便善巧に由るが故に能く布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若を滿するやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して能く實の如く知る、若し菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して布施波羅蜜多を修行し、一切の施者受者及び施さるる物皆不可得なりと了達せば是の如き布施は方便善巧して能く布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多を滿す。若し菩薩摩訶薩無所得を以て方便と爲して、淨戒波羅蜜多を修行し、一切の犯、無犯の相皆不可得なりと了達せば是の如き淨戒は方便善巧して能く淨戒・安忍・精進・靜慮・般若・布施波羅蜜多を滿す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して安忍波羅蜜多を修行し、一切の動、不動の相皆不可得なりと了達せば是の如き安忍は方便善巧して能く安忍・精進・靜慮・般若・布施・淨戒・波羅蜜多を滿す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して精進波羅蜜多を修行し、一切の身心の勤怠皆不可得なりと了達せば、是の如き精進・靜慮・般若・布施・淨戒・安忍波羅蜜多を滿す。若し菩薩摩訶薩、無所得を以て方便と爲して靜慮波羅蜜多を修行し、一切の有味無味皆不可得なりと了達せば是の如き靜慮は方便善巧して能く靜慮・般若・布施・淨戒・安忍・精進波羅蜜

三千大千世界の蘇迷盧山・大蘇迷盧山・輪圍山・大輪圍山、及び餘の小山・大地等の物を竊取して、他方無量無數無邊の世界に擲過せんに而かも諸の有情類を惱觸せざらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩・一食一花・一香一幢・一蓋一幡・一帳一燈・一衣一伎樂等を以て、十方各の琉璃沙の如き界の一切の如來應正等覺及び弟子衆を供養恭敬尊重讚歎して充足せざる無からんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、等しく十方各の琉璃沙界の如き諸の有情類に安立して戒蘊に住せしめ、或は定蘊に住し、或は慧蘊に住し、或は解脫蘊に住し、或は解脫知見蘊に住し、或は預流果に住し、或は一來果に住し、或は不還果に住し、或は阿羅漢果に住し、或は獨覺菩提に住し、乃至或は無餘依涅槃界に入らしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修行し能く實の如く知らば、是の如き布施は大果報を得。謂ゆる實の如く、是の如き布施は刹帝利大族に生ずるを得、是の如き布施は婆羅門大族に生ずるを得、是の如き布施は長者大族に生ずるを得、是の如き布施は居士大族に生ずるを得と知るなり是の如き布施は四大王衆天に生ずるを得、或は三十三天に生じ、或は夜摩天に生じ、或は靚史多天に生じ、或は樂變化天に生じ、或は他化自在天に生じ、是の布施に因りて初靜慮、或は第二靜慮、或は第三靜慮、或は第四靜慮を得、是の布施に因りて空無邊處定、或は識無邊處定、或は無所有處定、或は非想非非想處定を得、是の布施に因りて三十七菩提分の法を得、是の布施に因りて三解脫門を得、是の布施に因りて八解脫、或は八勝處、或は九次第定、或は十遍處を得、是の布施に因りて陀羅尼門、或は三摩地門を得、是の布施に因りて菩薩の正性離生に入ることを得、是の布施に因りて極喜地、或は離垢地、或は發光地、或は焰慧地、或は極難勝地、或は現前地、或は遠行地、或は不動地、或は善慧地、或は法雲地を得、是の布施に因り一佛の五眼、或は六神通を得、是の布施に因りて佛の十力、或は四無所畏、或は四無礙解、或は十八不共法、或は大慈大悲

との二あり。

【一】 善法の果報を求るもの爲に大神力を讚歎す。

【二】 劫火。婆劫の火災。劫盡(世界終末期)の時に起る三種の大災の一。

【三】 無餘依涅槃界。煩惱障を斷じ、灰身滅智して寂滅せし境界。有漏の依身なきが故に無餘依といひ、圓寂なれば涅槃と云ふ。

【四】 刹帝利(Kshatriya)。古代印度民族四姓の一。婆羅門に次ぐ貴族にて、軍事、政治も司り又は王者たるものにて王士族或は王族と稱せらるる階級。

【五】 婆羅門(Brahmana)。古代印度民族四姓の一。僧族の稱にて専ら宗教學問を司る最上位の階級。

【六】 居士(Kulapati)。古代印度四姓の一にて、商工業とする毘舍族の富豪の稱。

【七】 家主とも譯し、在家にて佛道に志すもの稱。

【八】 三十七菩提分法。三十七道品の異名。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七法は生死の迷界より證りて菩提涅槃の境に到るべき行法の支分品類なれば菩提分法と名づく。

【九】 五眼。肉眼(佛眼)に對して人間肉身の眼の稱、天眼

蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、佛種を紹ついでぎて斷絶せざらしめ菩薩の家を護りて、退轉せざらしめ、佛土を嚴淨して、速かに成辦せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、內空・外空・内外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・無變異空・本性空・自相空・共相空・一切法空・不可得空・無性空・自性空・無性自性空に通達せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切法の眞如・法界・法性・不虛妄性・不變異性・平等性・離生性・法定法住・實際・虛空界・不思議界に通達せんと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切法の盡所有性、如所有性に通達せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

若し菩薩摩訶薩、一切法の因緣・等無間緣、所緣緣・増上緣性に通達せんと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切法は幻の如く夢の如く響の如く像の如く光影の如く陽陷の如く空色の如く尋香城の如く變化事の如く唯心所現の性相俱に空なりと通達せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、三千大千世界の虛空大地・諸山大海・江河池沼・澗谷・陂湖・地水火風・諸の極微量を知らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一毛を拈ひちて以て百分と爲し一分毛を取つて盡く三千大千世界の大海江河・池沼澗谷・陂湖中の水を擧げ、他方無邊世界に棄て置かんに而かも水族の生類を憫あはれ隔へせざらんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、劫火有りて遍ねく三千大千世界の天地を燒きて洞然たるを見、一氣を以て吹いて傾みに滅せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、三千大千世界所依の風輪、飄擊ひた上涌ありし、將に三千大千世界の蕪迷あら山・大蘇迷あら山・輪圍山・大輪圍山、及び餘の小

山・大地等の物を吹いて碎くだくこと糠粃この如くならんとするに、一指を以て彼の風力を障さへ息めて起こらざらしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、三千大千世界に於て一たび結跏くわして坐し虛空に充滿せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一毛を以て

【三】三歸依。三歸戒又は三歸とも稱す。至心に佛法僧の三寶に歸依すること、即ち、(1)歸依佛(佛寶に歸依して大師となす)、(2)歸依法(法寶に歸依して良藥となす)、(3)歸依僧(僧寶に歸依して勝友となす)の稱。

【三】因緣、等無間緣、所緣緣、増上緣を四緣と稱す。(1)因緣とは因即緣の義。因とは自體を辨じ自果を生ずる性能第八阿賴耶識に於て本有の種子と新薰の種子とが相關相續無始無終に萬有を生起する如きを云ふ。(2)等無間緣(或は次第緣)は心所の上に立てる緣にて前念の滅するのが同時に後念を惹起する緣となり、前滅後生の關係を繼續するもの、(3)所緣緣(或は緣緣)とは緣せられるもの、即ち客觀の對象である。對象は心識に對して緣となり、活動を起さしめるから所緣緣といふ。何となれば主觀の心識は對象なくしては單獨偶然に生起するものに非ざればなり。(4)増上緣とは一切法の生起を助くるものを總括して云ふ。これに、與力(或は有力)増上緣、即ち他の現象の生起に或力を與へて助けるもの、及び、不障(或は無力)増上緣、即ち他の法が生ずるを障へ妨げないもの、

ば嘆に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に諸の相好を具し、端嚴なること佛の如く、一切有情見る者歡喜し、無上正等覺の心を發起し、速かに能く諸佛の功德を成辦することを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、種種の勝れたる善根力を以て意に隨ひ能く引いて妙供具を上り、一切の如來應正等覺を供養恭敬尊重讚歎し、諸の善根をして速かに圓滿なることを得せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切有情の求むる所の飲食・衣服・床榻・臥具・病に終る醫藥、種種の花香・燈明・車乘・園林・舍宅・財穀・珍奇なる寶飾・伎樂、及び餘の種種の上妙の樂具を滿ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、善く、盡虛空界・法界・世界、一切有情に安立し、皆布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多に安住せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念善心を發起して獲たる所の功德、乃至妙善提の座に安坐し、無上正等菩提を證得し亦た窮盡せざるを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、十方諸佛世界の一切の如來應正等覺及び諸の菩薩摩訶薩衆に共に稱讚せらるるを得んと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一たび發心し即ち能く十方に遍至し、各死伽沙の如き界の諸佛を供養し有情を利樂せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一たび聲を發して即ち能く十方に遍滿し各死伽沙の如き界の諸佛を讚歎し有情を教誨せんと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念の頃に十方死伽沙等の諸佛世界の一切の有情を安立して皆十善業道を習學し、三歸依を受け、禁戒を護持せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念の頃に十方死伽沙等の諸佛世界の一切の有情を安立して皆四靜慮・四無量・四無色定を習學して五神通を獲せしめんと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念の頃に十方死伽沙等の諸佛世界の一切の有情を安立して大乘に住し善薩行を修して餘乘を毀らざらしめんと欲せば應に般若波羅

種あり。
 【三二】 習氣。煩惱の體を指して正使といふに對し煩惱が慣習的氣分として殘るのを習氣と稱す。
 【三三】 正性護生。無漏智を生じて煩惱を斷じて永く異生(凡夫)の生を離るるを云ふ。
 【三四】 等持。三摩地(Samādhi)の譯。定の別名。心を一塊に住して平等に維持するを云ふ。
 【三五】 等至。三摩鉢底(Samāpatti)の譯。定の別名。定中に在て身心の平等安樂なるを等といひ、定能くこの平等の位に至らしむれば等至と名づく。
 【三六】 異生。凡夫の異名。凡夫は六道に輪廻して種種の異類に生を受けるの意。
 【三七】 宿住。過去の生涯のこと。
 【三八】 童真。沙彌の異名。
 【三九】 盡虛空界。堅に約して盡未來際と云ふ、横に就いて盡虛空界と云ふ。物の際限なきを顯はす佛門の套語なり。
 【四〇】 法界。達磨(Deharma)の譯。法性或は實相とも稱す。多義あるも今事理の二義に就いて云へば、事とは諸法各自界をもつて境界不同なるをいひ、理とは眞如の理性を云ひ諸の聖道を生ずるの故に法界と名づく。

ば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念隨喜俱ふ心を以て、一切の聲聞獨覺の所有布施に超過せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念隨喜俱ふ心を以て、一切の聲聞獨覺の所有淨戒に超過せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念隨喜俱ふ心を以て、一切の聲聞獨覺の定慧解脫・解脫智見に超過せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念隨喜俱ふ心を以て一切の聲聞獨覺の淨慮・解脫・等持・等至及び餘の善法に超過せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一念修する所の善法を以て一切の異生聲聞獨覺の善法に超過せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、少分の布施・淨戒・安忍・精進・靜慮、般若を行じ、諸の有情の爲に方便善巧して、無上正等菩提に廻向し便ち無量無邊の功德を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、行する所の布施・淨戒・安忍・精進・靜慮・般若波羅蜜多をして、諸の障礙を離れて速かに圓滿することを得せしめんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に常に佛を見たてまつることを得、恒に正法を聞きて佛の覺悟を得、佛の憶念教誡教授を蒙らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、佛身を得、三十二大丈夫相、八十隨好を具し圓滿莊嚴せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に常に宿住を憶ひ、終ひに大菩提心を忘失せず、惡友を遠離し、善友に親近し、恒に菩薩摩訶薩の行を修するを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に大威徳を具し、衆の魔怨を摧き、諸の外道を伏するを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に一切の煩惱業障を遠離し、諸法に通達し心聖礙無きを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、世世に善心・善願・善行相續し常に懈廢無きを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、佛の家に生じ、童真地に入り、常に諸佛菩薩を遠離せざらんと欲せ

【一】 漏盡明（現在の苦相を知り一切の煩惱を斷盡する智）の稱。

【二】 七聖財、七財ともいひ、進、戒、慚、愧、聞、捨、慧の稱。法財なるが故にかく名づく。

【三】 九有情居。三界五趣の中に有情の樂で住する處に就いて立てし九處、即ち七識住と有頂天、及び無想天の稱。

【四】 十地。修證の階位の名にて種々あるも、普通には、歡喜地、離垢地、發光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地の稱。

【五】 十行。菩薩修行に於ける十種の利他行なり。即ち歡喜行、饑益行、無瞋恨行、無盡行、離癡亂行、善現行、無著行、離重行、善法行、眞實行を云ふ。

【六】 十忍。忍とは安忍忍可の義にて、菩薩が證悟を得て安住する心的状態を云ひ、これに十種をあげて十忍となす。即ち音聲忍、順忍、無生忍、如幻忍、如焰忍、如夢忍、如毒忍、如影忍、如化忍、如空忍の稱。

【七】 四無所畏。佛、菩薩が説法に際して何ら畏れを感じざる四種の智徳にて、之に佛の四無畏と菩薩の四無畏の二

して、應に 四攝事・四勝住・三明・五眼・六神通・六波羅蜜多を圓滿すべし。是の如き六種不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し無所得を以て方便と爲して、應に 七聖財・八大士覺・九有情居智・陀羅尼門・三摩地門を圓滿すべし。是の如き五種不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し無所得を以て方便と爲して、應に 十地・十行・十忍・二十增上意樂を圓滿すべし。是の如き四種不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し無所得を以て方便と爲して、應に如來の十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法・三十二大士相・八十隨好を圓滿すべし。是の如き六種不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し無所得を以て方便と爲して、應に無忘失法・恒住捨性・一切智・道相智・一切相智・一切相微妙智を圓滿すべし。是の如き六法不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し無所得を以て方便と爲して、應に大慈・大悲・大喜・大捨、及び餘の無量無邊の佛法を圓滿すべし。是の如き諸法不可得の故に。

復た次に舍利子、若し菩薩摩訶薩、疾く一切智を證得せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、疾く一切智・道相智・一切相智を圓滿せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、疾く一切有情の心行相智・一切相微妙智を圓滿せんと欲せば、應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切の煩惱の習氣を抜かんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、菩薩の正性離生に入らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、聲聞及び獨覺地を超えんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、六種の捷速神通を得ん不退轉地に住せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切有情の心行の趣く所の差別を知らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切の聲聞、獨覺の智慧の作用に勝らんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切の陀羅尼門、三摩地門を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し菩薩摩訶薩、一切の陀羅尼門、三摩地門を得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。

すること。

【七】有尋有何三摩地、無尋有何三摩地、無尋無何三摩地を三摩地と稱す。所對の境を觀察する宛想を尋(舊に覺)といひ、其の細想を伺(舊に覺)と云ひ、色界、無色界に屬する諸定を此の尋伺の有無に依つて以上の三種に分ちしもの。

【八】未知當知根、已知根及び具知根は二十二根中の最後の三根にて、此の三は無漏清淨の法を増勝せしむるが故に三無漏根と稱す。

【九】奢摩他(Samatha)。禪定七名の一にて、止息、寂靜、能滅等と譯す。

【一〇】毘鉢舍那(Vipassana)。毘婆舍那ともいひ、觀、見などと譯し、事理を觀見するの謂。

【一一】四攝事。或は四攝法と云ふ。菩薩が衆生救済に際して衆生を攝招する四種の行法、即ち、布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝を云ふ。

【一二】三明。明とは智の法を知ることを顯したる義にて、三明又は智證明とも云ふ。三明とは、即ち、(1)宿命明(過去世のすべてに通達し、能く自身、他身の宿世の生死の相を知る)、(2)天眼明(自身他身の未來世の生死の相を知る)、(3)

の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に空解脱門、無相解脱門、無願解脱門を圓滿すべし。三解脱門不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に四靜慮、四無量、四無色定を圓滿すべし。靜慮、無量及び無色定不可得の故に、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に八解脱、八勝處、九次第定、十遍處を圓滿すべし。解脱、勝處、等至、遍處不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に九想を圓滿すべし。謂ゆる臆脹、想、膿爛想、異赤想、青瘀想、啄噉想、離散想、骸骨想、校燒想、一切世間不可得想なり。是の如き諸の想不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に十隨念を圓滿すべし。謂ゆる佛隨念、法隨念、僧隨念、戒隨念、捨隨念、天隨念、入出息隨念、厭隨念、死隨念、身隨念なり。是の諸の隨念不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に十想を圓滿すべし。謂ゆる無常想、苦想、無我想、不淨想、死想、一切世間不可樂想、厭食想、斷想、離想、滅想なり。是の如き諸想不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に十一智を圓滿すべし。謂ゆる苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、法智、類智、世俗智、他心智、如說智なり。是の如き諸智不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に有尋有伺三摩地、無尋有伺三摩地、無尋無伺三摩地を圓滿すべし。是の三等持不可得の故に。

諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に未知當知根、已知根、具知根を圓滿すべし。是の如き諸根不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に不淨處觀、遍滿處觀、一切智智、及び奢摩他、毘鉢舍那を圓滿すべし。是の如き五種不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲

進、正念、正定、の稱。邪非を離るるの故に正といひ、能く通じて涅槃に至る故に道と云ふ。

【九】 四靜慮。色界の四禪定、即ち、有尋有伺定、無尋唯伺定、無尋無伺定、捨念法事定の稱。

【一〇】 四無量。菩薩の廣大無量なる利他の心を、慈、悲、喜、捨の四無量心に別して云ふ。

【一一】 四無色定。四空定ともいひ、十二門禪中の四禪、即ち、空無邊處定、識無邊處、無所有處定、非相非非想處定の稱。

【一二】 八解脱。無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じて羅漢果を悟る八種の禪定。

【一三】 八勝處。勝智勝見を發して三界の貪愛を遠離する八種の禪定。

【一四】 九次第定。四禪、四無色、滅受想定、の九種の禪定を他心の間雜なく次第を追ひて修する禪定。

【一五】 十遍處。或は十一切處とも稱し、青黃赤白地水火風空識の十法を觀じ、其一一に於て一切處に周遍せしむるもの。

【一六】 九想。食着心を止息せんが爲の九種の觀法にて、死人の九相(脹脹想など)を觀想

卷の第三

初分學觀品第二之一

爾の時世尊、諸の世界の若しは天・魔・梵若しは諸の沙門、若しは婆羅門、若しは健達縛、若しは阿素洛、若しは諸の龍神、若しは諸の菩薩摩訶薩家の最後身に住し尊位に紹げる者、若しは餘の一切の法に於て縁有る人、非人等の皆會に來集せるを見、便ち具壽舍利子に告げて言はく、若し菩薩摩訶薩、一切法に於て一切相を等覺せんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべしと。時に舍利子、佛の所説を聞きて歡喜踴躍し即ち座より起ちて前んで佛所に詣り、雙足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ、右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は一切法に於て一切相を等覺せんと欲せば、當に般若波羅蜜多を學すべきやと。佛、具壽舍利子に告げて言はく、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は應に無住を以て方便と爲して般若波羅蜜多に安住すべし。所住・能住・不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無捨を以て方便と爲して布施波羅蜜多を圓滿すべし。施者、受者及び施さるゝ物、不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無護を以て方便と爲して淨戒波羅蜜多を圓滿すべし。犯、無犯の相不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無取を以て方便と爲して安忍波羅蜜多を圓滿すべし。動、不動の相不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無勤を以て方便と爲して精進波羅蜜多を圓滿すべし。身心の動怠不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無思を以て方便と爲して靜慮波羅蜜多を圓滿すべし。有味・無味・不可得の故に。諸の菩薩摩訶薩は應に無著を以て方便と爲して般若波羅蜜多を圓滿すべし。諸の法性の相不可得の故に。

復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多に安住し、無所得を以て方便と爲して、應に四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支を圓滿すべし。是の三十七菩提分の法不可得

佛力に依て大衆會し佛説般若を聽く。

- 【一】 健達縛 (Gandharva)。香神、臭香、香陰、尋香などと譯す。帝釋に奉侍して伎樂を奏する樂神の名。酒肉を食はず、唯香を求めて陰身を責け、又其陰身より香を出たせば、香神乃至尋香行と名づく。
- 【二】 具壽 (Arhanta)。法壽を具有する者の意にて受戒得度を経たる比丘の通稱。通例師長より後進子弟を呼ぶの稱。
- 【三】 無住。法に自性なく、自性なきが故に住着する所無く、緣に隨つて起るを無住と稱し、萬有の根本を云ふ。
- 【四】 無著。無礙の義、自在に圓融して障礙なきを云ふ。
- 【五】 四念住。四念處とも稱し、小乘の行人が五停心觀の後に移す、身念處、受念處、心念處、法念處の四種の觀法。
- 【六】 四正斷。四意斷或は四正勝ともいふ。煩惱を斷ずる四法、即ち斷斷、律儀斷、隨護斷、修斷の稱。
- 【七】 七等覺支。七菩提分或は七覺分ともいふ。涅槃に至る行道三十七種の中の第六の道法、即ち掃法覺支、精進覺支、喜覺支、輕安覺支、念覺支、定覺支、及び行捨覺支の稱。
- 【八】 八聖道支。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精

爾の時北方旃伽沙等……最後世界を名づけて最勝と曰ふ。佛を勝帝如來……佛薄伽梵と號づく。

……彼れに菩薩有り名を勝授と曰ふ……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時東北方旃伽沙等……最後世界を定莊嚴と名づけ、佛を定象勝德如來……佛薄伽梵と號

づく。……彼れに菩薩有り離塵勇猛と名づく……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時東南方旃伽沙等……最後世界を妙覺莊嚴甚可愛樂と名づけ、佛を蓮花勝德如來……佛薄伽

梵と號づく。……彼れに菩薩有り蓮花手と名づく……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時西南方旃伽沙等……最後世界を離塵聚と名づけ、佛を日輪遍照勝德如來……佛薄伽梵と號

づく。……彼れに菩薩有り日光明と名づく……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時西北方旃伽沙等……最後世界を眞自在と名づけ、佛を一寶蓋勝如來……佛薄伽梵と號づ

く。……彼れに菩薩有り名づけて寶勝と曰ふ。……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時下方旃伽沙等……最後世界を名づけて蓮花と曰ひ、佛を蓮花德如來……佛薄伽梵と號づく。

……彼れに菩薩有り蓮花勝と名づく……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時上方旃伽沙等……最後世界を名づけて歡喜と曰ひ、佛を喜德如來……佛薄伽梵と號づく。

……彼れに菩薩有り名づけて喜授と曰ふ……(以下(甲)ニ同ジ)

爾の時此の三千大千佛の世界に於て、衆寶充滿し、種種の妙花遍ねく其の地に布き、寶幢・幡蓋・
處處に行列し、花樹・果樹・香樹・鬘樹・寶樹・衣樹、諸の雜飾樹、周遍して莊嚴し、甚だ愛樂す可し。
衆蓮花世界の普花如來の淨土の如し。妙吉祥菩薩、善住慧菩薩及び餘の無量大威神力の菩薩摩訶薩、
本其の中に住せり。

と。上首の菩薩聞き已つて歡喜し各各に堪忍世界に往き、佛及び菩薩を觀禮し供養せんことを請ふ。彼の諸の如來、善しと讚め往くことを聽し、各金色千寶の蓮花を以て而かも之に告げて言はく、汝此れを持ちて彼の佛所に至り、具さに我が詞を陳ぶ可し。問を致すこと無量なり。少病少惱・起居輕利・氣力調和にして安樂に住したまふや不や。世事忍ぶ可しや不や。衆生度し易しや不やと。此の蓮花を持つて以つて世尊に寄せ、而かも佛事を爲せ。汝彼の界に至らば應に正知に住すべし。彼の佛土及び諸の菩薩を觀て輕慢を懷きて而かも自ら毀傷すること勿れ。所以は何ん。彼の諸の菩薩は威徳及び難く、悲願心に熏ず、大因縁を以て彼の土に生ずるなりと。一一の上首花を受け勅を奉け、各無量無數の菩薩童男童女と佛を辭し供を持ち發引して來る。經たる所の佛土の一一にて佛及び菩薩に供養し、空しく過ぎし者無し。此の佛所に到り變足を頂禮し、繞ぐるること百千匝して花を奉り事を陳ぶ。佛、花を受け已つて還つて東方に散す。佛の神力の故に、諸の佛土、諸の花臺に漏す。中に各化佛有り。諸の菩薩の爲に大般若波羅蜜多を説き、諸の聞く者をして必ず無上正等菩提を獲せしむ。上首の菩薩及び諸の眷屬、見已つて歡喜し未會有なりと歎じ、各善根に隨ひて多少を供具し、佛菩薩を供養。恭敬・尊重・讚歎し已つて退きて一面に坐しぬ。

爾の時南方兜伽沙等……最後世界を離一切憂と名づけ、佛を無憂徳如來……佛薄伽梵と號づく。

……彼れに菩薩有り名を離憂と曰ふ……(以下(甲)ニ同シ)

爾の時西方兜伽沙等……最後世界を近寂靜と名づけ、佛を寶焰如來……佛薄伽梵と號づく。……彼れに菩薩有り名を行慧と曰ふ……(以下(甲)ニ同シ)

卷の第二

初分緣起品第一之一

【善】 堪忍世界。勸忍土又は忍土とも稱し、娑婆世界の譯名。此界の衆生は忍て惡を爲し、又諸の菩薩は教化の爲に忍て勞倦を受くるが故に名く。【英】 化佛。佛が衆生を教化利益せんが爲に種々の身形に變化し應現すること。

に寄せて佛事を爲せ。汝彼の界に至らば應に正知に住して彼の佛土及び諸の大衆を觀るべし。輕慢を懷いて自ら毀傷すること勿れ。所以は何ん。彼の諸の菩薩は威徳及び難く、悲願心に熏ず、大因縁を以て彼の土に生ずるべし。時に普光菩薩花を受け勅を奉け、無量百千俱胝那由他の出家・在家・菩薩摩訶、及び無數百千の童男、童女と佛足を頂禮し、右に繞りて奉辭し、各無量種種の花香・寶幢・幡蓋・衣服・寶飾及び餘の供具を持ち、發引して來る。經たる所の東方琉璃沙等の諸佛世界の一一の佛所にて供養・恭敬・尊重・讚歎し、空しく過ぎし者無し。此の佛所に至りて雙足を頂禮し、右に繞ること百千匝して却つて一面に住せり。普光菩薩前んで佛に白して言さく、世尊、此れより東方琉璃沙等の世界を盡くし、最後の世界を名づけて多寶と曰ふ。佛を寶性如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と號づく。世尊に問ひを致すこと無量なり。少病少惱・起居輕利・氣力調和して安樂に住したまふや不や。世事忍ぶ可しや不や。衆生度し易しや不や。此の千葉金色の蓮花を持つて以て世尊に寄せ、而かも佛事を爲せと。時に釋迦牟尼佛此の蓮花を受け還つて東方琉璃沙等の諸佛世界に散ず。佛の神力の故に此の蓮花をして諸の佛土、諸の花臺に遍ねからしむ。中に各一化佛有り結跏趺坐し、諸の菩薩の爲に大般若波羅蜜多相應の法を説けり。有情の聞ける者は必ず無上正等菩提を得。是の時普光及び諸の眷屬此の事を見已つて、歡喜踊躍し未曾有なりと歎じ、各善根に隨ひて多少を供具し、佛菩薩を供養・恭敬・尊重・讚歎し已つて退きて一面に坐しぬ。是の如く最後世界已前の所有東方一一の佛土に、各如來有りて現に大衆の爲に妙法を宣説したまへり。是の諸の佛所に亦た各一上首の菩薩有り、此の大光、大地の變動及び佛身の相を見、前んで佛所に詣り、白して言さく、世尊、何の因、何の縁にて而かも此の瑞有るやと。時に彼れ彼れの佛、各各に報へて言はく、此の西方に於て堪忍世界有り、佛を釋迦牟尼を號づく。將に菩薩の爲に大般若波羅蜜多を説かんとす。彼の佛の神力の故に斯の瑞を現するなり

不の字を附せしもの。

【四】調伏、戒により規正せらるること。

【五】蘇迷盧山 (Sumeru)。印度古代の世界觀で一世世界の中心を爲すと信ぜらるるもの、普通須彌山と稱す。

【六】輪圓山。鐵輪圓山又は鐵圓山ともいふ。須彌山を中心として、外に七山海あり。此の第八海は鹹海にして、之を繞る山を輪圓山と稱す。

【七】淨居。淨居天にて色界第四禪天なり。小乘第三果の聖者、即ち、不還果を證した人の生ずる天處。

【八】花臺。俱蘇摩羅 (Kullin sumamāra) の譯。古代印度に於ける習俗の一として、生華又は造華を綴結して首身の飾となすもの。或は之を以て佛前の飾具となす。

【九】南瞻部洲、東勝身洲、西牛貨洲、北俱盧洲を須彌四洲と稱し、七金山の東西南北に在る四の衆生の住處に名づく。

【十】以下十方相見の大衆來會供養を明す。

(甲)爾時東方盡……退坐一面以上右ノ文章ヲ所付ノ符號ニテ略シ只異レル部分ノミ出ス

(乙)多寶。東方無量千萬億阿僧祇の世界を過ぎてある寶淨國を云ふ。

方殞伽沙等の諸佛世界を遍照したまふ。時に此の三千大千佛土の一切有情、佛の光明を尋て普ねく十方殞伽沙等の諸佛世界の一切如來應正等覺を、聲聞菩薩の衆會の圍繞せる、及び餘の一切の有情無情品類の差別を見る。時に彼の十方殞伽沙等の諸佛世界の一切有情、佛の光明を尋て亦た此の土の釋迦牟尼如來應正等覺を聲聞菩薩の衆會の圍繞せる、及び餘の一切の有情無情品類の差別を見る。

爾の時東方壽殞伽沙等の世界の最後の世界を名づけて、多寶と曰ふ。佛を寶性・如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と號づく。時に現に彼れに在して安隱に住持し、諸の菩薩摩訶薩衆の爲に大般若波羅蜜多を説きたまふ。彼れに菩薩有り、名を普光と曰ふ。此の大光、大地の變動及び佛身の相を見て、心に猶豫を懷き、前みて佛所に詣り、雙足を頂禮し白して言さく、世尊、何の因、何の緣にて而かも此の瑞有るやと。時に寶性佛、普光菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子、此れより西方に、殞伽沙等の世界を盡くし最後の世界を名づけて、堪忍と曰ふ。佛を釋迦牟尼・如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と號づく。今現に彼れに在して、安隱に住持し、將に菩薩摩訶薩衆の爲に、大般若波羅蜜多を説きたまはんとす。彼の佛の神力の故に斯の瑞を現するなりと。普光聞き已つて歡喜踊躍し、重ねて佛に白して言さく、世尊、我れ今請ひて堪忍世界に往き、釋迦牟尼如來及び諸の菩薩摩訶薩衆の無礙解陀羅尼門、三摩地門を得、神通自在にして最後身に住し尊位に紹げる者々觀禮し供養せん。唯だ願はくは慈悲哀愍して許すことを垂れたまへと。時に寶性佛、普光菩薩に告げて言はく、善哉善哉、今正しく是れ時なり。汝の意に隨つて往けと。即ち千葉金色の蓮花の其の花千葉にして衆寶莊嚴せるを以て普光菩薩に授け而かも之に誨へて言はく、汝此の花を持ちて釋迦牟尼佛の所に至り、我が詞の如く曰せ、寶性如來、問ひを致すこと無量なり、少病少惱、起居輕利、氣力調和にして安樂に住したまふや不や。世事忍ぶ可しや不や。衆生度し易しや不やと。此の蓮花を持つて以て世尊

善提の新譯にして、佛の情、完全なる覺醒窮まりなきを云ふ。

【四〇】 廣長舌相。大舌相とも稱し、如來三十二相の一。如來の舌は廣く長く軟くして薄し、これ虛妄なきを表はす相となす。

【四一】 般若波羅蜜多相應。眞の研究、解脫に契ふこと。

【四二】 涌。正義涌とあるもの(三)の如く涌と、以下皆之に倣ふ。

【四三】 傍生。傍行の生類の義にて、畜生を云ふ。

【四四】 六欲天。欲界にある六重の天、即ち、四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天を云ふ。

【四五】 惡趣。衆生が惡見、惡業の因によりて趣き生ずる所地獄、餓鬼、畜生を三惡趣と稱し、之に修羅を加へて四惡趣と稱するが如し。

【四六】 十惡業道。身口意の三で造作する十種の惡業、即ち、殺生、偷盜、邪淫、妄語、惡口、兩舌、綺語、貪欲、瞋恚、愚癡をいふ、この十惡の業因能く苦報に通づれば十惡業道と名づく。

【四七】 十善業道。十善の業行は以て善處に生ずる道なれば十善業道と稱す。十善とは人天の十戒にて、十惡の各各に

る。豈に善ならざらん哉と。

爾の時世尊、師子座に在し、光明殊特、威德巍巍として三千大千世界、并びに餘の十方殊伽沙等の諸佛國土、蘇迷廬山、輪圍山等、及び餘の一切の龍神天宮乃至淨居を映蔽して皆悉く現げざること秋の滿月、衆星を曜暎するが如く、夏日輪の光、諸色を奪ふが如く、四大寶の妙高山王、諸山に臨照するに威光迥出せるが如し。佛・神力を以て本の色身を現じ、此の三千大千世界の一切有情をして、皆悉く親見せしめたまふ。時に此の三千大千世界無量無數の淨居諸天、下欲界に至る四大王衆天、及び餘の一切の人非人等、皆如來の師子座に處し、威光顯曜せること大金山の如くなるを見、歡喜踊躍して未曾有なりと歎じ、各種種無量の天花・香・鬘・塗香・燒香・末香・衣服・瓔珞・寶幢・幡蓋・伎樂・諸珍、及び無量種の天青蓮花・天赤蓮花・天白蓮花・天香蓮花・天黃蓮花・天紅蓮花・天金錢樹花、及び天香葉、并びに餘の無量の水陸の生花を持つて、持つて佛所に詣り、佛の上に散じ奉る。佛の神力を以て諸の花鬘等、旋轉して上に踊り合して花臺と成る。量三千大千世界に等しく、天の花蓋を垂れ、寶鐸珠幡、綺飾紛綸、甚だ愛樂す可し。時に此の佛土微妙莊嚴なること猶西方極樂世界の如し。佛の光三千大千の物類に曜暎し虚空皆金色に同す。十方各殊伽河沙に等しき諸佛世界も亦復た是の如し。時に此の三千大千佛土、南瞻部洲・東勝身洲・西牛貨洲・北俱盧洲、其の中の諸人、佛の神力の故に、各各に佛の正しく其の前に坐したまへるを見、咸謂へらく、如來獨り爲に說法したまふと。是の如く四大王衆天・三十三天・夜摩天・覩史多天・樂變化天・他化自在天・梵衆天・梵輔天・梵會天・大梵天・光天・少光天・無量光天・極光淨天・淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・廣天・少廣天・無量廣天・廣果天・無繁天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天も亦た世尊の神通力を以ての故に各々に佛の正しく其の前に坐したまへるを見、咸謂へらく、如來獨り爲に說法したまふと。

爾の時世尊、座より起たず熙怡微笑し、其の面門より大光明を放ちて三千大千佛土并びに餘の十

一丈、四に舌相週覆、五に師子三昧大千震動、六に最勝身威德、七に常身示現。

【三】師子座。佛を人中の師子に喩へて、その床座を云ふなり。

【四】尼師壇 (Nigrahasthana)。六物の一にて、坐具、坐衣、隨坐衣などと譯す。

【五】結跏趺坐。坐法の一つにて、左右の足を交結して左右の股の上に安ずるをいひ、佛陀の正坐なり。

【六】三摩地とは Samadhi の音譯、等持はその義譯なり。心を一境一處に安住せしめて散亂せしめざる心的狀態を云ふ。

【七】千輻輪相。佛三十二相の一。佛の足趺の下にある千の輻輪狀の文 (アヤ) にて、諸法の圓滿なるを表はす相。

【八】眉間毫相。佛三十二相の一。佛の眉間に白玉の細毛ありて白瑠璃の如く清淨柔軟にして右旋宛轉して光明を放つを云ふ。

【九】三千大千世界。釋尊出世前後に印度に行はれし世界觀にて、小千、中千、大千の三世界の總稱。佛教ではこの世界を以て一佛教化の範圍となす。

【十】無上正等菩提。無上正等正覺なり。阿耨多羅三藐三

遍す。說法利益も亦復た是の如し。

爾の時世尊、本の座を起たす、復た師子遊戲等持に入り、神通力を現じて此の三千大千世界をして六種に變動せしめたまふ。謂ゆる動・極動・等極動・涌・極涌・等極涌、震・極震・等極震、擊・極擊・等極擊、吼・極吼・等極吼、爆・極爆・等極爆なり。又た此の界をして、東に涌り西に没み、西に涌り東に没み、南に涌り北に没み、北に涌り南に没み、中に涌り邊に没み、邊に涌り中に没む。其の地清淨にして光澤細軟に、諸の有情に利益安樂を生ず。時に此の三千大千世界の所有地獄・傍生・鬼界及び餘の無暇・險惡・趣坑一切の有情、皆苦難を離れ、此より捨命して人中及び六欲天に生ずることを得、皆宿住を憶ひ、歡喜踊躍して同じく佛所に詣り、殷淨心を以て、佛足を頂禮す。此より異轉して十方殞伽沙等の諸佛世界に周遍し、佛の神力を以て六種に變動す。時に彼の世界の諸の惡趣等一切の有情、皆苦難を離れ、彼れより捨命して人中及び六欲天に生ずることを得、皆宿住を憶ひ、歡喜踊躍して、各本の界に於て、同じく佛所に詣りて佛足を頂禮す。時に此の三千大千世界、及び餘の十方殞伽沙等の世界の有情の、盲者は能く視、聾者は能く聞き、瘡者は能く言ひ、狂者は念するを得、亂者は定まるを得、貧者は富を得、露者は衣を得、飢者は食ふを得、渴者は飲むを得、病者は除り愈ゆるを得、醜者は端嚴なるを得、形残者は具足するを得、根缺者は圓滿なるを得、迷悶者は醒悟するを得、疲頓者は安適するを得、時に諸の有情の等心相向ふこと父の如く母の如く兄の如く弟の如く姉の如く妹の如く女の如く親の如し。邪なる語・業・命を離れて正しき語・業・命を修し、十惡業道を離れて、十善業道を修し、惡尋思を離れて善尋思を修し、非梵行を離れて正梵行を修し、淨を好み穢を棄て、靜を樂しみ諍を捨て、身意泰然として忽ち妙樂を生ずること修行者の第三定に入るが如し。復た勝慧りて歡爾として現前し、感是の思を作さく、布施・調伏・安忍・勇進・寂靜・諦觀あり、放逸を遠離し、梵行を修行し、諸の有情に於て慈悲喜捨し、相撲亂せざ

大時と譯し、無限の長時期の稱なり。

【二】幻。以下十喻として非有、無實に常用ふる例なり。

【三】尋香城。乾闥婆城の譯にて盛氣樓のこと。物の幻有實無に譬ふる語。

【四】無生法忍。不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位、即ち、初住不退の菩薩位なり。

【五】轉法輪。佛が教法を説かるゝを云ふ。法輪とは釋尊所説の正法にて、衆生の惡を摧破すること輪寶の能く山岳巖石を碾摧するに譬へていひ、かく正法の聞説を轉法輪と稱す。

【六】般涅槃 (Parinirvana) 入滅。

【七】見。捺喇捨囊 (Darsana) の譯。思慮分別して事理を決定する義にて、正邪に通ずるも多く邪惡の意に異なり。

【八】纏。煩惱の異名なり。煩惱能く人の心身を自在ならしめざるの故に名づく。瞋、覆罪、睡、眠、戲、掉、無慚、無愧、慳、嫉の十纏乃至五百纏。

【九】菩薩摩訶薩 (Bodhisattva) 覺有情大士と譯す、研究者奉仕者たる者。

* 放光現瑞。初に神力、二に一切毛孔微笑、三に常光

王菩薩摩訶薩、慈氏菩薩摩訶薩と曰ふ。是の如き等の無量百千俱胝那庾多の菩薩摩訶薩は皆法王子にして佛位を紹きて上首たるに堪ふ。

爾の時世尊、師子座上に於て自ら 尼師壇を敷き 結跏趺坐して端身正願にして住し念に對面し、等持王妙三摩地に入りたまふ。諸の三摩地は皆此の三摩地の中に攝入す。是れ所流なるが故に。爾の時世尊、正知正念にして等持王より安庠として起ち、淨天眼を以て十方殑伽沙等の諸佛世界を觀察し、舉身怡悅し、兩足下の 千輻輪相より各六十百千俱胝那庾多の光を放ち、足の十指・兩趺・兩跟・四蹠・兩脛・兩腕・兩膝・兩股・腰脇・腹背・膺中・心上・胸臆・德宇・兩乳・兩腋・兩肩・兩臂・兩肘・兩臂・兩腕・兩手・兩掌の十指・項咽・頤頰・頰頰・頰頰・兩眉・兩眼・兩耳・兩鼻・兩口・四牙・四十齒・眉間毫相、一一の身分より各六十百千俱胝那庾多の光を放ちたまふ。此の一一の光、各三千大千世界を照らし、此れより展轉して十方殑伽沙等の諸佛世界を遍照するに其の中の有情の斯の光に遇ふ者は必ず 無上正等菩提を得。爾の時世尊の一切の毛孔皆悉く照怡し、各六十百千俱胝那庾多の光を出す。是の一一の光、各三千大千世界を照らし、此れより展轉して十方殑伽沙等の諸佛世界を遍照するに、其の中の有情の斯の光に遇ふ者は必ず無上正等菩提を得。爾の時世尊、身の常光を演べて此の三千大千世界を照らしたまふ、此れより展轉して十方殑伽沙等の諸佛國土を遍照するに其の中の有情の斯の光に遇ふ者は必ず無上正等菩提を得。爾の時世尊、其の面門より 廣長舌相を出して三千大千世界に遍覆し照怡微笑したまふ。復た舌相より無量百千俱胝那庾多の光を流出す。其の光雜色なり。此の雜色の一一の光の中より、寶蓮花を現す。其の花千葉にして皆眞金の色なり。衆寶もて莊嚴し、綺飾鮮榮に甚だ愛樂す可し。香氣芬烈、周流普熏し、細滑輕軟に觸るれば妙樂を生ず。諸の花臺の中に皆化佛有りて結跏趺坐し、妙法音を演ぶ。一一の法音、皆般若波羅蜜多相應の法を説く。有情の聞く者必ず無上正等菩提を得。此れより展轉して十方殑伽沙等の諸佛世界に流

初分緣起品第一之一

三

- 【一】 五神通。神妙不測無礙自在の五種の智慧、即ち天眼通（衆生の生死苦樂の相及び一切世間の種種の形色を見るに障礙なき通力）、天耳通（自在に一切の言語音聲を聞くことを得る通力）、他心通（自由にて他人の心中に思ふことを知る通力）、宿命通（自他の過去を明かに知る通力）、神足通（時機に適應して大小自在の身を現じ、到處意のままに飛行し得る通力）を云ふ。
- 【二】 聲明。舍羅婆迦（Śāliya）の譯。佛の言教或は遺教を開きて四諦の法を修し、三生六十劫の間に見思の二惑を斷じて阿羅漢果を得る聖者。
- 【三】 獨覺。鉢刺騎伽佛陀（pratyekabuddha）の譯。緣覺に同じ。十二因緣の法を觀じて煩惱を斷盡して涅槃の證果を得る聖者をいふ。獨覺とは常に寂靜を樂しみ、無佛の世界に於ては能く獨り自ら證悟するの故に名づく。
- 【四】 擇法。研究により死を去り生に進むこと、菩提分の最要なるもの。
- 【五】 俱胝（Koti）。拘胝、拘致、俱致等とも音譯さる。普通億と譯されてあるが印度の數名の名にて一千萬の劫。
- 【六】 劫（Kalpa）。劫波、劫波、羯臘波等の略。長時又は

大般若波羅蜜多經

卷の第一

三藏法師 玄奘奉 詔譯

初分緣起品第一之一

是の如く我れ聞きぬ。一時、薄伽梵、王舍城、鷲峯山の頂きに住まりたまへり。大慈芻衆千二百五十人と俱なりき。皆阿羅漢なり。諸漏已に盡きて復た煩惱無く、眞自在を得、心善く解脱し、慧善く解脱し、調慧馬の如く亦た大龍の如し。已に所作を作し、已に所辦を辦じ、諸の重擔を棄て已利を速得し、諸の有結を盡し、正知解脱し、心自在なる第一究竟に至れり。阿難陀の獨り瓊地に居し、預流果を得たるをば除く。大迦葉波而かも爲れ上首たり。復た五百の苾芻尼衆あり。皆阿羅漢なり。大勝生主而かも爲れ上首たり。復た無量の毘波素迦、毘波斯迦有り、皆聖諦を見たり。復た無量無數の菩薩摩訶薩衆有り、一切皆陀羅尼門、三摩地門を得、空無相無分別の願に住し、已に諸法の平等性忍を得、具足して、四無礙解を成就し、凡そ演説する所の辯才盡くる無く、五神通に於て自在に遊戲し、所證の智斷じて永く退失する無く、言行威肅聞くもの皆敬受し、勇猛精進して諸の懈怠を離れ、能く親財を捨て、身命を顧す、矯を離れ誑を離れ、衆無く求無く、等しく有情の爲に正法を宣ぶるに深法忍に契ひ、最極趣を窮め、無所畏を得、其の心泰然たり。衆魔の境を超え、諸の業障を出で、一切の煩惱怨敵を摧滅し、正法幢を建て、諸の邪論を伏し、聲聞、獨覺も測量する能はざるなり。心自在を得、法自在を得、業惑見障皆已に解脱し、擇法辯說善巧ならず

初分緣起品第一之一

- 【一】玄奘（隋仁壽二年 601—唐麟德元年 665）。支那法相宗の高祖。大旅行家、博學にして新譯を以て著はる。貞觀三年入竺、同十九年長安に歸り、太宗の優遇を受け譯經事業に専念、「大般若經」、「瑜伽經」俱舍論その他すべて七十五部、千三百三十卷の譯あり。
- 【二】薄伽梵（Bhagavat）。婆伽婆ともいひ、世尊と譯す。
- 【三】王舍城（Rājagṛha）。中印度摩揭陀國の都城。かの頻婆娑羅王、その子阿闍世王の居城として有名。
- 【四】鷲峯山。舊稱耆闍崛山、新稱靈鷲山。
- 【五】先づ聲聞比丘の徳を讃嘆す。
- 【六】苾芻（Bhikṣu）。比丘に同じ。
- 【七】阿羅漢（arhan）。應供、殺賊、不生などと意譯す。財產眷屬所學を離れて小乗の悟を極めたる位の名なり。
- 【八】漏。流注漏泄の義にて煩惱の異名なり。
- 【九】心善解脱。肉體も精神も行事も覺醒に従ひ向上し自由なること。
- 【一〇】慧善解脱。擇法研究に従ひて正しきにつくことの自由なるを云ふ。
- 【一一】有結。有とは生死の果報をいひ、結はその果報を招

(な) 一切智 道相智一切相智

(ら) 聲聞乘 獨覺乘無上乘

(む) 極喜地 離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地

(ろ) 異生地 種性地第八地具現地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地

(る) 預流 一來不還阿羅漢

(の) 預流向預流果 一來向一來果不還向不還果阿羅漢向阿羅漢果

(お) 獨覺 獨覺向獨覺果

四 適用範圍 (卷第一百六卷校量功德品末より卷第三百六十卷終迄)

(い) 色 受想行識

(ろ) 眼處 耳鼻舌身意處

(は) 色處 聲香味觸法處

(に) 眼界 色界眼識界及眼觸眼觸爲緣所生諸受

(ほ) 眼界 聲界耳識界及耳觸耳觸爲緣所生諸受

(へ) 鼻界 香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲緣所生諸受

(と) 舌界 味界舌識界及舌觸舌觸爲緣所生諸受

(ち) 身界 觸界身識界及身觸身觸爲緣所生諸受

(り) 意界 法界意識界及意觸意觸爲緣所生諸受

(ぬ) 地界 水火風空識界

(る) 苦聖諦 集滅道聖諦

(を) 無明 行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱

(わ) 內空 外空內外空空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空

(か) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界

(よ) 布施波羅蜜多 淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多

(た) 四靜慮 四無量四無色定

(れ) 八解脫 八勝處九次第定十遍處

(そ) 四念住 四正斷四禪足五根五力七等覺支八聖道支

(つ) 空解脫門 無相無願解脫門

(ね) 佛十力 四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八不共法

(な) 一切智 道相智 一切相智

(ら) 預流向預流果 一來向一來果不還向不還果阿羅漢向阿羅漢果 (本文に預流果乃至阿羅漢果とある時は同向無く四果のみと知るべし)

共法

(む) 眼界 耳鼻舌身意界

(う) 色界 聲香味觸法界

(ろ) 眼識界 耳鼻舌身意識界

(の) 眼觸 耳鼻舌身意觸

(お) 眼觸爲緣所生諸受 耳鼻舌身意識爲緣所生諸受

(ぬ) 極喜地 離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地

以上

以上

以上

(な) 一切智 道相智一切相智

(ら) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(む) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性不思議

界虛空界斷界斷界斷界無性界無相界無作界無爲

界安隱界寂靜界法定法住本無實際

(う) 預流向類流果 一來向一來果不還向不還果阿羅漢向阿

羅漢果獨覺向獨覺果菩薩如來

(ゐ) 極喜地 離苦地發光地熾慧地極難勝地現前地遠行地不
動地善慧地法雲地

(の) 淨觀地 種種地第八地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地
菩薩地如來地

(お) 聲聞乘 獨覺乘 大乘 初分無所得品第十八之三
以後は「大乘」を用ふ

(や) 常無常 樂苦我無我淨不淨空不空無相有相無願有願寂
靜不寂靜遠離不遠離難離染淨淨生滅有爲無爲有
漏無漏善不善有罪無罪世間出世間屬生死屬涅
槃

(ま) 善不善無記 欲界繫色界繫無色界繫學無學非學非無學
見所斷修所斷非所斷在內在外在兩間法

三 適用範圍 (卷第七十九、初分天帝品第二十二之三の終よ)
(卷第一百六、初分校量功德品第三十之四迄)

(5) 色 受想行識

對照表

(ろ) 眼處 耳鼻舌身意處

(は) 色處 聲香味觸法處

(に) 眼界 色界眼識界及眼觸眼觸爲緣所生諸受

(け) 耳界 聲界耳識界及耳觸耳觸爲緣所生諸受

(へ) 鼻界 香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲緣所生諸受

(と) 舌界 味界舌識界及舌觸舌觸爲緣所生諸受

(ち) 身界 觸界身識界及身觸身觸爲緣所生諸受

(り) 眼界 法界意識界及意觸意觸爲緣所生諸受

(ぬ) 地界 水火風空識界

(る) 苦聖諦 集滅道聖諦

(を) 無明 行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱
外空内外空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空
無際空散空無變異空本性空自相空苦相空一切法
空不可得空無性空自性空無性自性空

(わ) 內空 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(か) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(こ) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(こ) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

(け) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法
住實際虛空界不思議界

十七助道品

- (た) 苦聖諦 集滅道聖諦 (四諦)
- (れ) 十善業道 五近事戒八近住戒
- (ぞ) 施性福業事 戒性修性福業事
- (つ) 四靜慮 四無量四無色定
- (ぬ) 八解脫 八勝處九次第定十遍處
- (な) 空解脫門 無相無願解脫門 (三解脫門)
- (ら) 一切陀羅尼門 一切三摩地門
- (む) 極喜地 離苦地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地 (十地)
- (う) 五眼 六神通
- (ゐ) 佛十力 四無所畏四無礙解大悲大喜大捨十八佛不共法
- (の) 三十二大士相 八十隨好
- (お) 無忘失法 恆住捨性
- (く) 一切智 道相智 一切相智 (三智)
- (や) 一切智智 永拔一切煩惱習氣
- (ま) 預流果 一來不還阿羅漢果 (四果)
- (け) 一切菩薩摩訶薩行 諸佛無上正等菩提
- (ふ) 我 有情命者生者養者士夫補特伽羅意生聲聞作者使作者起者使起者受者使受者知者見者 (十六知見)

適用範圍 (卷第三十六初分攝學品第八より卷第七十九初分大帝品第廿二之三迄)

(い) 色 受想行識

- (ろ) 眼處 耳鼻舌身意處
- (は) 色處 馨香味觸法處
- (に) 眼界 色界眼識界及眼觸眼觸爲緣所生諸受
- (ほ) 耳界 聲界耳識界及耳觸耳觸爲緣所生諸受
- (へ) 鼻界 香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲緣所生諸受
- (と) 舌界 舌界舌識界及舌觸舌觸爲緣所生諸受
- (ち) 身界 觸界身識界及身觸身觸爲緣所生諸受
- (り) 意界 法界意識界及意觸意觸爲緣所生諸受
- (ぬ) 地界 水火風空識界
- (る) 苦聖諦 集滅道聖諦
- (を) 無明 行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱
- (わ) 內空 外空內外空空空空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空
- (か) 布施波羅蜜多 淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多
- (よ) 四靜慮 四無量四無色定
- (た) 八解脫 八勝處九次第定十遍處
- (れ) 四念住 四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支
- (そ) 空解脫門 無相無願解脫門
- (つ) 五眼 六神通
- (ね) 佛十力 四無所畏四無礙解大悲大喜大捨十八佛不共法

共法

國譯大般若波羅蜜多經諸法要目對照表

諸法要目對照表使用例

「諸の菩薩摩訶薩は色に住すべからず、受、想、行、識に住すべからず。何を以ての故に、世尊、色の色、性空、受、想、行、識の受、想、行、識性空なればなり。世尊、是の色は色、空に非ず。是の色、空は色に非ず、色は空を離れず。空は色を離れず。色は即ち是れ空。空は即ち是れ色なり。受、想、行、識も亦復た是の如し。是の故に世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は色に住すべからず、受、想、行、識に住すべからず。右の如く(い)の五蘊に就いて説明ある時次の(ろ)を適用すれば次文の如くなるものと知るべし。

「諸の菩薩摩訶薩は眼處に住すべからず、耳鼻舌身意處に住すべからず。何を以ての故に、世尊、眼處の眼處、性空、耳鼻舌身意處の耳鼻舌身意處性空なればなり。世尊、是の眼處は眼處、空に非ず。是の眼處、空は眼處を離れず、空は眼處を離れず、眼處は即ち是れ空。空は即ち是れ眼處なり。耳鼻舌身意處も亦復た是の如し。是の故に世尊、般若波羅蜜多を修行する諸の菩薩摩訶薩は眼處に住すべからず。耳鼻舌身意處に住すべからず。」此の場合本文には是を(a)(b)等の符號にて略し下の如く出せり。「(a)眼處乃至意處」

一 適用範圍 (卷第五、初分相應品第三之二より卷第三、十六、初分教誡教授品第七之二十六迄)

(一、二等の分類は般若關法に據りしものに非ず)

- (い) 色 受想行識 (五蘊)
- (ろ) 眼處 耳鼻舌身意處 (十二處)
- (は) 色處 聲香味觸法處
- (に) 眼界 耳鼻舌身意界
- (ほ) 色界 聲香味觸法界 (十八界)
- (へ) 眼識界 耳鼻舌身意識界
- (と) 眼觸 耳鼻舌身意觸 (六觸)
- (ち) 眼觸爲緣所生諸受 耳鼻舌意觸爲緣所生諸受 (六受)

對照表

- (り) 地界 水火風空識界 (六大)
- (ぬ) 因緣 等無間緣所緣緣増上緣 (四緣)
- (る) 無明 行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱 (十二因緣)
- (を) 布施波羅蜜多 淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多 (六波羅蜜)
- (わ) 內空 外空内外空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空 無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空 (十八空)
- (か) 眞如 法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法 住實際虛空界不思議界
- (よ) 四念住 四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支 (三)

一世尊、我れ五眼六神通に於て若しは集まり若しは散ずるを得ず見す。云何が此れは是れ五眼此れは是れ六神通なりと言ふ可けん。世尊、是の五眼等の名は皆住する所無く亦た住せざるに非ず。何を以ての故に、五眼等の名義は既に無所有なるが故に五眼等の名は皆住する所無く亦た住せざるに非ず。其他も皆此の例に準じて知られたい。

一〇、般若の教義は甚深なるも一切は縁起の故に空、住するなく、有の得べきなしとして總合進動の儘に認識し行爲し毫も凝滞しない。この佛教の妙法教旨を一切に表現し主張したものと云ふべきである。その詳細なることは最終に掲ぐる解題によりて領得せられたいが、如何に正當なる認識信仰を成就せしめんが爲に佛祖が殷勤に指導せられたるかを精讀し翫味し感謝すべきである。

一一、本經の譯出に就て親疎の諸縁に報謝するも、特に阪井泰俊、原田靈道、栗本俊道三學士の努力を受けたることを銘記して感謝の意を表す。

昭和九年三月

國譯註解者 椎尾辨匡誌

るものでない。既に葛藤の綱要には第二分乃至第五分は初分と具略の異に過ぎないと説いて居る。今も闕法等に倣ひて省略するを適當と認めて、省略せるを以て、讀者は次の三項を領知せられたい。

(一) 卷第三百十以下の本文中(甲)(乙)等の符號にて略せる所は、原文が洲名、世界等を異にするのみ故、前段に(甲)(乙)等を定め、後段には洲名等の外は(甲)(乙)等にて全文を略することとした。例へば瞻部洲につき全文を掲ぐれば、次の瞻部洲、東勝身洲、瞻部洲東勝身洲西牛貨洲。瞻部洲東勝身洲西牛貨洲北俱盧洲等の四大洲は洲名のみ出して他を省略し、又小千世界に述べたる場合に中千世界三千大千世界十方各如殞伽沙等世界十方一切世界等と世界のみ出して他の本文は(甲)(乙)にて省略せるものとして讀まれたい。

(二) 後掲對照表中に載する要目と同じきを省くも異なる場合は略せずして類似法相を再出する。例へばかの「眞如乃至不思議界」の場合は「眞如法界不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界」の經文は略譯して「眞如乃至不思議界」とするも、之と異なる時、例へば「眞如法界法定法住離生性平等性實際」の如くなる時は略さないで全法相を譯出する。

(三) 後掲對照表を使用して省略を補充するには

「世尊、我れ色、受、想、行、識に於て若しは集まり若しは散ずるを得ず見ず。云何が此れは是れ色、乃至此れは是れ識なりと言ふ可けん。世尊、是の色等の名は皆住する所無く亦た住せざるに非ず。何を以ての故に、色等の名義は既に無所有なるが故に、色等の名は皆住する所無く亦た住せざるに非ず」とある後に(う)の五眼六神通を適用せんとせば次の如くなる譯である。

九、三	百	頌	一	五七	能斷金剛分	同	三	同	九六…金剛(六本)月、九(第八、八七五)
一〇、百	五	十頌	一	五八	般若理趣分	同	七	同	九六…實相(四本)成三閻八(第八、七、七、七)
一一、	以下五品十四卷			五九—六三	布施波羅蜜多分	同	八	同	九九…
一二、	一千八百頌			五四—五八	戒波羅蜜多分	日、一〇、二、四	四	同	一〇一九…
一三、				五九	忍波羅蜜多分	同	三	同	一〇四四…
一四、				五〇	勤波羅蜜多分	同	三	同	一〇五〇…
一五、				五九—五三	靜慮波羅蜜多分	同	四	同	一〇五五…
一六、二千	一百頌		八	五三—六〇	般若波羅蜜多分	同	五	同	一〇六五…
計	十六會	西蕃本合十六萬四千五十頌	一	六百卷	二百七十五	同	五	同	洪荒日三帙 第五—第七の三卷

八、本經六百卷十六會二百七十五分の内容は全譯の後に解題に於て概括する。前々項に云へる如く本經の全貌を譯出するも、第一會に於ては註解を簡單にし第二會以下に於て之を綿密にす。これ第一會は増語重説多きがため經意を曉め易いためである。

九、本經の全譯を出すも通關の法によりて重言を略することとする。通關の法は宋濂の序に「その法、十二圖を畫し十三法二十九界八十四科を用ひて之が都を爲す、凡そ諸圖列ぬる所、或は齊行、或は各行、或は單位、或は避位、或は間位、或は加法、或は鈎鎖連環、或は廣略、一千言の間を過ぎず、總て初分難信解品一百三卷を攝して一字も違ふことあることなし」と云へる通りであつて、初分四百卷中、六卷の關法の攝するもの二百五十卷の多きに達して居る。通關によりて省略さるゝもの尙此の外にもある。若し具さに重言増語を省略すれば初會は第二會と多く異

大藏經にも大品を譯出せるのみであり、大正藏經にも二二三、大品。一三五、金剛。二四五、仁王に訓讀を施したに過ぎぬ。然るに今回の國譯一切經には此の大般若を全譯して般若の全貌を世に明らかにすることとした次第である。

七、大般若は四處十六會に區分せらる、大體次の如くである。

十六會六轉

- 四處
 - 一、王舍城 鷲峰山 善闍崛山 Gṛhṇakūṭa
 - 二、舍衛城給孤獨園 Śāvastī
 - 三、他化自在天王宮 Parāmitāvāsavatīm 一〇
 - 四、王舍城竹林精舍 Veluvana 一六

會 頌	卷數	卷次	品 數	縮 藏	大正藏	同 本 異 縮 (大正)
一、十 万 頌	四〇〇	一—四〇〇	九	洪、一……	三〇第五……	放光、月一(三)、第八、一(一—四六c) 光讚、月五(三三)、第六、四(七—二六e) 大品、月三、四(三三)、第八、三七(四四a)
二、二万五千頌	六	四〇一—四七八	金	日、一……	三〇第七一……	道行、月六(三三)、第八、四(五a—四七b) 小品、月六(三三)、第八、五(六e) 无六e) 大勝、月八(三五)、第八、四(七a—五三b) 鈔、月八(三六)、第八、五(八a—五三e)
三、一万八千頌	九	四七九—五七	三	日四、八……	三〇第七四……	
四、八 千 頌	六	五八—五五五	元	日七、八……	三〇第七六……	小品、月六(三三)、第八、五(六e) 无六e) 大勝、月八(三五)、第八、四(七a—五三b) 鈔、月八(三六)、第八、五(八a—五三e)
五、八千の分(四品缺)	二〇	五五六—五五五	二	日八、七……	三〇第七八……	
六、蕃 缺	八	五五六—五五五	七	日九、三……	三〇第七九……	王、月八(三三)、第八、六(七a—七六a)
七、七 百 頌	二	五五五—五五五	曼殊室利分	同 垂……	三〇第七九……	曼殊室利、月八(三三)、第八、七(七a—七三〇) 婆羅門、月八(三三)、第八、七(七三〇—七九e)
八、蕃 缺	一	五五五	那伽室利分	同 六……	同 九……	首、月九(稍廣)(三四)、第八、七(八a—七四八c)

いたものとして、懸命の誓願によりて顯慶四年十月に其の居を玉華宮に移して準備し、同五年(六六〇)正月一日より龍朔三年(六六三)十月二十日に至るまで、沙門大乘光、大乘欽、嘉尙等を筆受として譯出せるものである。始め衆徒もその重複繁冗なるを厭ひ刪略を請へるにより、玄奘もその意ありしが、夢告ありしたため遂に一句を略せず全譯したと傳へられて居る。玄奘は將來せる三種の梵本を校合して原本とし、慎重努力して其の功を完了した。譯中屢々奇瑞あり、譯するや玄奘は歡喜して云ふ。此の經は漢地に縁あり、玄奘玉華に來たれるも此經の力である。今その譯出を完成し得たことは並に是れ諸佛の冥加、龍天の擁祐に據る、全く此れ鎮國の妙典、人天の大寶と云はねばならぬ、徒衆各々踊躍欣慶すべきであると、實にその喜びの様が察せられる。この事は慈恩三藏法師傳(二一〇五三、第五十卷二七五左)に詳かである。

五、鎮國の妙典、人天の大寶と云はれる所から、攘災鎮護の爲に受持頂戴され安置供養され轉讀尊重されたものであるが、之を眞に諷誦解説することは稀である。西明寺玄奘は十六會各別に序を作る。開元錄に至りて大經の首に配し、十六會の大綱を示せるも未だ詳かにするに至らず、指要錄で稍々委しく、智旭の闍藏知津に及びてこれが大綱を細叙するに勉めた。蓋し講學行はれざるが爲である。本經を研究せるものには宋の雪月大隱が嘉祐八年(一〇六三)に初會通關の法を作り、四明の演忠重ねてこれを編定し、清の葛麟般若綱要十卷を作る、いづれも省略提綱に過ぎない。

六、從來般若を依用するもの多くは小品によるは本經餘りに廣長なると、小品にはその註釋として有名なる龍樹作、羅什譯に係る大智度論一百卷あるがためである。若し基礎であり要約である點からは小品も亦甚だ貴い。故に國譯

二八、金剛能斷般若波羅蜜經一卷(隋夏多譯)二二九、佛說能斷金剛般若波羅蜜多經一卷(唐義淨譯)以上第九會相當一二四〇、實相般若波羅蜜經一卷(唐菩提流志譯)二四一、金剛頂瑜珈理趣般若經一卷(唐金剛智譯)以上第十會相當一二四二、佛說遍照般若波羅蜜經一卷(宋施護譯)二四三、大樂金剛不空三摩耶經一卷(唐不空譯)二四四、佛說最上根本大樂金剛不空三昧大教王經七卷(宋法賢譯)並に二四五、佛說仁王般若波羅蜜經二卷(姚秦鳩摩羅什譯)二四六、仁王護國般若波羅蜜多經二卷(唐不空譯)二四七、佛說了義般若波羅蜜多經一卷(宋施護譯)二四八、佛說五十頌聖般若波羅蜜經(宋施護譯)二四九、佛說帝釋般若波羅蜜多心經一卷(宋施護譯)二五〇、摩訶般若波羅蜜大明呪經一卷(姚秦鳩摩羅什譯)二五一、般若波羅蜜多心經(唐玄奘譯)二五二、普通智藏般若波羅蜜多心經(法月譯)二五三、般若波羅蜜多心經(般若共利言等譯)二五四、般若波羅蜜多心經(唐智惠輪譯)二五五、般若波羅蜜多心經(法成譯)二五六、唐梵翻對字音般若波羅蜜多心經(玄奘)二五七、佛說聖佛母般若波羅蜜多經(宋施護譯)二五八、佛說聖佛母小字般若波羅蜜多經(宋天息災譯)二五九、佛說經想佛母般若波羅蜜多菩薩經(宋天息災譯)二六〇、佛說圓覺自性般若波羅蜜多經四卷(宋惟淨譯)二六一、大乘理趣六波羅蜜多經十卷(般若譯)を收む。故に此の大般若六百卷は殆ど般若の集大成にして大乘經中の大經である。

三、本經は集大成なるが故に般若部經の初出ではない。般若部經の成立發達過程は解題に譲るも、此に略述すれば道行小品初出にして小品之に次ぎ、金剛般若も亦た此等と伯仲すべく、大本十萬頌等次に成立し、諸部般若續出せるものと認めらる。即ち大乘經成立の中期に於ける集大成と云ふべきである。

四、譯者玄奘は大小經論の新正譯を出せる支那譯人の權威者たるは架説を待たぬも、殊に本經は漢天竺法の本願に酬

國譯大般若波羅蜜多經

凡例

、今此に譯出するものは世間に大般若と稱する經典にして、唐玄奘三藏譯出に係る六百卷大般若であり、大正大藏經の第二二〇に大般若波羅蜜多經として第五―第七に收むるものである。

二、般若は一切經の中にて最も大部の經典にして全經藏の約三分の一を占め、而もその四分の三は此の大般若たり、

他の一に小品、小品、金剛等の諸般若經あり、即ち大正大藏には第八卷に收載する二二二、放光般若經二十卷（西晉無羅叉譯）二二二、光讚經十卷（西晉竺法護譯）二二三、摩訶般若波羅蜜經二十七卷（後秦鳩摩羅什譯）―以上小品

―二二四、道行般若經十卷（後漢支婁迦讖譯）二二五、大明度經（吳支謙譯）二二六、摩訶般若鈔經五卷（前秦曇摩曇共竺佛念譯）二二七、小品般若波羅蜜經十卷（後秦鳩摩羅什譯）―以上小品―二二八、佛說佛母出生三法藏般若波羅蜜

多經二十五卷（宋施護譯）二二九、佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經三卷（宋法賢譯）二三〇、聖八千頌般若波羅蜜多一百八名眞實圓義陀羅尼經一卷（宋施護譯）二三一、勝天王般若波羅蜜經七卷（陳月婆首那譯）―これは第六會に當る―二三

二、文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經二卷（梁曼陀羅仙譯）二三三、文殊師利所說般若波羅蜜經一卷（梁僧伽婆羅譯）―以上第七會相當―二三四、佛說濡首菩薩無上清淨分衛經二卷（宋翔公譯）―第八會相當―二三五、金剛般若波羅蜜經一卷（後秦鳩摩羅什譯）二三六、金剛般若波羅蜜經一卷（元魏菩提流支譯）二三七、金剛般若波羅蜜經一卷（陳眞諦譯）二三

菩薩品第十二	(四五一—四六)	〔一六六—一七三〕	一六六
摩訶薩品第十三	(四七一—四九)	〔一七四—二〇〕	一七四
大乘鎧品第十四	(四九一—五一)	〔二〇一—二一六〕	二〇一
辯大乘品第十五	(五一—五六)	〔二七—二七七〕	二七
讚大乘品第十六	(五六—六一)	〔二七八—二九三〕	二七八
隨順品第十七	(六一)……	〔二九四—二九五〕	二九四
無所得品第十八	(六一—七〇)	〔二九六—三二七〕	二九六
觀行品第十九	(七〇—七四)	〔三二八—三五五〕	三二八
無生品第二十	(七四—七五)	〔三六—三三〕	三六
淨道品第二十一	(七五—七六)	〔三三—三四〇〕	三三

◇ 國譯大般若波羅蜜多經諸法要目對照表……………卷頭

目次

大般若波羅蜜多經 （六百卷中）

自卷第七十六至卷第七十六

（本丁）

（通頁）

初分

（卷數）

緣起品第一	（一一二）	〔一—九〕	一
學觀品第二	（三—四）	〔一〇—三四〕	一〇
相應品第三	（四—七）	〔三五—五三〕	三五
轉生品第四	（七—九）	〔五四—八七〕	五四
讚勝德品第五	（一〇）	〔八八—九〇〕	八八
現舌相品第六	（一〇）	〔九一—九二〕	九一
教誡教授品第七	（一一—一六）	〔九三—一二〇〕	九三
勸學品第八	（一六）	〔一二一—一二七〕	一二一
無住品第九	（一六—一七）	〔一二八—一三四〕	一二八
般若行相品第十	（一八—四一）	〔一三五—一五二〕	一三五
譬喻品第十一	（四二—四五）	〔一五三—一六五〕	一五三

(14)

般
若
部
一

椎
尾
辨
匡
譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

國譯一切經

大東出版社藏版

14

